

Gunslinger Girl -  
Birth of Ws - (旧題  
『あかつきの少女たち  
Marionetta in  
Aurora.』)

ふじやまさん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

イタリアの戦火は潰えれど、戦いの炎が消えることは無い。七十年の平和を謳う日本にも、戦の火が燦り始めていた。

周囲八方、国内外に闘争の火種を抱える日本政府は、『国立児童社会復帰センター』――通称センターなる組織を設立する。

表向きには厚生労働省管轄の社会福祉組織であるセンターの実態は、瀕死の少女の身体を超人的な肉体に改造し、絶対の忠心を薬物と洗脳によつて誓わせる、戦闘用生体義肢・サイバネティクス「義体」の研究と運用を担う超法規的な防諜組織だった。

新たな生と引き換えに、死ぬまで戦う事を運命づけられた少女たち。

大人に手渡された銃を手に、彼女たちは敵を撃ち殺しながら日々思う。

私は何なのか。

私は誰なのか。

私は何時死ぬのか。

私の居場所はどこなのか。

私は何故生まれたのか。

要するに——思春期だ。

これは銃弾飛び交う戦場で、血に塗れながら、ただ自己を見つめる少女たちの青春群像劇だ。

※この作品はフィクションです。

実在する、人物・地名・団体とは一切関係ありません。

またこの作品には物凄くたくさんオリジナルキャラやオリジナル設定が登場します。

それしか登場しないと書いてもいいです。そういうものが苦手な方はご注意ください。  
い。

こちらの方にも載せさせていただきます。

理想郷 http://www.maintenance.net/boards/sst/sst  
w. php?id=4461536  
pixiv http://www.pixiv.net/novel/show  
count  
t.php?act=dup&cate=tc&all=40630&n=0&  
曉 http://tnag.me/EMPLP

# 目次

第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
288	244	218	193	166	148	115	94	73	48	22	1

第21話	第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話
516	485	465	434	410	378	349	325	304



## 第1話

一〇一一四発目の銃声が鳴った。

網状炭素ナノチューブで補強され、一トンの重さにも耐える炭素強化骨格が砕ける。蜘蛛糸を主原料とした有機繊維が折り込まれて対弾性を持つ高張力筋繊維が抉れる。受容神経を密に敷かれて、背後の気配も感じ取れる鋭敏な複合型培養皮膚が裂ける。常人よりも多くのヘモグロビンと、多種多様な薬品が溶け込んだ血液が流れ出る。しかし彼女達は悲鳴を上げない。

風が重い唸りを上げて、雨が地表をたつぷりと濡らす。

厚い雷雲に空は閉ざされて、辺りは昼夜も定かではないほど暗い。

彼方此方から銃声が聞こえる。爆音が聞こえる。咆哮が聞こえる。

血が止めどなく流れる。雨が洗い流せない程に地に満ちる。

あらゆる意志が交錯し、あらゆる意志が充満し、あらゆる意志が燃え上がる。

そこは銃火に照らされた戦場だった。

猛る暴風雨の中に、血と鉄と炎が渦混するその中に、彼女達はいた。

——私は何なのだろう——？

血で汚れた服を身に纏い、少女は雨の中で誰かに問うた。

——私は誰なのだろう——？

振るう刃に血脂が染み込み、その臭いは彼女の身体に染み付いている。

——私は何時死ぬのだろう——？

少女が手に持つ重い銃器は、これまでに数え切れない人の命を奪ってきた。

——私は何処にいればいいのだろう——？

教えてくれる者はもういない。その答えは、自らで見つけ出さなければならぬ。

——私は何故、生まれたのだろう——？

戦場の真ん中に、少女たちがいた。

少女は、右手の銃を固く握る。

黒く濡れた彼女の髪は、ナイフで無造作に切り落としたかのように、真一文字に肩の

辺りで揃えられていた。

その短い髪が風に弄ばれる。

左手で髪をそつと整え、そして訊く。

「私たちは何なのでしょう？」

言葉を受けたのは、少女の正面にいた、長髪を一つに結った少女だ。

彼女は、左手の銃を固く握る。



そして答えずに、質問を返す。

「私たちは何故生まれた？」

一際強い風が吹いた。

二人の身体に風は嘯み付き、二人の問答は音に飲まれて、二人の他には聞こえない。風が止んだ。

雨がしとしと注ぎ、少女たちの髪を、頬を伝う。

首を流れ、肩を伝い、腕を落ちて、銃を滴る。

零れた水滴が地に落ち弾ける前に、再び風が叫びをあげる。

そして、一〇一一六発目の銃声が鳴った。

\* \* \*

粘りのある、濃い潮の臭い。小さく碎ける細波の音。

東京湾に数あるコンテナヤードの一つ。その鉄箱連なる港へと続く海沿いの道路脇に、黒のホンダ・ヴェゼルが停まっていた。

遠く港の照明受けて鈍く反射するボンネットに、二十代を半分と少しを過ぎた男が煙草を燻らせながら腰掛けていた。

彼の名は、蔵馬辰巳と言う。

アジア人にしては縦に長い身体。着崩した黒地のスーツの下には、衣服の上からでも分かる程に一厘の隙間も無く高密度の筋肉が蓄えられている。しかし、その体軀は人に大柄な印象を与えない。すべての筋肉が理想的な最適量を保っている為だろう。ギリシア彫刻の裸身像が、隆々の筋肉よりも美しさのイメージを見た者に植え付けるのと同じだ。

そんな健康的な肉体美を持つ蔵馬は、今や不健康の象徴と化した紙巻煙草を携帯灰皿で揉み消した。

次の煙草を啜えて火を点す。ライターから発せられた光が、一瞬、蔵馬の相貌を照らした。

彫の深い顔形。眼孔に嵌った目は、彼が今まで何を見てきたのか、底が見えない程に暗く深い。だが、右こめかみに走る深い傷跡と、額や頬やライターを持つ手の甲など表に出ている部分、そして服の下にもある多様無数の傷の跡が、蔵馬の人生を推し量らせる。

蔵馬は肺に溜まった煙を宙に吐き出し、横目で港と、その向こうの海を見る。

海に近寄るのは、貧乏人と犯罪者と日本人だけ。

そんな言葉を昔誰かから聞いたのを、蔵馬辰巳は思い出していた。誰から聞いたのかまでは覚えていない。

しかしなるほど、今の状況を慮ると確かにその通りである。

積まれたコンテナは、これから日本中に散らばっていく様々な物資の山だ。食品衣類雑貨に麻薬に武器弾薬。そして日の食事にも事欠く生活に嫌気が差し、豊かな生活を夢見て一念発起、輸送船のコンテナの中に忍び込んだ密入国者。

それらを荷卸し捌いて国内にばら撒く犯罪者たち。

そして、そんな連中を片っ端から見つけては潰していく自分たち日本人。

「クラマさん、今日の相手は密輸業者ですか？」

ガラスの鈴を打ったような、耳触りの良い、丸みある女の声。

ヴェゼルの助手席に座っている少女の物だ。

開いた窓から顔を覗かせる彼女の年齢は十六歳ほどだろうか。

蔵馬が彫刻的と比喻出来る身体を持っているなら、この少女の顔の作りは、まさに美術的造形その物だった。美を極めた熟巧の彫刻家が生涯一の傑作を彫れば、それは彼女の顔になると言っても、決して過剰でも的外れな表現でもない。

学校の制服らしきブレザーの内にある肢体も、女性としての凹凸がはつきりしてお

り、伸びる手足はネコ科を思わせるしなやかさがある。

都市光に潰されて星一つない暗い夜空に煙を吐き、蔵馬は首を振る。

「一応今回の俺たちの目標は、武器を受け取りに来るテロリストだ」

「なら売人は無視するんですか？」

少女が首を傾げる。動きに伴って、瑞々しく、艶やかで、するりと長い黒髪が頬を伝って小さく揺れた。

「向こうが無視してくれるならな」

「つまり全員やつつけなければいいんですね」

「最低一人は残せ。情報を聞き出さないといけないからな」

「分りました」

蔵馬のジャケットのポケットから、携帯電話の着信音が鳴った。

煙草を手のひらで握り消し、携帯を取り出す。画面には常盤と表示されている。

『蔵馬君、連中が来た。こっちが当たりだ』

「了解。すぐに行く」

蔵馬は電話と拳の吸い殻をポケットに戻し、車から腰を上げた。

「モモ、行くぞ」

「はい、クラマさん」

モモと呼ばれた少女は微笑んで頷く。

そして、細腕で抱えていたイスラエル制自動小銃タボールAR21のコッキングレバーを静かに引いた。



コンテナヤードの片隅。人の気配は驚くほど無い。本来なら巡邏しているはずの警備員は「ある連中」に頼まれて、今は港から離れた飲み屋で酒を食らっている。

今この港にいるのは、コンテナの陰に隠れるようにして集まっている男が十五人だけだ。隠れると言っても遮蔽物の無いただの通路だ。傍から見れば随分と目立つ光景だ。

彼らの内訳は静かに、しかし忙しなく動く五人と、それを眺める十人だ。

大陸から送られてきた膨大な貨物に紛れ込ませた、商品を荷卸ししているのだ。

「こんな骨董品ばかり仕入れて、あんたら原始人と戦争する気か？」

荷卸しを指揮する男が肩をすくめる。普段から良い物をたらふく食べているのか、全身にたっぷり脂肪を膨らませている。薄暗いコンテナヤードでどこか陰のある男たちを指揮するよりも、休日の河川敷で少年野球チームの監督でもしている方が似合いそうな風貌だ。

だがこの肥満男は、東アジア一帯で活動する武器の密輸商だ。彼の本国である中国で銃器をマフィアから買い付け、東アジアのあちらこちらにばら撒く迷惑な仕事を生業としている。

今回運んできた荷物は、世界中で弾をばら撒く名銃AK—47のコピー品が十挺と、その弾薬を六百発。

AK—47の装弾数は三十発、一艇あたりマガジン二本分の弾しかない。たったこれっぽっちで、一体何と戦うつもりなのだろう。

「原始人なら対話を試みるが、生憎我々の敵は言葉が通じない畜生だ」

答えるのは荷卸しを眺める集団の、リーダー格の男だ。武器商は男の芝居掛かった言い草に肩をすくめ、自身と対照的に酷く痩せこけた姿を密かに観察する。一言で言えば気味の悪い男だ。瞳孔が落ち込み一見するとミイラの様だった。ホームレスと見間違わん異臭を放つボロボロの服を着て、露出した肌も隈なく煤と泥と垢で汚れている。実際ホームレスとして日常を過ごしているのかもしれない。

汚れた外見はこの男に限らず、他の連中も似たような恰好をしている。中には片目のない者や指を失っている者、顔面を強打されて骨が折れた後に病院に行けずおかしな状態で骨が固まってしまったらしい者、この平和な日本でどう生きればそうなるのか尋ねてみたくなる者たちがいる。

「なるほど、確かにハンティングには十分だ。何を追うんだ？ キジか？」

銃の買い付けなど、これまで日本では暴力団相手などの小口の買い付けが年に数回あるか無いかだった。だが最近はよく売れる。

客は、いわゆるテロリストと呼ばれる連中だ。数年前までは日本では虫の息どころか存在していたのかどうかも怪しい連中だった。近ごろ何処から湧いたのか、日本のアンダーグラウンドをチョロチョロとうろつき始めている。

武器を買いには来るが、日本の新聞にテロ事件が起こったというニュースが載ることは無い。武器を持って地下に潜り、一体何をしているのか。見当もつかないが不気味な奴らだと武器商の男は内心一線を引いて彼らと付き合っていた。

テロリスト達は受け取ったAK-47をそれぞれに行き渡らせ、どこで習ったのか動作点検をさせている。コンテナから降ろされた弾薬をすぐマガジンに詰めて、銃に装填する。

「おいおい、せっかちな連中だな」

「代金は支払っただろう」

確かにコンテナを開く前に料金は受け取っている。汚い身なりからは違和感を覚えるほど、綺麗な新品の札束を彼は手渡してきた。

「そりゃそうだが、いきなり戦支度されたらこっちもビビるさ。だいたい何だ、ぞろぞろ

と手下連れてきやがって。目立つたら無いぜ」

「最近我々の仲間が、頻繁に襲撃を受けているのだ」

「それで早速、買ったてのオモチャを使おうってか」

リーダーの男はこれ以上応じず、納品書を確認し始めた。

襲撃を警戒するのは結構だが、目立つ彼らに吸い寄せられて、警察がやって来たらどうするつもりなのだろうか。自分たち密売人は、敵の襲撃よりもお巡りさんが怖いのだ。今後この男からの注文は、受けない方がいいかもしれない。

武器商は再び肩をすくめて、ジャケツトの下に隠したマカロフPMを撫でる。

襲撃事件の話は、彼も聞いたことがある。

日本での密輸品取引は、警察が介入してくることは間々あるが、敵対勢力から襲撃を受けることはまず無かった。そういう意味では何とも治安がよろしく、安心して非合法活動が出来たものだった。

それが去年あたりから、取引中に何者かに襲撃に合う同業者が出始めたのだ。

いや、襲撃というよりは神隠しに近い。取引現場にいた人間は皆消え失せ、商品も掻っ攫われる。後に残るのは、僅かな血痕と弾痕だけ。

まるで都市伝説だが、実際に起こっている事件なだけに笑えない。

突然、テトリストたちが騒がしくなる。



「どうかしたのか？」

「見張りに周らせていた者が、人を捕まえたらしい」

「おいおい、こいつらの他に見張りまで連れてきてたのか」

「当然だ」

「あのなあ……」

こいつらは悪事を働いた経験に欠けるようだ。

人が増えれば増えるだけ、一般人に目撃される危険は増す。そうすれば通報される可能性は桁違いに増すのだ。見張りをその辺にブラつかせるなんて論外だ。人は最低限度、出来るだけ人目に付かないように動いて、さっさと仕事をし、誰にも見つからないように帰る。

見張りは現場に置くのではなく、この取引現場に通じる道路に配置して、警察車両が通った時にだけ連絡を入れさせるのだ。そして、その見張りからは連絡が入っていない。

恐らく、いや間違いなく、捕まえたのは堅気の間人だ。

「そいつだ」

リーダーの男が小銃の銃口で指した方、通路の陰から少女が一人、下っ端テロリストに連れてこられていた。学校の制服らしいブレザー姿に背中にギターケースを背負つ

た、綺麗な髪の目見麗しい少女だ。

「こいつは……」

武器商は少女の美しさに思わず息を飲む。彼も仕事柄、接待業務として組織の上役や取引相手の機嫌を取るために器量の良い娘を集めてプレゼントすることがある。美人は見慣れているはずだったが、しかしここまで美しい少女は見たことが無かった。

怯えた様子で男たちが手に持つ小銃を見て、自分がどういふ場所に紛れ込んでしまったのかを察したようだ。

「あ……私……」

少女の震える声で、武器商は我に返る。

そして凄まじい勢いで悪化する状況に辟易する。

テロリストが連れてきたのは、やはり一般人だった。しかも子供。決定。もう二度とこいつらに物は売らん。

武器商は吐きたい溜め息を我慢して、殺気立つテロリストに代わって少女に話しかける。

「お嬢さん、何しに来たのかな？」

「え……あの、わた、私……ギターの練習をしに、き、ました」

「そうかそうか。精が出るね」

深夜のコンテナヤードなら人もおらず、誰にも迷惑をかけずに好きだけ楽器の練習が出来るだろう。自分も若いころ、ギターに夢中になった時期があったが、練習場所を探すのに苦労したものだ。彼女の深夜の散歩、とてもよく理解できる。

だがしかし、選んだ場所が最悪だった。

男は微笑みながら、少女に歩み寄る。

「だがね、ここは私有地だ。勝手に入ってはいけないよ」

近くで見ると、ますます美しい娘だ。売ればいったい幾らになるだろう。これほどの上玉なら、贈り物としても極上の品となる。難航している交渉のいくつかが好転するに違いない。少なくとも中古品を細々としか買わない、チンケな日本人を相手にするよりは稼げるはずだ。全く、できれば別の機会に会いたかった。

取引現場を見られたら殺すしかない。生かしておけば、どうしたって必ず足がつく。そうすれば、自分は逮捕され、貨物は押収され、本国のお偉いさんは怒り狂う。結果出所と同時に、見せしめとして『暴走車』に轢き殺されるか、何処かの海岸で水死体として発見されるだろう。

お偉いさんの虫の居所が悪ければ、拉致監禁拷問されてから粉碎機にかけられ豚の飼料になることだって十分あり得る。

殺すデメリットと生かすデメリット。生かす方がわずかに上回る。

男は懐からマカロフを取りだし、少女の額に照準を合わせた。

「来世（つき）からは気を付けるんだよ？」

「ええ、貴方もね」

引き金が引かれたマカロフは、まるでカメラの向きを直す様な、恐れも躊躇もない少女の左手で横に逸らされていた。当然、弾は外れる。

「あつ……」

弾が頬脇を通過した時、彼女の右手はブレザーに隠された腰のガンホルスターに回っていた。

抜かれるのはベレッタ社の自動拳銃P x 4 s t o r m S D。

そして、銃声。



テロリストと密売人に囲まれたモモは、まず自分に話しかけ、そして銃を向けてきた男の胸に9 m m弾を撃ち込んだ。一発二発三発。心臓部に銃弾を受けた男は即死する。

続いて射線に一番近いA K - 4 7を携えた男に発砲を移しながら、モモは膝を折って身を屈める。

背負っていたギターケースは一つしかない留め金を一指で開き、中身を取り出した。中に入っていたのはタボールAR21。

撃ち尽くしたP×4を放って宙のタボールを掴み、弾丸で敵を薙ぐ。弾を受けて、テロリストと密売人の二人が血を吹き出しながら崩れ落ちる。

男たちが呆気から意識を取り戻すまでに、すでに四人が屠られた。

彼らは応戦を始めるが、モモはその細い肢からは考えられない脚力で跳び、敵弾を躲す。コンテナで出来た壁を蹴って慣性を得て、そのままテロリストを跳び越え十数メートルの距離を取った。

着地と同時に射撃。左腕で頭部を庇い、片手で小銃を手繰る。

「モモー」

モモが連れて来られた方向から、蔵馬がSIG P220拳銃を構えながら駆け出してきた。

蔵馬は自分に銃の向きを変えるテロリスト達に二発ずつ撃ち込んで、正確に確実に射殺する。

挟まれた男たちは混乱に陥り、無茶苦茶に応射するが、跳ね上がり動き回る銃口に踊らされた弾丸は四方八方へ散って狙いつた場所へは一発も届かない。当然だ。彼らが手に持っているのは『命中率の悪さ』の代名詞になっているAK-47の、それもどこ

で造られたのかも定かではない模造品である。それをフルオート、腰だめに近い素人撃ちで使っているのだ。

多少心得のあるらしい密売人が、マズルフラツシユの中でマカロフを弾く。拳銃弾はモモの左肩を掠って血を吹くが、モモは痛がるどころか瞬きすらせずに撃ち返した。

ある者は喉、ある者は頭蓋、心臓、腹、的確に急所を狙われ、波止場の悪人たちは次々と血の池に沈んでいく。

そして最後。残るのはテロリスト達のリーダーだった男だけになった。

「くそっ！」

男はAK—47の銃口でモモを追うが、弾は狙ったところに一つも飛んで行かない。三十発を撃ち尽くし、AK—47は白煙を上らせ静かになる。替えのマガジンは無い。そして味方も、もういない。

銃撃戦が始まって一分も経たずに、彼らはモモと蔵馬に壊滅させられたのだ。

蔵馬とモモはトリガーに指を掛けながら、銃口の先で立ち尽くす男に声を掛ける。

「あなた銃撃つの下手ですね」

「お前銃の撃ち方を知ってるか？ 銃はな、撃ちたい相手を狙って引き金を引くんだ」

「く、くそおおお！」

男は小銃を放り出し、鼠のように素早く武器商が落としたマカロフに飛びついた。そ

してモモに狙いを定め、引き金に指をかける。

しかしマカロフが火を噴くより先に男から血飛沫が二つ舞う。一つは蔵馬が撃った右肩から。二つ目はマカロフを持った男の手から。

神経を焼く痛みに、男は悲鳴を上げる。

「やるー！」

モモは感嘆を漏らして、海沿いのガントリークレーンに手を振った。そこに、男の手を狙撃した仲間がいる。

蔵馬は男に向けていたP220を降ろし、呻く男の腕を後ろに回して手錠をかけた。

「目標確保。撤収だ」

「くそ……くそくそくそくそくそ！」

痛みに身悶え、脂汗を全身から滴らせ、男は呻いた。

何なのだ。一体何が起こった。

年端もいかない子供と、たった一人の男に、全滅させられた。

警察では無い。警察はこんな無茶苦茶しない。

この国で、こんな一方的な暴力を振るえる存在など、あるはずがない。

「お前ら……一体何なんだ……！」

臍物から絞り出すような苦渋に満ちた問い掛け。

対して蔵馬は、明日の天気を教えるような何気なさで答えた。

「お前らの敵だ、国家の敵（テロリスト）ども」



「あの一、クラマさん？」

「……………」

「その、ごめんなさい……」

「黙って傷を押さえていろ」

深夜の首都高速を走る蔵馬のヴェゼル。東京湾からどんどんと北上していく。

潮の臭いはとつくに消え失せ、都心の明かりも通り抜け、ヴェゼルの周囲は徐々に街から山へと移っていく。

運転席には蔵馬がおり、その隣でモモが気まずそうに蔵馬の顔を窺っている。

現場を処理班に任せ、二人は奥多摩にある本部へ戻る最中だった。

モモはブレザーを脱ぎ、裂けた肩部に回収班から貰ったガーゼを押し当てている。赤く染みたガーゼを指先で弄び、申し訳なさいっぱいという表情で蔵馬と道路照明灯へ交互に視線を移していた。



今回の作戦は、武器を手に入れようとするテロリストへ奇襲するはずだった。取引の最中のテロリストを陰から二人で銃撃する手筈で打ち合わせをした。そうすれば被害も軽微で穏便に済ませられる。結果が同じなら楽に仕事をしたいのには、どんな稼業でも同じだ。

だが実際蔵馬たちが演じたのは、正面からの銃撃戦を大立ち回りである。モモを助けるために咄嗟に飛び込んだが、今思えば死んでいてもおかしくない程危険な状況だった。

「お前もうスカートを履くな」

「そんな……」

こんなことになったのも、潜入中にモモが海風に煽られて覗いたスカートの中身を、蔵馬が見たとか見てないとかで騒ぎ始めたのが原因だった。そこを哨戒していたテロリストに見つかり、蔵馬は咄嗟にコンテナの陰に隠れたがモモは連行され、あの顛末である。

「ううう……嫌だよお……」

「マジ泣きすんなよ……」

泣きべそをかくモモに、蔵馬はうんざりしながら煙草を啜える。

「嫌なら二度と作戦中にあんな真似するなよ。今回の件はお前のパンツの色まで報告書

に書くからな」

「……………はい」

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が続く。

「……………やつぱりパンツ見たんですね」

「ほんと懲りないなお前は」

ヴェゼルは八王子第二インターチェンジから一般道に降りた。赤信号でヴェゼルが停まる。蔵馬は助手席のグローブボックスを指差した。モモが開くと、中には拳銃の予備マガやティッシュ箱に混じって新品のガーゼと包帯が入っていた。

信号が青に変わり、エンジンが静かに回る。

モモはガーゼを替えて、血の染みだガーゼと新品ガーゼの包み紙を丸めてスカート下のポケットに入れた。

奥多摩の山道を走りながら、蔵馬はモモを一瞥する。

「お前に出来るだけ長持ちしてほしいと思っっている。本当に頼むぞ」

「はい……………あの、蔵馬さん。怪我とか、してませんよね？」

「してない。お前の肩は、大丈夫か」

「大丈夫です。私は修理できますから」

自傷気味にそう言つて、モモは肩の傷を撫でた。

彼女の言う通り、モモはあらゆる怪我也『修理』が可能である。

銃で撃たれて腹に大穴がぽっかり開いても、四肢をナイフでちよん切られても、爆発に巻き込まれて全身真っ黒焦げになつても、脳さえ無事なら『修理』が出来る。

彼女の体は半分以上が人工物で出来ている。

骨は網状炭素で補強された人工炭素強化骨格。

筋肉は有機繊維が折り込まれた培養超筋繊維。

皮膚も研究室の冷蔵庫で培養された人口表皮。

ガーゼに染みた血にも色んな薬品がいっぱい。

そして彼女には戸籍がない。彼女には過去がない。彼女は人間ではない。

神は自らを模して人間を創つた。

そして人間は、自らを模して彼女たちを造つた。

生体義肢・サイバネティクス。ATD-06。義体名『モモ』。

彼女は日本政府が造つた、義体と呼ばれるサイボーグである。

## 第2話

例え話をする。

魂と言うものが、存在しないと仮定しよう。

21グラムの魂魄、我を我と無自覚に自覚する精神、何かを思わんとする心、日々波打ち揺れる感情などと呼ばれるものが、頭蓋の内で髄液に揺蕩う柔らかな神経細胞が、絡み合う様に幾重にも連鎖的なインパルスを起こした結果に発生した、数式によつて表すことが可能な一個の現象だとしてしよう。

そして、その現象を完全に再現できる機械が、存在する仮定としてしよう。

喜びを再現し、怒りを再現し、哀しみを再現し、快楽を再現する機械があるとしてしよう。誰かを思いやり、愛し、時に嫌いになつて、やれやれアイツにはもうウンザリだと愚痴を溢す。ユーモアを解し、冗談を言つたり、ギャグが滑つて落ち込んだりする。そんな電気羊の夢を見る機械があるとしてしよう。

そんな存在があつたとして、人と機械の違いとは一体どこにあるのだろうか。

中身で区別がつかないのなら、その容器——肉体の有無で判別すればよいのだろうか。であるなら、何らかの理由で肉体を失つた人間は、もう人間ではないのだろうか。

腕を失い義手を使用する人間は人間か？

その人物の脚も義足になったら？

眼も失い義眼となったら？

歯も人工歯と差し替えられ、髪も植え替え、皮膚も培養皮膚に貼り換え、筋肉も内臓も代用物と挿げ替えられ、その人間を構築していたものをどんどんと別の物に入れ替えていった先。その人間は、果たして人間でいられるのだろうか？ 自身を人間と認識できのだろうか？

「君の名前は？」

白衣の女が尋ねた。

白を基調としたその部屋は病室の様でもあり、研究室の様でもあった。中央に設置されているのは、小型化されたMRIに近い装置。それにはケーブルが何本も接続され、脇に並ぶコンピュータと繋がっている。

女は装置の脇に立ち、コンピュータのディスプレイに表示される数値を見つめている。

「モ……モです」

問いに対する返事があった。

装置に寝かされている、薄桃色の検査衣を着た黒髪の少女、モモは苦しそうに、震え

る声で答える。頭にヘッドマウントディスプレイの様な機器を着けられているモモの表情は硬い。瞼は強く閉ざされ、額や頬には汗が幾つも筋となっている。

「モモ、君は一体何だ？」

女は重ねて尋ねる。モモが一体何なのか。彼女の口で自分が何者なのかを答えさせる。

この言葉を口にする時、女はいつも考えた。この問いの意図は何だろうか、と。これは一種の儀式だった。義体が生み出されてから短くは無い月日が流れた。その中でいつの間にか定着した、遠くイタリアの地から連綿と続いてきた、一種の伝統だ。

元はある男が始めた。

これを探ねた男は、どういう答えを欲したのだろうか。なんと答えて欲しかったのだろうか。

この質問を始めた男は、欲しかった答えを得られたのだろうか。それとも、まだこの質問を続けているのだろうか。

この問いの先を、女は知らない。何の意味があるのかも分からない。

今この問いは、単なる処置の一環として投げかけられている。

故に答えも、プログラムに従ったシークエンス通りに返される。

「わた……私は……生体義肢・サイバネティクスATD-06。担当官、蔵馬辰己……です」

モモは苦痛に耐えるような険しい顔のまま、しかし今度は言いよどみ無く答えた。

「私は日本国家と国民に忠誠を誓います」

そして、誓った。プログラムの通りに、“条件付け”の通りに。

●  
国立児童社会復帰センター。

奥多摩の奥地。山を切り開いて作られた、広大な施設だ。

病気や事故によって日常生活を送れなくなった子供たちや、犯罪や児童虐待などの被害を受けて心に傷を負った子供たちの、リハビリテーションと社会復帰の促進を促すために作られた。厚生労働省管轄の独立行政法人である。

ここには心と体に傷を負った子供たちが全国から集められ、自然と触れ合い、似た境遇の者たちが互いに協調し合い、高度な医療とカウンセリングを受けながらのびのび健康やかに生活している。そうして傷が癒えた日には、再び社会へと戻っていく。

ここは外の世界で生きる力を失くしてしまった子供たちを護り育み、いつの日か飛び

立たせるための繭なのである。

——というのが、国家が国民に向けて触れ込む、この施設の表向きの概要だ。

つまり真実ではない。では本当のこの組織の姿とはどのようなものなのか。

「モモの具合は？」

国立児童社会復帰センター、通称センターの敷地内にある医療棟と呼ばれる建物。その中の一室に蔵馬はいる。質素なベッドが並ぶその部屋はさながら病院の大部屋のようではあるが、民間医療機関の病室にあるような、気の利いた設備は一切ない。ベッドの群れと、それらを分けるカーテン。後は精々壁に掛かったアナログ時計くらいの、愛想の無い部屋だ。

その部屋の一番奥のベッドにモモは寝かされている。シーツは掛けられておらず、それどころか服も着ていない下着姿を蔵馬は見下ろす。

静かに寝息を立てるモモの左肩。昨晚銃傷を受けたその肩には、銃創どころか手術痕すら無い。綺麗な、白くて丸い肩がある。

そのはずだ。彼女に施されたのは普通の手術では無い。肩をほぼ丸ごと「替えた」のである。

パンクした自動車のタイヤを替えるように、肩部の骨と筋肉と神経と皮膚を、別の新しい物に交換したのだ。



普通ならあり得ないことだ。

だがモモにはそれが可能なのだ。モモだけではない。この施設にいる子供たちは、みんな怪我をすれば新しいパーツと交換できる。皮膚を擦り剥けば新しい皮膚を。骨が折れれば新しい骨を。内臓が破裂したら新しい内臓を。

ここは、そういう技術の研究と試験、運用の為に作られた組織だ。

その技術とは、『義体化技術』。

イタリアの『社会福祉公社』という、センターとよく似た政府の組織で開発され、五年ほど前に技術交換と多額の非公式な資金提供によって日本に与えられた先進技術だ。

人間の身体パーツを人工物と入れ替える不死身の肉体。そして人工の筋肉は人ならざる膂力と瞬発力を持つ無敵の力。それらを与えられた被検体に薬物と洗脳による“条件付け”と呼ばれるプログラミングを施し、国の命令に我が身を省みず服従するサイボーグを創り出すのだ。

その被検体は年の若い女性が一番も適合率がよく、その為に社会福祉を謳い子供を集める施設を作った。

まるで漫画やアニメの世界だが、これが実際に運用されたイタリアでは、義体研究から得た技術で先端医療の分野では目覚ましい発展を遂げ、そして彼女らを用いた防諜活動、対テロ作戦においても多くの実績を残している。

無論良い事ばかりではない。まず研究開発そして運用と維持に莫大な費用がかかる。そしてこれが最も大きな問題だが、処置を施された義体は、極端に寿命が短い。戦闘の第一線に駆り出される故に負傷する可能性が高い事もあるが、身体のパーツをいくらでも入れ替えられる義体にとつての寿命とは、肉体の傷によるもの無い。唯一代替えの効かない器官である脳之死である。

義体の運用には非常に強力な、見方によつては劇薬とも言える薬品を複数、それも大量に使用する。手術の際にも、“条件付け”の際にも、そして人工の臓器官が正常に動作するために。何かにつけて投与される薬品によつて、彼女らの脳は常に薬漬けの状態となり、それが脳神経に凄まじいダメージを与える。

彼女らの寿命は、奇跡と言い換えられるほどの強運があつても十年といったところだろう。

だがそんな燃費の悪さがあるとしても、メリツトの方が上回るならば使つてみようと考えるのが為政者の考えることだが、やはり少女をモルモットにしての人体実験は世間体が悪すぎる。故にイタリアでも研究・運用は秘密裏に行われた。

義体の研究・運用は、日本政府の人間にも総理大臣と内閣府各大臣の他は、活動範囲が重複しがちな法務省と防衛省の重役と担当職員、センターの管轄として隠れ蓑にされている厚生労働省の一部職員などの少数にしか知らされていない。

対外的には研究は社会福祉を名目にして、運用は将来創立される予定の日本版CIAの仮組織という事にして機密性を高め、国立児童社会復帰センターは運営されているのだ。

当然、ここに勤める職員たちも、いわゆる普通の就職活動を経てここに来たのではない。

全員が、何か事情を抱えてここにいるのだ。

それは蔵馬辰己も例外ではなく、彼の隣でモモの処置記録を眺める義体外科医の正木もそうである。蔵馬と並んでも大柄に見える正木は、生え茂る髭と、幾つもの死を目前で見た経験から来る鋭い眼光の所為か、中年を超えて壮年の域に片足を入れながらも、大熊と形容できるほど威圧感のある男だ。

見た目からは想像もつかない繊細な手腕で、国立大学病院を舞台に何十何百と命を救ってきたこの男も、院内の権力闘争に巻き込まれ、最後には自らとは関係の無い医療ミスの責任を負わされて人殺しのヤブ医者汚名を着せられ、病院を追われたところを、センターに拾われたのだ。

「もともと肩関節の摩耗が大きくて交換時期に入っていたからな。全部替えた」

正木は目の下にクマを浮かべ、欠伸を噛み殺しながら処置記録の入ったバインダーを蔵馬に手渡す。

「肩の傷より、少し『条件付け』で調整が入ったぞ。やっぱり作戦中に集中を欠いたのは良くなかったみたいだな」

「まあ、そうだろうな……」

「じゃあ俺は上がるからな。これから出すつて言うから徹夜で直したんだ。頼むから今日はこれ以上俺に働かせないでくれよ。もう歳なんだ、無理させんでくれ」

正木は今度こそ大きな欠伸を放ち、蔵馬の背を軽く叩いて病室から出て行った。

義体はいくら傷付いても、即死でなければ直せる。

だが手術の度に、条件付けの度に使用される薬品が、彼女の脳の機能を少しずつ奪っていく。最後には脳が完全に機能を停止してしまう。

今晚だけで、モモの寿命はどれだけ縮まったのだろうか。

「……頼むぜ、おい」

蔵馬の声呼び水になったのか、モモの瞼がかすかに動く。

同時に壁の時計が電子音を発し、午前六時を知らせた。

そうして、また一日が始まる。



秋葉原。他の街とは似ても似つかない、独自の進化を遂げた現代文化の中心地だ。

どこ彼処からけたたましい電子音や、甘ったるいアニメ声や聞こえてくる。

最近のゲームPVやアニメCMがあらゆるモニターに映され、美少女キャラクターやら男前なキャラクターが描かれた極彩色のポスターが、どこを見ても視界に入る。

かと思えばビルとビルの隙間にひっそりと、電子機器の部品を売っているらしい飾り気のない店が収まっていたりする。そういう店舗に紛れて、カロリーの高そうな飲食店ばかりが多数点在していたり、何に使うのかよく分からない雑貨や工具を売る店があったり、そしてまたアニメグッズのショップがあったりする。

一言でいえば、混沌としている。そんな街だ。

「はあ……凄いところですね」

美少女キャラクターがデカデカとプリントされた看板を見上げて、モモは感極まったように呟いた。赤や青や緑の髪の毛の美少女イラストに目をパチクリさせたり、軒先のショーケースに陳列された、少し卑猥な黒髪の美少女フィギュアを見て、その形容が自分の容姿と似ていることに気付いて複雑そうな顔をしたりしている。

「秋葉原に来たのは初めてだったか？」

隣を歩く蔵馬は、スーツのポケットから煙草を取り出し、しかし秋葉原は路上喫煙が禁止されている事を思い出して悲しそうに懐に戻す。そういうところで変に律儀な男だった。

「はい。目がチカチカしますね」

「確かに、少し目が疲れる街ではあるな……っと、曲がったぞ」

言つて蔵馬は正面に注意を促す。二人が目で追う先には、雑踏に紛れて青いブルゾンジャンパーと灰色のパーカーの男二人組が、中央通りからドンキホーテの角を右に曲がった。

今蔵馬たちは、この二人を尾行している最中だ。

国立児童社会復帰センターは大きく分けて、実働部隊として作戦を立案実行する作戦部と、情報を集めて分析し、時にはカウンターインテリジェンスとして防諜活動を行う諜報部の二つの部署で構成されている。

基本的には諜報部が何らかの情報を持ってきて分析し、信憑性と危険度が高いと判断すれば作戦部の方に案件を持つてくる。そして作戦部が銃を引つ提げテロリストやそれに類する犯罪者をぶっ潰す。そういう風な流れで任務を行なうことがほとんどであり、昨日の波止場もその例に漏れない。

そして今日も、諜報部が持つてきた情報をもとにした任務だった。テロリストの会合

があることを掴んだのだ。

調べでは情報交換程度の小さな集会らしいが、銃器を携帯している可能性があるとのことだ。そういう危険そうだけど大人数を投入することは目立つし出来ない、という作戦の場合はだいたい、義体と担当官のツーマンセルが投入される。

義体の本国イタリアでは、この二人組の事を『兄弟』と呼んでいたそうだが、日本においてはその風習はない。『義体班』か、あるいはそのまま二人組と呼ばれることがほとんどだ。ちなみに『義体班』はそのままコールサインとして使用されており、蔵馬とモモの班は六つ目の『義体班』ということで『マキナ6』と呼称される。

その『マキナ6』だが、銃器を所持した相手との戦闘を行うには軽装だった。二人とも持っている武器は拳銃一丁のみ。そこらの警官と変わらない装備だが、今回彼らはテロリストの生け捕りを指示されている。アサルトライフルでは殺してしまう可能性の方が高くなるうえ、日本では銃声そのものがタブーとされている為に、消音装置を使いにくいアサルトライフルは置いてきたのだ。

これで現場がどこか人気のない場所ならば短機関銃くらいなら持ってきても良かったのだが、生憎彼らがいるのは都会も都会。日本で最も人口密度の高いエリアの一つだ。万が一にでも流れ弾が出るとまずい。

可能ならば彼らが会合に参加する前に捕縛して、尋問して会合の開催場所やらを聞き

出すことが出来れば良かったのだが、男たちは宿泊していた浅草のホテルから、大通りを外れずに来た。流石に公衆の面前で誘拐は出来ない。結果、出てきた彼らの後ろを着かず離れず追って、とうとう秋葉原までやってきたのだ。

「どうして秋葉原なんでしょう?」

「ここが打ってつけだからだ」

「こんな人の多い場所が?」

モモが首を傾げ、黒髪がさりと揺れる。

「ああ。連中は秋葉原を好む。あいつらが街中で何を言っても、誰も気にしないからな」

「どうしてですか?」

「あいつらがどんな物騒なことを言っても、漫画かアニメの話だとしか思われないからだ」

内緒話はあえて人の多い所で、というのとはよく言われる話だが、実際ただ人の多いだけの場所では、話す内容によってはかえって目立つこともある。何かを話すにもTPOを弁えなければならぬのだ。

蔵馬がそう教えると、モモはよく分かってないのか変な表情でフムフム頷いた。

「分からないならそう言え。まあ例えるなら……えーとだな、日曜の混んでる動物園の



どうぶつふれあい広場で、日本がAAV-7を運用する上での課題は、なんて話をしてたら逆に目立つだろ？」

「何と無くですけど、分かりました」

「本当かよ……」

「話題にも相応しい場があるのは分かったんですけど、秋葉原だと大丈夫っていうのがよく分らないです。こんなにたくさん人がいるんだから、少なからず不審に思う人がいるんじゃないんですか？」

「そうだな……」

蔵馬は追跡する二人から目を離さないようにしながらも、周囲の人々に意識を傾ける。秋葉原の街に行くのは、各々が気ままに生きる。そんな人々だ。辛い事もあるだろう、哀しい事もあるだろう。だが、その目には蔵馬には無い朗らかさとも言えいいのか、どこか緩さのようなものがあつた。

それは生命の危機に瀕したことの無い人間のみが持つことを許される、己の生に対する絶対的な信頼感のような物だ。明日の自分の生を無条件に信じきっている。自分の死という避けられない運命に、いまだ向き合つた事の無い人間の目だ。

「お前には少し実感がないだろうが、日本って国は本当に平和なんだ」

「平和？」

生まれながらにして戦闘行為を義務付けられ、他の何よりも銃と言う道具が手に馴染む義体にとつては、縁の薄い言葉だ。

「分かりにくいか……この国の人間にとつて、死は他人事なんだ。戦争は七十年前に終わったか、遠くの砂漠でどこかの国がやつてることか、それこそ遠い世界——漫画やアニメの中にしかないものなんだよ」

蔵馬は口元でシニカルに笑う。その笑みは、すれ違う若者たちに向けているようにも、自分に向けているようにもモモには見えた。

前を歩くテロリスト二人組は、どんどんと秋葉原の街を進んでいく。中心街からは少しずつ外れ、人気も徐々に疎らになってくる。ここまで来るとサブカルチャーの街という風でも無くなってくる。そして寂れたテナントビルの前で立ち止まった。玄関前に設置された自動販売機を眺める振りをしてながら、周囲の様子を窺っている。

「おっと。立ち止まるなよ」

蔵馬はモモの耳元で囁いたかと思うと、歩を進めながら普段の彼からは考えられないほど明るい声で笑い始めた。

「はっはっは！ そいつは凄いな！ それで？」

「な、なんですか急に……」

「このまま話しながら一回通り過ぎる。何か適当に最近あったこと話せ」

「ええ？ えーと……実はついにアザミに初潮が来ましてね！ さすがに驚いたらしくて下半身真っ赤にしながらガクガク震えてました！」

「……、そうか！」

この会話を聞いていたテロリストたちは、擦れ違い様に少女に友人の生理の話させると男に最高度の怪訝な目を向ける。

その嫌な物を見る様な、湿度の高めな視線と、モモの話題選択センスに片眉をひくつかせながら、ビルの前を通り過ぎた先にあつた角を曲がった。

男たちの視界から逃れ、蔵馬は立ち止まるとポケットからスマートフォンを出して、カメラアプリを起動させる。レンズをビルの角から覗かせ、男たちがいる道路の写真を撮った。取れた画像には二人組は映っていない。既にビルの中に入ったのだろう。

「入りましたね、突入しますか？」

建物の陰からビルの前に移動する。モモは上着の下に隠した拳銃に手を伸ばす。

蔵馬も領きを返しながらか銃を手にし、隣でやる気を出してる少女の肩を叩く。

「ああ、だがその前にな、一つ。生理の話は二度とするな」

蔵馬とモモは周囲の物陰を窺いつつ、テロリストが入ったビルに足を踏み入れる。北南東の三方を囲まれたこの建物は、日中にも関わらず非常に暗い。節電の為か、それとも使用年数が切れているのか、天井の蛍光灯も点いていなかった。

二人は拳銃のマズルに消炎器を取り付ける。蔵馬がポイントマンとして前方を、モモがテールガンとして後方を警戒しながら進む。蔵馬とモモが『義体班』として動く時は、いつもこのフォーメーションだった。

一つしかないエレベーターの階数表示は最上階の四階にある。会合もそこで行われているのだろう。蔵馬はエレベーターの横に連なる階段を、身を低くして足音を消し、陰に潜むようにして上がっていく。

周囲の気配を探り歩を進めながら、いつものことだが、アホらしいと蔵馬は思う。こんな義体と言う特異な存在ありきのニンジャみたいな真似、いつまでするつもりだろうか。周囲を封鎖し部隊を突入させた方がよほど成功率が高い。

蔵馬は後ろを抜き足差し足で追ってくるモモに振り返る。視線に気付いて目を合わせてきたモモ。薄闇の中に浮かぶ美貌は、向けられた視線の理由を求めて傾げられる。蔵馬は言葉は発さず、首を振ることで『何でも無い』という意味を表し、半ばまで登った階段の上方に目を戻す。

いつまで続けるのだろうかという自問をしながらも、蔵馬は既にその答えに察しがつい

ていた。義体を兵器として見れば、単純明快なことである。

データが揃うまでだ。

義体がいかに程の有用性を持っているか。どれくらいの戦闘力を有しており、どれくらいの負傷に耐え、どれくらいの耐久年数を持っているのか。何度修理したら無敵の身体にガタが来て、どれくらいの薬を投与すれば脳が故障するのか。

将来的に義体技術を民間にフィードバックするためには、まず義体の限界を見極める必要がある。商品化するためのカタログスペックを弾き出すためには、まず最初に品物を限界まで使い潰す必要があるのだ。その為には肉体的にも精神的にも可能な限りの高負荷に晒さなければならない。

その為に戦闘行為をさせているのだろう。

長年戦場を渡り歩いてきた蔵馬は、戦闘状態というものが半端でないストレスを心身ともにもたらす事を知っている。義体を戦闘サイボーグとして使う事を思いついた人間も、そのことを知っていたのだろう。

故に可能な限り、義体を戦闘に駆り出す。壊れるまで、使い倒す。

データ収集のために、壊れることを前提として。普通なら小隊規模の戦力を投入するような作戦を『義体班』のみに行なわせるのも、戦闘データに余計なノイズを入れたくないという事もあるだろうが、要するに、とつとどぶつ壊れて欲しいのだ。

このオモチャがどれくらい乱暴に扱えば壊れてしまうのかを知るために、まずいくつか壊してしまおう。

それがこの国の指導者たちにとっての、モモたち現世代義体であった。

彼女らは試作機。科学と国防の生贄。取り換える事が前提の消耗品。

戦場の最前線にいる兵士は、時折自分たちが使い捨ての駒でしかないのだと自虐しブルー垂れる。だがあらゆるものには上には上がいるように、下にも下がいる。食肉用の豚と同じように、生まれた時から死ぬことが存在意義として死が義務付けられている彼女たちを見れば、少しは文句の数も減るだろうか。

薄暗い中でも分かるほど、埃が積層した階段が途切れた。蔵馬は足を止めて周囲の気配を探ろうとし、

「……………んぎ」

その筋肉で固い尻に、呑気に段差を上っていたモモが顔面を突っ込ませた。実に鈍くさい娘だった。文字通りオカマを掘られた蔵馬は、無言でモモの頭を叩く。

尻から外した顔は不服そうで、モモは叩かれた頭を擦りながらブチブチを愚痴を溢す。

「……………急に止まるし、お尻押し付けてくるし、頭叩くし……………」

「……………お前を軍隊に放り込んだら少しは文句の数も減るか？」

重ねて何か言おうとするモモを蔵馬は手を挙げて制し、傍に寄るよう手招きする。

このフロアには横並びに三つの部屋がある。

「声、聞こえるか？」

「ええつと……はい。一番奥の部屋の方から聞こえます」

「よし」

蔵馬は一番奥の扉に潜み寄り、耳をそばだてる。確かに話し声がした。モモは特別聴覚が鋭い義体ではないが、それでも扉越しの声を聴き取った。やはりチートだ。だがそのお陰で余計な危険を回避できた。

この国の連中がどういう思惑でいるかは、蔵馬とは関係が無い。

蔵馬にはモモを使い捨ての駒にする気など微塵も無い。モモの身体に宿った特異な能力。それは可能な限り、モモの身を守るために使う。

モモは、兵器などでは無い。

蔵馬はモモを下がらせ、扉をノックする。

中の話し声が止んだ。

しばらく沈黙が流れる。

待っていると、部屋の中にいるテロリストの方が先に痺れを切らして、様子を確認しに来た。ドアノブが回る。こちらにも実に鈍くさい。彼らは自分が国家を敵に回してい

るといふ自覚があるのだろうか。板一枚隔てたテロリストに向けて、蔵馬は手のP220の銃弾を三発撃ち込んだ。

薄いアルミの板を貫通して、内側にいた一人が冷たい床に崩れ落ちる。その絶命と交差して、蔵馬は扉を改めて開いた。日本の扉は基本的に外からは内開きになっているので、蹴り破ることが出来ないのだ。

部屋の中には今死んだ男一人を入れて三人のテロリストがいた。諜報部の報告より一人少ない。彼らは蔵馬の奇襲に面を食らって固まっている。死体を跨いで部屋に踏み込み、彼らに銃口を向けた。

「妙な動きをしたら殺す。黙って両手を挙げて跪け」

これは殲滅が目的では無い。彼等は極力生け捕りにしなければならぬ。

初めに一人殺してこちらがマジで殺すと見せつけければ、余計な抵抗はしないだろう。案の定テロリストたちは抵抗する様子を見せず、蔵馬の言葉に従う。

あとはこの連中を拘束して、応援を要請してセンターに運ぶだけだ。

拘束するには一人では難しい。蔵馬は部屋の外にいるモモを呼び寄せようとして――部屋の外に他の気配を察知した。この部屋の隣から、微かに物音がする。モモも気付いたらしい。諜報部め、いい加減な仕事をしやがって。

「行きますー！」



「おいちよつと待つ」

モモに目を向けた一瞬のうちに、跪いていた一人、先ほど追っていたブルゾンが距離を詰めて飛び掛かってきた。手にはサバイバルナイフが握られている。P220の銃口は間に合わない。

蔵馬は横に跳んでブルゾンの刺突を躲す。間合いと取ったが、銃を構えるより先に、残っていた巨漢の男が蹴りを放ってきた。その爪先が拳銃を握る手を突いた。P220が弾き飛び。

巨漢の追撃を避けて、蔵馬は部屋の奥へと転がった。出口はブルゾンに塞がれ、正面には巨漢の男。その手にはブルゾンが持つナイフが爪楊枝に見えるほど大型のボウイナイフ。

「お前からそれ銃刀法違反だぞ。よく秋葉原に持ってこれたな」

「お互い様だ」

ブルゾンと巨漢が落としたP220を見て笑い、ブルゾンの方が拳銃を拾い上げて蔵馬へ向ける。

二人の動き、何か格闘技をやっていた者の動きだ。

さすがに銃と刃物で武装した格闘技経験者を二人同時に、素手で相手にするのは分が悪い。しかし蔵馬は大して慌てた様子も無く、むしろ状況を楽しんでいるかのように笑

い、

「おい、それもう弾切れだぞ」

「え？」

ブルゾンは蔵馬の言葉に目を奪ったP220に落とす。巨漢の意識も一瞬逸れた。十分な隙だ。

「——ッ」

溜めておいた足のバネを開放して、床を蹴る。瞬時に巨漢との間合いを詰めボウイナイフより内側に入った。

右掌底鉤突きを顎に打つ。次いで左アッパーカット。巨漢が思わず後ずさり距離が開いた。

アッパーの引手で腰を回転させ、全力の右フックを巨漢の左脇腹にめり込ませる。拳の感触で、肋骨を砕いたのを感じる。

巨漢の体から力が抜けた。初撃の顎が効いて、脳震盪を起こしているのだろう。

蔵馬は巨漢の襟首を掴んで無理矢理立たせ、ブルゾンに撃たれないように盾にする。

そしてそのまま突っ込んだ。

「くそー！」

ブルゾンは突撃を避けたが、もう蔵馬の間合いだ。ブルゾンの拳銃を持つ手に、蔵馬

の回し蹴り。P220は再び宙を舞う。

銃を失ったブルゾンは、ナイフで切り掛かってくる。

蔵馬は紙一重で躲し続け、間隙を縫ってジャブをブルゾンに放つ。三発目のジャブが、顎に綺麗に入った。

脳を揺らされブルゾンの膝がカクンと折れた。蔵馬は身を回してブルゾンの襟と手首を掴み、そして手本のように綺麗な背負い投げを放つ。だが綺麗なのは投げるまでだ。

投げたブルゾンの胸に自分の肘を突き立て、一緒に地面に飛び込んだ。床に叩き付けられた衝撃と蔵馬の肘に挟まれて、ブルゾンの肋骨は粉々に砕ける。

蔵馬は立ち上がると一息吐くと、脳震盪から回復しつつある巨漢の顔面にフルスイングの蹴りをブチ込んだ。鼻血を噴きつつひっくり返る男を横目に、P220を拾う。

一連の戦闘は、一分にも満たない短時間だった。

近頃満足に訓練出来ていなかったが、それでも条件反射になるまで身体に刻み込んだ動作は、淀みも滞りもなく出てくるものだ。

ともかくこの場は切り抜けた。次は隣のモモだ。

「モモ！ 大丈夫か？」

隣室のモモに呼びかけると、はいはいと呑気な返事をよこす。無事だったようだ。

スマートフォンを出して作戦終了の連絡を入れた。数分で諸々の回収に来るだろう。蔵馬が隣室を覗くと、そこは血で赤く、臓器と骨で処々白く、零れた内臓から発せられた生臭い熱が満ちていた。返り血で顔を真っ赤にしたモモと、死体が四つあった。銃で撃ち殺された者もいれば、背骨から二つにへし折られている者もいる。乱戦になり、無茶苦茶に暴れたモモの四肢に巻き込まれたのだろう。

「怪我はしてないか？」

「大丈夫です。ちよつと拳、擦り剥きましたけど」

「……みんな殺したのか」

「え？ ……あ！」

「こつちで生け捕りにした。気にするな」

「ごめんなさい……その……」

モモは目尻に涙を浮かべる。

「その……私、生け捕りの仕方を知らなくて……」

「……………そうか」

蔵馬は。

どこか別の場所を見るような目で、モモではない誰かを見るような目で、そつとモモの頭を撫でた。

叱咤の代わりの、予想外の蔵馬の手。きよとんとモモは眼を丸める。

「生け捕りの仕方……ちゃんとした戦い方を教えてやる」

「……はい」

「今日はよくやった」

「……………はい！」

蔵馬は少女の頭を撫で続ける。

死体に囲まれて。返り血を浴びて。硝煙の臭いを体に染み込ませて。

それでも蔵馬に頭を撫でられるモモは、幸せそうに笑うのだった。

## 第3話

東京都奥多摩。市街から濃厚な葉緑に覆われた山道を一時間弱ほど進んだ中に、国立児童社会復帰センターはある。

この場所は、元は昭和末期の箱物建設ラッシュに建てられた野外活動施設だった。子供たちが楽しく自然と触れ合えるようにと作られた、どの都道府県にも二つ三つはあるアレである。

箱物行政の終焉と共に政府から切り捨てられて、長年売りに出されていたこの敷地を周りの山ごと、再び政府が拾い上げて義体の研究施設として改築したのだ。

青少年健全育成施設の時代に作られたハイキングコースは全て取り潰されて入り、また猟区から外れているこの辺りに来る人間はまずいない。

人目からの隠しやすさもさることながら、敷地自体は広大で、運動場や宿泊施設なども整っている。一から建物を作り直さずとも、リフォームと増築で間に合わせることが出来る。まさにお誂え向きの物件だった。

山の斜面をほぼ正方形に切り開かれた敷地は、大きく分けて本部棟、研究棟、居住棟の三つの区画に分けられている。まず四階建ての研究棟があり、義体の研究開発設備や

医療設備はここに纏められている。ここで義体は少女の身体から人工物の塊に改造されるのだ。

その隣にあるのが五階建ての本部棟だ。青少年健全育成施設時代はサービス棟として、図書館やレクリエーション室など様々な施設を内包していたこの建物は、いま作戦部のオフィスも課報部のオフィス、食堂も倉庫も独房もここに詰め込まれたセンターの本丸だ。

隣り合った二つのビルディングから少し北に離れたところに、居住棟がある。ここはほとんど手を加えられてはいない。四階建ての建物が山の斜面に沿って東西に三棟並ぶ。職員も義体も全員がここで寝泊まりしているのだ。

居住棟の内装や備品は、ベッドやデスクなどがそのまま使われていたりする。もちろん私物の持ち込みは許可されているが、義体たちが寝泊まりする寮は、特に流用品が多い。特に変える必要が無いということもあるが、そもそも彼女たちは模様替えをするほど物を持っていない。義体は担当官に与えられた物以外を所持できないのだ。

居住棟の最東にある義体寮の二階。蛍光灯に白く照らされた寒々しい廊下に、秋葉原から帰ってきたばかりのモモがいた。返り血のついた深紅のセーターは脱いで手に抱えている。青白い蛍光灯の光のせいか、少し顔色が悪く見えた。

ワンフロアに十部屋。同じ扉が並ぶ、その中の一室。二〇二号室が彼女の部屋だ。

正確には彼女たち——四人が寝泊まりできるこの部屋には、モモの他にもう一人の居住人がいる。

「ただいまー」

「おかえり」

二段パイプベッドと一对のクローゼット以外の家具が無い、生活臭のしない殺風景な部屋。モモに言葉を返すのは、シンプルな二段ベッドの上段で寝そべる少女だ。見た目の歳は十三ほど。ふわふわのくせ毛を肩口あたりで切り揃えている。やる気のなさそうな垂れ目をちらりと一瞬モモに向け、手にあるスポーツ雑誌に戻った。

アザミというのが彼女の名前である。モモのひとつ前に作られた義体で、部屋が同じと言うだけでなく、仕事で組むことが多い。昨夜の東京湾での仕事で、モモたちを狙撃で援護したのも彼女である。

「アザミ、昨日の狙撃凄かったね！ 銃を持った手に一発！」

「本当は銃だけを狙ったんだけどね」

アザミがいたのは船からの荷物を下ろす、モモたちから200メートル以上離れたガントリークレーンの上だと聞いている。潮風の中で動き回る、こぶし大の目標に命寄せただけでも大したものだろう。狙撃が苦手なモモにとっては当てただけでも神技だ。



モモは空笑いしながらカーデガンを洗濯籠に入れた。中には昨日の負傷で破れた服以外の衣装と下着が詰め込まれている。明日は仕事が無かったはずなので、まとめて洗ってしまう。カーデイガンの血が落ちるか不安だが、一応試すだけ試す。

「血の臭いがする。また怪我した？」

「うん、敵の血。胸に撃つたら噴きだしてきちゃって。心臓に当たったんだろうね」

そっか、と相槌を打って、アザミは寝返りを打ってモモに背を向ける。気の無い態度だが、モモの負傷に一々気を掛け、仕事でもしつかりとサポートしてくれる。身体は小さくとも、モモにとっては立派な姉貴分だった。

だが無論一切の不満がある訳では無い。対人関係に対するストレスはおおよそ、何気ない日常生活的一幕に潜んでいるのだ。

モモはクローゼットから石けん洗髪剤に化粧落としが詰め込まれた洗面器を取り出し、そこに洗濯済みの下着を重ね、タオルと寝間着で覆う。入浴の支度を済ませたモモは、クローゼットからベッドのアザミに向き直る。風呂の準備はこれで終わりではない。むしろこれから始まるのだ。

「アザミ、お風呂行こう」

ベッドの上で背を向けたままのアザミに声をかけた。

「……………もう入ったよ」

「いっつー」

「やっつき」

「やっつきつていつつ？」

「一時間……いや二時間くらい前……？」

ふうんと頷き、モモはベッドの上段に半身を登らせ、アザミの髪に鼻を近づける。

「……硝煙臭い。どうせ昨日から入ってないんでしょ。茶番はいいからお風呂行くよ」

「……嫌」

高速回転してミノムシのようにシーツを身体に巻き付け、ベッドに張り付くアザミを寢床から引き剥がす。彼女の不整頓に物が詰め込まれたロッカーから適当にタオルと下着とTシャツを引っ張り出す。

懸命に抵抗を続ける往生際の悪いアザミを器用に抱えて、モモは寮の一階にある浴室へ向かった。

アザミは水を極端に嫌がる。

モモが聞いた話によれば、義体になる前に受けた心的外傷に寄るものであるらしい。〃条件付け〃を施せばこの症状も無くなるらしいのだが、その分脳に負担を掛ける。基本は〃条件付け〃は必要最小限しか行われずに義体の延命を図るのがセンターの方針だ。

担当官の意向もあるが、それこそ昨夜モモがしたような、作戦遂行に影響を及ぼすようなことが無ければ原則“条件付け”はされないのだ。

それが、日本の義体運用である。

作戦遂行には影響なしと判断されたアザミの水恐怖症だが、任務に影響が無くとも私生活には影響がありまくる。放っておけば彼女は、いつまで経つても風呂にすら入らないのだ。

いくら人工物だらけの身体とは言え基本構造の半分は人間のままである。汗だつてかく。訓練や仕事で汚れだつてする。要するに臭くなる。

アザミがたまに敷地に潜り込んでくる野犬のような臭いを放ち出す前に、風呂へ連れ込み洗浄するのが、同室であるモモの役割なのである。

その任を仰せつかった当初は殴られ蹴られ、大格闘の末に大根でも洗うかのような様相を見せていた風呂戦争が繰り広げられていた。一旦アザミの逃走を許すと、寮内のどこかに潜伏する彼女を捜索しなければならない。しかもやたら隠れるのが上手いので、一晚掛かりだ。

さすがに面倒くさすぎるのでモモも必死になり、最終的に格闘の余波で部屋を一つをダメにして担当官とその他偉い人から叱られた以降は、二日に一度の入浴という条件で停戦条約が締結された。

そこまで嫌がるなら「条件付け」で治したほうが良いのではないかとモモは思うが、彼女の担当官が「まあ別にいいんじゃない？」と言う以上はどうしようもない。

アザミもいい加減水に慣れて来たのか以前よりは大人しくなっているの、モモとしては肅々とアザミの身体を洗浄するのみだ。

「別にさー、入らなくてもいいじゃんお風呂。どうせ定期メンテで皮膚ごと貼り換えるんだし」

「その作業をする義体技師さんに、マジ汚すぎて仕事する気失くすから洗えって言われたんでしょ」

「私の身体を綺麗にするのがあの人たちの仕事でしょ。職務怠慢だよ」

ぶつぶつ文句を言うアザミの服を馴れた手つきでひん剥き、自分も服を脱ぐ。先にアザミの服を脱がせたのは、脱衣している間に逃げるのを阻止するためだ。一度それをやられて半裸で追いかける羽目になった際の戦訓である。

服を脱ぎ終わると、モモは浴室に顎をしゃくり、アザミを先行させる。これは油断して先に浴室に入った隙にアザミが逃げ出し、泣く泣くタオル一枚身体に巻いて追いかける羽目になった際の戦訓だ。

刑務所の罪人連行の如くアザミをシャワーノズルの前に座らせると、モモはその背後に回り、持ってきた洗面器に湯をいっぱい溜める。そこにシャンプーを溶かし、アザ

ミの頭に流した。そうやって最低限の水で体を洗ってやるのが、怪我をすることなくアザミの清潔を保つ、これまでの経験の中で得た最も大切な戦訓だった。

全裸になつて余計小さく見える身体をさらに縮めて、微動だにせず洗われるのを待つアザミの背中。そこに今度は石けんを溶いた湯をかけて、ゴシゴシとタオルでこすつてやる。そのまま全身を隈なく泡で包んだら、最後に再び頭から湯をかぶせて泡を落とすてやる。

「お湯かけるよ」

「あー待つて。タンマタンマ」

アザミは震える指先を両掌に握り締め、胸に添えて乱れつつあつた呼吸を整えようとする。水に触れると起こる動悸。これが限界に達すると、錯乱に陥り水から離れようとして身体が勝手に逃走に駆られてしまう。

深呼吸をして、アザミは背後にあるモモの胸に後頭部を押し付けた。大きいとも小さいとも言えない膨らみに頭を沈ませ、自身の薄いあばら骨の浮いた胸を上下させる。

「どうしたの？」

「最近気づいたんだけど、人の胸って何故か落ち着く」

「何それ……」

よく分からない理屈だが、アザミが落ち着くならそれでいい。

胸中で震える小さな頭を抱いて、震えが収まるのを待つ。

「ねえ、やつぱり『条件付け』で治してもらった方がいいんじゃない?」

「……トキワさんが要らないって言うなら、しなくていい。それに治したら寿命が縮むと思うと、やつぱり、ね」

「そっか……そうだよね。ごめん」

死は恐くない。そういう風に『条件付け』されている。戦闘人形である自分たちにとつて、死への恐れは仕事の支障になる。人よりも近いところに予定されたその運命を怖がっているのは、義体として生きていくのは苦しいだけだ。

だが、それでも死ぬことが嫌だとは思って、そんな当たり前の感情だけは残されている。最も恐れるべき死を恐れることは許されず、人が生きる上で最も親しむ水を気狂わせるほど恐れることは許容される。つくづくアンバランスな存在だった。どうせ取り除くならば、いつそ全ての感情を奪い去ってくれたら余計な事を考えずに済むというのに。「……うん、いいよ。流して」

アザミの頷きを見て、モモは湯をその頭頂に注ぐ。頭から髪に、その毛先から肩に。身体を伝って爪先から雫となる、肌を舐める水の感触が過ぎ去るまで耐える。

チクリと、アザミは腹が痛んだ気がした。

「終わったよ」

「ん……？」

モモの声に四肢を弛緩させ、腹を撫でてみるが何ともない。子供というよりアスリートに近い、引き締まった腹筋があるだけだった。

「どうかした？」

「……どうもしない。もう上がるよ」

アザミは立ちあがり、ぶるぶると頭や手足を振るって水滴を払い落としながら、浴室から出て行った。その背を見送り、モモはシャワーのバルブを捻る。湯を受け、一息つく。

昨日は肩の治療の為風呂には入れなかった。二日ぶりの湯の熱に息を漏らし、その中で先ほどのアザミの言を思い出し、自分の胸をふよふよと触ってみる。なんてことない、ただの胸だ。これが人の物だと落ち着くのだろうか。よく分からないが、これが好きな人間が多い事は知っている。特に男衆。

……蔵馬もこれが好きだろうか。たぶん好きだろう。センター職員の中でも胸の大きな女とは何だかんだで甘いし、仲がいい気がする。

蔵馬と言えば。

モモは濡れた頭に手を乗せた。昼間、蔵馬は唐突に自分の頭を撫でてきた。それはいい。どんな理由があっても、行為自体が嬉しいのだから。

モモが気になったのは、あの時の蔵馬の目だった。

まるで自分を通して何か他の物を見ているような。自分の背後にある何かを見ているような。近くの物を見ているのに、焦点はどこか遠くにあるような。

「……あの眼は、嫌だな……」

その降り注ぐ水滴の中で吐かれた眩きは浴室に薄く反響し、そして湿気に吸われて消えた。



「昨日モモから聞いたんですが、クラマさんが言うにはこの国は平和らしいですよ」「ははは、蔵馬君らしいなあ」

日本国内でも指折りの歓楽街、渋谷はいつにもまして騒がしい。

渋谷駅前のビル二階に入った喫茶店、普段は人が途切れることのない繁盛店が、今店内に居るのは二人だけだった。窓際の席から街を見下ろすアザミと、アルマーニのスーツを着こなした青年だ。

名は常盤大輔といった。国立児童社会復帰センター作戦部の職員で、アザミの担当官だ。彼ら二人のツーマンセルで『マキナ5』と呼ばれている。



180センチを軽く超える高身長、肩や胸などが筋肉で膨らんでいるが、長い脚のお陰か細長いシルエツトを持っている。

そして適度に遊ばせてはいるが、しつかり整えられた髪に縁取られた柔和で甘いマスク。これで白い馬と華美な衣装を用意すれば世の乙女が妄想する『白馬に乗った王子様』を完全再現できるだろう。

ワザとらしく組まれた長い脚も、高級品で統一された衣装も、他の人間がすれば一々鼻につくであろう気障つたらしい仕草も、常盤がすれば全て自然な、そうで在るべきものに見える。そういう男だった。

対してアザミの服装は、そこらの格安衣類量販店で適当に見つかった灰色のパーカーに濃紺のジーンズと至つて地味だった。

「……これでも、平和なんですかね」

「これも、まあ平和な世の中じゃなきゃ出来ないことではあるよね」

駅前スクランブル交差点に面したガラス張りの席に座る、二人の眼下。

交差点内にひしめき合うデモ隊がひしめき合っていた。軽く見積もつて千人は下らないであろう大規模デモだ。

老若男女が、参加と離脱を繰り返す、人の波を作る。その流れを堰き止めるのは、警視庁から派遣された機動隊だ。このデモは渋谷駅前までしか道路使用の許可が下りて

いない。もしここより先へ行こうものなら、屈強な警察官たちが取り押さえにかかろう。

しかしデモ隊の熱気は止まるところを知らず、それどころか次第に熱気から熱狂へとボルテージを上げつつある。

このままでは、いざれデモ隊と機動隊の間に何らかの衝突が起こるだろう。

それを察してか機動隊の隊員たちは殺気立ち、またその殺気がデモ隊を刺激する。

確か平和とは言い難い光景だ。

一触即発のスクランブル交差点を見下ろしながら、常盤は甘いホワイトモカを口に運ぶ。

「蔵馬君にとつての平和は、殺し合いをしていないってことなんだろうね」

「ならトキワさんはどう思っているんですか」

「元警察官の立場から言わせてもらうと、平和ではないね。機動隊にいた頃、あそこの彼らみたいにデモ隊の前で壁作つた事あるけど、結構怖いよあれ」

「トキワさん機動隊にいたんですか？」

「少しの間ね。すぐに追い出されたよ。まあその後もずっとデモ隊の周りをうろちよるする仕事をした。だからデモ隊には詳しいよ、僕」

「へえ……ならこのデモはトキワさんから見てどうですか？」

「うーん……このデモ隊には扇動家アシテーターが混じっているね」

「アジ……何ですかそれ？」

「扇動家。一言で言うとお祭り上げ屋だ。みんなをお祭り気分させるのが仕事だ」

常盤の言うお祭りに気分が飲まれたのか、デモ隊の一人が空き缶を宙に放り、それがアザミの目の前のガラスに当たった。

「アザミちゃん、これが何のデモか知ってる？」

問われ、首を横に振る。

「イタリアのジャコモ・ダンテは？」

「はい」

ジャコモ・ダンテ。

義体の祖国イタリアで、数々のテロを敢行したテロリストだ。

イタリアで義体を運用していた社会福祉公社の主敵である五共和国派を率いて、去年大規模爆破テロを伴う、一連の戦闘の後に身柄を拘束された。

彼がイタリア闘争の烈火を点した張本人であり、彼がいなければ、イタリアは義体の運用に踏み切らなかつただろう。それほどまでにイタリア政府に大きな影響を及ぼした人物だ。

「彼の戦いを見て、死に体だったイギリスフランススペインにコロンビア、世界中のテロ

リストが我々もイタリアに続けと闘いを始めた。ジャコモのテロ自体は失敗したけれど、彼が撒いた火種は、着実に世界中に燃え広がっている。特に彼が一時期身を置いていた、中東地域でのテロ活動は彼の逮捕後一気に増加した」

一旦区切り、コーヒーで舌を湿らす。

「中東でテロ組織が活発化したのがまずかった。中東のそれは規模が桁違いに大きい。ジャコモの腹心がイタリアの激戦を生き延びて中東に落ち延びた、なんて噂もあるね。どの国も出来れば無視したいけど、放っておけば中東の砂漠を飛び越してヨーロッパまで戦いが波及しかねない。

何とかしないといけないけれど、英仏西は自分の国が忙しい。イタリアは五共和国派との戦いが終わったばかり。すると動ける大国はドイツとロシアだけだけど、ドイツは一国だけで行くのは嫌だし、ロシアだけを紛争地域に放り込むのも避けたい。欧州連合としては出来ればアメリカを引っ張り出したいところだ。

一方アメリカは、今軍事費を削減している真っ最中。またイラクの時みたいな泥沼の対テロ戦争に突入するのは避けたい。とは言え中東のテロ組織は反米を謳っているから、野放しには出来ない。ではどうする？」

「わかりません」

「アザミちゃん考えようともしなかつたね……。まあ、ドイツと同じだね。参加者を増

やして自分たちの負担を軽くしようとした。そして、アメリカのスケープゴートとしていつも貧乏くじを引くのが、日本だ。

日本は今年集団的自衛権の行使容認を認めたから、アメリカが戦闘に参加すれば、日本も一緒に行かざるを得ない。これまで資金援助と後方支援のみを行ってきた日本が、とうとう戦争に参加することになる」

そして常盤は、外の群衆を指差した。

「これは、日本のPKO活動参加反対の人たちだね」

「話逸れた上に長いですね」

「ご、ごめん……」

しよげる常盤を無視して、アザミは話を戻した。

「それで、扇動家がどうしたんですか？」

「ああ、うん。日本ではデモ行進ってあんまり派手にならないんだ。警察が取り囲んで監視してるから、みんな結構冷静だ」

「でも、私知ってる限りでは、デモって暴動に発展しているの多いですよ。」

「それはここ数年のことだよ。もう針で一突きしたらデモ隊と機動隊の衝突が起きそうなくらい緊迫してる。少なくとも、ここ数十年はあんまり無かったことだ」

「つまり、扇動家がデモ隊を煽っているんですね」

「そういうこと。デモに参加する人たちは、多少の差はあれ心の中に怒りを持っている。扇動家は集団意識を利用してそれを突き、心のタガを外すんだ。これも一つのテロの一环だね。扇動家はテロリストに雇われているだけだけど」

「なるほど。今日の目当てはその扇動家なんですね。テロリストとの繋がりがあるから……あ」

アザミが外を指差す。デモ隊の一人が、手に持っていたペットボトルを機動隊に向かって投げつけたのだ。

これが引き金となった。

それからはもう、デモ隊が手に持っていたもの機動隊に投げつけ、封鎖された道路へと流れ込もうとする。機動隊もそれに応じて動きだし、人の奔流は渦を巻いて騒乱となる。

「あーあ、始まった」

「ペットボトルを投げた人が扇動家ですか？」

「違うよ。扇動家は煽るだけだ」

一瞬、常盤の目の雰囲気が変わる。森の全てを見渡す梟のような、動物的な目だ。

「……………いた、彼だ」

人が入り乱れてごった返すスクランブル交差点を一望する常盤の目が、ある一人の男

を捕えた。紺色のシャツにジーンズの、どこにでもいそうな痩せた中年だ。男は暴動から逃げ出すデモ参加者に混じって、道玄坂通りに入って行った。

「追うよ」

「はっ」

常盤はアザミの肩を叩いて、店外へ駆けて行った。アザミもそれを追う。

二つのカッパだけが、店に残されていた。



騒然とする道玄坂通り。

騒ぎから逃れそうとする者と、騒ぎを見物しようとする者。そうして出来た人の渦を、常盤はするすると器用に進む。一方アザミは人波に弄ばれ、思うように身動きが取れていない。

「ううう、トキワさん動けない……!」

「アザミちゃん、こつち」

常盤はアザミが伸ばした手を掴むと、一気寄せて、そのまま引いて行く。

背の低いアザミには周りがどうなっているのか把握出来ないが、身長185センチ

チの常盤は周囲から頭一つ飛び出しており、かろうじて目指す先が見えている。

前方、30メートル先に、扇動家の男がいる。彼も常盤と同じように、慣れた身のこなしで人混みを避けていた。

「トキワさん、どうしてあの人だと分かったんですか？」

「まあ色々だね。例えば今だって、彼はこの混雑の中を滞り無く進んでいるよね。あれはこういつた混乱の中を歩きなれている証拠だ。扇動家は一度場の空気が燃えたらすぐに姿を消さないといけないから、自然とああなるんだよ」

「いまの一瞬で探し出したんですか？」

「そんな訳無いよ。デモ行進中から目を付けてたうちの一人」

道玄坂を半ばまで進み、扇動家は左の細い路地に入った。追って二人も路地に入り、ようやくくすし詰めから解放される。人のいない路地の奥。この先は、

「入り組んだ路地だ。アザミちゃん、行って」

命じられ、アザミは弾けるように走り出した。デニムのホットパンツから伸びる細脚が高速で回転する。

辛気臭い細路地の突き当り。落書きだらけのその場所に、スクーターが一台隠すように停められていた。

「待てー！」



扇動家は駆けるアザミを眉一つ動かさずに一瞥する。何者か訝しんでいるようだが、動きは止めない。アザミを無表情のまま無視した。いち早くここから逃げることを最優先としている。

扇動家は素早くスクーターに跨ってアクセルを回し、路地に入って行った。

追って中に路地に入る。が、すでに先の角を曲がってしまい、姿は見えない。

アザミは目を閉じて、耳を澄ます。デモの騒音に混じって、エンジン音が小さく聞こえた。三時の方向。まだ数十メートル先だ。

脛を開き、アザミは脇の扉を踏み台にして、縦方向に大跳躍。二階建ての建物に飛びついた。壁を蹴りあがり、屋根に取りつく。このまま屋根伝いに、スクーターを直線的に追うつもりだ。

アザミは渋谷の地理に明るくない。このまま地表を走るよりは、巻かれる可能性が低いだらうという判断だ。

屋根から屋根へ、ビルの谷間を跳び越える。

屋上を四つほど跳び過ぎた辺りで、下の街道を走る扇動家を視界に捉える。このまま追えば先回りが出て来る。テロリストに金で心売り人の心を惑わす小悪党め。成敗してくれ。

「作戦勝ち」

アザミは勝ち誇って純度百パーセントのドヤ顔を見せる——が。

「——へなっ！」

扇動家は渋谷を首都高速方面へ南下して、ビルの中の街路から京王渋谷駅の隣にある、渋谷マークシティの東棟と西棟の間に開けられたトンネルに入った。あんなトンネルなどアザミの作戦には組み込まれていない。

しかも低いビル群が立ち並ぶ繁華街は、マークシティの手前で途切れている。もう飛び移れる屋上は無い。

アザミは最後の屋上でブレーキを掛ける。今いるビルの屋上から地面まではさすがに遠い。無理に飛び降りれば下手すれば死ぬ。かと言って今から呑気に階段を使って降りていては扇動家を見失うだろう。

困った、どうするか——アザミは周囲を見渡す。このままでは取り逃がしてしまう。調子に乗って猿みたいな真似しなければ良かった。後悔と焦燥を奥歯で噛み締める。

何か、何かと打開策を探すアザミの目に入ったのは扇動家が入ったトンネルの屋根部分。そこはマークシティの東棟にある高速バス乗り場と、隣の西棟を繋げる屋外ロータリーだ。距離は十メートル以上。しかも高さが屋上よりも上にある。

ジャンプして届くだろうか。微妙なラインだ。

しかし、ここで諦める訳にはいかない。

「女は度胸……!」

アザミは今いる屋上の隅まで下がって助走距離を稼ぐ。

息を吸って、吐いて、そして屋上の汚い床を蹴った。

助走を消費して身体に速度を乗せ、そして跳躍。

アザミの体は弾丸のように宙を鋭く飛んだ。カコつと股間の辺りで異音がするが、気にしてはいられない。

辛うじて片足がロータリーの淵に掛かった。着地で勢いを殺さないように衝撃を膝から逃がし、疾駆。コンクリートを踏み割らん勢いで地を蹴り、加速する。

雑踏の中、スクーターのエンジン音が微かに聞こえる。若干右に逸れた。右折する気だ。

アザミはロータリーから次の着地点を探すが、次に跳べそうなビルは二十メートル以上離れている。

「げっ」

難易度がさらに跳ね上がる。やつぱり普通に走って追いかければよかった。

しかしもう止まれない。やるしかない。

もう一度強烈に踏み込み、加速を重ねる。脚の筋繊維がブチブチ千切れる感覚がある。帰ったら間違いなく修理だ。

二度の加速で勢いを得て、そして三度目の踏み込みで跳ぶ。

遠く離れた向かいのビル。眼下にはデモの騒動から逃げ惑う人々がいる。彼らもまさか頭上で少女が飛び跳ねているとは夢にも思わないだろう。

しばしの浮遊。徐々に落下して高度を落としながら、しかしギリギリ目標のビルの壁に届いた。べたりと壁に叩き付けられ「ぐえ」とカエルの様な呻きを漏らしながら、ずり落ちる前に壁を足場にして再度飛ぶ。今度は地面へ降りる為の緩やかな跳躍だ。

空中で眼下を見下ろす。運良くこの道は人が疎らだ。ちよほどスクーターがトンネルから出てきて、アザミが降りようとしている道路に入ってきていた。

猫のように空中で体を回して姿勢を制御し、スクーターの真ん前に着地。

「なっ!？」

さすがに空から少女が降って来られては、その鉄面皮は守れなかった。

扇動家は驚愕の声を上げてブレーキを握るが、制動が効くよりも先に、スクーターがアザミに激突した。が、アザミは、

「ぐっ……!」

スクーターのレッグシールドに掴みかかって、唸りながら踏ん張りを掛けた。義体の膂力が50ccの馬力を上回る。走行を真正面から止められ、扇動家は逃げることも忘れて口を開ける。

「な……なんだ……？」

何が起こったのか理解が追い付かない扇動家の胸倉を引つ掴み、地面へ投げ飛ばす。頭部を固いアスファルトに打ち付けて、扇動家の男は見事に失神する。

アザミとスクーターの激突音を聞きつけて、周辺の飲食店から何人かが顔を覗かせた。

デモ行進、暴動、轟音、少女、スクーター、地に伏す男。

誰もが、血生臭い事件を連想する。

「きゅ、救急車ー！」

居酒屋の店主が、慌てて店内の従業員に指示を飛ばす。

「大丈夫です、もう呼びました」

そう言うて場を収めたのは、やっと追い付いた常盤だ。

「アザミちゃん大丈夫？」

「はい。ただ、ちよつと脚が」

「分かった。帰ったらお医者さんに診てもらおう」

常盤はそうアザミに笑いかけながら、扇動家の体をまさぐる。

傍から見れば、男の具合を確かめているようにしか見えない手つき。そしてズボンのポケットから、携帯電話を抜き取った。

「よし行こう。人が増えてきた……すみません、この人をお願いしますー!」

「あ、ああ……」

突然の非日常に面喰っている店主に扇動家を押し付け、常盤はアザミの手を引いてこの場を後にした。

デモ隊の暴動から逃れた人々が、新しい事件を見つけて集まってくる。

この事件は、世間にはただの交通事故として扱われ、デモ隊の暴動のニュースの陰に隠れることになるだろう。

渋谷の街を覆う、怒声と悲鳴。

それらが、常盤達の存在を綺麗に掻き消した。

「……トキワさん」

「どうしたの?」

「脚が折れました。歩けません」

「え? あ、膝が逆方向に。隠して隠して」

## 第4話

その男は悪事を企んでいた。

開放感のある喫茶店のオープンテラスに腰を掛け、秋の陽光を浴びながら、様々な悪事を企んでいた。

明黄に色づいたイチヨウ並木をぼんやり眺め、心透く青い空を見上げながら、脅迫傷害殺人爆破誘拐拉致密輸、あらゆる悪事を企んでいた。

男の年齢は恐らく四〇代。後ろに流した総髪と、顎に生えそろった髭には散り散りとした白い毛が混じり始めている。だがその肉体に蓄えられた筋肉は服の上から見ても澆漑としており、特注で作らせたのか肩や胸周りを大きく取られているオータムジャケットで起伏のある稜線を描いている。

男は犯罪計画を連々と脳内で組み立てておきながら、その目はやけに大らかで、犯罪者が持つ瞳の仄暗さなど僅かながらも存在しない。天気がいいので散歩に出かけ、少し喉が渴いたので喫茶店に立ち寄った大柄だが気の優しい中年男性。

今の彼をプロファイリングしようとする、ほとんどの人間はそう判断するだろう。しかし、その判断を正しいか間違っているかの二者で言うなら、正しい。

この男は元來人が良く、誰かを憎むより愛することを好み、事実として今彼は朝起きたら天気がよくだったので散歩に出かけ、少し喉が渴いたのでこの喫茶店に立ち寄っている。だいたい人間が、付き合うならこんな男が良いと考える人物だった。

だがそんな彼は、窃盗密輸脅迫傷害詐欺誘拐監禁殺人国家反逆、思いつく限りの悪事を企んでいた。

この男は間違いない、大罪人だ。

そんな悪徳の男はテーブルの上のコーヒーへ、おもむろに手を伸ばす。

指がカップに届く前に、ジャケットの懐から携帯の着信音が鳴った。

コーヒーへ伸びた手を止めて、取り出した赤い携帯電話を耳に当てる。

「もしもし」

電話の向こうの人物は、男のことを『羽柴さん』と呼び、会社の重要案件の指示を乞う。

男は短くいくつか指示を飛ばし、電話を仕舞った。

そしてコーヒーカップに指を掛け、唇がカップに触れる寸前に再び携帯の着信音。今度取り出したのは先ほどとは別の青い携帯電話だった。

「もしもし」

今度は男のことを『松野さん』と呼び、ある企業の株価が変動したことを告げた。



売って、とだけ伝えて電話を切る。

今度こそコーヒーに口をつけようとしたところに、三度目の着信音。次は緑色の電話だ。

「もしもし」

この電話主は、男のことを『辻野さん』と呼び、彼が所持するビルに大口のテナント依頼が来たことを報告する。

そのまま進めるように告げ、電話を戻した。

「忙しそうだな」

異なる三つの名前を持った男に、声をかける者がいた。

長身瘦躯。稲荷キツネのような細く吊り上った眼。十代の若者にも見えるが、三十路を超えた中年にも見える。不思議な容姿を持った男だ。

「李明か。久しぶりに顔を見せたな」

現れた男、李明は断りも入れず正面の席に腰掛け、ウェイターにコーヒーを注文する。

「そうだったかな」

「約半年ぶりだ」

「君は半年会わないだけで久しぶりと言うタイプの人間か？」

「一週間会わなかったら言うね」

李明はウエイトレスが運んできたコーヒーを受け取り、強面の男の言を鼻で笑った。

「そんなに寂しかったならスカイプのIDを教えよう。いつでも話しかけてくるとい  
い」

「あれは駄目だ。CIAが盗聴したりエロいビデオ通話を覗き見るのに使ってる」

男はおどけた風に言って、ジャケットから黒い携帯電話を取り出すと李明に差し出した。受け取った李明はその電話を掲げ、首を傾げて見せる。

「これは？」

「今度連絡する時はそれを使う。安心してくれ、通話料は俺持ちだ」

「有り難いね」

「だろうな……」

男はここで言葉を区切る。そして次に紡がれたのはアラビア語だった。

「中国情報部のスパイは銀行口座作るのも一苦労だろう」

「……有り難いね」

返された李明の言語はドイツ語だった。その返事を聞いて、男は口角を緩く上げながら、テーブルに備え付けられたナプキンを一枚手に取り、指先で弄び始める。

「それで、何の用だ？」

今度の男の言葉はフランス語だった。

「……ふむ。実は去年から、うちの工作員が何人か消えている。何か知らないか？」

李明はカシミール語で話し、その口元で手を組み、薄い笑みを見せる。が、鋭い切れ長の眼には冷え冷えとした光が灯っていた。一挙一動見逃さず、こちらの心内を見透かそうとする。そんな目だ。

「それはこつちが聞きたいことだよ」

隠す必要はないし、むしろ男の方から聞こうと思つていたことだった。

男は正直に、スペイン語で返す。

突然始まった多言語の会話に、周囲の客は一瞬彼らに目を向けた。

だが矢継ぎ早に変わる異言語の会話、その内容を理解できる者は一人もない。

東京の街では異国の言葉はそれほど珍しい物でもない。理解の出来ない言葉など、聞こえていないのと同じだ。二人に集まった注意はすぐに霧散した。

「二年前に基地に襲撃を受けて以降、仲間や物資の業者、あと扇動家とか雇った殺し屋、運び屋、仲間になりたいと擦り寄つて来たチンピラ、その他もろもろが姿を消している」  
惜しげなく情報を提示する。知られたところで、困ることもない。李明は男の仲間が消息不明になっていることを知つたうえで、情報の共有を求めてきたのだろう。

男のポーランド語に、李明は言葉を広東語で応える。

「なるほどね」

「……もしかしたら、北朝鮮。あとロシアあたりの工作員も消えたんじゃないか？」

男の朝鮮語。

「なんだ、知っていたのか」

李明の英語で応え、ほんの少し驚いた様子を見せた。

「俺の推測の通りなら、他には中東テロ組織とか、あとジャコモ・ダンテのシンパ……要するに日本の敵性組織が消えてる」

「……なるほど。なるほどね、やっぱりお前もそう思うか。日本がやつと、『そういう組織』を作ったと」

「まあそれしか無いだろう」

ここまで来ると、もう二人の会話は何語でも無かった。単語単語が異なる様々な言語で構成され、文法も滅茶苦茶だ。それでも二人の間の意思疎通は完璧だった。互いが互いの言いたいことを、話しながら推測し合っているからだ。

「ふふふ、遅すぎるだろうよ日本のアホどもめ」

「そう、遅すぎる。だがギリギリ間に合ったとも言える。俺にとっても嬉しくないことだがね。これもジャコモ・ダンテが世界に点した火の影響か」

「だろうな。革命には失敗したが、しかし奴本人の野望は叶った訳だ」

李明はコーヒーを一口飲み、言葉を日本語に戻した。

「ジャコモ・ダンテと言えば、一つ良い物がある。お前、二億円を今年中に用意出来るか？」

「出来る」

男は二億と言う数字に眉一つ動かさずに頷いた。男の肯定に、李明は口元の笑みを深くする。

「なら我々のオモチャ、特別にその二億で譲つてやろう」

「何をくれるんだ？ 中古の戦車か？」

「もっと良い物だ。しかも新品……とは言い難いが、まあほぼ新品だ」

「新しいオモチャか。嬉しいね」

「それで、これからどうするんだい、御堂？」

「そうだな……」

御堂。四つ目の名前と呼ばれ、男は顎に指を当てて思案する。

「釣りに行く」

そう言つて、指先にあつたナプキンをテーブルに放る。その紙片は、いつの間にか魚の形に折り込まれていた。

「そうか、大物が釣れるといいな。では、また連絡を待っているよ」

李明は手を掲げて、喫茶店から立ち去つた。男が李明を目で追うが、人波に姿を潜ら

せたその一瞬で、影すら残さずに姿を消していた。

残された男は、すっかり冷めたコーヒーを一口で飲み干し、そして再び悪事について考え始めた。

彼は立場によって名前を使い分けている。

とあるベンチャー企業の代表取締役としての『羽柴』。

とある株式トレーダーとしての『松野』。

とある新興都市の高層ビルのオーナーとしての『辻野』。

彼にとって名前は、役割を表す記号である。

そして『御堂』。それは本名だった。

男の名前は御堂文昭。

日本国家の転覆を目論む、テロリストの名前である。



国立児童社会復帰センターの運動場。本部棟の裏に広がる平らな空間は、野球とサッカーとラグビーが並んで同時に出来そうなほどの広さを持つ。ここにCQB訓練用のキリングハウスやアスレチックコースなどが押し込められている。センターの職員や

義体の肉体練成は、おおよそこの場所で行われていた。その芝生生した一角。  
「あんたら何やってんの？」

170センチという女性にしては高い背丈に相当量の筋肉と適度な脂肪を乗せた、石室夕子という名のセンター職員は、あるものを見つけて足を止めた。

「柔軟だ」

「ギョギョ……」

大股開きで前屈しているモモの背に腰掛けて煙草を吹かしている蔵馬はそう答える。  
美少女を椅子にして吸う煙草はさぞ美味かろう。

蔵馬は短くなった煙草を赤い煙缶に放り捨て、石室の顔を見上げる。彫りの深い目鼻立ちに吊り目。いつもドギツイ海外の煙草を啜え、銃器をいじっているか、自動車やバイクの整備をしている。格好いい面構えの女だというの蔵馬の彼女に対する評だった。

色気も糞も無い陸自の戦闘服を着込んだ彼女の手には、大型のガンケースがあった。背中には荷物で膨らんだ雑囊がある。

「格闘技教えてやろうとしたんだが、見る。こいつ身体硬すぎる」

「うぎぎぎ……」

苦しげに呻くモモの身体は、柔軟というにはあまりに傾く角度が浅い。

「確かに硬いね……でも無茶しすぎると処女膜破れるよ」

「毎日柔軟するよう言ったのにサボりやがったからな。罰だ罰。ていうか義体に処女膜とかあるのか？」

「うぎぎぎぎ……有りますよお、処女ですよ……クラマさんの為に大事に取っておいた……うぎぎぎぎぎぎぎ！ 痛い！ クラマさん痛い！ 破けちゃう！」

「義体もサボったりするのねえ」

じやれ合う二人を見て、夕子はぼつりと呟く。

「他の子達は？」

「アザミとタンポポはキリンググハウスでCQB訓練やつてる」

モモの背中にほとんど全体重を預けながら、蔵馬は運動場と隣接した近接戦闘訓練場の方を指差した。

時折指した方向から銃声に混じって「ゴラアアアアア！」だの「ボケエエエエ！」だの濁点だらけの大よそ人の物とは思えない吠え声が聞こえてくる。

「初瀬か……元気ねえ」

「あいつと訓練で被るとは。常盤……運のない奴」

「そーいや常盤が先週捕まえた扇動屋いたでしょ」

「俺らが救急隊員に化けて回収しに行った奴か。あいつがどうかしたか」

「いや、別にどうもしてないんだけどね。結局雇い主の情報、全然出てこなかったみたい



だわ。諜報部もお手上げだってさ」

「常盤が先に持って帰った携帯も空だったし、これで手詰まりだな」

「実は常盤君が携帯の中身を先に消してたりしてな」

「敵が送り込んだスパイでしたって展開か。たまにあるやつだ、今度尋問してやろう」

ケラケラ笑い合う二人。

すると、石室の戦闘服が後ろから引つ張られた。

「……夕子」

「ん、ああ」

石室の陰に隠れていた、義体のムラサキだ。

重そうな長い黒髪を一对のお下げに結っている、十歳かそこらの容姿をした少女だ。口数はあまり多いほうでなく、ジトツとした湿度の高い目を持つ、アザミとは別の方向性で活気をあまり発しない義体だった。彼女の体躯にあう戦闘服は当然の如く存在しない為、民生品の迷彩柄をポイントされた衣装を着せられている。

彼女たち二人も『義体班』だ。コールサインは『マキナ3』。

陸上自衛隊機甲科の偵察部隊出身である石室、隠密行動と長距離射撃を得意とするムラサキのチームは、山岳地帯など自然地形の多い条件の任務に出ることが多い『義体班』だった。

「どこか行くのか?」

「狩猟期間になったし、これから鹿狩り。鹿がセンター内の赤外線センサーに引っかかって鬱陶しいから、数減らしてこいつで部長がさ」

石室は背中 of ガンケースを背負い直した。ムラサキの背にも、夕子とお揃いの物がある。

「ついでにムラサキに、動く目標を狙撃する経験値を積ませる。この前アザミがテロリストの手を打ち抜いたのに、対抗意識燃やしちやって。楽しみねームラサキ。いっぱいお肉食べれるわよ」

「……うち鹿肉きらい。臭いし」

「ははは、どんなに嫌いでも、食べ物がそれしかなければ嫌でも好きになるわ」

「……うええ……」

半ベソになるムラサキを引きずり、石室は運動場から直でガサガサと藪を掻き分けて山へと消えて行つた。野人の様な女だ。

あれでも京都の国立大学出身らしい。人の内側は外面では推し量れないものだ。

「日本語で何て言ったか……あの声で蜥蜴食らうかホトトギス、か?」

「……クラマさん……クラマさん……本当に破れます……」

独りごちる蔵馬の尻の下では、全ベソのモモがすすり泣いていた。

●

鈴木太一。今年で三十六歳になる、発電所に勤める機械技師だ。物心ついた時から機械類が好きで、地元の工業高校を卒業後に専門学校に進み、将来的に安定していそうな半官営の電力発電所に就職した。

昔からリスクを背負い込むのが嫌いで、常に石橋を叩いて叩いて絶対に安全だと分かってから渡るタイプの人間だった。小中高と周囲にそこそこいた不良どもにも決して近寄ることはせず、酒も付き合いで多少嗜む程度、煙草は吸わず、賭け事の類には近寄ることもしない。常に安牌を打ち続ける人生を送ってきた。

彼の父親が後先考えずに行動を起こし、その結果失敗して負債を背負い込むタイプの人間だったことが原因だろう。子供の頃は常に貧しさがあり、母親も兄弟もそんな父親を見て、諦観からか怒る事はなかったが、哀しみを秘めた顔をよく浮かべていた。

ああはなるまいと最も近い身内を反面教師として、鈴木太一は堅実な人生を歩んでいた。そうして公務員になることは叶わなかったが、ほとんど官営と言つていい仕事場を見つけた。

そんな面白味は無くとも真面目な人柄に惹かれた女性と親しくなり、結婚し、そして

彼も子供を授かり、家庭を持つに至った。自分が築いた安定した人生。安定した家庭。その中で大人として十年近くを過ごし、鈴木太一もそろそろいいおじさんになりつつあった。

そうして幼少時から青年期に至るまで、あまり好意的に見ていなかった父親の当時の年齢に近付くにつれて、彼の中の父に対する見方も変わってくる。

金になりそうなものなら何にでも手を出していたのは、結局は家族の暮らしを豊かにするための物だったのだろう。

暴走しがちなあの性格は、事業に失敗し貧しい思いをしている家族を、出来るだけ早く貧困から救い出したかった故なのだろう。

大人になると、過程を持つと、父親になると、同じ父親だった者の気持ちに察しがつくようになるのだ。

すると、会ってみよう。そう思えるようになる。

完全に和解することは出来なくとも、今なら少しは正面から話が出来る気がする。

もうすぐ二人目の息子が生まれる。親父はまだ碌に一人目の息子に会ったこともないはずだ。向こうは何も言っていないが、やはり孫にだつて会いたいはずだ。

これからどんどん成長する子供たちの思い出の中に、ちゃんとお祖父ちゃんとして登場したいだろう。

だから、会いに行こう。嫁と孫を連れて、久しぶりに実家に帰ろう。そう決心がついたら、気が変わらないうちに行動したほうがいい。

今週末にでも、顔を見せに帰ろう。

鈴木太一は、そう考えて今日家を出た。一人が立つと手狭になる玄関から、腹が膨らんできた嫁と、今年から幼稚園に通い始めた息子に手を振り、家を出た。

まだ一戸建てを購入するには至っておらず、こじんまりしたアパートに親子三人暮らし。ここにあと数か月で一人加わる。そのころには引越すか、ローンを組んでも一戸建てを買うおう。

そんな風な事を考えながら仕事場に向かい、いつも通りの仕事を行ない、そしていつもとは違うことが起きた。

鈴木太一はテロリストに、仕事場の同僚たちと共に銃を突き付けられ、監禁された。彼が16年間働き続けた仕事場の名は、小河内ダムと言った。

小河内ダム。

東京都奥多摩に造られた人工湖である、奥多摩湖を堰き止める巨堤だ。

高さ一四九メートル、幅三五メートルのダムは山のように大きく、総貯水量は一八九、一〇〇、〇〇〇キロリットル。国内でもそれなりの規模を持っている。

このダムが、テロリストによって占拠された。

犯行グループは日本山林保護戦線を名乗るエコテロリストだ。

昭和のダム建設ラッシュ時に活動していた弱小環境テログループだが、ラッシュの収束と共に存在意義を無くし、とうの昔自然消滅したと思われる組織である。

故に公安のマークからも完全に外れており、日本政府は不意を突かれた形となった。

犯行グループの要求は、警視庁にのみビデオメッセージという形で送られてきた。

『日本にある全貯水ダムの即時解体及び、全山林開発事業の凍結。』

これが呑まれなかった場合、小河内ダムに仕掛けた爆弾を起動させ、ダムを決壊させる。

なおこの事件がマスコミに漏れた場合も、ダムを爆破する』

という要求に加えて、ダムの内部通路と外壁、放水ゲートに仕掛けられた大量の高性能爆薬。

人質として拘束されたダムと発電所の職員たち。

そしてアサルトライフルを携えて、スノーマスクで顔を隠したテロリストたちの映像が添えられていた。

この事件はすぐに警視庁公安部に回され、秘密裏に対策本部が設立される。

事件の秘匿性と事態の緊急性から、すぐにS A Tの突入が決定されたのだった。

そして、その裏では着々と、センターによるテロリスト殲滅作戦が進行しているのだった。

夜の山は驚くほど暗い。路灯がほぼ皆無な上、樹木に遮られて月明かりすら差し込まないからだ。

その濃密な闇を差す光が三筋走る。奥多摩の山斜面を削られ敷かれた国道411号線を、青色の大型警察車両・特型警護車2型が三台連なって走行していた。警視庁特殊急襲部隊S A Tを運ぶ輸送車だ。

彼らはこれから小河内ダムへ向かい、ダムを占拠したテロリストを殲滅する。

SATは犯人逮捕を目的に作られた部隊では無い。

危険分子の速やかな排除。それがSATの行動方針だ。

そのために彼らは毎日常人には耐えがたい訓練を乗り越えてきた。

今日のような状況を想定された訓練も何百何千と繰り返してきた。

訓練通りに。

いつもの通りに。

SAT隊員たちは輸送車の中で、各々が何度も何度も脳内で自分がすべき事を確認する。

車内は自然と、殺気が立ち込めていた。

突然、輸送車が停止した。

「どうした?」

先頭の輸送車。後部席にいた第一班の班長が、運転席に目をやる。

「道が倒木で塞がれています」

「バリケードか?」

「いえ、ただ木が一本転がっているだけです。人影はありません」

「そうか……障害物を撤去する。後続にそう伝えろ」

班長は無線で停車の理由を後ろの二台に伝え、そして隊員を連れだつて車外へと出て



いく。手にしたMP5短機関銃の安全装置を外し、周囲を警戒しながらゆつくりと動いた。もうここはテロリストの活動圏内に入っている可能性が高い。この倒木も妨害工作の一つで間違いないだろう。

この道は山からの射線が通りやすい。防弾盾を部下に構えさせて周囲を固め、敵襲に備えながら倒木に近寄る。日々鍛錬を積むS A T隊員だ。道路に寝そべる倒木を苦も無く担ぎ上げる。

その樹体にテグスが縫い付けられている事に、彼等は気付かなかった。小さな火花を散らせる物体が倒木の真下に二つ。それは、スチール缶にぎつしり黒色火薬とナットや釘が詰められた、即席手榴弾だった。

倒木を担いで一列に並ぶ隊員の足元にそれらは転がり——爆発。

火薬の燃焼と破裂の音が峡谷に木霊する。

爆風により殺傷力を持って飛び散る鉄片が、彼らを貫き切り裂いた。

血を噴き倒れる男たち。その仲間の姿を見て、S A T隊員たちは混乱に陥り、そして一瞬で回復した。さすがは日々実戦を旨として訓練に励む精鋭たちだった。傷付いた仲間を急いで担ぎ、盾を亀甲の如く構えて輸送車に戻っていく。負傷者を輸送車に担ぎ込み、倒木を撥ね飛ばして道を進んでいった。

この様子を一部始終眺める者たちに、S A Tは気が付かなかった。

国道を挟む、木々生い茂る山の斜面。雑木の葉層と森の濃密な闇に溶け込む影。

御堂文昭がそこにいた。

総髪を後ろで一つに縛り、カーキ色の野戦服を身に纏った御堂は、A K M自動小銃をスリングで背に吊っている。暗視装置付きの双眼鏡を目から離して、バックバックに仕舞いながら、まるで出来の悪い生徒に肩をすくめる教師のようにやれやれと呟いた。

「幾らタイマンが強くて、やはり戦争の素人だな。立て籠もつてる犯罪者ばかり相手にしているからだ」

「どうして今殺さないんですか？」

尋ねるのは御堂の隣にいる、天城健太郎と言う名の青年だ。歳は二十代そこらだろうが、妙に幼さが残る顔には似合わない、御堂と同じ野戦服を着ており、その手にはルーマニア製の自動小銃P M m d. 90カービンが握られている。彼はまだ暗視双眼鏡でS A Tの輸送車の尻を追っている。

「健太郎、あれは餌に寄って来た外道だ」

「そろそろ何を狙ってるのか教えてくださいよ」

「ダメだ」

「何故です？」

「何のための作戦か分からなくても指示に従う兵士の気持ちを理解してもらったためだ」  
「お前は指揮官になる男だからな。現場の兵士が何を考えているか、一番理解しないと  
いけない。今日わざわざ戦争を引き起こしたのは、半分お前の初陣の為だからな。よく  
学べよ」

「痛み入ります。じゃあなんでかよく分かりませんが、とりあえず邪魔なS A Tは殺  
しちゃいましょう。実はボク、警察がすごく嫌いなんですよ」

御堂は頷くと、心底楽しそうに、夏休みに田舎で釣りに興じる子供のような目をしな  
がら、S A Tたちが走り去った方角を指差した。

「良い心構えだ。さあ、先に倒しておいた他の丸太にS A Tがビビって動けないうちに、  
ダムに戻ろう。日本山林保護戦線の連中、まったく使い物にならないからな」

## 第5話

「くそ、ついてないぜ」

秋口を過ぎた深夜の空気は冷える。時刻は午前二時八分。闇は深まり月星が最も輝きを帯びる頃だ。冬季には必ず積雪するほど標高の高い位置にある、国立児童社会復帰センターの廊下はなおさらだ。

底冷えするガランとした通路を蔵馬と並び、愚痴を溢しながら行くのは、すこぶる人相の悪い短髪の男。そう、半端なく人相が悪い。短髪の名は初瀬伸一。ギンギンに尖った目に、薄くて細い眉毛。剥き出た尖った八重歯は、肉食獣か鮫を想起させる。

身長は蔵馬ほど高くないが、肩幅は同等。尋常ならざる筋肉量の持ち主だ。そんな男が不機嫌そうに悪態を吐く姿を見た者は、思わず目を逸らそうとする。そういう男だった。

特殊メイク無しで特撮の悪役を演じられそうなほどの悪人面の初瀬は、見た目に反して元は警察特殊部隊の元隊員であり、そして今は蔵馬や常盤らと同じ、タンポポと言う名の義体の担当官だった。

ピリピリと殺気立たせる初瀬とは対照的に、蔵馬はいつも通りの怠重そうな顔で火の

点いていない煙草を唾えている。センターの建物内は喫煙所以外は全面禁煙なのだ。不機嫌な凶悪顔で口から白い息を出す初瀬を見て、エヴァンゲリオンみたいだなと蔵馬は思った。

「お前夜弱い方？」

「ゲームしてた」

「あつそ……」

二人は作戦部のオフィスである本部棟の三階にある、第一会議室に入る。広い室内に  
いるのは常盤の他に数人の屈強な男達。それぞれ適当に、壁際に積まれているパイプ椅子を出してきて座っている。一瞬蔵馬らに視線が集まったが、すぐに会議室の奥へ戻る。

その目の先にいるのは壮年の男と、眼鏡を掛けた若い女。この二人は会議室の上座に当たる場所に立っていて、蔵馬たちの姿を確認すると、女の方が手に持っていたプロジェクターのリモコンを操作し始めた。

「あれ、姐さんは？」

「石室はすでに現場に向かっている」

初瀬に囁かれた声で答えたのは壮年の男。彼こそが、義体と各政府機関から選りすぐりの捨て駒達を拾い集めた、国立児童社会復帰センターの実力部隊である作戦部の全権を

掌握する最高責任者——作戦部部長の佐久間康夫だった。

還暦は過ぎていてであろうが、未だに現役であることを感じさせる若々しさを全身から放っている。日に焼けた赤褐色の肌を着慣れないブラックスーツで包んだ彼の身体。その彼方此方に、日常的な事故や怪我では付きようの無い古傷が刻まれていた。

蔵馬や初瀬、ここにいる男たちと同じ、戦士の身体だ。故に彼らを従えることが許されるのだ。

「あいつ鹿狩りに行くって言ってたが……」

石室の所在に、蔵馬が疑問を呈する。

昼間、楽しそうに山に分け入って行く彼女に蔵馬は会っている。今頃奥多摩の密林で、ムラサキを枕にして獣の如く眠っているだろう。

「現場の近くにいましたから、そのまま向かってもらっているんです」

眼鏡の女が言った。彼女は坂崎咲という名のセンター職員だ。

日々テロリストや裏稼業の人間たちと戦う兵たちの中では異彩を放つ、何とも朗らかで温暖な空気を持つ女性だ。常に柔和な笑みをたたえ、暗く重くなりがちな作戦部に花を添えている。

坂崎は天井のプロジェクトを操作し、小脇に抱えていたタブレットとリンクさせる。

「どなたか部屋の電気を消してもらえますか？ ……ありがとうございます。では状況を説明します」

暗い会議室に、プロジェクターの光が差す。

そしてホワイトボードに映し出されたのは、奥多摩の地図だ。その中の一点、多摩川の河川上に赤く印がつく。

「ここ、どこだか分かる人はいますか？」

「小河内ダムだね」

坂崎の問いに、常盤が答える。まるで小学校の教室のような光景だった。

「はい、その通りです。先ほど、この小河内ダムがテロリストに占領されました」

そして小学校には似つかわしくない、言葉が続く。坂崎はタブレットを指先で叩き、動画ファイルを再生させる。流れるのは小銃を持った覆面の男と、数珠つなぎに拘束されたダムの職員たち。

「日本山林保護戦線と名乗る、エコテロリストのグループの犯行です。彼らの要求は日本にある全貯水ダムの解体と環境開発事業の凍結」

「アホじゃねえの」

誰かが呟いた。坂崎は微笑み領いて、話を続ける。

「組織規模は不明です。弱小も弱小で、メンバーは十人もいなかったはずなんです

……」

犯行声明の映像には、映り込んでいる人数だけで十五人はいる。この他にも歩哨や撮影を担っているメンバーもいるはずだ。とすると、多ければ倍の三十人はいると見積もっていいだろう。

「大所帯じゃないか」

「ええ。そして彼らに取られた人質は、発電所と職員三十八名。もし要求が明日朝六時まで呑まれなかった場合と、この事件がマスコミに漏れた場合は人質ごとダムを爆破する、と」

「変だな。テロリストは目立ちたがり屋がなるものだ」

蔵馬の指摘に頷きを返し、坂崎は付け加える。

「おかしなところはまだあります。彼らはAK-47と高性能爆弾を所持している事が確認されています。これを用意する資金もコネも、彼らにはありません。どこから手に入れたのでしょうか？ 不思議ですね？」

正体不明の飛び入り参加者に、出所不明の武器弾薬、そして意味不明の要求。不明な点が多い事件です。警視庁も動いてますが、マスコミに情報が漏れないように、SATを最小限の人数しか送り込めずにいるようですよ」

「ていうか小内ダムって超近所だろ。諜報部気付かなかったのかよ」



『自分たちはカウンターインテリジェンスだから国内の菜食主義者は担当ではない』、  
「だそうです」

「クソうぜえ言い訳しやがって……」

殺気洩瀾な闘犬の様に犬歯を剥く初瀬に、苦笑を漏らす坂崎。そんな、緊張を保ちながらもどこか弛緩した室内の空気が、佐久間の一言で引き絞られた。

「事態は急を要する」

「……ええ、そうです。我々も急がないと」

「SATは犯人を基本皆殺しにするからね。それじゃあ困る」

「その通り、困ります。彼らは我々センターが把握していなかった銃器と爆薬を大量に所持しています。その出所を探らねばなりません。それが急ぐ理由の一つ。」

二つ目ですが……先ほど警察が日本山林保護戦線の本部を家宅搜索して押収された資料が、こちらにも回されてきました。その中の通話記録に、先日常盤さんが扇動屋から押収した携帯電話の中にあつた番号がありました」

「あの電話には、何の手がかりも無かつたんじゃないのか？」

昼間、石室がそう言っていたはずだ。蔵馬の問いに答えるのは常盤だった。

「あの携帯にあつた通話記録は、公衆電話からの物だけだったんだ。それも二度と同じ公衆電話は使われていない。」

周囲の防犯カメラや聞き込みを諜報部がしてくれたみたいだけど、結局手がかりは掴めなかったはずだよ」

「今回のテロリストは、他のテロ組織と繋がっている可能性が高いです。」

故に、S A Tがテロリストを全員射殺したり、彼らが自爆してしまう前に、身柄を押さえる必要があるんです。ここままで何か質問は？」

沈黙を受け、ここから佐久間は作戦内容を告げる。

「今回は我々にも最少の戦力で作戦を行う必要がある。だから現場に向かうのはここにいるお前たち『義体班』だけだ。その代り、四人全員を連れて行け。十五分で支度して車庫に集合。以上」

全義体——マキナ3からマキナ6までの『義体班』の投入は、作戦部のおよそ半分の戦力を投げ打つに値する。どうしても後手に回りがちなセンターにとって、情報源の確保はそれほどに重要な任務だった。

佐久間はブリーフィングを終え、会議室から出て行く。それに続いて職員たちも移動を始めようとした時だった。坂崎の懐で着信音があった。ただの携帯電話ではない。空が見えれば通話可能を謳う、高性能の衛星電話だ。

「石室さん？ そちらの様子は？」

『坂崎、急いで』

親戚の近況を尋ねる様な口調の坂崎に対して、石室の声は緊迫と、静かに燃える怒気がある。その声色から、悪い方向へ事態が急転したことを坂崎たちは知る。

『あいつら早速人質を一人殺したわ』



センターの会議が始まるより三十分前。

奥多摩の山中。普段は獣と虫と疎らな観光客しかいない小河内ダムが、今人知れず未曾有の重大件の渦中にある。

小河内ダムは多摩湖の端を南北に塞ぐ提頂があり、北面には国道411号線が伸びている。その幹線には民家など人の気配がちらほらとあるが、対してダムの南面には行き止まりの山道が一本あるだけで、鬱蒼とした山森が広がる地理だ。

休日には観光客の姿も見えるが、深夜のこの時分に訪れる人間など肝試しにくる若者くらいだろう。その肝試しも、とつくにシーズンを終えている。人を見るより獣を見ることの方が多い。

そして、このダムへと至る唯一の道である国道411号線は、SATの到着と同時に封鎖された。これより小河内ダムは、常世から隔絶された異常空間——戦場となる。

そんな場所に小河内ダムに到着したS A Tは、部隊を三つに分けた。

一つ目は負傷者と共に司令塔としてダム北東にある神社に置く。二つ目は『突入第一班』として国道411号線から分岐した山道に入って、ダム提頂の下の発電所へ。三つ目は『突入第二班』となり、そのまま国道を進み、ダムの提頂を制圧する。

幾人かの負傷者は出たが、作戦実行に支障は無し。そう判断したのでろう。着々と十八番の奇襲作戦を進めるS A T隊員は、各々配置に付く。紺色のアサルトスーツの上から同色のボディアーマーを装着し、顔には黒色のマスクとケブラー製のヘルメット。闇に溶け込むような出で立ちの彼らの手には、ドイツ製の短機関銃M P 5が握られている。

《こちら突一、発電所前のゲートに到着。犯人グループはゲート前に土嚢を積んでバリケードを築いています》

《こちら突二、待機ポイントに到着。こちらも提頂の展望塔前に土嚢のバリケードあり》  
前線からの無線連絡を指揮車の中で聞き、作戦指揮を任せられた倉内というS A T隊員は、広く厚い顎を指で撫でる。犯人がテロリストであるとは聞いていたが、やはり普段の作戦とは勝手が違う。

バリケードとは、侵入を防ぐ受動的な防衛手段では無い。そこに身を潜め、迎撃のために備えられるものだ。先ほどの爆弾で身に染みたが、連中は建物の中に引き籠つて来

るな来るなど喚く立て籠もり犯と異なり、『戦闘』をしに来ている。

「……狙撃班各員、バリケード付近の様子を報告しろ」

《狙撃01、提頂のバリケードに複数の人影あり》

《狙撃02、ゲート前も同じく。しかし射線にはなかなか入って来ません。狙撃を警戒しているようです》

《狙撃03、展望塔で動きあり、誰かがエレベーターで下の発電所から昇ってきた。……ダメだ、見えない。あいつ、こつちの位置が分かっているのか?》

「ふむ……」

報告を聞き、倉内は低く唸る。やはり素人を相手にしている感じがしない。まるで怪物の巣穴の前に立ったかのような、重密な威圧感と殺意。それが現場から離れた指揮車の中からでもはつきりと感じ取れた。

だがしかし、弛まぬ訓練と幾多の死線を経験した彼らSAT隊員たちを畏れさせる、ダムに近い辺に満ちる威圧と殺気。それらを放っているのはたった一人の男——御堂昭文だった。

御堂は暗視装置を頭に着け、提頂のバリケードから『突入第二班』が待機する辺りを眺めている。無論そこにいると知っていたわけでは無い。自分が指揮官ならそこに待機させる、という場所を見たに過ぎないが、案の定人の気配があった。

「ぎりぎり間に合ったな。気を引き締めろよ、おい」

ここには日本山林保護戦線のメンバー二人と、働く当ても無く日本にやって来て、路頭に迷っていたところを雇った密入国者、合わせて十二人配置している。

それぞれにAK-47のコピー品を持たせてあるが、昨日今日初めて銃を触った連中だ。半日あればサルでも撃てるで誉れ高い銃だが、撃てると当てるは別問題である。戦闘力的には特殊部隊であるSATなどとは比べようも無い。

「その辺は気合と金でカバーだな……」

眩き、隣で蹲っている戦闘員を見ると、緊張と恐怖でブルブルと震えていた。他の者たちも似たようなもので、これでは戦いが始まった途端に瓦解してしまいそうだ。

流石にあと数時間は持ち応えてくれなければ困る。

御堂は周囲に察知されないほど小さく溜息を吐き、日本山林保護戦線のメンバーたちの耳元にそつと耳打ちする。その声は重低でありながら耳触りのよい柔らかさがあり、そして男の物であるにも関わらず、ずっと聞いていたいと思わせる色気のようなものがあつた。

「どうした、君たちが望んでいた戦いが、もうすぐ始まるんだぞ、日本山林保護戦線の諸君。

思い出せ、君たちは何のために生きてきた。

何のために、今まで矜持を捨てずに生きてきた。

社会に無視され白い目で見られ続けてなお、何故君たちは信念を曲げなかった。

この日の為だろうか？ この機会をずっと待ち続けてきたんだろう？

この戦いで、君たちを無視し続けた政府にキツイピントを食らわせてやるんだ。

俺たちの声を聞けと、奴らの耳元で叫んでやるんだ。

さあ、安全装置を外せ。照準器を覗け。引き金に指を掛ける。

敵はあつちからくるぞ。君たちの敵が、やってくるぞ。その銃で、7・62mmの弾

丸で撃ち殺せ」

そうだ、この日の為に生きてきた。もう後戻りはできない。敵が来る。敵が来る。

御堂の言葉に、彼等は無意識のうちに小銃のトリガーに指を掛ける。プライドと命以外に何も残されていない人間を御するのは容易い。その二つを突いてやればいいだけだ。

続けて密入国者たちに言う。

「一人殺せば百万円だ」

百万円。それを持って国に帰れば、一気に成り上がれる。十年は遊んで暮らせる。店を持てる。畑を買える。最底辺から抜け出せる。

密入国者の目の色が変わった。これで何とか戦えるだろう。

「おっと、来たぞ」

御堂の暗視装置を通した視界に、蠢く影が映る。数は見たところ十二人。こちらの戦闘員と同じ数だ。

提頂の入り口両端にあるコンクリートの塀。バリケードから数十メートル離れた位置から、ドイツ製のMP5短機関銃の銃口をこちらに向けていた。

「伏せろ」

状況が分かかっていない周りの連中に命じて、御堂も土囊の陰に隠れた。

連続した射撃音。MP5から発射された弾丸が、土囊から頭を出したままだったノロマを二人、射殺した。

飛び散る脳漿の中、御堂はやれやれと肩をすくめて、死人の手にあるAK-47の弾倉を抜き取る。銃は粗悪品だが、弾はそこそ良い物を使っている。アホの冥途の土産にするには惜しい。

そのままパラパラ飛んでくる銃弾を土囊で塞いでいると、SATの銃撃が止んだ。

沈黙が訪れる。三十秒も経つと、こちらの戦闘員が待ちのストレスに耐えきれずに、土のうの向こうを覗こうとして、すぐに撃ち殺された。

「お前ら、俺が良いと言うまで動くな。一発も撃たずに死ぬ気か」

再びの静寂。今度は誰も動こうとしない。



三十秒待ち、一分待った。

御堂の鋭い聴覚が、金属の擦れる音と、コンクリートの地面の上で何かを転がすような音、そして布擦れの音を捉える。

SATが動き始めた。こちらの素人丸出しの動きを見て、一気に乗り込んできて制圧する判断をしたらしい。

SATが移動する音が近づいてくる。彼我の距離はもう二十メートルほどか。頃合だ。

御堂は土囊のバリケードに紛れ込ませるように設置しておいた、ストロボフラッシュライトのスイッチを押した。

一斉に強烈な光の点滅が発し、彼らを包んでいた闇が掃われた。

五個あつたライトのうち二個は壊れていたが、威力は十分だ。

現代の暗視装置は強い光で故障する、なんて事態には陥らない。許容量を超える光を受けると、保護機能が働き集光・増幅を遮断するからだ。

ただし、それは装置の故障を防ぐための装置であつて、使用者の視力を護るものではない。強い光を受けている限り、暗視装置は作動せず、しかし装置を外すと強烈な閃光に目を焼かれる。

持ってきたのは写真スタジオなどで使用される大型フラッシュライト。普段目にす

るフラッシュライトの数十倍の光量だ。人間は光の無い暗闇の中では物が見えなくなるが、強すぎる光の中だと視力その物を失う。暗所に馴れた目には、絶大な威力を發する。

「撃てー！」

御堂が叫び、土囊から身を乗り出してAKMのトリガーを引いた。

フルオートで弾き出された破壊の礫。それはS A Tが構えていた盾に防がれた。

S A Tは先頭のポイントマンが防弾性に富んだバリステイク・シールド。AK—47の大型弾薬をも防ぐその盾は大きく重く、人が持つて運べるものではない。

機動性を有するためにはキャスターを取り付けられた盾は動く壁に近く、その後ろに他の隊員が続く。それが三列で進攻してきていた。遮蔽物が無い天端での戦闘の対策をしつかり用意してきたようだ。

銃撃はシールドに防がれるが、構わずに撃ち続ける。

御堂に連れられて、他の者たちも射撃を開始する。

十のアサルトライフルから猛攻を受け、S A Tは後退していく。

S A Tを提頂の入り口に押し戻し、御堂は弾倉を入れ替えて、セレクトターをセミオートに切り替え追射を続ける。これまでは敵を寄せ付けない為の攻撃。これからは敵をその場に縫い止めるための攻撃。

こちらの攻撃力を知れば、相手も迂闊には突っ込んでこない。S A Tがなにか策を講じるか——応援を呼ぶまでの間は時間を稼げるはずだ。

「……後は任せるぞ。下の様子を見てくる」

御堂は生き残った連中にもセミオートに切り替えさせ、撃ち続けるように命じた。弾はまだある。彼らにはここでしばらくS A Tの足止めをしておいてもらう。身を低くしたまま展望塔のエレベーターに入る。

下の方からも銃声が聞こえた。発電所ゲート前のバリケードには天城を置いてある。人数はこちらの倍を配置した。押し負けることは無いだろうが、念のために様子を見に行く。下が抜かれたらゲームオーバーだ。こんな時に、現場を任せられる下士官があと一人でもいればと思う。

しかし、難易度の高いゲーム。それはそれで面白い物だ。

それに、今回は戦闘の勝利がクリア条件では無い。御堂はコンクリートの巨壁を下りながら、鼻歌を歌い始める。

「もつと楽に勝ちたいだろう？ ほら応援を呼べ。もつと強い奴を連れてこい」

小河内ダム of 戦闘は、二か所同時に開始した。

一方はダム提頂部の天端で、もう一方はダムの下にある発電所に続く入口ゲートで。どちらも土のうのゲートにライトを隠し、S A Tが近づいたら光を放つて意表を突いたところに自動小銃で掃射という手で、テロリストがS A Tを追い返した。

単純だが、一応の効果はあった。

だが今はS A Tも一旦退いてはいるが、すぐに立て直して応戦を始めるだろう。

ダムを挟む渓谷の南斜面。その中腹に蓄えられた藪原に、微かに動く影と、双眼鏡のレンズがある。覗くのは女と少女。夕子とムラサキだ。

彼女らはいつ先ほど、山を幾つか越えてここまで来たところだった。上手い具合に獲れた鹿を血抜きしていた途中に呼び出され、初瀬ほどではないが石室もご機嫌斜めだ。見下ろすダムの一帯は、テロリストが点けたライトで、遠くからでもよく見える。

「ライトで目暗まし……考えたわね」

「S A Tは何で先に閃光手榴弾とか使わなかったんやろ」

「あいつらが持つてるやつは堪え性が無いから、土嚢を超える前に爆発するのよ」

「へー」

藪の中、季節外れのやぶ蚊に頬を噛まれながら石室の解説に相槌を打って、ムラサキ

は傍の木に立て掛けておいたステアー・スカウト狙撃銃を引き寄せる。急な斜面で器用に座射姿勢を取り、スコープを覗いた。

「……ゲートの敵ならここからでも狙えるけど、どうする?」

「まだ撃っちゃダメよ」

ムラサキはスコープから目を放し、頬に食っていたやぶ蚊を叩き潰した。血の粒が掌に付着する。

「……うちの血多分身体に悪いよ」

「殺してから言うのね……」

そう言つて笑う石村の頭には、さつきからバツタが引つ付いている。そこを新たな寝床に決めたのか、動く気配はない。石室は頭の虫に意を介する様子も無く、ザックから衛星電話を出して、作戦部の佐久間へ通信を飛ばす。現状を報告し、待機を言い渡される。これからセンターの方で作戦会議が行われるらしい。

提頂の方では散発的な射撃が続いているが、入口ゲートの方ではテロリスト側にも動きがあった。どうやら彼らも撤退するらしい。戦線が移り、発電所からの増員を得てダム下での戦いは戦力が拮抗したようだ。戦闘に停滞が生じ始めた。

「……夕子、あれ」

ムラサキが、ダムの提頂を指差した。

そこにはニツカポツカを着た男が、ダム of 絶壁際に立たされていた。

あれは人質にされていた、発電所の職員だ。

銃撃戦の後、テロリストが人質をあんな場所に立たせる理由は、一つしかない。

「……ちよつと待ちなさい……!」

擦れた石室の声。それは当然届くことは無く。

ぼん、と。

人質の男が、突き落とされた。

「~~~~~ああ!」

悲鳴は山麓に響き渡り、そして肉が潰れる音。

小河内ダムに、厭な静けさが戻った。

虫鳴き。川のせせらぎ。それらがはつきりと聞こえる。

——と、

《あ、あ……聞こえるかねS A T の諸君》

拡声器で増幅された声が、自然の声を掻き消した。

人質が立っていたその場所に、代わりにカーキ色の野戦服を着た大柄の男が現れた。

《君たちの上司に伝えてくれ。これより君たちが一発でも発砲すれば、そのたびに人質を一人ずつ殺す。また我々の要求に対する政府の返答が、今から一時間遅れる度にも一

人ずつ殺す。そして明日六時に我々の要求が呑まれない場合は、全員まとめてダムごと爆破する。あと四時間だ……早くしろよ。時間は人の命と等価だぞ」

言うだけ言って、男は堤の陰に消えた。反撃せんと行動を始めていたS A Tは彫像のように固まる。そして、そろそろと撤退を開始した。こうなつては現場判断で動くのは無理だ。ひとまず上の判断を仰ぎに指揮車へ戻るのだろう。

「……………」

石室の奥歯がきつく噛み締められて軋む。

ブツと音を立て、石室の頭にいたバツタが飛び去った。単に居心地が悪くなったのか、それとも彼女の身体から溢れ出てきた怒気に生きると言う本能が害されると感じたのか。

石室は黙って、傍らのガンケースから一丁の狙撃銃を取り出す。M 2 4 A 2、アメリカの兵士たちがこぞって愛用する、信頼と実績を重ねに積み上げた対人狙撃ライフルである。夜間用暗視スコープを覗き、光が増幅された緑色の視界で、人質を突き落とした男の顔を覗く。

野禽の如き静かな野性を秘めた、総髪の子。顔の皺一本一本までを記憶に刷り込む様にして凝視する。

「……………」その顔、覚えたわよ」

腹の底から出た、女の物とは思えない程低い声。

スコープから目を放し、衛星電話を手取る。

「坂崎、急いで。あいつら早速人質を一人殺したわ」



## 第6話

小河内ダム発電所。二基の巨大な発電機を囲む様にして、人質たちが数珠繋ぎに拘束されている。三十八人いた人質は、三十七人になった。全員が顔に麻袋を被らせられて表情は窺えないが、俯き震え、恐怖が全身の汗腺から汗と共に噴き出している。

彼らを取り囲むのは日本山林保護戦線が三人と、御堂が雇った密入国者が八人。そして御堂と、日本山林保護戦線のリーダーの相野という男。相野は唾を飛ばして御堂に詰め寄っていた。

「人質は極力殺さないと言っていたじゃないか！」

「だから一人しか殺さなかったじゃないか」

御堂が不思議そうな顔をするのを見て、相野はこの計画に乗ったことを後悔した。

そもそもこのダム占領計画も、御堂が彼らに持ちかけた話だ。

長年弱小団体として日本国内で燻り続けていた自分たちに、御堂は目も眩む様な資金と、大量の武器と、共に戦う人間。そしてダム占領計画とそれを実行する行動力を持ってきた。

爆破テロなど自分たちの手に余る。荒唐無稽だ。

初めはそう感じていたはずだった。

だが御堂と話をしているうちに、何故か自分たちには何だつて出来るような気になり、そして崖から転がり落ちる様に現在の境遇にある。

まさに、口車に乗せられた。

御堂は蛇だ。巧みな言葉で、そして金で出来た果実で人の心を惑わせる。

気付いた時には、もう取り返しのない状況に陥っているのだ。

「二人殺しただけでSATを止められたんだ。割のいい抑止効果じゃないか。

これを渡しておく。ダムに仕掛けた爆弾の起爆装置だ。ここぞという時に使え。

テレビのリモコンみたいに失くしたりするんじゃないぞ」

御堂は安物の携帯電話を相野に手渡す。

これに登録されている番号にダイヤルすると、仕掛けられた高性能爆薬がダムを吹き飛ばすのだ。そんな危険な物を、本当にテレビのリモコンのような気軽さで持たされて、脂汗を全身から滴らせる相野と対照的に、御堂は気楽そうに笑う。

「御堂さん、応急処置終わりました」

天城が、全身血まみれになって駆け寄ってきた。彼は今まで負傷者の手当てをしていたのだ。御堂は頷き、相野を置いて処置の手際を確認しに行く。

「どこまでやった？」

「止血までですね。内臓ボロンは手に余ります」

「それはもう助からんから放っておけ。お前はどうか？ 俺お医者さんの免許持つてるから怪我したなら診てやるぞ」

言われて、天城は自身の肩に、銃弾の擦過があることに気付く。あと10cm横にずれていたら、喉を貫かれて死んでいただろう。

「あつぶな……」

「まあ、死ぬ奴は何をしても死ぬから気にするな。どうだった、初めての实战は」

「怖い半分、なんだこんな物かって気持ち半分つてところですよ」

「ま、それが分かったならお前を連れてきた甲斐があったよ……お前包帯巻くの下手だな！」

ミイラのようにグチャグチャに巻かれた負傷者の包帯に、御堂は思わず突っ込んだ。天城には色々と戦場のイロハを教える必要がある。経験値を積ませるために衛生兵の役をやらせてみたが、これだと一人前になるまでに死傷者で一山築けそうだ。

「これからどうするんですか？」

「お前は包帯巻きなおしたら、撤退だ。今なら狙撃手も撃つてこない。教えた通りに山を抜けろ」

「御堂さんは？」

御堂は釣り糸を巻き上げる様な仕草をして、一笑。  
「釣った魚を見てから帰る」

一人目の人質が殺されてから四十二分後。緊迫し、膠着した多摩湖周縁に動きがあった。初めに気付いたのは、浅間神社で特Ⅱ型輸送車の周りを警邏していたS A T隊員だ。

黒塗りのハイエースが二台、境内に入ってきたのだ。ガラスにはスモークが掛けられており、中を窺うことは出来ない。

「停まれー!」

停止命令に従い、ハイエースはS A Tが乗ってきた特Ⅱ型輸送車の前に停車する。S A T隊員はM P 5を構え、すぐに発砲出来る様にセーフティを外し、トリガーに指を掛ける。

先頭のハイエース。その助手席の窓が開いた。中から伸び出た二つの手。右手には白い紙が二枚。続いてドアが開き、助手席にいた者が両手を挙げながら出てきた。

黒い戦闘服にタクティカルベスト。その下にセラミックの防弾プレートまで仕込ん

だ重装備。フェイスマスクで頭部を覆い、その上からメガネを掛けている。大腿には拳銃が収まったホルスター。所属組織を表すワッペンも見当たらない。

「何者だ？」

「政府機関の者です。機密に当たりますので、あなたとお話は出来ません。これが指令状。指揮官に通していただけますか？」

若い、柔らかな女の声だ。

SAT隊員は銃口を黒衣装に向けながら、掲げられた紙を見る。

確かに警視庁公安部の証印が押されていた。

「待っている」

SAT隊員は一応銃を降ろすが、警戒は解かず、黒づくめの女に身体の正面を向けながら、輸送車のドアを叩く。

「どうした」

指揮官のSAT隊長がドアを薄く開く。

「おかしな連中が来ました。警視庁の指令状を持っています」

「来たか……」

倉内は颯み面を作る。そして渋面のままドアを開き、黒装束を車内に招き入れた。

「どうも。これが指令状です。ご確認ください」

「……………了解した」

黒く物々しい出で立ちに、何事かと訝しんでいた車内のS A T隊員たちは、「では現時刻を持って、この現場の指揮権は我々に移ります。よろしいですね？」

女の言葉で熱り立った。

「お前、いきなり来て何を……………！」

「止めろ！」

その一喝は血の気の多い特殊部隊の若人たちを抑え込んだ。それだけの迫力と、形相を倉内にあつたからだ。どんな犯罪者にもテロリストにも怯まないS A T隊員を畏れさせる倉内の鬼面が、黒装束の女に向けられた。

「……………よろしく、お願いします……………！」

搾りたての苦虫の体液を千匹飲み干した様な憎々しげな声で、錆固まったブリキ人形の様なぎこちない動きで、ゆっくりと頭を下げた。

「はい。これより小河内ダム及び多摩川第一発電所の奪還作戦を執行します。

時間が無いので手短に。我々が突入するので、S A Tは後続して援護をしてください。それ以外のことはしなくて結構です。後は現場の隊員の指示に従ってください。

今から十分後に行動開始です。急いで準備してください。以上」

女は最低限の説明を矢継ぎ早に言い、一礼。輸送車から降りて行った。

「……行動開始！早く動け！」

倉内に怒鳴られ慌ただしく動き始めたS A T隊員を背後に、女はハイエースへ戻る。そして女——坂崎はサムズアップでS A Tとの顛末を車内に伝え、二台の車両の戸を拳で叩いて降車を促した。

「作戦開始ですよー。降りてきてくださーい」

「うーっす」

間の抜けた返事をするのは、坂崎と同様の黒装備。

国立児童社会復帰センター作戦部の職員たちだ。

まず初めに、初瀬が降りてくる。

「うっすうーっす」

次に彼の担当義体、タンポポが毬のように跳び出てきた。

彼女の素体は11才の少女だったが、その歳にしては背が低い。小学校低学年程度の身の丈だ。亜麻色の波打った髪を肩ほどまで伸ばし、動くたびにふわふわと揺れる。そしてその小さな背中には、彼女の身の丈の半分はあるタクティカルアックスが結いつけられていた。

「これが神社か——！」

猫の様に丸い目で物珍しそうに境内を見渡し、足元の砂利を楽しそうに踏み鳴らす。

「あれがS A Tカー！」

今度はS A T隊員に好奇心を向け、よく見ようと近寄って行こうとする。その首根っこを初瀬は引つ掴み、膝を折ってタンポポの目線に合わせる。

「静かにしろ。今何時だと思ってるんだ」

しゅんとして口を抑え、それから比較的大人しくなったタンポポの姿に、S A T隊員たちは啞然としている。テロの犯行現場に、まるで遠足気分の子供が現れたのだから当然である。

続いて降りてくるのはモモと蔵馬、そしてアザミと常盤だ。もう一台のハイエースからはセンターの後方支援要員が出てくる。全員揃いの黒い戦闘服。違うのは、各々の手にある装備類だ。アサルトライフル、散弾銃、P D W、全員が異なる種類の銃器で武装している。

皆が長物の銃火器を提げる中、唯一坂崎だけは大腿のホルスターにある拳銃以外の武器を持っていない。それは彼女が自衛目的以上の武器を持つ必要がない、この場の指揮官であることを意味している。

「ではみなさん、息苦しいのを我慢して、そろそろマスクしましょっか」

言われ、みなは懐から坂崎と同様のマスクを取り出す。

「なんでみなさんマスク着けるの嫌がるんですかねー」



「タバコ吸えねえだろ」

蔵馬の一言に、皆が違いないと失笑を溢す。

「はい、それじゃあ打ち合わせ通り蔵馬さんと常盤さん達は発電所。初瀬さんはダムの上を制圧してきてください。生け捕りが目的ですので、間違っても全滅させないように」

「サキちゃんサキちゃん！」

手を挙げてピョンピョン跳ねるタンポポに、坂崎は膝を折って視線を合わせる。

「どうしたの？」

「一人残せばオツケー？」

「出来れば三人くらいは残してほしいかなあ。あとテロリストのリーダーは絶対確保」

「オツケー！ 了解！」

絶対に了解していなさそうな能天気な声でオツケーオツケーと連呼するタンポポの頭を、坂崎は優しく撫でる。そのまま黒い兵士たちに穏やかに、たおやかに、のどやかに言った。

「それでは行動開始です。お仕事がんばりましょう」

小河内ダム提頂天端は、テロリストが点けたライトに照らされ視界良好だ。

土のうが積まれたバリケードを眺めるのは、黒装備の二人組。ブツシユマスターACRを肩に担いだ男と、ベネリM3ソードオフを背負ったチビ。初瀬とタンポポだ。

この場を死守していたSAT隊員たちは、明らかに困惑していた。

この場を指揮するらしい二人組は、素性を明かさず、武器もバラバラ、そして一人は大人の半分ほどの背丈しかない。

「んで、どうすんのシンイチ。突っ込む?」

「そっくだな……」

突っ込んでもいいが、ただ突っ込めば間違いなく死ぬ。何か一策講じなければ。

初瀬はSAT隊員に振り返る。そして彼らの手にあるバリスティック・シールドに目を付けた。無言で一つ手に取り、持ち上げて重さを確かめる。15kg前後くらいだろうか。

「これくらいなら大丈夫か。借りるぞ。おい、タンポポ」

初瀬はタンポポに盾を手渡す。義体の腕力は自身の体重の半分はある板を軽々と片手で受け取るが、しかし成人用に作られているそれを持つて運ぶには身体が小さい。タンポポは盾を引きずりながら提頂の陰から、テロリストたちの射線上へと移る。

ガリガリ、ガリガリと湖畔の闇に盾が地を舐める擦過音が通る。徐々に近づくその音に、テロリストたちは固唾を飲んで、手汗で滑るライフルの銃把を握り直した。土囊バリケードに仕込まれたライトが照らす提頂の先端。

バリケードの側から見ると、盾だけが独りで歩いてきたようにしか見えないう。その陰には、盾で全身を隠したタンポポがいる。

「じゃ、行くよ」

そう告げ、疾駆。突進してくるタンポポに、テロリストたちは一斉に射撃を加えた。盾は火花を散らせて銃弾を弾くが、表面は削られ薄くなっていく。このままではバリケードに辿り着く前に、弾を防ぐ力を失うだろう。

だがその前に、タンポポの後ろからは初瀬とS A Tの銃撃が始まった。タンポポの頭に弾丸が飛び交う。彼女に集中していた弾幕が分散され、盾に掛かる攻撃が多少だが和らいだ。その多少で十分だ。義体の脚力は数十メートルの距離を一瞬で縮めうる。

バリケードの寸前に到ったタンポポは、息を止めると脚に意識を込め、上に跳んだ。広がる視界。弾幕が、土囊が、テロリストが眼下に滑る。そして擦れ違いに、M3散弾銃の散弾を放った。鉄粒の雨に降られ、一人が赤く飛沫をあげて肉微塵になった。

バリケードのすぐ後ろに着地し、踵で回る。遠心力を乗せて、ボロボロになった盾で横に薙いだ。盾の打撃を食らい、テロリストが二人まとめて吹っ飛ばす。一人は運よく堤

縁のコンクリート塀に叩き付けられ、失神しただけで済んだ。片方はダムの断崖に吸い込まれ、悲鳴を上げながら落下していった。

防壁の後ろを取られたテロリストたちは慌てて銃を反すが、タンポポに向く前にM3散弾銃の射撃。射撃。射撃。ソードオフされ絞りのない散弾は爆散し、テロリストを四人、瞬時に肉塊に変えた。残り二人だ。

敵の残数を視認し、ここでタンポポは唇の隙間から息を吐く。一息分の停滞にAK—47の銃口がタンポポに迫いついた。タンポポは咄嗟に盾を構えて陰に潜む。だが既に盾には銃弾を防ぐ力は残っていなかった。貫通してきた7.62mm弾が頭上を掠める。

「このっー」

タンポポは盾に向けて三連射。向こう側から貫通するなら、こちらからでも通る。

テロリストは血をまき散らしながら千切れ飛んだ。

背後から銃声。

堤縁に叩き付けられて気を失っていたテロリストが、意識を取り戻して撃ってきたのだ。だが狙いも定まらない射撃はタンポポの遙か右方を通り過ぎ、AK—47は弾を撃ち尽くす。テロリストは慌てて替えの弾倉を装填しにかかった。

タンポポは振り向きざまにM3散弾銃の引き金を引く。が、何も出てこない。こちら

も弾切れだ。リロードはA k—47の方が早い。テロリストは勝ちを確信し笑みで唇を歪めた。

だがタンポポはリロードなどせず銃を手放し、腰の戦斧を抜いて投擲した。旋回し空間を裂く重い飛翔音の後、頭蓋骨が割れる硬い音。脳幹を叩き割られ、テロリストは笑みのまま死亡した。

「……………つふうー」

内側に溜まっていた物を吐き出す様な、長い吐息。タンポポはギョツと瞼を閉じる。血と肉が四散する戦場に佇むタンポポに、初瀬が走り寄ってきた。

目を開いたタンポポは笑顔を弾かせ、テロリストの頭に刺さったトマホークを引っっこ抜く。脳漿をボタボタ滴らせ、斧を振り回す。

「どうだったどうだった!? タンポポ格好良かった!? ねえねえ! 最後斧がいい感じに刺さった時は自分でも『格好いい〜!』って思ったもん!」

はしやぐタンポポの頭を乱暴に撫でながら、初瀬はインカムで坂崎に通信する。

「——こちら《マキナ4》。制圧完了。捕虜は……蔵馬さんか常盤になんとかして貰え」

多摩川第一発電所でも攻防が開始していた。バリケードは既に突破され、戦線はダム下部の発電所に移っている。発電所は背に切り立ったダムの提体があり、発電所の正面には橋が一本かかっている。発電所に向かうにはダム提頂展望塔のエレベーターから下るか、この橋以外に道は無く、故に防りが厚い。

「ほら、来たぞ。撃て撃て」

戦闘の指揮を執る御堂は、発電所に逃げ込もうとする雇いの密入国者を蹴り飛ばす。ここで背を見せたら一気に押し潰される。後退しながら撃ち続けるが、手応えはない。弾が空を切る感覚が、トリガーを引く指先から伝わってきた。

先ほどから聞こえる銃声は、S A TのM P 5短機関銃に混じって、M 4カービンとM G 4機関銃の音が聞こえる。他にも混じっているが、聞いたことが無い。

「変なのが釣れたな……」

御堂が銃轟の中で呟いた時、発電所と対面の山腹からも二発の銃声があった。同時に逃げ腰だった外国人と日本山林保護戦線の一人が、頭を仰げ反らせて崩れ落ちる。狙撃されたのだ。今の銃声はM 2 4 A 2と、片方は未知のもの。

「この短時間であそこまで登ったのか……？」

銃火は見えなかったが、音から推し量るに、ダム提頂より高い位置からの射撃だ。この渓谷は両の傾斜が急で登りにくい。足元の不確かな夜間となると、その登攀にはか

なりの時間を要するはずだった。

ともかく狙撃手がいるとなると、外にいるのはまずい。御堂は発電所の中まで退いた。暗い通路を進み、すれ違う者々の肩を叩く。頑張れ、まだやれると口にしなから、御堂は既にこの戦場からどのタイミングで抜け出すかを思案し始めていた。

ダム提頂での銃声はまだ続いているが、突破されるのも時間の問題だ。

先ほどから聞こえる聞き知らぬ銃声。

今、この場に日本の警察にも自衛隊にも配備されていない銃器が持ち出されている。つまり公ではない政府の組織が動いているという事だ。

御堂が起こした、このダム占拠作戦。

この男の目的はダムの解体でも、環境開発の阻止でも、国内の弱小組織の手助けでもない。政府が設立したと思われる、非公式組織が本当に存在するのか確認するためだ。

その為に、扇動家に連絡するのに使った、普段なら絶対に二度使わない公衆電話で日本山林保護戦線に連絡を取った。件の扇動家が『非公式な組織』によつて身柄を拘束されたのであれば、扇動家との繋がりに気付いて、この事件に介入しようとするはずだからだ。

結果、思った通りにやって来た。

マスコミに情報を流させなかったのは、秘密裏に動きたいのであろう連中が出てきや

すいようにする為。ダムに爆弾をしかけてタイムリミットを設けたのは、警察に時間をかけた包囲戦をさせない為。

人質を殺して脅しをかけたのも、事件の即応性を増して組織の出勤に大義名分を作つてやる為。こうして散々金と人命を掛けて御堂が仕掛けた釣り餌は効果を發揮し、狙い通りの大魚を釣り上げたのだ。

政府の非公式組織が存在することは分かった。

想定よりも大分早い登場だったが、それだけ身軽な組織ということだろう。

後は釣つた新種の魚がどんな姿をしているのかを一目見て、さっさと退散しよう。

「さあ、早く面を拝ませてくれよ、俺の敵」

●

そんな御堂の思惑など露程も知らない日本山林保護戦線の者々は、囿の羊にされた事にも気付かずに迫る敵と戦っていた。

「あああ……！」

相野の隣で銃を乱射していた古株のメンバーが、額を撃ち抜かれて絶命した。



戦闘員は相野を入れて、もう三人しか残っていない。やはりダム占拠など無茶だった。

自分たちはしがない環境活動家として、細々と生きていけば良かったのだ。御堂と関わったばっかりに。

御堂にさえ。御堂にさえ出会わなければ。

「くそ、くそくそくそおおおおお!! 御堂おおおおお!!」

戦いが始まったと思えば姿を消した男の名を、相野は憤怒に満ちた声で呼んだ。しかし返事は返ってこず、来るのは敵の弾幕だけだ。

相野のAK-47が弾を切らした。同じタイミングで残り二人の仲間が弾丸を受けて冷たい床に伏した。

始めた時は三十人はいた仲間が、もう誰もいない。

もう負けだ。これ以上は戦えない。

このまま一人で戦っても、殺されるだけだ。

では降参するのか？

降参して捕まったとしても、自分はこの事件の主犯として拘束される。

殺人か、国家反逆罪か、とりあえず何かしらの罪で死刑になるだろう。

「う、ううううわああああ!」

相野は仲間が落としたAK—47を拾い上げ、弾を撒き散らしながら後ろに逃げた。廊下を曲がり、階段を登り、とにかく施設内を逃げた。

そしてたどり着いたのは、発電所の屋上だった。

逃げ場はない。小銃の弾ももう空だ。

捕まったら殺される。

ダム占領前は死を覚悟したはずなのに、今は死ぬのが恐ろしくて堪らない。

何かないか。何か、何か……。

「動くな！」

相野を追ってきたのは、ドイツ製短機関銃MP7を構えた常盤だった。後ろにはSA  
T隊員が連なっている。

機関銃の照準を相野に合わせ、投降を促す。

「投降しろ。両手を挙げて、地面に伏せるんだ」

常盤の声に、相野はゆっくりと振り返った。

そして両手を挙げる。が、その右手には小さな箱状の物が握られていた。

安物の携帯電話。爆弾の起爆スイッチだ。

「お、お前からこそ動くな！ 動いたらダムを爆破するぞ！ いいか、全員銃を捨てて退

け！ 出ないとダムごと全員爆は——」

相野の言葉を遮るように、銃声。血飛沫。そして悲鳴。

携帯電話を持っていた相野の右手。その手首から先が撃ち抉られて飛んで行った。痛みに膝から崩れて悲鳴を上げ続ける相野を、常盤は慣れた体捌きで組み伏せる。

ベストから出した手錠で左手と、右手が無いので左足首を繋ぎ合せた。

その様子を眺めていたのは、山の傾斜で一部始終を観察し続けていた石室とムラサキだ。

樹木の陰。人質が殺された時から寸分変わらない座射姿勢。

一時間近く、延々同じ姿勢で、いつでのタイミングでも撃てる姿勢で、耐え続けていた末の一射だ。ムラサキが構えたステアー・スカウトの銃口からは、薄く紫煙が上っている。

「やるわね、ムラサキ。上手くなったじゃない」

「……うち狙撃好きやから」

蔵馬はモモとアザミを連れて、発電所を奥へ奥へと進んでいた。

残存の敵戦闘員はいないようで、一発も撃たないままタービンフロアに辿り着いた。

タービンを囲んで縛られた人質の一人は、見た感じでは無事なようだ。

「クラマさん、人質がいます」

ドイツの軽機関銃MG4を掲げたアザミが、人質に寄って行くこうとするのを制する。

「アザミ。人質の解放はSATに任せて、残りのテロリストがいなか警戒しろ」

タービンフロアは天井が高く、水車と水が通る太いパイプ以外はすつきりとした造りになっている。

身を隠せそうな所は無さそうだ。

モモがフロアの最奥、外へ出られる裏口を見つける。

「裏口がありますね。ここから逃げたんでしょうか」

「この先はダムの壁と天端に続くエレベーターだけだ。上は初瀬たちが制圧したらしい。袋の鼠だな」

言いながらクリアリングを完了させ、蔵馬を構えていたM4カービンを下げた。

どうやら常盤が追って行ったテロリストが最後だったようだ。発電所の外での戦闘で、既に二人のテロリストを捕縛している。後は警察に現場を明け渡して、作戦完了だ。

一応人質の人数確認だけしておく。

「人質は何人だ？ 全員いるか？」

義体二人に尋ね、彼女らは二手に分かれて人質を数える。

「一、二、三……三十五、三十六、三十七人です」

「三十七、三十七っ!？」

人質は事件発生時で三十七人。一人殺されて三十六人のはずだ。

一人多い。

「気付かれたか」

男の呟き。

声が耳に届き、蔵馬の眼がその主を探そうと巡る。

「ぐっー」

しかし見つけるより先に、銃声と、胸と腹に重い衝撃が来た。

撃たれた。そう直感し、ともかく射線から身を逸らすために地へ転がる。

二発目の弾丸が蔵馬の傍を通り抜け、マズルフラッシュが暗いフロアの中で燃えた。

近い。十メートルと離れていない。

やはり人質の円の中。コルト・ジユニア拳銃を握っている御堂がいた。周りの人間と

同じ青い作業着を着て麻袋を被っているが、目の部分に穴があげられている。

人質の中に紛れて、隙を突くつもりだったのだろう。蔵馬は、まんまとしてやられた。

「クラマさん!」

三発目から蔵馬を守ろうと、モモは猫のような俊敏さで二人の間に入った。そして夕

ボールを構える。

モモの指がトリガーに掛かるより先に、駆け寄ってきた御堂に銃身を蹴られた。タボールはモモの手を離れてクルクル宙を舞い、配管の裏に落下した。

蔵馬とモモを見下ろす御堂は、拳銃を二人には向けずにMG4で狙いをつけていたアザミに発砲した。

連続射撃の一発がアザミの頬を裂き耳を射抜く。

25口径の小さな傷だが、それでもアザミの射撃を一瞬遅らせるには十分だった。

「それでは失礼」

手の平サイズの拳銃で作ったほんの一瞬の隙に、御堂は身を翻して脱兎の如く裏口へ走り抜けた。

蔵馬の胸の一発が無線機を砕いてしまっていて、他の職員と連絡が取れない。

このまま行かせては駄目だ。蔵馬の本能が最大級の警鐘を鳴らす。

「追え！」

「でもクラマさん、撃たれて……！」

「行け！ 命令だ！」

怒鳴り声に近い蔵馬の命令に、モモはそれ以上言わずに御堂を追った。

モモよりも数秒早くに逃走を図った御堂は、既に裏口に辿り着いていた。

ドアノブを捻りながら、作業着の裏に隠しておいた閃光手榴弾を二個取り出し安全ピンを抜く。

ドアを潜ると同時に、一つを宙高くに放り投げた。

約一秒後、強烈な発光が一帶の闇を白く塗りつぶす。外から発電所を見張っていたムラサキたちも、屋上で相野を拘束していた常盤とS A T隊員も、思わず目を覆った。

瞳孔の開ききった夜の眼に、この光は痛みすら呼び起こす。

外の人間の視界が奪われたこの数秒間。御堂は発電所の裏庭を通り抜け、二個目の閃光手榴弾を投げる。

こうしてムラサキたちの狙撃を躲し、ダムへの排水溝上部にある通路に入った。この通路はダム内部に造られた、天端の展望塔に繋がるエレベーターに続いている。

薄暗く冷えた空気に満ちた通路を中ほどまで走った。あと数十歩でエレベーターホールだ。

「――！」

硬い足音が迫るのを、御堂の耳が捉えた。

首を後ろに捻ると、硬いブーツの裏が見えた。

モモのドロップキックだ。

「おっしょ」

御堂は闘牛士の如く身を翻す。寸でのところで蹴りを躲され、モモは御堂の前に転がるように着地した。蹴りを避けはしたが、御堂も体勢を崩して走りが停まる。

「派手なことするじゃないか」

「黙れ……!」

モモは腰を低くして、エレベーターへ続く通路を塞ぐ。彼女を排除しなければ、御堂は前には進めない。大の大人を素手でくびり殺す義体ならば、足止め程度容易い事はずだ。ここで御堂を足止めしていれば、応援が駆けつけて作戦は終了だろう。

だが。モモはマスクの下で犬歯を剥き出して怒りを露わにし、御堂に殴り掛かった。

「よくも!」

大振りの拳は御堂のスウエーで簡単に躲される。

「よくも!」

当たらなくても、拳を振り続ける。よくも、と歯を軋ませながら、殴り続ける。

——よくもクラマさんを撃ったな……!」

担当官を撃たれた怒りが、モモの行動を単純化させる。

「何を怒っているんだ?」

単調な空振りの殴打に合わせるように、御堂のコンパクトなジャブがモモの顔を穿った。



「人質を殺したとかか？」

挑発的に言葉を重ねながら、モモの顔を滅多打ちにする。

「君の仲間……アザミとか言ったな。彼女を撃つたとかか？」

脳を揺らされ、モモの動きが鈍る。

「それとも、あの男——クラマだったか？ 彼を撃つたとかか？」

的も同然となったモモの鼻頭に、体重を乗せた強烈なストレートがめり込んだ。

「つぶあー！」

「ところで……」

御堂は鼻血を吹いて仰け反るモモのフェイスマスクを掴み、

「私は君たちの事が知りたいんだ。クラマに、アザミ。そして君の名前は何だ？」

剥いた。

つるりと艶やかな黒髪の滝が零れる。

赤く腫れ、鼻血を垂れ流した酷い顔でもなお、美しいと感じさせる端正な、そして十代にしか見えない未成熟な容貌が外気に晒された。

「……………は」

さすがの御堂も、子供の顔が出てくるのは予想外だったらしい。

虚を吐かれた御堂の、一瞬の停止。その意識の狭間に、駆け迫る者がいた。アザミだ。

御堂は背後からアザミのドロップキックを察知できずにモロに受けて、身体をくの字に曲げて前に吹っ飛んだ。

「モモ！ 大丈夫!？」

「だいじよびだいじよび」

「全然大丈夫じゃないよ……立てる?」

アザミの手を借りて、モモは膝に力を込めて立ち上がった。マスクを脱いだアザミの顔も、半面が血で黒く濡らしている。

「そうか、モモと言うのか」

モモと連動するように、御堂もムクリと起き上がった。

アザミの蹴りの直撃は、しかし大してダメージを与えていないようだ。

「二人とも、もっとプロレスとか見てドロップキックの練習をしたほうがいい」

言って投げたのは、三個目の閃光手榴弾。

光と音の爆発がモモとアザミの眼を奪い、御堂はエレベーターに向かって駆け出す。

二人の眼が闇を取り戻した時には、御堂は既にエレベーターの中に入っていた。

階数指定のボタンが押され、エレベーターの扉はゆっくり閉じる。

しかし閉じきる前に、アザミの跳躍力が十数メートル離れた扉に一蹴りでたどり着いていた。明らかに、人の動きではない。生物の動きと言うのも憚られる、そんな挙動。

御堂は、強いて言うならばバツタの跳躍を見たような感覚を味わう。

「……………っ！」

半開きの扉に体ごと突っ込んだアザミは、両開きの板を強引に開き、そしてその後ろからモモが御堂に飛び掛かる。義体の体当たりを受けて奥の壁に叩き付けられ、御堂の肺は押し潰される。

腹にしがみ付き、両腕で締め付けてくるその力は、まるで重機に巻き込まれたのかと錯覚するほどだ。やはり人の域を超えている。肋骨と背骨が軋みをあげ、内臓が圧力に激痛を生む。

モモを引き剥がそうと御堂がもがく間に、三人をまとめて腹内に収めたエレベーターは今度こそ扉を閉ざし、ダム of 提頂へと昇って行く。

御堂は今日で一番の危機を感じていた。

ゴリラ娘にベアハッグされ、バツタ娘は腰のホルスターから拳銃を抜こうとしている。万事休すだ。

だから、少し本気を出す。

御堂は動く左足でアザミを蹴り、エレベーターの壁に押し付けた。

アザミが動きを制され銃を抜くのが遅れているうちに、モモの後頭部に両肘を振り下ろす。

「ぐう……い」

今の打撃で腕の力が緩んだ。アザミを押さえていた足を戻して強引にモモとの間に  
入れ、前蹴りの要領で蹴り放した。

銃を抜き終えていたアザミにモモをぶつけ、銃を向けさせない。

前蹴りで上がった左脚を踏み込みに使って半歩詰め、再度向けてこようとするとアザミ  
の拳銃を左手で払う。

そして右手ですくい上げる様に掌底をモモの顎に入れ、左手にあるアザミの腕を掴ん  
で引き寄せ、腰を入れた右肘打ち。

側頭部にめり込んだエルボーがアザミの鼓膜を破いて耳から血が噴いた。

この肘打ちで御堂の全身に左回転がかかった。

その勢いを殺さず、右足を軸にして身体を左に回す。

右掌底と右肘打ち。右からの攻撃を受けていたモモとアザミはエレベーターの左側  
に寄っていた。

空いた右側のスペースに御堂は身体を滑り込ませる。

そして身体を一回転させて遠心力が乗った右フックを、モモの左頬に叩き込んだ。

拳と壁に顔面が殴挟される。モモの唾内から血に混じって歯が数本吐き出た。

二人が仲良くエレベーターの左面の壁に衝突し、そして狭い戦場となっていた箱はダ

ムの天辺に到着した。

上昇が停まり、扉がゆっくり開く。

モモとアザミは血まみれになってエレベーターの床に崩れて、動く気配はない。

御堂は優雅に歩いて、エレベーターからダム提頂の展望塔に降りた。

「では、また会おう。モモ、アザミ」

エレベーター内の二人に笑顔で手を掲げ、懐からRGD―5手榴弾を二個取り出した。これが最後の武器だ。

展望塔の外には、SATと黒い戦闘服を着た連中の姿が見える。まだ御堂がここに着ってきたことには気付いていないらしい。

先ほどの閃光手榴弾に気を取られ、多くは発電所を見下ろしている。

蔵馬の無線機が壊れたのは偶然だが、これが御堂の逃走を容易にしていた。運まで彼の味方であるようだ。

両手に持った安全ピンを抜き、外のSAT隊員たちに向けて投擲の姿勢を取る。

「ま……………で……………！」

御堂の足首に、軽い衝撃。

ズタボロになったモモがしがみ付いていた。姿は弱弱しいが、膂力は健在。このままでは御堂の足首の骨が握り折られる。

「……。四秒だ。急げ」

手榴弾を片方、アザミがいるエレベーター内に放った。

レバーが外れ、信管が作動する。

一秒。

「ぐ——ッ！」

モモは御堂の脚から手榴弾に首を巡らし、手を放す。

二秒。

脳震盪が脚を上手く動かさせない。両腕で床を搔いて手榴弾を追う。

三秒。

人間離れの義体の筋肉は、辛うじて腕での跳躍を可能にした。モモの手が手榴弾に届く。

四秒。

エレベーターの外へ投げる。手榴弾は展望塔の窓を破って屋外に出た。

爆発が爆風と熱と破片を飛ばし、爆発音が小河内ダムに響いた。

展望塔の窓ガラスは、爆発に面した物全てが砕け散った。

爆音が外にいたセンターの職員とS A T隊員の視線を集める。

一連の様子を眺めていた御堂は、輝き散るガラス片の中で拍手と一笑をモモに送る。

「やるじゃないか」

そして、空いた窓からS A Tに向かつて、御堂も手榴弾を投げてよこした。

精鋭らしく、彼らはすぐに手榴弾に気付き、殺傷範囲内から退避する。

だがその行動は、天端に警戒の空白を作った。

二度目の爆発に紛れて御堂は展望塔から外に出る。

その隙間を通って、御堂は天端を悠々と横切り、多摩湖に飛び込んだ。

水飛沫があたり、黒い水面が波打つ。そしてそのまま、御堂は姿を消したのだった。



戦場に来る時と帰る時の人数が同じであれば、指揮官の仕事が一つ減る。部下の名簿にK I Aと書かずに済むからだ。その三文字を書かない為に、指揮官は小銃を抱えた敵つい連中にあれやこれやと指示を飛ばす。

その点で言えば、坂崎は今日その忌まわしい文字を見ずに済む。喜ばしい事だ。しかし帰路につくハイエースの車内は、軽口どころか話し声一つ無い。モモのすすり泣く声だけがあつた。

少女の嗚咽を止めようとする者はいない。掛けるべき言葉が見つからなかったり、自

分も泣きたいのを堪えるので精一杯だったり、何故泣いているのかを理解できていなかったり、寝てたり、そもそも関心がなかったり。

「……飲め」

重い沈黙を破ったのはモモの隣の蔵馬だ。懐のタブレットケースから青い錠剤を出し、モモに差し出す。眠気を誘発する鎮静剤だ。担当官の掌にある錠剤を指に取るが、その小さな粒は彼女の震える指先から滑り落ちて座席の裏へと消えた。

「ご、めんなさ……んむ」

言葉の途切れは蔵馬が錠剤を直接モモの唇に押し込んだからだ。

「飲め」

モモの喉が小さく動くのを確認して、蔵馬の指は義体の柔い唇から抜かれる。それから数分もしないうちに、モモの意識に分厚い靄がかかり始め、抗い難い強烈な眠気が襲う。

「……ク……さん……」

蔵馬に垂れかかる、見た目よりも重い義体の身体。人である部分は半分程度のその肉体から戦闘服越しに伝わる熱、それだけは確かに人の物だ。戦場の炎に火照ったか、熱い。

蔵馬は肩でモモを受け止め、



「……………」  
そっと、押し返した。

## 第7話

秋が日本列島を去り行き、代わりに冬が北から降りてきた。

奥多摩の山々は葉を落として、空いた木枝から山肌が覗く。じきに雪がそれら全てを白く閉ざすだろう。

木枯らしに吹かれる国立児童社会復帰センターは静謐で、人の動きはあまり見られない。

陽も暮れ初め、気温は下がる一方だ。

「おわー、寒いなあ……」

義体寮の裏庭。アザミが北風に身体を震えさせる。

この日、奥多摩は霜月らしからぬ一桁台の気温だった。

服は秋物を重ね着しているだけで、冬の寒さにはやや心許ない。急に来た寒気に、衣替えがまだ済んでいないのだ。

衣替えと言うより、これがアザミにとっては初めての冬であり、そもそも冬服を持っていない。早急に温かい服を常盤に買って貰おう。

アザミはおねだりの文句を考えながら、センターの敷地から集めに集めた落ち葉と枯れ枝を何か所に集積していく。

十一月も中旬を過ぎ。小河内ダム of 戦いから、二日が経っていた。

負傷を負ったアザミは帰ったその日に修繕されて、顔の傷も殴打の痣も綺麗に消えている。

今日は、一昨日の作戦に参加した義体は午後から休みが与えられていた。

久々に得た余暇を、彼女はセンター内の清掃に費やしている。

これは自主的奉仕活動などでは無く、アザミがこれからしようとしている事に対して課せられた条件だった。

「アザミーこれで全部」

真紅のダツフルコートに羽織ったモモが、落ち葉のこんもりと抱えて裏庭にやって来た。腕の中の葉塊を、アザミが積んだ落葉枯枝その他可燃物の山に放り投げる。

凍える寒さを物ともしないモモのコートを、アザミはじつとりと湿度の高い目で見つめた。

義体の中で今のところ一番若いモモは、見た目に反して妹気質でおねだりが上手い。一番物や服を持っているのは間違いなく彼女だろう。

担当官に「何か必要なものはあるか？」と問われれば、義体は基本的に本当に必要な

物しか求めない。『必要な物』ではなく『欲しい物』を要求するのを遠慮してしまうのは、性格を超えた日本製義体の性質だった。

しかしモモは、『必要な物』ではなく『欲しい物』をちゃんと担当官に伝える。故にどんどんと物が増えていくのだ。

「……にしたってクラマさんも甘やかしてるよな」

「クラマさんがどうかした？」

「どうもしない。寒いから早くしよう。他の三人は？」

アザミはモモと一緒に行動していたはずの、ムラサキとタンポポ、そして坂崎の所在を問うが、モモは小首を傾げて、

「どこか行っちゃった」

「何だよそれ」

溜息を吐いたが、それも束の間。

何やらシルエツトが丸い二人と、眼鏡の若い女が連れだつて帰ってきた。

ムラサキとタンポポは、かなりサイズの大きい迷彩柄のハーフコートで身を包んでいた。陸上自衛隊で使われている冬季装備の防寒外衣だ。屈強な自衛隊員が着用する事を前提に作られた衣服。子供の体躯である義体の彼女らが着ると、まるで太った照る坊主だ。

「お待たせしましたー。はい、アザミちゃんの分です」

言つて、同じものをアザミに手渡すのは坂崎咲だった。

一昨日の全身黒の戦闘服とは違い、グレーのパンツスーツ。上から着た黒いコートの襟に、明るい茶髪がかかっている。

「さすがに秋服じゃ寒いでしょう？ 作戦部で使う物を借りてきました。サイズは合わないと思うけど、無いよりはマシだと思つて」

「ありがとうサキちゃん」

「どういたしまして。風邪ひいちゃいけませんからねー」

受け取つて袖を通す。さすがは氷点下を下回る北海道でも使える冬季装備。これなら肌を刺す冷気を通さない。

被服の偉大さに軽く感動を覚えているアザミに、坂崎は穏やかな微笑みを見せる。

彼女の役職を知らない人間が見れば、小学校の優しい担任教諭か何かだと勘違いするだろう。テロリストの殲滅や要人暗殺の現場指揮を執る女だとは誰も思うまい。

「早く始めようよー寒いよおー」

モコモコと動くタンポポに急かされ、坂崎はポケットからライターとちり紙を出して、アザミが作った枯葉の山に火を点けた。

小さな火は白煙を揚げながら、徐々に大きな炎となつて明かりと熱を放ち始める。

その火の中に、アザミは用意しておいた十個のアルミホイールに包まれた芋を入れた。彼女らが始めたのは、焼き芋だった。

ただし使っている芋はサツマイモでは無くジャガイモだ。

「サキさん、今日は引率してくれてありがとうございます」

頭を垂れるモモに、坂崎はにこにここと笑みを深くして、足元に落ちていた枯れ枝を拾い火をかき混ぜる。

「いいんですよー、私も暇でしたし。たまにはみんなと遊びたいですもんね。

ところで、どうしてジャガイモなんですか？ ドイツ風？」

「これはアザミが育ててたジャガイモなんです」

「そうなんですか？」

火の間近で熱に当たる迷彩服三人組の一人となっていたアザミは、首だけで坂崎に振り返り、頷きを返す。

「うん。夏頃に食堂で使い忘れて芽が出てきたジャガイモを貰って。

トキワさんが地面に埋めたらジャガイモが出来るって言うから、やってみたら本当に採れたの。勝手に植えてめっちゃ怒られたけど」

「ああ、食堂の花壇にいつの間にか、植えたはずのない未知の蔓植物が大繁

殖していたのって、これだったんですね……」

「どうせなら食べようって事になったんですけど、そしたらタンポポが焼き芋したいって駄々をこね始めて。」

結局みんなでセンター内の落ち葉や燃えるごみを集めたら、それを使って焼き芋をしてもいいと許可が下りたんです」

「だって焼き芋やってみたかったんだもん！」

「……うち別に茹で芋とかでよかったのに」

「じゃあムラサキにはお芋食べさせてあげない！ 一人で茹でて食べてれば

いいじゃない！」

「私が育てた芋だっつの……」

騒ぐタンポポと呆れた様に呟くアザミを余所に、ムラサキは無表情のまま外衣の懐からかなり大きなタツパーとシースナイフを取り出す。タツパーの中身は赤身の多い肉の塊だった。

「何それ!?! お肉!?! タンポポも食べたい！」

タンポポを無視して、ムラサキは肉をナイフで小さく切り取り、表面を削いで串状にした枯れ枝に刺す。

そして、それを火にかざして一人でBBQを始めた。

「ムラサキ！ タンポポもお肉食べたい！」

「……これうちが獲ってきた鹿肉。タンポポはお芋さん食べとき」

「じゃあじゃあ、タンポポのお芋と交換しよ！」

「……全部くれるならいいよ」

「うううううー！ 意地悪だ！ ムラサキ意地悪だよ！」

「だから、私の芋を勝手にバーターするのやめなよ」

アザミは喧嘩を始めた二人に肩をすくめ、その様子を後ろからモモと坂崎が眺める。

火を囲んだそこには、義体たちの日常は無かった。

ナイフも銃も固めた拳も無い。

火薬の臭いも血の色も無い。

義体たちの非日常だった。

センターには大きく分けて三つの建築物がある。

義体の研究を行う技術棟。作戦部や諜報部のデスクがある本部棟。センターで働く者や義体たちが寝泊まりする職員寮。

森林をくり抜いて木々に囲まれた敷地のほぼ中央に本部棟があり、それと隣接してL字型の技術棟。それらの周りに点々と職員寮。



さらにその外郭に食堂や体育館、車両などを収容する大型倉庫がある。

そして運動場や射撃場、フィールドアスレチック、キリングハウスが連なり、その先はもう深い奥多摩の森だ。

蔵馬は、敷地の中心である本部棟の地下にいた。

本部棟の地下は三階まであり、主な使用用途は倉庫と拘留所だ。

蔵馬がいるのは地下二階の拘留所。その最奥にある部屋だ。

その部屋は薄暗く、中央がマジックミラーで間仕切られて二分割されている。

ここは尋問用の部屋だった。

「あれ、坂崎は？」

マジックミラーに囲まれた尋問部屋から出てきた蔵馬は、上司の女がいないことに気付く。

いるのは常盤に石室、初瀬。そして諜報部員が数名。

「約束があるから出て行つたよ。まあ、あの子がいても仕方ないしね」

壁にもたれて腕を組む石室が答える。

「ま、後で書類に纏められたのを読めばいいもんな。それがデスク組の仕事だ」

「それで、僕たちの仕事はどうだい？」

啞えていたキャスターを携帯灰皿に入れ、常盤はマジックミラーの向こう側を見据え

る。

蔵馬が今しがた出てきたそこには鋼鉄で出来た椅子があり、男が縛り付けられていた。

小河内ダム占領の実行者とされているテロリスト、相野だった。

「ダメだな。話したら殺されると思って何も言わん」

「ということは、いつもの奴か」

やれやれ、と初瀬は肩を持ち上げ、常盤も同じような仕草を取る。

蔵馬は壁の内線受話器を取って、作戦部長のデスクに繋げる。

「部長。相野の奴、案の定口を割りません。やっていいですか？」

『……許可する』

受話器を置き、同僚たちに振り返る。

「蔵馬、任せるわ」

「分かった」

石室に肩を叩かれながら頷き、蔵馬は再び相野がいる尋問部屋に戻る。

椅子に拘束された中年の男は、部屋に入ってきた蔵馬とは目を合わそうとせずにコン

クリートの床を見つめていた。

ぬめりを帯びた脂汗が、髪を顔を唯一の照明である裸電球の黄色い光で鈍く照らして

いる。

緊張と恐怖で筋肉を強張らせ、震えさせている。

とてもあんな大事件の首謀者とは思えない姿だ。

「優しく聞くのはこれが最後だ。今回の事件、お前たちに連絡を取ってきた人間がいるな？ それ誰だ？」

蔵馬の問いに相野は答えない。

「お前たちに武器や人員を手配したのはそいつだな？」

相野は唇を噤んで動かない。

「……お前たちの仲間の一人が逃げた。背の高い、人質を突き落とした奴だ。そいつの名前は？」

相野は顔も上げず、ただ沈黙を守る。

その様子を見て蔵馬は、ふと気が付いたように声を掛けた。

「もしかしてお前、耳が聞こえないのか？」

唐突で突拍子のない問いに、相野はつい頭を動かす。

が、その動きよりも速く、蔵馬の手が相野の頭髪を掴んでいた。

強引に顔を上げさせ、椅子の背もたれに押し付ける様に固定する。

そしてスーツのポケットから小型のバタフライナイフを取り出した。運指でナイフ

を開き、

「耳が聞こえないのは、耳垢が詰まってる証拠だ。待ってろ、すぐに聞こえる様にしてやる」

相野の左耳にナイフを刀身半ばまで刺し込んだ。

「やっぱり耳垢溜まつてるな！ 待ってろ、すぐに綺麗にしてやる！」

「あつ……あああああああ!!」

相野の、男の喉から出たとは思えない程けたたましい悲鳴。

その中で蔵馬はナイフを前後左右に掻き回して、耳孔の肉と骨を削ぎ切っていく。

耳道を切り裂き、鼓膜が突き破れる。

内耳神経が膾になり、相野の平衡感覚は永遠に失われる。

「あああああああ!! やめえええええええええ!!」

ゴリゴリゴリゴリゴリゴリゴリ。

頭蓋と耳の軟骨が異音を相野の脳に直接響かせる。

「メエエエエエじゃねえよ羊さんの真似してる暇があるならとつとつと言え」

相野の絶叫に冷笑を飛ばし、ナイフを更に深くに埋めていく。

脳に切っ先が届くまで、あと一センチもないだろう。

血が耳の孔から吹き出し、ナイフを握る蔵馬の右手を、激痛と耳の中にナイフを刺さ

れた恐怖で醜歪した相野の顔が赤く塗れる。

蔵馬がナイフを耳から抜くと、血とリンパ液が抉られた肉が混ざった、煮崩れたトマト汁の様な液体が溢れ出して糸を引く。

相野は平衡感覚の狂いと激痛から胃液をぶちまけた。

「これでよく聞こえる様になった。さあ、電話の相手は誰だ？」

シヨックで項垂れた相野は、悲鳴の残滓を呟くだけで質問に答えない。

「なんだ、聞こえなかったのか？　もしかして、もう片方の耳も掃除してほしいのか。甘えん坊め」

子供を相手にするような口振りで蔵馬は高らかに笑い、そして右耳にナイフの切っ先を宛がう。

さすがに今の苦痛の再来には、相野の精神が拒絶反応を抱いたらしい。

心神喪失していた相野は弾けるように頭を起こし、涙と鼻水を垂れ流した醜い顔を蔵馬に向ける。

「ああああ！　や、やめやめてやめてください！　聞こえます！　言います！　言いますからもうやめて……！」

「言う気になつたなら早く言え。俺は耳搔きをしたくてウズウズしてるんだ」

「はい、はい……言います……」

過呼吸気味になって口を開閉する相野は、絞り出すように、一言。

「……御堂……」

「御堂？ それ電話してきた奴の名前だな。じゃあ武器の調達係もそいつか？」

「そ、そうです……御堂が全部……全部あいつ……あいつが持つて来たんだ……！」

武器も、計画も！ あいつだ！ あいつが全部悪いんだ！ あいつが！ あいつがあ

ああああああ！

堰を切ったように言葉を吐き出す相野から蔵馬は一步離れ、マジックミラーの方を見る。

恐らく向こう側では、諜報部員たちが御堂の名前を調べに走って行っただろう。

「なら、人質を殺して一人逃げたのも、その御堂か？」

「そう……そうです……人質もあいつが勝手に殺したんだ……あいつ、一人

で逃げたのか……御堂、御堂おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

怒りに吠える相野は、嘘を吐いているようにも、誰かを庇っているようにも見えない。

どうやら、彼も御堂と言う男に利用されていただけらしい。

……が、そんなことはどうでもいい。この男が国家に牙を剥いたことに変わりはない。

聞きたいことは聞いた。後は他の職員に任せることにして、蔵馬は尋問室を出る。

「……御堂」

憤怒の叫びの中、今聞いたその名を舌で転がせた。

藍色の夜を東に浮かべ、橙の夕日は西の山の陰に隠れようとしている。

夜が近づく奥多摩の空の下、モモは焚火から少し離れて寮の壁に背を預けていた。

芋はみんなで食べ尽くした。アザミはぼんやりと火を突き、ムラサキは未だに肉を削いでは炙って食している。タンポポはさつき何処かへ走って行った。

「モモちゃんは火に当たらないの？」

坂崎がモモの傍に歩み寄ってきた。

モモは自分の黒髪を指先で弄びながら、火を遠目に見つめる。

「……何だか……」

火を見ていると身体がざわつく。

全身がむず痒くなる。まるで皮膚の下で無数の毒虫が這い蠢いているような。

痒い。そして、痛い。

人工皮膚と人工筋肉の隙間に沸いた痒痛が、火を見る目から、火を感じる肌から、火を嗅ぐ鼻から、火を聞く耳から、入り込み、浸透していく。

火が身体を蝕み、そして心がチクチクと毒虫の針で刺される。

そんな感覚に、モモは襲われていた。

——そして何故だか。

無性に蔵馬に会いたくなつた。

「何だか？」

「……いえ、何でもありません。ちよつと火の熱で逆上せちゃっただけです」

「あんまり身体を冷やすとよくありませんよ。モモちゃんも女の子なんだから」

「ふふ、サキさんは私の事を女の子だと思ってくれているんですね」

「当然です。モモちゃんは素敵な女の子ですよ」

「やめてください」

坂崎の言葉に、モモは壁から背を放して、眼鏡の彼女に向き直る。

正面から、眼鏡の奥の瞳を覗き込む。

「私は人間じゃありません」

「……モモちゃん」

坂崎が続けて何かを言おうとしたが、その言葉は、狂った仔馬のような走りに戻ってきたタンポポの声に遮られた。

「どつでござだよー！」



火に近づくその足音は、グツシヨグツシヨと妙に湿度が高い。

焚火の番をしていたアザミは顔を上げてタンポポに向き直り、そしてあんぐりと口を開けた。

「タンポポ何処に行つて……うわっ、こいつ鯉持つてる！ どつから獲つてきたの!？」

「玄関前の池がらどつでぎだ……」

タンポポは全身をずぶ濡れにして奥歯を鳴らし、その両腕には巨大な錦鯉がビチビチもがいていた。

この付近に錦鯉がいる場所なんて一つしかない。タンポポの言うとおり、センターの玄関前にある小池で飼われている鯉だ。諜報部長が可愛がつている高級品である。

ムラサキとの物々交換に用いるために、この寒空の下で鯉が泳ぐ冷たい池に飛び込んだのだろう。いいガツツしているが、非常にはた迷惑なガツツだ。

「タンポポ、それ早く元の場所に」

「ふんっ！」

タンポポは暴れる鯉の首を引き千切ってしまった。

アザミは引き攣つた笑みを浮かべて、枯れた笑いを吐く。

「は、ははは……こいつバカだわ……」

「ムラザギ……ごうがん……」

「……うち鯉嫌い。骨多いし」

「うううううううう!!」

「ムラサキもいい加減少し分けてあげなよ。このバカが取り返しのつかない事しでかす前に。……つてもう手遅れか。あーもー、どうすんのよさーこれー!」

「……食べて証拠隠滅?」

「適当なところに捨てて万が一発見されるよりは、その方がまだマシか……モモー、サキちゃーん! 手伝ってー!」

アザミが振り返ると、離れて様子を見ていた二人は、忍び足で現場から去ろうとしている最中だった。

ぼつちり目が合い、アザミは笑顔で手招きをする。

もし逃げる様なら全力で追いかけて、鯉の肉をその口に突っ込む。食ってしまったら共犯者である。

アザミからは逃げ切れないと悟ったのか、モモと坂崎は大人しく火の周りに集まって行った。

「……せめて醤油が欲しいですねー」

「あの、私が代わりに謝ってこようか?」

「ダメだよモモ。この事が他に知れ渡ったら、私たちまとめて二度と池に近

「つかないように条件付けされちやうよ」

「……うちこんなアホな理由で寿命縮むの嫌やで」

「ムラザギ、ごのおにぐおいしいねー」

「……もう全部あげるからしばらく黙つとき」

「ちくしよー、私もう二度と焼き火なんかしないぞ……」

鯉が火の中で美味そうな匂いを醸し始める。

燃える枯れ枝が音を立て、火の粉が夜闇に舞った。

上昇気流に乗って、光の粒は上へ上へ。

輝き始めた星々に一瞬混じり、そして消えた。

## 第8話

白く塗られたコンクリートの壁と、畳が敷かれた床。

国立児童社会復帰センターの体育館。一階に間取られた一五平方メートル一二八畳の柔道場。

白壁の上部に嵌められた窓からは午前青の光が差す。遠く外の運動場からは時折銃声が響いていた。

「それじゃあ、モモ。お前に俺の近接格闘術を叩き込む。俺の汚券にも関わるから、これからは出来るだけ負けないように」

その静寂の中に、低い男の声。蔵馬だ。場所に相応しく、使い込まれて袖や襟のすり減った道着を纏っている。

「顎を引いて、身体は正面に向かって斜めに傾ける。肝臓がある右側が後ろだ。」

両手を顎の近くまで挙げて、脇は締める。拳は固く握るな。筋肉が強張って動きが遅くなる。

脚は肩幅より少し広く。重心に常に気を配れ。転んだら死ぬぞ」

言葉が向けられた先、長い黒髪を後ろで一つに結った少女が、彼の言うとおりの姿勢

を取る。

純白の新品道着を着たモモだ。

蔵馬はモモを一周して全身の構えを確認し、頷く。

「まあいいだろう。その構えが基本だ。忘れるな」

「はい師匠！」

「いやそういうノリいいから。じゃあまず、格闘技の基本、分かるか？」

「パンチですか？」

「そう、パンチだ。今から教えるのは基本中の基本パンチ——ジャブだ。」

これが全ての攻撃の始点であり、初めのジャブ一発で終わらせるのが理想だな」

言いながら、蔵馬は左手を顎まで挙げ、ジャブを宙に放つ。

肩が、腕が、手首が鋭くしなる。道着の袖が乾いた音を立て、鳴り終わった時には既

に蔵馬の左拳は顎の位置に戻っていた。

常人には反応が難しいほどの速度。全身の筋肉が無駄なく作動し、体重が乗せられた一閃。

これを一発顎に受けた人間は、その多くが脳震盪を起こして行動不能になるだろう。

現に蔵馬はこのジャブだけで、今までに幾人ものテロリストを地に沈めてきた。

「やってみろ」

「はー」

モモは左の拳に力を込め、そしてジャブを打つ。

とろつとした、鈍く、遅い、見ていて眠くなるようなジャブだった。重心も拳に乗らず、上半身だけ打っているから姿勢が前のめりになっている。

「……………」

これでは格闘技を少し齧った事のある人間なら簡単に躲せるどころか、むしろ腕を取られて投げられるか極められるかする危険の方が大きい。

蔵馬はモモの姿勢を直し、要点を一つ一つ説明していく。

重心の移動。腰の回転。肩と腕の動作。そして拳の固め方。

「十発くらい打ってみろ」

モモは十回、錆びたぜんまい人形のような動きでジャブを打つ。多少はマシになったが、それでも実戦で使えるとは言い難い。

「どうですか?」

「うーん……………」

思わず唖ってしまふ。

初めから変に銃器の知識があったり、すんなりとその撃ち方を覚えたりしはしたが、こつちの方は一筋縄ではいかなそうだ。

同じ体術でも、タンポポはすぐに斧の扱い方を体得した。初瀬が案外教え上手という事もあるだろうが、それ以前に義体の潜在能力の差であるようにも思える。

そういうば、と蔵馬は思い出す。

日本製義体の運動性能は、ある程度義体の素になった人間の影響を受けると技師たちが言っていた。耐久年数を伸ばすため、脳の他に神経系の多くが素体の物をそのまま使われている為らしい。

確かに同じ人工筋肉を用いて作られている割には、義体たちには身体能力にある程度のバラつきがある。例えばアザミは信じられない程の脚力でノミのようにピョンピョン飛び跳ねるし、タンポポは奥多摩の山道でエンストした初瀬のデカイアメ車を、センターの駐車場まで一人で押してきた。

比べてモモは、300キロの訓練用丸太をなんとか一人で担げる程度の膂力しか持たない。恐らく元は運動が苦手な少女だったのだろう。

「まあ、何事も初めから出来る奴なんていないか」

そう結論付け、同時にある考えが浮かんだ。

脳と神経が人間の体のままならば、反復練習による動作の取得が可能という事だ。

ならば先ずやるべきなのは——蔵馬はモモの肩を叩く。

「じゃあ取り敢えず、ジャブ千回」

「せつ……が、頑張ります。一、二、三、四……」

マンガみたいな目標設定だが、蔵馬の眼は本気だ。モモは黙って拳を刻み始める。

地味な稽古だが、これが案外キツイ。人工筋肉は本物の筋繊維よりも持久性が高いが、それでも三百を超えた辺りから肩の辺りが熱くなってきた。

「……クラマさん、義体って鍛えたら筋肉つくんですか……？」

「つかん」

「じゃあなんでこんな事を……」

「筋肉を鍛えてるんじゃない。神経を作ってるんだ。いいから黙ってやれ」

そう言われたらやるしかない。柔道場内に、ジャブの動きに弾かれる道着の袖音だけが響く。

モモが千本ジャブを始めてから十数分。

回数が残り三百を切った頃に、柔道場に顔を覗かせる者がいた。眼鏡の女、坂崎だ。

開けっ放しだった戸を潜り、足音を立てずに畳の上を歩く。蔵馬の背後まで行き、モモと向かい合って悪戯っぽく笑んだ。

モモと目が合う。

モモは助けを求めるような目をするが、坂崎はいつもの笑顔を振りまくだけだ。

「動きが鈍くなってきたぞ。ロボコップみたいな動きしやがって、ヤル気あるのか」



「……あります！」

「だつたらもつと気合い入れろ。一九八〇年代のロボットに負けるんじゃない。最新型だろうが」

「……はい！」

「腕が下がってきてるぞ。どんなチビと戦うつもりだ、腕挙げろ」

「腕挙げろー」

声が混じった。

背後からの坂崎の声に蔵馬は肩の筋肉をピクリを動かし、しかし落ち着いた態度で彼女に振り返った。

「……いつからいたんだ」

「たつた今来たところですよ。楽しそうにしてるから、邪魔するのもあれかなーと」

「本当に邪魔しにきたなら仕事に戻れ」

「いやー蔵馬さん全然気付かないからちよつと興が乗っちゃつて。ちゃんと用はありますよ」

背の高い蔵馬を見上げて口角を柔らかく上げ、坂崎は手に持っていた黒いバインダーを差し出した。

「お仕事です」

神奈川県厚木市。東京や横浜のベッドタウンとして人口を抱える街だ。

蔵馬はヴェゼルの助手席にモモを乗せて、厚木市の中心である本厚木駅までやって来た。衛星都市としての機能が強い街だが、本厚木駅の周辺は繁華街の様相を見せて雑多としている。

蔵馬はヴェゼルを路肩に停め、車内時計で時間を確認。

午後三時過ぎ。奥多摩から高速道路をかつ飛ばして遙々やって来たが、一時間以上かかってしまった。

「ここに対象が潜んでいるんですか？」

停車したヴェゼルの周囲を見渡すモモは、外の人々を大きな瞳をクリクリ動かして追いかけている。

「対象……まあそうだな。ここらでクレジットカードを使った形跡がある」

坂崎が持ってきた仕事は、人物の搜索だった。

ただいつもの違うのは、搜索対象がテロリストでもその協力者でもない。一般人の少女だということだ。

蔵馬はダッシュボードに置いていた黒いバインダーを手取る。そこには三白眼気

味な黒髪の少女の写真と、彼女の詳細なデータが書き込まれた書類がある。

名前は斎藤美希。十五才。神戸にある私立高校の一年生。父親は外交官。母親は専業主婦。そして母方の祖父は――。

「西京重工業の重鎮、斎藤孝三か……やれやれだ。こういうのは常盤が大得意なんだが、あいつ今大阪に出張中だしな」

「その人って私たちと何か関係あるんですか？」

「西京重工業は、センターの資金提供元の一つだ。公な資金提供じゃないが」

「大口投資者の孫娘が行方不明になったから、私たちがその捜索に駆り出されてる訳ですか」

「行方不明ってほどでもない。ただの家出らしい。とりあえず俺は一旦警察署に行って情報を集める。もしかしたら補導されてるかもしれない。お前は……そうだな」

バイナダーを閉じてモモに渡し、蔵馬はモモの顔を見る。

いつも通り、幼気な美少女だ。この娘を連れて行って、事情を知らない警察官は自分の話をまともに取り合うだろうか。否だろう。車の中に置いておくのも、それはそれで目立つ。

「その辺ぶらぶらしてろ」

「何故ですか？ 私も一緒に行きますよ」

「連れて行きたくないから置いていくんだ。この辺はセンターの顔が効かない。お前が  
いると目立って仕事が滞る。情報が集まったら迎えに来る。ほら、これ持つてろ」

蔵馬は懐から、今や旧式となった折り畳み式の携帯電話を出してモモに渡す。

任務中に担当官と義体が別行動を取る際に、連絡用にと支給されている物だ。

フィルタリングが掛けられており、インターネットには接続できないように設定されている。担当官との連絡以外には使えない、まさに電話としてのみにしか使えない代物だ。精神年齢が時折見た目の齢を、見た目の齢分下回る義体にインターネットは害悪でしかないのである。

「念のために言っておくが、絶対に銃を抜くなよ?」

「分かっていますよ、それくらいは常識はあります」

「そうか、まあそうだよな。すまん」

さすがに心配し過ぎたか。

先日焼き芋と詐称してセンター内で飼育している鯉をアザミたちと密かに貪り食った事件が、変な猜疑心の尾を引いているのかもしれない。

モモは普段からどこか抜けているし不真面目でもあるが、最低限の常識はある。

蔵馬はモモへの信頼に欠ける発言に反省し、そして今日の昼食がまだだったことを思い出す。

「モモ、金の使い方は分かるか？」

「失礼な！　こう見えてもやりくり上手なんですよ！」

モモは鼻を鳴らして胸を張った。

以前、アザミやムラサキ、タンポポらと石室に連れられて青梅まで出た際、石室にお小遣いとして百円を貰って駄菓子屋でお菓子を買った経験がある。そこでモモは、十円の駄菓子のみを攻めて物量による満足感を得ることに成功している。五十円の高額商品二つで済ませたアザミや、三十円前後の商品で中途半端な買い物をしたムラサキ、何故かおみくじを引いて吉と書かれた紙切れを手にしたタンポポと比べて、格段に買い物上手と言える自負が、モモにはあった。

自分ならば、百円どころか、一つハイランクな五百円硬貨すら使いこなすことが出来るに違いない。

モモの内心を与り知らぬ蔵馬は、何故か自信満々な様子のモモに怪訝な顔をしながらも、自身の黒革財布から適当に中身を抜いた。

「じゃあこれで適当に飯でも食って待ってろ」

「……………」

「どうした？」

「……………」

モモは肩をわなわな震わせて、食った鯉に憑りつかれたかのように口をパクパク開け閉めする。

蔵馬に差し出されたのは五千円だった。樋口一葉だった。身の丈を大きく上回る大金だった。

過去に使った金額の五十倍だ。こんなにやくステイックゼリーを五百本買える。おみくじだって五十回も引ける。確実に大吉を引けるだろう。

「いいんですか……こんな大金……!」

「大金……? うん、まあ好きに使え」

「うわあああ……!」

まるで待ちに待った補給の食糧を受け取ったガダルカナル島の日本兵のように爛々と目を輝かせるモモに、蔵馬は自分の義体に対する接し方に不安を持つ。

——俺はそんなにモモに貧しい思いをさせているのだろうか……?

欲しいと言った物はだいたい買いつけてやっているつもりだったのだが、年頃の娘と言えば娘な彼女にしてみれば、色々と不足していたのかもしれない。

それとも、センターの食事が足りていないのだろうか。義体の普段の食事はセンターの側に一任しているから、蔵馬は義体たちが普段どうい生活を送っているのか知らないのだ。

義体は基本的に現状に対する不満をあまり言わない。だから黙って耐えているだけで、本当はいつもすきつ腹を抱えているのかもしれない。だからアザミはこっそり救荒食であるジャガイモなんぞを育てていたし、空腹が限界に達した故に、この前はつい池を泳ぐ観賞用の錦鯉など食ったのだろう。

そういえば、モモは外で食事に連れて行くといつも成人男性の1.5倍分くらい食べる気がする。あれは食い溜めていたのか……。

飢餓の辛さは身に染みて分かっている。よもや自分がそのことに気付いてやれなかったなんて、担当官、いや、大人失格だ……。

「すまなかつた。帰りに美味しい物をお腹いっぱい食わせてやる」

「え、本当ですか?! やった!」

蔵馬の憐憫溢れる面持ちとは対照的に、モモはルンルンニコニコで車を降りた。

車を発進させる前、蔵馬は窓からモモの顔を覗いて言う。

「お前ならたぶん知らん男に声を掛けられるだろうが、絶対について行くなよ。無視するか、しつこいようなら俺に電話しろ。いいな?」

「分かりました」

モモの頷きに頷きで返し、蔵馬はハザードランプを切って、シフトレバーをニュートラルからドライブに切り替える。アクセルを踏み込んで車線に戻り、手を振るモモが後

方に消えていくのを見ながら、小さく溜息。

そしてスーツの内ポケットから煙草の箱を取り出した。

蔵馬を見送ったモモは、五千円を丁寧に折りたたんでブレザーのポケットに入れ、ぐりと周囲に目を巡らせた。

本厚木駅前前の広場。あちらこちらから人が湧き出て、駅に吸い込まれていく。そして同じだけの人間がまた駅から流れ出てくる。平日の午後だけあって、制服姿の少年少女が多い。

とりあえず人ごみに入ったモモは、ある場所を探して足を動かしていた。

いくつかの信号を渡り、路地を抜け、そして見つけた。

赤い看板に黄色のM。アメリカ合衆国が誇る肥満と塩分過多の殿堂、暴力的なまでの脂質と化学調味料で世界中の舌を虜にして止まない、ファーストフード界の首領。マクドナルドだ。

「……………えへ」

その店舗前で、モモは緩んだ笑みを漏らす。

たまに任務で街に出るとかなりの頻度で目にしていたこの店に、モモは変な好奇心と



憧れを抱いていた。

マクドナルドに対して、モモは様々な評価を耳にしている。

蔵馬曰く、日本に住んでいるならわざわざ食う必要のない物。

常盤曰く、味が濃すぎて舌がバカになる物。

石室曰く、太るための食事。

初瀬曰く、美味い。

坂崎は『時々食べたくなるんですけどよねー』と言っていた。

他のセンター職員も、似たり寄ったりな、肯定とも否定とも取れない事を言う。そんな不思議な食事を提供するのが、モモにとってのマクドナルドであった。

ずっと前から訪れてみたかったのだが、機会に恵まれなかった。そもそも奥多摩にマクドナルドは無い。

そしてこの度、ついにマクドナルド入店のチャンスを得た。軍資金もたんまりある。価格設定は知らないが、きつと足りるはずだ。なんとつてこちらには五千円もあるのだ。

モモは意気揚々とガラスのドアを潜り、店内に踏み込む。

中はそこそこ混雑しており、特に学生の客が多い。

どう振る舞えばいいのかは、坂崎から学習済みだ。

モモは数人並んでいるレジの最後尾に着いて、前の客が掃けるのを待つ。

その間にモモの後ろに男性客が並んだ。ついに列の中に組み込まれた事に謎の感動を覚えつつ、モモはレジの後ろに張られたメニュー覧を眺める。

やはりここは、王道にして全ての礎たるハンバーガーだろうか。いやしかし、チーズバーガーと言うのも美味そうであるし、てりやきバーガー何ていうものもある。

思案している間に、モモの番が来た。

レジの向こうにいるのは長い髪を三つ編みにした女性店員だ。

「いらつしゃいませー、店内でお召し上がりでしょうカー？」

言葉に訛りがある店員だ。外国人だろうか。

モモは首をカクカク縦に振って、

「えっと……」

再び考え込む。まだ何を食すか決まっていない。

こういう時、どうすればいいんだろうか。蔵馬ならどうするだろうか。

モモは頼れる担当官の言葉を思い出す。

『モモ、怪しいと思った所はとりあえず全部撃て。たぶんどこかにゲリラがいる  
なるほど、つまりこういうことだろう。』

「これと、これと、これと、これ、あとこれも全部ください」

「えと、全部ですか？ 多いですよ？」

「大丈夫です。よろしくお願いします」

言つて、折りたたんだ五千円を差し出す。店員もそれ以上は何も言わずに注文を通した。

数分後、モモが頼んだ商品各種がトレイに乗つて来る。

ハンバーガーにチーズバーガーにてりやきバーガーにポテトにオレンジジュース。完璧だ。これだけ買って、まだ四千円近く残っている。やはり自分の買い物スキルは天性のものがあるに違いない。モモは鼻高々になって、トレイの上の物を食する席を探して店内をうろつく。

疎らに埋まつてはいるが、空席もいくつか見受けられる。

もつとも近くの空いている席に、モモは腰を下ろした。

そこは椅子が向かい合った二人用席の通路側。

壁側のソファ席には既に、茶色く毛染めしたセーラー服姿の少女がおり、スマートフォンから突如現れたモモに顔を上げて、目を丸くしていた。

「……あんた誰？」

「私はモモです」

少女に問われ、モモは素直に名を答える。

「そう、モモね。そんで、何でここに？」

「?」 ご飯を食べに来ました」

「いやそれは分かるって。そうじゃなくて、何でその席に座ったの? あたしに何か用?」

「あれ、マクドナルドって空いてる席に座っていいんですよね?」

もしかして、自分の知らないマクドナルドルールが存在するのだろうか。席に座った後のことは坂崎に教わっていない。あるいはこの席には既に先客がいたのだろうか。

モモは冷や汗を一筋垂らす、少女はしどろもどろするモモの様子に吹き出した。

「まあいいや。あんた変わってるね」

「そうですか?」

「うん、普通そこに座らないし、そんなたくさんハンバーガーばかり食べないよ」

山積みのバーガー類を指差して笑う少女。

モモは首を傾げながら、ハンバーガーを手にとって包装紙を剥く。そして一口。

「……あつ、これおいしい!」

濃い味付けの薄い肉と味の薄いパサパサのパンがケチャップを伴って口の中で混ざり合い、条件だけなら不味いとも言えるはずの代物を、舌は何故か美味いと判断して脳に伝える。

大企業の幾星霜に渡る試行錯誤の末に作られた、脳に直接叩き付ける科学の旨味が、そこにはあつた。

二口三口と美味しそうにハンバーガーを齧るモモを、少女は珍しそうに見ている。

「ハンバーガーをそんな美味しそうに食べる人初めて見た」

「だって美味しいじゃないですか。想像していた通りです。来てよかつた!」

「想像通りって、もしかして初めてマクドナルドに来たの!? あんた歳幾つよ!」

「半……十五歳です。私の住んでるところって、マクドナルドとか無いんですよ」

「へー、そんな場所が日本にあるんだ……。あんた——同い年だしモモでいつか。モモってもしかして、滅茶苦茶茶田舎にある旧家のお嬢様だったりする?」

「滅茶苦茶茶田舎ではありませんけど、旧家とかそういうのじゃないです。どうしてですか?」

「なんか雰囲気それっぽいじゃん。言葉遣い綺麗だし、見た目もザ・清楚って感じだし」  
「清楚……」

モモはハンバーガーの一片を口に入れ、チーズバーガーの包みを剥がしながら今朝洗面所の鏡に映っていた自分の顔を思い出す。

思い出したところで自分の顔以外の何物でもなく、とりあえず顔を設計した技師が優秀だという事にしておこう。

「モモは今高校生だよな？ それ制服？」

「私服です。私学校に行つてないんで」

「つて事は中卒？ このご時世にやるね」

「中卒でもないです」

「え、嘘、小卒!?! そんなのあり得るの!?!」

あり得ないだろう。

モモは言葉を返さずチーズバーガーを食い尽くして、てりやきバーガーに取り掛かった。

そもそもモモは教育機関など通つたことも無いし、生後半年なら行くとしたら託児所だ。

ただこれ以上の情報は出すべきではないと、頭の中で誰かに言われた気がして口を噤む。

何も言わないモモに、勝手に事情を想像して解釈した少女は神妙そうに頷いて、それ以上は聞いてこなかった。

「貴方のそれは制服ですよね？」

「そりやそうでしょ。コスプレじゃ無いんだし」

「学校の帰りですか」

「んー、いや。あたしはあたしで事情があつてね。今は家出中だから学校もサボリ」  
「そうですか」

「え、それだけ？」

「じゃあどうして学校サボつたんですか？」

「そして訊くのはそこか。……別にサボつた訳じゃなくて、正確に言えば停学中。それで親とケンカしちゃつて、こんなところまで来ちゃつた」

「よく分からないですけど、それって結構プライベートな話題ですよね。どうして初対面の私にそんな話を？」

「……。なんでだろうね。誰かに聞いてほしかったのか、それともモモが話しやすい子だったのかも」

モモは首を傾げながらバーガー系を食べ尽くし、ポテトをつまむ。

塩辛い。確かにこれは舌がバカになりそうだ。

「どうぞで」

「ありがとう」

単独で食べるのはキツイと判断して、少女の方にポテトの山を差し出した。

二人で揚げ芋を減らす。最後の一本を溶けた氷で薄まったオレンジジュースで流し込み、空になったトレイにモモは手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

「ねえ、モモってこの後暇？」

「暇ではないです。人を待たないといけないので。駅の近くにいないといけません」

「じゃあ駅前なら良いわけでしょ？　ここで知り合ったのも何かの縁だし、その人が来るまでどっか遊びに行かない？」

少女の提案に、モモは手を顎に当てた。

年頃の娘がいったいどんな遊びをするのか、正直興味がある。

蔵馬は知らない男について行くなど言ったが、相手が女の場合については禁止されて  
いない。

「念のためにお尋ねしますが、貴方は女性の方ですよね？」

「は？　当然でしょ。ほれ、これが見えぬか」

少女はかなり豊満なその胸部をモモに見せつける。センター水準で言えば石室サイ  
ズだ。

「分かりました。連絡が来るまでの間ならいいですよ。えっと——」

モモは少女の名前をまだ聞いていない事に気が付いた。

「貴方のお名前は？」

「あれ、言ってなかったっけ。あたしは斎藤美希。どうぞよろしく」



蔵馬は厚木警察署の玄関扉を出て、煙草を啜えた。

先端に火を点して、警察署の外壁に背もたれる

結局警察では碌に情報は集まらず、全くの無駄足だった。

こうなったら写真を手掛かりにして、地道に探していくしかない。

過去にこういった仕事をしたことが無いわけではないが、やはり権力者に私用として働かされるのは乗り気がしないものだ。

紫煙を深く肺に吸い、溜息と一緒に煙を吐いた。

ともかくモモと合流しよう。それから女子高生が訪れそうな場所を当たる。

蔵馬は携帯を取りだし、モモに渡した携帯の番号を履歴から探す。

「はーやれやれや」

「お前次同じことしたらぶつ殺すからな」

警察署から、関西弁を話す坊主と、顔面に傷のある二人組の大男が出てきた。

人相が極めて悪く、スーツの襟元には揃いのバッチ。そして漂う血の臭い。明らかに堅気の人間ではなかった。

彼らから何かを感じ取ったのか、蔵馬は煙草を握り潰して携帯と一緒にポケットに入

れ、彼らの後ろに追く。

男たちは蔵馬の追跡に気付かず、話を続けた。

「まさか話しかけただけで通報されるとはな」

「お前みたいな敵ついのに声かけられたら、誰でもお巡り呼ぶわ」

「黙れ、殺すぞ」

「ええから、早う探すぞ。ただでさえ無駄に時間使つて食つてんねん。なんて名前やつたか」

「齋藤美希。つたく、なんで俺らがこんなこと……」

「——おい」

人気の疎らな裏道に入ろうとする二人に、蔵馬は後ろから声をかけた。

二人は眉間に深く皺を寄せ、威嚇する猛犬のような容顔で振り返つた。

「誰や兄ちゃん」

「あんたら、齋藤美希を探しているんだな？」

「だからお前誰や」

坊主の方が蔵馬の胸倉を掴んで、道路脇の民家の扉に押し付ける。

そして顔面を近づけ、瞳孔の奥を覗き込むようにして睨みつけてきた。

「齋藤美希の事、兄ちゃん何か知ってるんか？ なら教えてくれんか？」

「訊いてるのは俺だろうが」

恫喝するような声色と手荒い扱いに蔵馬は嘆息。

周囲に通行人がいない事を確認し、そして器状にした右手で坊主の耳を叩き、鼓膜を割り裂いた。

蔵馬の先制攻撃に驚き、思わず胸倉の手を緩めた坊主。蔵馬は体を落としながらその手首を取って捻り、地面に投撃。

坊主の巨体がコンクリートに当たって歪み、苦痛の呻きを上げた。

そこに容赦なく、頭部に足裏でのスタンピング。頭蓋を強打し、坊主は気を失った。

「お前……！」

傷の男は咄嗟にボクシングスタイルの構えを見せた。

「俺の質問に答えてくれたら、俺はすぐに消えるんだが」

「殺す！」

傷の男は素早いステップで距離を詰め、ジャブを繰り出す。

モモの数倍は様になってる、良いジャブだった。が、蔵馬はそれを上半身の反りだけで躲し、間隙を縫って男の喉の手刀を入れた。

傷の男は氣道を潰された激痛に動きを止める。

命取りの停滞だった。

側面に回った蔵馬は踏み込むような膝蹴りが男を跪かせ、低い位置に来た頭髪を掴む。

そして民家のコンクリート塀に顔面を叩き付けた。

「斎藤美希を探しているのか？」

再度尋ねる。

「うるせえ……絶対に殺す……！」

蔵馬は男の口を手で塞ぎ、顔面を横に滑らせた。粗い表面の塀が、男の顔の肉を削ぎ落す。苺の果肉のような小さな赤い塊が、塀にこびり付く。

「——！！」

「静かにしろ。そして答えろ。斎藤美希を探しているのか？ 何故だ？」

「……………黙れ、絶対にころ」

口を塞いで滑らした頭を元の位置に擦り戻す。感触がゴリゴリと硬い物の擦過に変わった。どうやら傷が骨まで届いたらしい。

くぐもった男の絶叫に、蔵馬は言葉を重ねる。

「早く言えよ。これ以上人ん家の壁汚すな」

「わ、わかった……言う、俺らは斎藤美希を拉致るように言われたんだ」

「誰に？」

「親父にだよ！」

「親父……やっぱり暴力団かお前ら。それで、何人で来た？ 人探しなら他にもいるだろ」

「若いの入れて八人だ……もういいだろ……早く放せ……」

「狙う理由までは聞かされてないよな。まあいい」

蔵馬は髪から手を放し、襟の代紋を筆り取る。そして男の後頭部に膝蹴りを入れた。

失神して崩れ落ちるヤクザをその場に残し、足早に立ち去る。

そろそろ騒ぎを聞きつけた地元住人か、通報を受けた警察がやってくる。ここは警察署から徒歩数分の場所である。

道を右往左往。数百メートル離れて、なんとか安全圏まで逃れた蔵馬は携帯を取り出す。

カメラで奪った代紋を撮影し、その画像を添付したメールを常盤に送る。

そしてメールに続いてダイヤル。

『蔵馬君か、今の画像は何だい？』

『ヤクザの代紋だ。どこのか分かるか？』

『ちよつと待ってね……大柳組だって。関西の暴力団扇組の直系だね』

『関西の？ どんな連中だ？』

『詳しくは僕も知らないけれど、確か外国人の不法就労斡旋とかを主な資金源にしていたはずだよ』

「……そうか。分かった」

『どうしたんだい？ 何かトラブルでも？』

「いや、大丈夫だ。助かった」

通話を切り、続いてモモの番号にかける。

『もしもし』

電話に出たモモの声は、荒い息が混ざっている。聞こえる音も何やら騒がしい。どうやら走りながら話しているらしい。

「モモ、今どこだ？ 何してる？」

『えつとですね、何と云えばいいのやら』

「どういうことだ。状況を説明しろ。短く的確にだ」

『短く的確……斎藤美希を見つけました。そして』

そして、

『怖いおじさんたちに追われています』

## 第9話

師走に入ると陽が落ちるのも早い。紺と橙の混ざり空の下、モモは厚木駅の近くにあるゲームセンターに連れて来られていた。

溢れ出る大音量のゲーム音、派手な発光を繰り返す筐体。

秋葉原でもいくつかこの手の店舗の前を通り過ぎたりしたが、実際中に入ったのはマクドナルド同様初めてだ。

美希はクレーンゲームのマニピュレーターを真剣な顔で操作している。

モモはその相貌を横から、なぞる様な視線で確認していく。

先ほどマクドナルドで偶然出会った少女、斎藤美希は、今日蔵馬と共に搜索を命じられた少女の名前だ。

しかし車の中で見た資料写真の顔と、今日の前にいる美希の顔は、目鼻立ちは似ているがいくつかの特徴が合致しない。

髪の毛は染めればいいが、目も瞳孔が大きく三白眼のそれではなかった。

同姓同名、他人の空似というやつだろうか。

「あの」

「あー、取れない!」

マニピュレーターが掴んでいた間抜け面した巨大カエルのぬいぐるみを落とす。

あまり可愛くないが、美希はこれが欲しいのだろうか。

「これが欲しいの?」

「ん? 別に欲しいわけじゃないよ。取れそうだったから、ちよつとやってみただけ。

モモもやってみる?」

「私お金持つてません」

「マクド食べてたじゃん。まさかあそこで全部使ったの?」

「あれはご飯代として貰ったものです」

「あつそ。まあワンプレイ分くらいなら奢るよ。やってみな」

美希は二百円を筐体に投入し、モモに場所を譲る。

前後と左右の操作ボタン。これを押してマニピュレーターを狙いの場所に持つて行って、中のぬいぐるみを見をホールドして手前の穴に落とすのだ。

モモはとりあえず、美希が動かしたカエルに狙いを定める。

「お……お……お……!」 モモ上手いじゃん!」

美希が歓声を上げた通り、モモは卓越した空間把握でクレーンを的確な位置に運んだ。



マニピュレーター腕が開き、降下。カエルの首に爪が食い込み、大きな図体を持ち上げた。

ゆつくりとカエルは移動し、外へ続く穴に落とされる。

「おおおおおー！」

が、ギリギリのところまで引つかかり、受け取り口にまでは降りてこなかった。

「おおおおお……」

美希はがっかりと肩を落として、追加の硬貨を財布から探す。

しかしそれを投入するより前。

モモが筐体を蹴った。

「ちよっ!?!」

義体の脚力で衝撃を食らい、クレーンゲームは横転しそうな勢いでグラグラと揺れる。

中にあつた景品たちは派手に転げ回り、引つかかっていたカエルも落っこちた。

「はっ」

突然の暴挙に口を開けて驚く美希を尻目に、モモは取り出し口からぬいぐるみを引っぱり出し、美希に差し出す。

「いやいや……はい、じゃないって。ていうかめっちゃ揺れたし……。何、モモつてもし

かしてサイボーグだったりする?」

「……………違うよ?」

「冗談だつて。そんなマジトーンにならなくていいから。ていうか店出よう、たぶんこれ店員さんに怒られるやつだ」

美希はモモの手を引いてクレイニングゲームから離れ、対戦ゲームの脇を抜けて店の出入り口に向かう。

「そーいやモモ、さっき何か言おうとしなかった?」

「え? あー、その。美希さんつて……」

モモは言葉を選ばず。

こういう場合、どういう風に聞けばいいだろうか。

あなたは神戸在住西京重工業の重役の孫娘さんですか、などとは聞けない。もし違った場合の取り繕いが難しい。

思案が長引きモモの口が開く前。二人の足が止まった。

ゲームセンターの出入り口で、男三人と鉢合わせた為だ。

黒いジャンパーを着た強面の巨漢が二人と、革ジャンを羽織った一応目鼻立ちを整っているが軽薄そうな若い男が、モモたちを待ち構える様に立っていた。

真ん中の若い男は美希とモモに笑いかける。人の不快感を煽る、薄気味悪い笑みだ。

「おっと、出てきた。ねえ茶髪の君」

そして美希を小指で指差した。

「もしかして斎藤美希って名前だったりする？」

「は、はあ。そうですけど……」

美希の答えに男は笑い顔を濃くして、後ろの二人にアイコンタクトを取る。

「そっかーよかったぜー、見つかった」

なははと気の抜ける笑声を発し、気安く美希の肩に手を掛ける。

ナンパなのかどうか判断の付かない男たちの態度に、美希は意見を求めようとモモの方に振り返る。

一方モモは軽薄男の左腕に、まっすぐと、睨みつけるような視線を送っていた。

男の左腕の辺り、革ジャンが少し膨らんでいる。

そして、鋭敏なモモの嗅覚は、そこから漂ってくる臭いを感知していた。嗅ぎなれた臭気。ガンオイルの臭いだ。

美希の方に乗った軽薄男の拳、後ろの巨漢二人の拳、どれも拳タコや小さな傷が出来ている。

何より彼らは、斎藤美希の名を知っていた。口ぶりからして、彼女を探していたのだろう。

モモの脳内で警報が鳴り響く。

彼らが何者で、傍にいる少女が自分たちの探している斎藤美希なのかはまだ分からない。  
い。

しかし、少なくとも目の前の少女をこの男たちに渡しては駄目な気がする。

「あの、確認したいんですが」

モモは最終確認の為に口を開く。

「あなた方は警察の方ですか？」

「うん？ ちげーよ？」

否定の回答。

それを聞いた瞬間、モモは軽薄男を突き飛ばし、美希の手を引いて巨漢の間を通り抜けた。

モモたちはゲームセンターを出て、往来する人々の間を縫うように疾駆した。

「え、なにになになに!？」

「いいから走って！」

蹴り躓きながらモモの後に引かれる美希は、戸惑い混じりの悲鳴を上げる。

それを引きずる様にながら、モモは後ろに首を少し回した。

男たちは案の定、モモたちを追ってきていた。

人を躲しながら、モモは路地を曲がる。

「待てやオイコリアー！」

後方でドスの効いた怒鳴り声が響く。

振り返って様子を窺うと、軽薄男が携帯電話で誰かに連絡を取っている。脇の二人はまるで鬼のような皺を顔面に彫っていた。物凄く怖い。

蔵馬と連絡を取りたいが、今は逃げるのが先決だ。こんな人の多い場所で義体の力を発揮する訳にはいかない。それに銃を持った相手を殺さずに、美希を守りながら戦う自信がなかった。こちらにも銃を抜ければ話は別だが、今は蔵馬に拳銃の使用を禁じられている。

ともかく連中を巻くか、少なくとも存分に暴れられる場所まで移動しなければならぬ。

二人は右へ左へ、厚木の街を駆け巡る。

「ちよ、モモ……速い……！」

「急いで！——っあ」

足を纏れさせて転びかける美希に気を取られ、モモの方が前方不注意になっていた。気付いた時にはもう遅い。

走行路横の細い路地から、モモの正面に髪の高い女性が飛び出していた。

彼女の方も前以外に意識が向いていたらしい。

両者は勢いよくぶつかり、道路にすつ転んだ。

「あうあつ！」

「アイヤア！」

「うわわっ！」

モモと長髪の女、そしてモモと手が繋がっていた美希も巻き込まれて転倒し、三者三様の悲鳴を上げる。

モモは即座に立ち上がって美希を引き起こし、

「ごめんなさい！」

謝罪を叫びながら再び走行を開始した。

今の転倒で距離が大分縮まってしまった。もう十メートルも無い。モモ一人なら難なく逃げ切れるのだが、如何せん美希の足が遅い。

このままでは追い付かれるのは時間の問題だ。距離を稼がないといけない。

なにか手は無いか、周囲を詮索するモモの目に、道端に違法駐輪されている自転車が留まる。

モモは右手の美希を強く引いて、投げる様にして前へと送り出した。

「のわっ」

ひっくり返ってスカートの中を公衆に晒す美希に内心で謝罪しながら、モモは自転車のフレームを片腕で掴む。

追ってくる男たちはモモの常識はずれな膂力にまず驚き、そして自転車をどうするつもりなのかを察して顔を青くした。

「おりゃー！」

横スイングで投擲された自転車は、ブーメランのように回転しながら男たちを薙ぎ倒した。追いかぶさる自転車を蹴り飛ばして起き上がろうとする男たち。彼らを横目に、モモは何が何からで状況が呑み込めずに涙目になっている美希の手を引き、また走り出す。

「あっー！」

美希が声に、モモは首を後ろに返す。

「どうしました!？」

「カエルどこかに落としてきちゃった!」

「カエルなんて後です後後!」

モモは目を進路に戻そうとして、

「っ!？」

美希の顔面、涙を溜めた双眸に違和感を持った。

瞳孔が一回りほど縮んで、見事な三白眼になっている。

するともう、彼女の顔は写真で見た斎藤美希の物と全く同じだった。

「美希さん、目が」

「あれ、カラコンも取れてる!？」

と、その時モモのブレザーのポケットから電子音が鳴った。

蔵馬に渡されていた携帯だ。

走り止めず、空いている方の手で携帯を取り出す。

「もしもしー!」

『モモ、今どこだ? 何してる?』

蔵馬の声。

聞きたくて仕方がなかった声だが、悠長な声に少し腹立つ。

「えっとですね、何と言えぱいいのやら」

『どういふことだ。状況を説明しろ。短く的確にだ』

蔵馬の要求に、モモは現状を鑑みた。

今は走っている。だがそれだけでは的確とは言えない。

何故走っているのか。それは怖い顔をした男たちに追われているからであり、追われ

る理由は――。



モモは困惑と不安で表情を引き攣らせる美希の泣き顔を振り返る。

『短款的確……斎藤美希を見つけました。そして、怖いおじさんたちに追われています』

携帯からのモモの報告に、蔵馬は唇の隙間から溜め息とも驚嘆とも言えない息を吐いた。

斎藤美希を見つけ、怖いおじさんに追われている。

モモの言葉に、蔵馬は手の中にある暴力団のバツヂを見下ろす。

斎藤美希を見つけたのはお手柄だが、もう既に厄介事に巻き込まれているとは……。義体になった経緯も含めて、事件の渦に取り込まれやすい星の下に生まれたのだから。

さつきの二人は全員で八人いると言っていた。もしかしなくても、奴らの仲間だ。

「そいつらはヤクザだ。何故か斎藤美希を狙っているらしい。モモ、何人に追われている？」

『三人です！』

という事は残り三人だ。恐らくそいつらもモモの方へ向かっているはずだ。

ともかく、早くモモと合流しなければならぬ。

「今どこにいる？」

『分かりません！』

「近くに何か目印になるようなものは」

『居酒屋さん！』

「厚木には山ほどある。他には？」

『えつと、えつと、あつ公園！ 今公園に入りました！』

「デカイ球がいつぱいある公園か？」

『そうです！』

ならば恐らく厚木中央公園だろう。

「そこから北へ向かえ。まっすぐ行けば小学校がある。その周りを俺が着くまでグルグル回ってる。ただし銃はギリギリまで使うなよ。殺すのもナシだ。今はセンターのバックアップ準備が無い。さすがに死体の隠蔽は出来ん」

『分かりました！』

了解の声を聞いて、蔵馬は通話を切る。

蔵馬がいるのは厚木警察署の西にある市街地だ。そして小学校は警察署の北東。なかなか距離があるが、相手がヤクザであるならモモなら持ち応えるだろう。

いくらなんでもチンピラ紛いのヤクザ程度にやられる義体ではない。手足を適当にぶん回せば人を殺せるくらいに性能は潜在的に持っているのだ。

ともかく、モモがヤクザを引き連れて走り回っている間に警察署の駐車場に停めてある車に戻り、モモと、一緒にいるらしい斎藤美希を拾ってとつと逃げよう。

蔵馬は息を大きく吸って、脚に力を込める。そして、厚木の街を駆け出した。

モモたちは厚木中央公園を抜けて、蔵馬が指定した小学校が視界に入る場所までやって来た。

後ろのヤクザはいつの間にか倍の六人に増えている。揃いも揃って神社に敷かれた狛犬のような獯猛面だ。

「あいつら、なん、なの……!」

美希は嗚咽と呼吸が混ざり合った息で、涼しい顔のまま走り続けるモモに問いかけた。

「ヤクザさんだそうです」

「ヤク、ザ……? 何で、私たち、を、追って、来てるのよお!」

息も切れ切れになって泣き言を言う美希は、その足の回転も落ちて、半分モモに引き

擦られるような形になっていた。

彼私の距離もまた縮まって、残り数メートルだ。ヤクザの眉間の皺まで見て取れる。蔵馬は走り続けると言ったが、苦しそうに走る美希の様子からは、これ以上の逃走は難しそうだ。

進む路の先に駐車場を見つけ、モモはその中に入って行った。

寒風吹く夕方の駐車場には運よく人が無い。一戦交えるにはちょうどいい場所だ。後ろを取られないように駐車場を奥まで進み、ようやく美希の手を放した。

「おっ……追いついた……このゴリラ女があー！」

開口一番、軽薄な上に失礼な男だった。

ヤクザ達もぞろぞろと駐車場になだれ込んできた。運動不足か煙草の吸い過ぎか、彼らの息づかいは女子高生の美希にも劣らぬほど荒い。

六人の男たちは息を整えながら、モモたちを取り囲むようにして扇状に広がった。

その中心、モモと向かい合うのは軽薄男だ。彼が男たちのリーダーなのだろう。

「何なんですか貴方たちは」

「うっせ……いいからその娘っ子を渡せ……！　じゃねえと大阪に帰れねえだろうが

……！」

「私だって美希さんを探していたんです。連れて帰らないと私たちが怒られるじゃない

ですか」

「へ……？　モモ、何それどゆこと……？」

駐車場の砂利の上にへたり込んだ美希は、汗を顎から滴らせながらモモを見上げる。状況の説明をしてもいいのだろうか。今更隠しても無駄な気もするが、その辺の判断は蔵馬に任せよう。

ともかく今は、美希を守る。

モモは今朝蔵馬に教わった戦闘の構えを取った。

それを見て、ヤクザ達は各々が小馬鹿にしたように笑う。年端もいかない子供——それも虫も殺したことが無さそうな華奢な少女が、暴力を仕事とする暴力団組員に戦いを挑もうと言うのだ。常識で考えれば無謀を通り越して冗談か何かにかかと思えない。

一方でモモは、彼らを如何にして“殺さないように”制圧するかを考えていた。

戦う術は色々と学んできたが、それはどれも殺すための技術である。殺さない戦い方は、今日習い始めたばかりだ。

ともかく急所は狙わず、威力の小さいジャブを打ち続けるしかない。

戦法を定めたモモに、軽薄男が厭なニヤけ顔で近付いてきた。警戒も何も無い、油断しきった動きだ。

「ほら、どけ」

男はモモを押しつけようと手を出す。

その手と交差するように、モモはジャブを男の右肩に打ち込んだ。

千回も繰り返せば、一応形にはなる。

「——あつ」

蔵馬ほどではないが、鋭さを帯びたジャブ。それを食らい、男は独楽のように回転しながら吹っ飛んだ。

土埃を上げて地に伏す軽薄男を見て、残りのヤクザ達の表情が変わった。舐めきった弛緩から、警戒の緊に。

各々が顔を見合わせ、そしてうち一人が進み出てきた。その拳は既に固く握られており、穩便策を行使する気が無いことは明らかだ。モモを殴り飛ばして黙らせるつもりだろう。

体躯の大きなヤクザの方がリーチは長い。モモを拳の射程に捉えたヤクザは腕を振り上げた。顔を狙った一撃だ。

対してモモは場所を動かさず、躲す動作も見せない。

迫るヤクザの拳を目掛けてジャブを打つ。今度は余計な力加減はしない。全力の一撃だ。結果、ヤクザの拳はグシヤリと潰れた。皮膚を突き破る骨に苦声を上げるヤクザを、モモは力任せに両掌で突き飛ばし、軽薄男と同様に砂利の上に敷いた。

二人も伸されれば、ヤクザ達もモモがただの子供ではないことが分かったらしい。二人が抜けて空いた扇状の穴を塞ぎに動くが、包囲を縮めはしない。

明らかに人間離れしたモモのバカ力に攻めあぐねている様だった。

——ジャブだけでも何とかなる物なんだなあ……。

モモは蔵馬が言っていた意味を理解した。

ジャブは攻撃の始点であり、ジャブ一発で終わらせるのが理想。

常人には難しい事だろうが、義体ならばジャブ一発が致命の威力を持つ。

蔵馬の言った意味とは少し違うが、これも立派な義体の戦術だった。

その破壊力を目の当たりにしたヤクザたちは、威力過多なジャブの餌食になるのを恐れて動けないでいる。しかし逃げ出すのも、それはそれでプライドが傷つく。

意図せず生まれた戦闘の停滞だが、これはモモにとって都合がよかった。

このまま待ち続ければ蔵馬が迎えに来る。どうにかして時間を稼ぐのが最善だろう。

「てっめ……許さねえ……！」

殴り飛ばされて失神していた軽薄男が起き上がった。

ジャブを食らった右肩は脱臼しており、激痛に脂汗を浮かべている。

そして動く左手には、懐に隠し持っていた回転式拳銃が抜かれてモモを向いていた。

S & WのM10だ。

「骨董品みたいな銃使いますね。博物館から盗んできたんですか？」

「ンだと、てめえ……！」

「ちよつ！ モモ！」

挑発するようなモモの言い草。軽薄男は青筋を立て、美希は拳銃を持った相手を煽るモモに悲鳴を上げる。

モモは怖気づくことなく続ける。初めの一言で、いや抜いた瞬間に撃つてこなかったならば、軽薄男は既に発砲する機会を逃している。分水嶺さえ見誤らなければ、恐らくもう撃つてはこない。

「あなた、利き手は右手ですよ？ 左手で撃つて当てられるんですか？」

「試してやろうか……！」

軽薄男はM10を握り直しながらも、その手が震えている。

銃を向けられても臆することなく、むしろ生き生きと話し出すモモの異常さに、軽薄男は苦痛とは別の、冷たい汗を流していた。

「あ、どうせならゲームしましょう」

「はっ。」

突拍子のないモモのセリフに、軽薄男はトリガーに掛けていた指の力を思わず緩める。



ゲーム。そう言ったモモは、戦闘の構えを解いた。

目を細め、無邪気とも妖艶とも見れる笑みを湛え、トランプでも取り出すかのような気軽さで、腰に手を回してブレザーの下のホルスターからP x 4を抜いた。

銃口を軽薄男に覗かせ、安全装置を親指で解除する。

「どっちが先に我慢出来ずに相手を撃ち殺しちゃうかゲーム！」

「なっ……………」

呑気に言い放つモモに、絶句するヤクザと美希。

彼らの視線はモモのP x 4に集中する。ポリマーフレームの、一見オモチャにも見えるその銃は、しかし多くの命を奪ってきた武器のみが持つ瘴気を纏っていた。

「先に相手を撃ち殺した方が負けですよ。罰ゲームは死体の片づけです」

モモの勢いに飲まれて、誰も口を挟めない。

状況の異常さに、モモを除く全員が着いて行けずに思考をフリーズさせていた。

じゃあ、始め——。

モモはそう告げようとした瞬間。

駐車場に一台の乗用車がエンジン音を響かせながら入ってきた。蔵馬のヴェゼルだ。

砂利を撒き散らしながら爆走するヴェゼルはスピードを全く落とさず、全員を轢き殺さん勢いで駆動してくる。いや、実際そうしようとしているのかもしれない。そんな気

迫と殺気を感じる走り方だった。

モモたちまで十メートルを切った地点で、ヴェゼルは車体を横に滑らせてドリフトで制動を掛ける。

「うおおお!!?」

ヤクザ達は突っ込んでくるヴェゼルの辛うじて避け、彼らがいた空間に黒い車体が土煙を上げながら滑り込んだ。

「遅いですよ!」

「すまん! と言うかお前、撃ってないな!」

運転席の窓から、蔵馬がモモに怒鳴る様にして言った。

「撃ってません!」

「ならいい、乗れ!」

「はい!」

モモは地面に尻を置いたままの美希を、もう何度目かの引き揚げを行い後部座席に飛び込んだ。

二人が乗り込んだのを確認して、蔵馬はハンドルを勢いよく回し、アクセルを思いっきり踏み込む。エンジンが唸り、駆動輪が砂利の地面に噛み付く。ヴェゼルは猛牛の如く駆け始めた。

もはや呆然と見送るしかないヤクザ達を背後に、駐車場を飛び出したヴェゼルは違法速度を大幅にオーバーしたスピードで走り去っていった。

残ったのは土埃と出来立ての轍、そして六人のヤクザだけ。

「……一体何なんだ……」

誰かが呟く。もうそれ以外に言葉が見つからない、そんな顛末だった。

センターに事のあらましを報告し終え、蔵馬は携帯をダッシュボードに放り投げた。

蔵馬、モモ、そして美希を乗せたヴェゼルは首都高速に乗り、奥多摩に向かっている。

警察の出動が懸念されたが、幸いなことに警察には数本の『女子高生が怪しい男に追われている』という通報があった程度で済んだようだ。

蔵馬に顔をを下ろされ、モモに銃を突き付けられたヤクザ達は警察に気取られることなくあの町から消えたようだ。彼らも脛に傷のある連中だ。警察の世話になることだけは避けたかったのだろう。少なくとも一人は確実に銃刀法違反である。

蔵馬はバックミラーで後部座席を窺う。

もう完全にくつろぎモードに入って窓の外を眺めているモモと、いまだに状況を呑み込めずに固まっている美希。

「随分と写真と印象が違うな」

「んえ、あ、あたし、ですか？」

「君だ。資料の写真と比べると、少し垢抜けて見える」

「あー、えっと、髪の毛のせいですかね」

「そうかもな。綺麗に染まっている」

「あ、ありがとうございます……」

声を掛けられて、美希の緊張は幾分か取れたらしい。

伸ばしていた背筋から力を抜き、背もたれに身体を預ける。

「クラマさん、茶髪の方がいいんですか？ 染めましようか？」

「お前はいい。失敗してデザートパターンみたいになるのが目に見える」

ぷうっと膨れて抗議の意を表明するモモに、美希はようやく、乾いてはいるが小さく笑みを取り戻した。

「あの、あたし今どういう状況にいるんですか？」

「詳しいことは俺の上司が君に話すだろうが……ともかく斎藤美希、君は今から俺たち国立児童社会復帰センターの保護下に置かれる。本来は護衛とかならない組織なんだが、君は事情が少々異なる。そして状況だが、そもそも俺たちもイマイチ何が起こっているのかが分かっていない。ただ」

蔵馬は後ろ手に、奪った代紋バッジを差し出す。

「関西を占める広域指定暴力団扇組、その直系である大柳組の代紋だ」

「さっきのヤクザさんたちですね」

「そうだ。その大柳組が、君を狙っている。動機は現在調査中。まあ、君のお父さんかお祖父さん絡みだろうな、たぶん。何か心当たりは？」

「分かりません。最近パパともお祖父ちゃんとも会ってないから……。それで、その、二人は？」

美希は蔵馬の後頭部と、モモの横顔を交互に見る。

「さっきも言ったが、俺たちは国立児童社会復帰センターの人間だ」

「その名前だいぶ前にちらっとだけニュースで聞いたことがあるんですけど、でもそこって確か福祉施設なんじゃ……」

「表向きはな」

「センターは、実は政府の秘密警察なんです。クラマさんはその職員」

「ちよつと待って……秘密警察？ アニメか何かの話？」

「クラマさん、やっぱり私たちってそういう風に見られるんですね」

「それだけ俺たちの隠蔽工作が上手いって事だ」

さすがに信用しきれない様子の美希だが、唐突な暴力団組織の襲撃と、拳銃を掲げて

殺意を眼光に冷たく秘めたモモの姿を思い出す。

「……モモは？　モモはまだ十五歳なんですよ？」

「……ごめんなさい。嘘を吐きました。私は美希さんと同じ歳ではありません」

「実は年上ってこと？　モモも蔵馬さんと同じ秘密警察の人なの？」

「私は……」

モモは美希の三白眼を真つ向から見据える。

「備品です」

「備品………？」

言葉の意味が分からず、美希は眉をひそめた。

モモはそれ以上語らず、憂悠の色がある微笑みで窓の外に顔を戻す。

ちようどケンタッキーフライドチキンの赤い看板とすれ違ったところだった。

「クラマさんクラマさん！　あれ！　あれ食べたいです！」

「寄ってる時間があると思うか」

「帰りに美味しい物食べさせてくれるって言ったのに！」

「状況考えろ。ていうかあれは美味い物には入らん。却下だ」

「あれもきつと美味しいです！　だってマクドナルドはすつごく美味しかったですもん  
！」

「お前五千円持ってマクドナルドに行ったのかよ……」  
途端、車内が騒がしくなる。

目まぐるしく変わる周囲の状況に美希は頭が痛くなり、額に手を当てて思わず呟いた。

奇しくも、自分を狙ったヤクザと同じ言葉を。

「もう……一体、何なのよお……」

## 第10話

「大阪には——」

暗曇に覆われた街は空と同じ灰色で、しかしクリスマスに備えた照明が所々で街路を染める。

大阪、天王寺。大阪府都心部の南玄関として賑わいを見せる土地だ。

この街は難波や梅田に続く北の天王寺地区と、下町としての活気がある南の阿部野橋地区に分かれており、その狭間にある太い車道には大型歩道橋が掛かっている。天王寺駅と阿部野橋駅を直接繋ぐその歩道橋は天王寺の中心である辻路を跨ぎ、橋の幅は十メートルを超える。橋よりも宙に吊られた広場と表現したほうがいいかもしれない。その半ばに、常盤とアザミが並んで立っていた。

常盤は仕立ての良い鳶色のトレンチコート姿。アザミは大きめのサイズのグレーのダツフルコートを着ており、一見すると寸胴のようだった。その背に負っているMP9短機関銃を隠す為には、ダボついた服を着なければならぬのだ。

昼も幾分か過ぎ。歩道橋の手すりに手を預け、主婦やスーツ姿のサラリーマン、ちらほらと見え始めた学生を眺めている。



「来たことがあるんですか？」

アザミは隣で新聞を読みながら煙草を燻らせる常盤を見上げた。その手には爆笑したり落ち込んだり忙しいテレビCMで有名な、関西一帯でローカルチェーン展開する飲食企業の主力商品の肉まんが握られている。大阪に来たならこれを食べなきゃね、と常盤が今し方六個入りを一箱も買い与えてくれた物だ。肉と、それを包む皮の香りが芳しい。早速齧り付きたいところだが、猫舌のアザミには熱すぎて食べられない。今は外気に晒して冷ましている最中だ。

「来たことがあるも無いも、僕は大阪出身だよ。言ったことなかったっけ？」  
「初耳です」

「じゃあ言っていないのか。まあセンターじゃ、あまりプライベートに踏み込んだ話ってしないもんね。僕は生まれも育ちも大阪だよ。大阪府警を辞めるまで、旅行以外で大阪から出たことが無い」

「それにしてもムラサキみたいな訛りが無いですよね」

「そりゃあ、訓練の賜物さ。それに自分でも驚くんだけど、東京に出たらどどん周りの人たちの言葉に感化されて、訛りが無くなつていくんだよ。ムラサキちゃんみたいなのって、割と珍しい方だと思うよ。あれって条件付けの類かな？」

「さあ……。本人は意識して喋ってる感じしないんで、人格形成した技術員の趣味じゃ

ないんですか？」

自分がその趣味の餌食にならなくて良かった。アザミは自らの標準言語仕様に感謝しながら肉まんを一口。

皮は厚く、甘く、しつとりとしている。そして皮の淡い甘みに包まれた、野菜の旨味と濃厚な肉の味わい。噛むと染みだした具から肉汁と脂が皮に吸われ、極上の味の協和を生み出した。

「何これ！ 美味しい！」

「アザミちゃんいいリアクションするね、買ってあげた甲斐があるよ。……じゃあ行くか」

「ふあい」

口いっぱい肉まんを頬張りながらアザミは頷く。

その肯定に苦笑しながら、常盤は短くなった煙草を放って靴底で踏み消した。新聞を折り畳み、そのまま歩を進めて歩道橋を下り、街を南西に移動を始める。

アザミは残りの肉まんが入った紙袋を引っ提げてその隣を追いかけ、残った肉まんを嚙下した。手に付いた油をハンカチで拭いながら、常盤の手にある新聞紙をチラと一瞥する。

縦に折られた一面紙には、全国の都道府県警察にSAT部隊を設立するべきだとする

国会議員の発言が飾られている。先の小河内ダムに関連する記事だ。

アザミたち国立児童社会復帰センターの部隊も投入されたあの事件は、世間的には『奥多摩テロ事件』として報じられている。犯人が自動小銃を装備していた事や山麓で闘争が繰り広げられた事から、第二のあさま山荘事件などとも呼ばれ、報道機関のみならずあらゆるマスメディアが特集を組んで事件を取り上げた。大規模な銃撃戦が繰り広げられた為、一部の層から批判が出たものの、世論の大半としてはS A Tの対応に肯定的だ。S A Tの広範囲配備や戦力拡大なども、ある程度は現実の物となるだろう。

昨今の戦火が燦る世界情勢に加えて、イタリアであった大規模テロのニュースは逐一日本でも報じられていた。中国の軍事的台頭の片鱗の事もある。平和を空気と同じレベルで享受してきた日本人も、さすがに多少の危機感の片隅に抱いていたのかもしれない。それでも自分以外の誰かが戦ってくれるならば、という消極的肯定ではあるだろうが。

報道の内容としては、環境テロ団体が小河内ダムには爆弾を設置し、大勢の人質を取り、うち一名を殺害。最終的にS A Tの突入が敢行され犯行グループは全員射殺、残った人質は無事解放されて事件は幕を閉じた。ということになっている。実際には犯人のリーダー格とその部下二人の三名がセンターに拘束され、御堂と呼ばれるこの事件の真犯人とその仲間の男二名が現場から逃走を図っているのだが、それらの情報が世に出

ることは無い。凶悪なテロリストが野放しになったままであると国民に知らせたところで無用な混乱を生むだけであるし、そもそも彼らを逃がしたことを報じれば、上手く手柄を手に入れた警察の面子に傷がつく事になる。こちらから頼まなくとも、情報の隠蔽を行ってくれるだろう。

「結局御堂という男の事は分かったんですか？」

二人は天王寺を西へと進む。

アザミは御堂の名を唇に乗せ、彼に殴られた頬を擦った。

「いいや、全然。警視庁のデータベースにそれらしい人間はいなかった。けれどあんな大規模なテロを武器まで持参して実行するような人間を、警察が見逃しているとは思えない。それで、まあ公安警察には公式資料にも乗せていない、個人用メモみたいなレッズドリストがあるところにはあつたりするから、それを今から見に行くわけだね」

「なるほど……それじゃあ今から府警に行くんですね？」

「いや、その前に寄り道をする。大阪には結構色々預けたままの物があるんだ。次何時来れるか分からないから、ある程度回収しに行こうと思う」

「お金ですか？」

「いいや、もつと凄い物だよ。お金で動かない人間でも、あれならイチコロだ。まあそういう物の回収と、後は情報集めだね」

一体どんな物なのかアザミには見当もつかないが、常盤がそういうならそれは素晴らしい物なのだろう。

だがそのミラクルアイテムよりも、アザミの気を引くことがあった。

「府警に行く前に情報収集をするんですか？」

「うん。テロリストや犯罪者は警察に見つかからないように細心の注意を払っているから、普通の警察の捜査では、本気で隠れている人間っていうのは見つけられなかったりするんだ。逃がし屋とか雇われたらもう無理だね。その辺にいる人間に聞き込みしたり監視カメラの映像と睨めっこしてただけじゃあ、絶対に見つからない。だから、どっちかと言えば府警の方がいいで、今から行くところが本命なのさ。」

情報っていうのは、地表には落ちてない。蛇の道は蛇。地下に潜っている人たちの事は、地下にいる人間が一番よく知っているんだよ」

「つまり私たちが向かっているのは……」

アザミは周囲の街並みが、少しずつ変化してきている事に気付く。

煌びやかで老若男女入り乱れる繁華街から、埃と汚水が染み付いた裏町へと。

「地下の世界の管理人——ヤクザのところさ」

小便臭い空気が鼻を刺す。

道路脇にはゴミなのか個人の所有物なのかも分からない物々が積まれ、その傍にホームレスが眠っている。

そこら中で露店が広げられ、売られているのは古雑誌やら古着やら卑猥な装丁のVHSなどだ。

道には天王寺と同じくらい多くの人々が行き交っているのだが、歓楽街のそれとは人種が違う。生気が無いが、不気味なほどギラついた目の人間ばかりだった。

天王寺から西へ数キロ。

西成と呼ばれる地域に、アザミたちはいた。

「なんていうか……浮いてませんか私たち」

「浮いてるだろうね」

何年洗っていないのか見当もつかない程汚れが折り重なった外套を着た男とすれ違う。他の土地ならば目立って仕方がないその格好も、この街ではそれが一般的な服装であるらしい。むしろ一着二十万円近くするコートを着た常盤や、染み一つ無い真新しい服を着ているアザミの方がよほど目立っている。

先ほどから街の人の目が漏れなく二人を追っていた。

珍しそうな、訝しむような、憎らしげな眼で、常に四方から見られている。

居心地の悪さに、アザミは思わず常盤に引つ付いて隠れる様に歩く。

対して常盤は周りのことなど意に介さない。勝手知ったるといった様子で汚れた街を闊歩していた。

「なんですか、ここ」

「面白い街だろう?」

「変な街です」

「その変なところがいいんじゃないか」

一笑する常盤と懽然と見上げるアザミは、背後に妙な気配を感じる。同時に鼻腔を刺激する獣臭。

首を後ろに回して見ると、ふてぶてしい顔をした野良犬が三匹、荒い息づかいでアザミの後ろに並んでいた。白地に茶斑点の冬毛で膨らんでいても隠せない程痩せこけている。

「え、何? これ?」

アザミは一瞬身構えるが、犬たちの視線が、肉まんの入った紙袋にあると気付く。だが犬に襲いかかつてでも奪い取ろうとする気迫は無い。どうやら空腹のあまり、アザミの手にある肉まんの匂い引き寄せられてきたらしい。

これはどうしたものか。

放っておけばどこまでも追いかけてきそうな様子だ。アザミとしては惜しくはあるが、肉まんを彼らに譲渡しても構わない。しかしこの肉まんにはたまねぎがたっぷりと練り込まれているのだ。犬には玉ねぎを与えてはならないと咲が言っていた気がする。アザミは常盤に指示を乞おうと犬から振り返るが、彼は薄い笑みで見るだけだ。彼女がどう行動するかを観察するつもりらしい。

「……………」

このまま餓死するよりは、中毒の可能性があつても何か腹に入れた方がいいだろう。それにコンクリートジャングルを逞しく生き抜いてきた野良犬たちだ。きっと多少の玉ねぎなど難なく消化してしまうに違いない。たぶん。

そう判断して、アザミは袋から肉まんの入った赤い紙箱を出して、少し離れた路端に放った。

野良犬たちは目を輝かせて紙箱に跳びつく。包装を噛み破って、三匹仲良く肉まんを貪り始めた。

恵んだ食料が犬の口に入ったのを見届けて、二人は移動を再開した。

「アザミちゃんはそっちを選択したか」

「常盤さんならどうしました？」



「無視してたんじゃないかなあ」

「酷い、とは言いませんけど……」

「あ、紙袋は持つててね。後で使うから」

言われ、アザミは空の紙袋を折りたたんでコートの中のポケットに入れる。

「それでさっきの話の続きですけど、この街は何なんですか？」

「ここは西成さ。一言で言うと、社会の裏側への玄関口かな。この街にはいろんな人間が集まってくる。日雇い労働者に彼らを雇いに来る幹旋屋、売春婦に盆屋にノミ屋に麻薬の売人、そして彼らを取り仕切るヤクザ。他には裏社会とコンタクトを取りたい人間との間を取り持つブローカーとか、あとは身を暗ましたい犯罪者とか」

「全然一言じゃないですね」

「ご、ごめんね……」

「それにしても、よくこんな街が残ってますね。警察は動かないんですか？」

「二応手は入っているけどね。ただ完璧に街を浄化してしまうと、ここの住人が変に散ってしまう。それはかえって危ないから、あえてこういう街を残しておいているんだ。一か所に集まってくれていた方が管理も楽だしね」

「なるほど」

「それに警察も色々と便利に使わせてもらっているしね……着いたよ」

二人が立ち止まったのは、三階建ての小さなビルの前だった。真村興業と看板が掲げられたビル。ここが常盤の言うヤクザの事務所らしい。

一階はガレージになっており、その上、二階の窓からは蛍光灯の光が透いて見える。留守ではないようだ。

常盤は磨りガラスの玄関扉を通り、階段を登る。そして二階の事務所の戸をノックする。

「はい」

若い男の声で返事があり、半ばまで戸が開かれる。こちらを窺うのは金髪を短く刈り込んだ、土佐犬の様な顔貌の小男だった。

小男は常盤の顔を見て細い目を限界にまで開いて驚愕の表情を作る。

「とっ、常盤さん!?!」

「や、久慈くん久しぶり。ちよつと中に入れてもらっていい?」

常盤の申し出に、久慈は奥にいるらしい他の人間に指示を求めて振り返る。

そして許可が下りたのか、彼は脇に退いて常盤たちを通した。

そこには応接用のテーブルとそれを囲むソファがあり、ワークデスクがあり、壁には代紋をあしらった壁掛けがあり、その下には隣室に続く扉がある。そして久慈を含めた三人の男たちがいた。久慈と、ソファに腰を掛ける黒ワイシャツの男。その男の傍

に立っている、久慈と同世代の若者だ。

「……常盤さん」

ソファアーにいた男は常盤の顔を見て立ち上がる。

背が高い。一八一センチの常盤よりも、まだ十センチは高いだろう。

歳は三十を数年過ぎたくらいだろうが、彫りの深い顔と、全身から立ち上る巨獣の様な威圧感が、彼の年齢を十も二十も底上げして見せた。

「真村さんは？」

「今は食事に出かけていまして。親父に用でしたら、すぐに連絡を取りますが」

「いや、いいよ。あの人僕のこと嫌いだろうし。というか、あの人がまだ組長やってたんだね」

常盤はコートを脱いで久慈に手渡し、男に言う。

「とつくに貴方が跡を継いだと思っていたよ。真村組若頭、鏑一鉄さん」

「それで」

鏑は紫煙を吸い込み、常盤に来訪の用を促す。

「何の御用で？」

ソファアの正面に座る常盤に尋ねながらも、その視線は常盤の隣にちよこんと腰掛けるアザミに向けられていた。

戸の近くで待機する久慈も、便所と言つて事務所を出て行つたもう一人の男も、怪訝そうな顔でアザミを見ていた。

一体この子供は何なのだ、言葉にせずとも表情で語っている。堅気の場所ならまだしも、ここは暴力団の事務所だ。子供を連れてきて良い場所ではないし、常盤もそれを承知しているはずだ。承知しているはずなのに、わざわざ連れてきた。それが不気味であり、好奇心もくすぐられる。しかし触れてはならない領域なのだろうと、日々理不尽と暴力の中に身を置く彼らは肌で感じていた。

常盤は理由のない行動をする男ではない。この柔和な面の男が自分から言わないのであれば、それは自分たちが聞く必要のない話なのだろう。

そう理解し、鐮はアザミには一切触れずに会話を始める。

「常盤さんはもう警察を辞められたのでしょうか？ 我々極道者にどんな御用が？」

「要件は二つ」

常盤も懐からシガレットケースを出して、細巻きを啜える。

鐮は自然な動きで自らのライターの火を点し、常盤の煙草に近付けた。

煙を吸い、吐き、煙草を口端で啣えて人差し指を立てて見せた。

「まず一つ。最近逃がし屋と武器の輸入業者に動きは無かったかい？」

「警察の捜査じゃないんでしょ？ 答える義務がありますか」

「尋ねる権利はあると思うけど。それで、どうなんだい？」

「……私どもが仕切ってる逃がし屋連中は特に。賭場荒らしをしたアホと族抜けしようとしたガキを逃がしたくらいです。武器は、もう私どもは取り扱っていないので何とも」

「そうか……。じゃあ佐々さんと取り次いでもらえないかな。情報屋の」

「構いませんが、常盤さん、さつきも言いましたがあなたもう警察官じゃないんでしょ？ どうしてそんな事を」

問われて、常盤は首を傾げる。

「答える義務があるかい？」

「……失礼しました」

「いや、僕も少し意地悪だったね。これは仕事さ。僕は今、フリーの記者をしていてね」

「記者？ 常盤さんが？」

「意外かい？ とにかく、奥多摩の例のテロ事件について調べているんだ。どうも関東の方にはなかなかいいネタが無くてね。面白い情報が無いかと思って大阪くんだけりま

で来たわけさ。……そういうことにしておいてくれないかな」

察しろ。

そう暗に言う常盤に、鏑はもうこれ以上踏み込むのを止めた。

鏑は煙草をテーブルの灰皿でもみ消し、久慈に物を書く仕草でメモを持ってくるように示す。

久慈は頷き、小走りでワークデスクからメモとボールペンを鏑に運んだ。

受け取った鏑はメモに数字の羅列を記し、破り取って常盤に手渡す。

「それが佐々の今の連絡先です。今週中はその番号で繋がります」

「いやー助かったよ。ありがとう」

紙片を懐に入れ、常盤は世間話をするように笑いながら会話を続ける。

「それで二つ目の用なんだけど」

二本目の煙草を啜え、今度は自分のライターで火を点す。

「預けていた物を返してもらいに来た」

「あれを……ですか？」

アザミを一瞥し、鏑は言い淀む。何やら遠慮しているらしい。それも常盤では無く、

アザミに。

「ああ、この子の事は気にしなくていいから。早く」

今更になって、アザミについて『気にするな』と無茶な言及が入った。

「しかし……」

「早く」

静かな、腹底に響くような声だった。

「分りました」

観念して鎬は腰を上げ、そして別室への扉に消えた。

「何を預けているんですか？」

「今にわかるよ」

小声で尋ねるアザミに、常盤は煙をぶくぶく吐いてはぐらかす。

預けていた物とは、さつき常盤が言っていた凄い物の事だろう。曰く金よりも凄い物らしいが、何が出てくるのか少し楽しみである。

その時、常盤のポケットから携帯の着信音が鳴る。

「ん？」

見ると、蔵馬からメールが届いていた。件名も本文も無く、ただ画像が一枚、添付されている。どこかの代紋バッチのようだが。

「なんだいこれは」

言ってる間に電話が来た。

「ちよつと失礼」

誰ともなく断りを入れ、携帯を耳元に着ける。

「蔵馬君か、今の画像は何だい？」

『ヤクザの代紋だ。どこのか分かるか？』

自分の経歴から知っている可能性があるかと、まず宛てにしてきたのだろう。確かにある程度ヤクザについての情報は持っているし、現に今ヤクザの事務所にいる。だがこれは見たことが無い代紋だった。

「ちよつと待つてね……」

常盤は携帯を操作して画像を表示し、久慈に代紋を見せる。

「これどこのか分かる？」

「これは……大柳組つすね。最近扇組の直参になったところつす。柳応会のところの若頭だった奴が親やってますね」

「柳応会……つてことは、外国人を囲ってる連中か」

記憶を探り、該当情報を引っ張り出す。確か公安時代に何度かマークしたことがあつたはずだ。若頭の大柳という名前も、確かに聞いたことがある。

「大柳組だつて。関西の暴力団扇組の直系だね」

『関西の？ どんな連中だ？』



「詳しくは僕も知らないけれど、確か外国人の不法就労斡旋とかを主な資金源にしていたはずだよ」

『……そうか。分かった』

「どうしたんだい？ 何かトラブルでも？」

『いや、大丈夫だ。助かった』

通話が切られる。相変わらず忙しい同僚だ。しかも、またトラブルに巻き込まれているらしい。今日は大した仕事は無かったはずだが、何かあったのだろうか。

ともかく、こっちの仕事は半分片付いた。早く前の職場に顔を出して、残りの仕事もとつと片付けよう。

もしセンターで何かあったなら、急遽呼び出される可能性もある。

タスクが積み重ねられるのは、常盤が最も嫌う事の一つだった。

「お待たせしました」

戻ってきた箱が持ってきたのは、A4サイズの茶封筒だった。

テーブルの真ん中に置かれた封筒。中には何か体積のあるものが入っているらしく、真ん中あたりがこんもりと膨らんでいる。

常盤は煙草を灰皿に捨てて封筒を引き寄せ、封を無造作に破った。そして封筒を逆さにする。

破られた封筒の口から、内容物がぼとりとテーブルに吐き出された。

「これは……」

出てきたそれが何なのか、アザミには分からなかった。

白い粉だった。手の平サイズのポリ袋に詰められた白粉。それが一袋だけである。

「何ですか？」

何と無く華美な宝石やら凝った装飾の調度品のような、宝物めいた物を想像していただけに、少し拍子抜けだった。

常盤は白粉の袋を手にとって、重さを確かめる様に上下する。

「へロインだよ」

「へろいん」

聞き覚えのない名称だった。

「常盤さん、子供にそんな物を見せるのはお控えなさい」

鐘の諫言を無視し、首を横に傾けるアザミの目の前に、常盤は袋を吊るす。

「麻薬だよ麻薬」

麻薬。なるほどそれは聞いたことがある。

アザミは理解の及びを頷きで表す。麻薬は一時的な多幸感や酩酊状態を引き起こす代償に多大な身体的・精神的障害を引き起こす違法薬物の事だ。

それは分かったが、そこから先が分からない。

「それを人にどう使うんですか？」

アザミの発言に反応したのは鑓だった。

眉間に深く皺を寄せ、歯を剥き出す。額には青筋が浮かび、それは明らかな憤怒の貌だ。

「常盤さん！ あんた子供になんて事言つたんだ！」

落ち着きの体面こそ保つてはいるが、膨大な量の憤怒が込められている。

「うるさいよ鑓さん。この子の事は、貴方は気にしなくていいんですよ」

笑顔のまま冷たく言い放ち、常盤は三本目の煙草に火を点ける。

「アザミちゃん。それ、さっきの紙袋に入れて持つておいて」

常盤に従い、アザミはポケットから紙袋を出して広げ、ヘロインの袋を収める

「常盤さん！」

今度は間違いなく怒声だった。ソファアから半分腰を浮かせ、身を乗り出すようにして常盤を睨みつけている。ちらつく犬歯は今にも常盤の喉元に食らい付きそうで、怒り狂った虎を目の前にしているようだった。

アザミは意識を緊にシフトして、密かに腰の拳銃ホルスターに手を伸ばす。

一方常盤は笑みを持ち続け、最早せせら笑いに近い。

「落ち着いてくださいよ、鑄さん」

鑄は強張らせた肩を一旦落とし、深く深呼吸した。

「……常盤さん。あんたは今も、あんなあくどい真似を続けているんですか。しかも、今度はこんな子供まで巻き込んで」

「それが何か問題かい？ 君には何の関係もないだろう」

「私に関係が無くて言わせて貰います。これはあまりにも惨い」

突如言い争いを始めた大人たちに、アザミはついて行けずにきよとんと目を丸くするしかない。

ただ、鑄が常盤に対して激怒していることは分かった。その理由が、自分の存在であるらしいこともだ。

何とか常盤を庇いたい。そう思ったのは義体の条件付け故だろうか。アザミにも、それは分からなかった。

「あの」

会話に介入したアザミに、二人の目が刺さる。

「私は好きで常盤さんに従っているんです。あまりひどい事を言わないでください」

「……………」

「……………」



「あんたには借りがある。組を救ってくれた大恩だ。そんな相手にこんな事を言いたくねえが、やっぱり我慢ならん。言わせてもらう。言わなきゃ気が済まねえ」

鏑の言葉。嘎れた、小さな声だった。

「常盤、お前はクス野郎だ」

小さくとも、人の心の芯を射抜く、力のある声だった。

それを聞いて、常盤の笑みが消える。

指に挟んだ煙草を口に運び、深く吸う。

体を前に大きく折って、端正な白い顔を鏑の鼻先寸前まで寄せた。

そして、煙を吹きかけ、言う。

「ヤクザのあんたに言われたくねえよ」

ヤクザの事務所を出た常盤とアザミは、新今宮駅から環状線に乗って、大阪府警本部のある森ノ宮へと向かっていた。

午後の電車は人も疎らで、二人は赤いシートに座っていた。

電車がカーブに差し掛かり、並んだ大小の身体が横に揺れる。

「常盤さん」

「何だい？」

アザミは膝の上にある、ヘロインの入った紙袋を撫でる。

「あのヤクザとはどういう関係なんですか？」

「……………」

常盤は黙ってアザミの顔をじつと見る。

「なんですか？」

「いや、なんだか今日のアザミちゃんいつもと違うなあって」

「別に違くありません。通常運行です」

「そうかい？ ……ま、あの人たちとは、ビジネス上の取引相手だね」

「警察官の時のですよね」

「そうだよ。ヤクザって、本当に横の繋がりが広くて強い。裏社会の情報は、だいたい彼らのところ集まるんだ。だから、情報と引き換えに四課——暴力団担当の人たちがガサ入れしようとしてるぞーとか、麻薬取締官の捜査が来るぞーって情報を教えてあげてんだ」

「それって身内売ってませんか……………」

「それは言わない約束で……………」

二人は笑い、しばらく沈黙する。

電車が再び揺れた。

「アザミちゃん、さつき言つてたのつて本当？」

「さつきつていつのさつきですか」

「好きで僕に従つてゐるつてやつ」

「……………」

アザミは答えなかつた。自分でも実際どうなのかが、分からなかつたのだ。

自分が常盤に抱く、この感情は何なのだろうか。義体が持つ、条件付けの忠誠心なのだろうか。それとも本物の感情なのか。

本物の感情だとしても、これは何なのか。

感情の定義付けが、アザミは曖昧だった。

例えばモモは、蔵馬が好きだという。条件付けなどではない、本物の愛だと言う。

何をもってして本物だと言えるのか皆目見当つかないが、モモはそう豪語していた。

理屈ではなく感覚で分かる物らしい。

そう言われると、確かに感覚としてはネガティブな感情ではない。

ただ、恋愛とか、そういうものでは無いようにも思う。



なら何なのか。

分からない。

分からないから、アザミはこう答えた。

「答える義務がありますか？」

## 第11話

楊一花（ヤン・イーファ）は住んでいる築半世紀のアパートのボロさに辟易していた。見た目が汚いとかそういう外見的要因では無く単純に、柱や梁が老朽化して住人の誰かが身動き一つすればアパート全体が軋みをあげる、その建築的安全保障の経年劣化にある。

「……………ぬあああ……………めっちゃ揺れてる……………怖い……………」

一花はゆらゆら揺れている床に身体を揺さぶられて目を覚ました。ヤニの染み付いた黒い天井が、ギイギイ鳴いて埃を落としている。この激しい揺れは同じ二階の奥に住んでいる爺さんの部屋が震源地だろう。あの辺りは特にガタが来ているらしく、抜き足差し足以外で歩くのは危険なのだが、あの爺さんは何暴れているんだろう。他の住人が言うには寒い冬の日にはシベリア拘留の記憶が甦って暴れることがあるらしいが、このアパートを倒壊させて他の住人も巻き込み集団自殺をする気だろうか。

このまま揺れが収まらないのなら、避難しなければ本当に危ないので身を起こす。だが爺さんはすぐ落ち着いたのか、アパートの振幅は次第に収まって行った。

一花は小顔で童顔な割にまつ毛の長い切れ長の眼をこすり、背中まで届く長髪に一度

手櫛をかける。布団の中の肢体はふくよかな体型ではない。しかし痩せ型でもない、全身に程よく筋肉が付いた、アスリートの様な体型の少女だ。

煎餅蒲団の上に落ちた埃を払って、枕元の携帯電話を手取る。スマートフォンではない、かなり旧式の折り畳み携帯だ。開いた液晶の時計は六時八分を示しており。そして日付は、

「今日で三月か……」

一花が日本に来て、三ヶ月経過していた。

三ヶ月前までは中華人民共和国にいた。

物心が付いてからずっと、山奥の田舎で細々と米だの野菜だのを育てて暮らしていた。吹けば崩れそうな狭いボロ屋で両親と四人の弟の中で鯨詰めになり、学校など行く暇も無く働いた。自分も働かなければ幼い弟達が飢え死にしようし、学校に行っても貧乏を理由で苛められるだろう。ノート一冊にも事欠く家だ。同世代の子達が行っている学校に興味がないと言えば嘘になるが、言っても仕方のないことであると、一花は幼い時から理解していた。

働くことに抵抗がある訳ではない。ただ働いても働いても、生活が上向きになる気配がない。自分のお下りの、もう裸足と変わらないような靴を履いている末弟に、新しい履物も買ってやれないような生活には嫌気が差していた。

だから一花は十八歳になると、一念発起、もつと稼ぎのいい仕事を探して北京に出た。北京に知り合いなどおらず、仕事の当ても無い。それどころか、一花が都会に行く為の路銀を得る為に畑を少しを抵当に入れて借金しており、もし仕事を見つけて田舎に送金できなければ、家族は食い扶持の一部を失う事になる。一家の生き死にが掛かった賭けだった。都会に行けば、何とかなるかもしれない。もしかしたら、もつといい暮らしが出来てもかもしれない。小さな背中からはみ出すほど大きな家族の期待を背負って、一花は出稼ぎに出た。

結果から言えば、仕事は見つからなかった。集合体として完結した閉鎖的な田舎で暮らしてきた彼女と両親は知らない事だったが、中国はすでに人材の飽和状態に入っており、働きたくても働けない人間が北京の中だけでも数多くいるのだ。教育も受けておらず、ひよっこり田舎から出てきた小娘に仕事を回せるほど、北京の街は人に困っていないのである。

もし一花に声を掛ける人間がいるとすれば、それは女としての価値を搾取しようとする輩だけだろう。そういう連中に都会の暗部に引き摺り込まれなかったのは、一花自身が極力避けてきたとは言え、僥倖以外の何物でもない。

ともかく仕事が見つからない。旅費は往路の分しかない。もし働けなければ真っ先に破滅するのは一花自身であった。財布はとつくに空になり、空腹を抱えながら北京を

うろろうとしてた。そして北京に出て十日目。雇ってくれる職場を探して街の中を徘徊していると、突然身体から力が抜けて、歩くことが出来なくなつた。道路の端に蹲り、ぼんやり街を眺める。北京に出て、これまでの人生で出会つた人を遥かに超える人々とすれ違つた。今も目の前の大通りを行き交う人の数は、田舎の村の人口を軽く超えるだろう。

この人たちはみんなちゃんと仕事を持つて、毎日を生きているのだろう。これだけの人が働けているのに、自分には出来ることが何も無い。

正直、現実舐めてたなと一花は反省していた。

都会に出れば何とかなるなんて幻想を抱くなんて、人生舐めてる。今まで甘い夢など見ないように生きていたのに、自分としたことが一体どうしてしまったのだと言うのか。何に浮かれていたのだろうか。何に縋ろうとしていたのだろうか。このままではホームレスまっしぐらだ。と言うかホームレスになつたとしても食つていく手段が無い。……いや、無くは無い。一つだけ、女の自分には最後の手があるにはある。

同年代くらいのも、綺麗な服を着た少女の集団が目の前を通り過ぎた。そのうちの一人と目が合う。一花は居た堪れなくなり視線を咄嗟につま先に落とした。感じたことのない内側からくる胸の痛みに耐える。いや、違う。思い返せば今まで何度かこの感覚を得たことがある。しかしそれはいつだつただらうか。

胸の疼痛に思いを馳せようとしてみるが、ぐうと鳴る腹が一花は現実呼び戻す。

……最終手段は、出来れば使いたくなかった。そんなことをするくらいなら、道端に転がる骸になって犬の餌にでもなりたいと思っていたが、しかし自分が金を稼げないと田舎の弟たちの誰かが飢え死にするかもしれない。それは嫌だ。他？的……選択肢なんて無いじゃないか……。

もしかしたら。

両親はこうなることが分かっていたのかもしれない。

負感情は負感情を呼び、一花の思考は飛躍する。

弟たちも大きくなって、食べる量が増えてきた。うちの畑から取れる分を上回るのは時間の問題だったろう。畑は増やせない。仕事もない。そうすると、取れる手段は一つだ。食い扶持を減らすしかない。

だから自分が選ばれた。大人だから。女だから。もう一人で生きて行けと、都会に送り出されたのだ。

初めは責任転嫁の現実逃避のつもりが、考えるうちにそれが真実である気がしてくる。

目尻に涙が浮いてきた一花は、街中で見つとも無く泣いたりするのが嫌で、眉間に力を込める。あと瞬き一回で涙が零れそうだった。

耐えろ耐えろ耐えろ。泣いたらもう止まらないぞ。

ほとんど決壊寸前のぼやける視界の中。

泥水を吸ってよく分からない色に汚れたスニーカー、その爪先に一枚の紙切れが引つかかっていた。どこからか風に吹かれて飛ばされてきたのだろう。

いくつか靴跡はあれど、風雨に晒された様子の無い真新しいコピー紙。

無意識のうちに、一花はその紙を手にとっていた。

この紙が一花のこの後の人生を一変させ——そして今に至る。

「起きますか……あー寒い」

一花は一度伸びをして関節をほぐし、布団から立ち上がった。十二月の日本は、一花の田舎がある中国南部では経験したことが無いほど寒い。もう一度布団に潜るか三瞬ほど考えたが、棄却。欲は我慢するためにあるのだ。

真四角、四畳半の隅に布団を畳み、壁に立て掛けておいたちゃぶ台を部屋に真ん中に設置。家具はこの二つだけ。布団は部屋で凍死しかけた翌日に、近所で開かれていたフリーマーケットで運良く三千円で手に入れた。ちゃぶ台は初めからこの部屋にあったものだ。この二つの他には、服や雑具を入れている、実家から持ってきた大きなカバンだけがある。

今日は昼から夕方までマクドナルドのアルバイトが入っている。テスト勉強のため

来れなくなった高校生の代わりに出勤だ。日本はいい。仕事がいくらでもある。しかもたくさん働きたいと言えば何故か喜ばれるのだ。

あわよくば食事を恵んで貰えるかもしれないという打算でマクドナルドのアルバイトを選んだが、面接の際に、

『週にどれくらい働けますか?』

『毎日働けます』

これで一発採用だった。食事にしても、一応会社としては賄いなどは無しの方向らしいのだが、ゴミ箱に捨てられた廃棄品が勿体無かったのでこっそり食べようとしたら、先輩たちに廃棄品をゴミ箱に入る前に手に入れる方法を教えてもらった。今の一花の食事は三食全てがマクドナルドのキッチンから出た廃棄品によって賄われている。食費はゼロ。仕事もある。先輩たちはみんな優しい。本当に日本に来て良かった。四畳半風呂無しトイレ共同のこのアパートにしたってオンボロではあるが、ここは支給された部屋なので、家賃は負担しなくていいのだ。雨風は防げるし清潔な水が蛇口を捻れば出てくる。

一花はシンクで顔を洗い、歯を磨く。

バイト先で貰った紙コップに水を注いで、残しておいた廃棄飯と共にちやぶ台に運んだ。この廃棄飯は昨日のうちに食べ切る様に先輩に言われていたが、昨日が終わってま



だ六時間しか経っていないし大丈夫だろう。

パサパサになったバンドとボソボソに油が固まったパティ。常人なら不味いの宣告を迷わず下す、そんな朝食を一花は美味そうに頬張り、しかし流石に飲みこみ難いらしく水で胃に流し込む。

ギイギイギイ、と。

部屋がアパートごと揺れ始めたのは、朝食も佳境。最後の一口を口内に放り込んで咀嚼を開始した時だった。

この揺れ方は、アパートに誰かが入った時の物だ。危険度は少ない。住人の誰かが帰ってきたのだらうと一花は構わず口を動かし続けるが、揺れは止まらず、しかも足音が彼女の部屋に近づいてきている。このアパートの二階には、一花とシベリア爺さんしか住んでいないはずだ。

「……………？」

怪訝顔で廊下の方に首を巡らせたの同時。この部屋の戸が強く叩かれた。

普通なら、早朝の訪問という非常識に憤るところだ。しかし一花は口の中のものを嘔下して立ち上がり、鍵を解いて戸を数センチ開く。部屋の外にいたのは、汚れた作業着を着た金髪オールバックの男だった。手には家電量販店の紙袋がある。

「なんの御用ですか……………？」

「仕事だ」

言つて男は紙袋を戸の前に置く。それで要は済んだのか、踵を返してとつと帰つて行つた。並みの廃墟よりも耐久度が低そうな建物から早く出ていきかけたのかもしれない。

仕事。一花は舌の上で軽く呟く。とうとう来たか、そんな思いで紙袋を部屋の中に入れた。

これはもちろんアルバイトではない。仕事だ。この部屋とパスポートと日本でのビザを引き換えに、雇い主から与えられた仕事だ。

一花は一家の為に稼ぎにきた、ただの中国人労働者ではない。彼女にはバイト先の他に、もう一つ雇い主がいる。

中華人民共和国・中国人民解放军総参謀部第二部——通称情報部。

中国と言う大国の情報を一手に担う諜報組織。それが一花の雇用主だ。

楊一花、十八歳。彼女は中華人民共和国のスパイである。

スパイと一口に言つても、その活動内容は千差万別、多岐に渡る。摩訶不思議なビツクリドツキリメカを手繰つて敵地に潜入し、機密情報を盗み出す。そんな映画の主人公

の様な活躍をするスパイも、いないことはない。色香で異性を惑わし政府高官などを手籠めにするハニートラップを仕掛けるスパイは結構いる。

しかしそういうスパイは全体から見てもごく一部。パーセンテージにして1%もないだろう。そういうスパイのみを使う諜報機関も存在するが、中国におけるスパイという物はもつと地味な物なのである。有能な人間の他にも大量のスパイが留学生や旅行者、会社員を装って相手国に侵入し、後は適当に日々を過ごす。そうした日常の中で少しずつ情報を集めるのだ。一人一人が集める情報は信憑性が低く、重要な情報が得られることもほとんどない。しかしそれが十、百、千と積み重なっていくにつれて、小さな情報も大きな意味を持つのだ。数千人の人間が風潰しに情報を収集すると、入ってくる情報と入ってこない情報に偏りが生じてくる。その入ってこない情報こそが、国家が本場に秘密にしたい重要機密なのだ。機密情報の輪郭さえ分かれば、あとは1%の優秀な人材を使ってその部分だけ探ればいい。数に限りがある能力のある人間のリソースを裂かないように、有象無象を大量にばら撒く。こんな人海戦術が使えるのは人間と言う資源が異様に恵まれている中国くらいだろう。

午前九時。朝日が眩しく大気が凍える時間帯だ。

一花は紙袋を下げて歌舞伎町をぶらついていた。

今朝届けられた紙袋には『開封厳禁』とタグが貼られた小箱と、メモが一枚入ってい

るだけだった。

メモには『歌舞伎町』という場所の指定。そして『九時半、電話』という行動の指示と電話番号が書かれているだけだった。何のことか分からないが、とりあえずメモに従って歌舞伎町に赴いた訳だ。

一花もスパイの一員と言えばそうなるが、しかし情報を集めたりはしていない。スパイには1%の優秀な作業員・99%のその他大勢の作業員と言う序列があるが、その下にはスパイ活動の援助をする準作業員という者たちも存在する。一花はその準作業員の更に下つ端という身分であつた。

三ヶ月前。

一花が北京の街で見つけたコピー用紙。そこに書かれていたのは、役所の短期臨時職員募集の要項だった。

つまり求人広告。しかも公務員の。

それだけが一花の意識に深く沈み込む。道端から立ち上がると、これでダメなら——そもそも学の無い自分には絶対無理だが、とりあえずもう流れるままに身を任せようという、自暴自棄に近い感情で紙に書かれてある住所へ向かった。

役所の受け付けにコピー紙を見せ、別室に通されて大勢の他の受験者に混ざってまるでパズルのような筆記試験を受けた。一応公務員試験のはずだが、何故か風体の小汚

い、一花と似たような雰囲気の方が多かった。テストの後、数時間待たされ、そして一花を含める何人かが別室に呼ばれた。そこで身分証明をし、また数時間待った後に合格を言い渡された。

「え」

一花がまさかの合格に思考が停止する。

次いでこの短期臨時職員の募集が、ただの役所職員の求人では無く中国人民解放軍総参謀部第二部の準工作人員の選抜試験だと知らされた。

「え？」

一花はよもやの事態に全身の細胞一片に至るまで凍結させる。

これより身柄の一切は中国共産党が預かる者とし、もし規則や命令を違反したりした場合は厳しい罰則があるらしい。厳しい罰則と聞いて死罪をすぐに連想させられるのが中国国民というものだ。状況のデンジャーステージが一気に最上階にまで跳ね上がる。

こうして、一花はその場任せ運任せの自暴自棄に出た結果、晴れて鉄の掟に支配されたスパイの一員になったのであった。

だがこの辺りの事は一花の状況理解のキャパシティ限界と、栄養失調により脳に支障を来し始めたのか何を話されていたのかほとんど記憶にない。気付いた時にはパス

ポルトと就労ビザを用意されて日本行の船に乗せられ、日本に着いたと自覚した時にはトラックに詰め込まれ、そして例のアパートの前に降ろされて当面の生活費として十万円と連絡用の携帯電話を渡され、そのうち仕事をよこすと言いつ残してトラックは去って行った。

「え!？」

ボロアパートの前でしばし呆然と立ち尽くし、そして日本での生活が始まったのだつた。

以降雇い主からの連絡は一切無く、一花はこの三か月を完全にフリーターとして暮らしていた。初めの一か月で日本語を死ぬほど勉強し、資金が尽きる前に辛うじて日常会話が可能なまでには言葉習得できた。それからはマクドでバイトし、悠々自適、ある意味人生で最も豊かな時間を過ごしていたのだが。

「なんなのかなあ、これ」

一花は歌舞伎町の一番通りをぶらぶら歩きながら、紙袋の中身を覗く。いくら見ても透視能力がある訳ではないので、そこには小箱があるだけだ。

中身が気にならないことない。しかし中を暴いてみる勇氣も無い。イマイチ実感が湧かないが、これも一応スパイ活動の一環らしいのだ。わざわざ開けると書いてある物を開けた結果、変な物が入っていて、それを見てしまったが故に抹殺されるなんてい

う事態もあり得なくは無さそうだ。淑女は危うきに近寄るべからず。もう既に虎穴の最奥まで入ってしまっている気もするが、重ねて寝ている虎の鼻先を突くような真似までする必要はない。

そうして九時三十分きっちり。歌舞伎町一番街ゲート下で一花はメモにあつた番号にダイヤルする。

「あの一、もしもし」

『……………』

ワンコールで出たが、相手はだんまりだ。

妙に威圧感のある沈黙に少し気圧されながら、現状を報告する。

「歌舞伎町にいるんですが、私はどうすればいいですか？」

『……………』。今から三十分以内に新宿のバッテリーセンター横の駐車場に行け』

低い男の声。久しぶりに聞く中国語だ。

『そこに停まっている白いセダンに荷物を届けろ。車のナンバーは——』

男は口早にナンバーを伝えると、通話を切ってしまった。荷物を持ってきた男と言い、この電話の男と言い、ずいぶんと一方的だ。こちらから何か聞く必要はないという事だろうか。

まあ必要ないなら別に構わないし、こちらから聞きたいことも特に無い。変に首を

突っ込んで厄介事に巻き込まれるのも嫌だ。自分はまだまだ働いて、実家にお金を送らなければならぬのだ。自分を捨てたかもしれない親にお金を送るのに思うところが無い訳ではないが、しかし借りた路銀分は返さなければならぬ。

ともかく三十分という制限時間が設けられたのだし、早く仕事を終わらせよう。バツティングセンターの場所なら分かる。八時には歌舞伎町に入つて、一時間かけて街の主な構造は頭に叩き込んだ。ゲート下からなら歩いて十五分くらいだろうか。

早く終わらせて帰ろう。

廃棄の食糧が今朝で尽きたので、バイトに行く前に廃棄を詰め込む容器を取りに家に帰らなければならぬ。その時間を考慮すると、出来れば十時ごろには歌舞伎町から出ていたいところなのだ。

迷いなく道を進み、一花はバツティングセンターに到着する。その隣にあるコインパーキングには十数台、多様な自動車 が置かれていた。白のセダンもいくつかある。

駐車場に入り、ナンバーを確認しながらぐるりと巡る。

「あつた」

半ばほど回つた駐車場の隅に、指定されたナンバーの車があつた。

ナンバープレートからフロントガラスへ視線を上げると、中にいた男たちとバツチリ目があつた。前座席に二人。後部座席に一人。とろりと今にも溶けて零れそうな、死魚



のような嫌な目の連中だ。

気まずさから一花はぎこちない笑みを浮かべて、手の紙袋を掲げる。

運転席にいた男が小さく手招きし、それに従い運転席の窓に一花は寄って行く。

「これ、お届け物です」

半分ほど開けられた窓から紙袋を渡す。運転席の男は受け取りそのまま後部座席に紙袋を回した。後ろの男が小箱を取りだし、開封。中身は一花からは見えなかったが、彼らの望むものが入っていたらしい。領きを見せると、セダンはエンジンを唸らせて車輪を転がし、駐車場から出て行った。

一分ほどの出来事だっただろうか。

随分と呆気ない仕事の完了だった。

「……まあいつか。帰ろ帰ろ」

一花は仕事の余韻も減ったくれも無い変な空気に肩をすくめ、駐車場から出て行った。

よく分からないスパイの仕事よりも、ご飯とお金が入るアルバイトの事を考えよう。今日はどんな廃棄があるだろうか、野菜がいっぱいあるといいな、などと食卓のことで頭がいっぱいで一花は気が付かなかった。

仕事が始まるのが突然で、仕事が終わるのも行き成りで。人生が変わるのはいつも急

だ。

人の一生は不意の連続だ。

だから彼女の日本での三ヶ月。これも終わった。唐突に。

楊一花は厚木の街を逃げ回っていた。

街路を走り路地を走り、道とは呼べないような建物と建物の隙間を縫って全力疾走していた。

後ろの様子を確認すると、あのメスガキとつ捕まえてぶち殺してやる、という気概に溢れた怖い顔の男たちが十数メートルの後方で追ってきている。絶対に追い付かれるわけにはいかない。捕まったら最後、どんな結末が待っているのか考えたくも無い。

「待てやオイコリアー！」

前方からドスの効いた声が聞こえる。

回り込まれた？ 一花は体の向きを急転させて再びビルの隙間に入る。

「はひっ……ひっ……」

生まれてこの方山奥で畑仕事ばかりしてきたお陰で培った体力と健脚で、何とか大

人の男から逃げおおせているが、そろそろ心肺の限界だ。胸が苦しい。心臓が痛い。立ち止まりたいが、逃げてても逃げてても後ろの連中を引き離せない。

一体何ですか。何が起こってるんですか。

混乱と酸欠で思考が乱れ始めるが、とにかく現状の打破には現状の理解だ。

一花は歯を食いしばりながら考える。

この逃走劇が開始して約十分。事態の開始から言えば四十八分前になる。

午後十五時過ぎ。一花はバイト先の本厚木のマクドナルドにいた。

歌舞伎町から家に戻り、廃棄品回収用のタツパーを携えての出勤である。今日は高校生のヘルプで入っただけなのでもうすぐ上がりだ。

平日の午後、放課後の学生が客層としては多い時間帯。学生はジュースや単品の注文が多いので仕事が楽だ。

賑やかに友人同士でポテトを突きながら談笑に耽る学生たち。自分とそう歳の変わらない青春を満喫している学生たちを横目に、一花はレジに並ぶ客列を捌いていく。オーダーをキッチンに回し、そしてキッチンから来た商品を客に渡す。こんな単純作業を繰り返すだけでお金と食糧が手に入るなんて、マクドナルドは本当に最高だ。一生マクドの店員でいたい。

「いらっしやいまセー、店内でお召し上がりでしょうカー？」

学生グループが掃け、次の客にマニユアルのセリフで対応する。

現れたのは、変な息が漏れそうになるほど美しい女の子だった。このファーストフード店の雰囲気とは完全に乖離している、ある種の非俗世的な空気を放っている。しかし少女は妙に人間臭い壊れたゼンマイ人形みたいな緊張した動きでカクカク頷き、

「えつと……」

一世一代の賭けに出た博徒の如き真剣な面持ちで考え込み始めた。待っている間、一花はメニユーを眺める少女の顔をじっくり観察する。真つ黒さらさらな艶髪と雪のような白肌のコントラストが印象的だ。顔の造形も女としての理想形と言っている。田舎から出てきて様々な人間を見てきたが、これほどまでに美しい女の子は初めて見た。同じ女として羨望やら嫉妬すら起きる気がしない。生物としてのステージが違う。

少女はオーダーを決めたらしい。カウンターのメニユー表から一花へ視線を上げ、  
「これと、これと、これと、これ、あとこれも全部ください」

三人前の注文を寄越してきた。女性にしては高めの身長だが、一見細身のこの少女が食べ切れるのだろうか。

「えと、全部ですか？ 多いですよヨ？」

一応確認する。

「大丈夫です。よろしくお願いします」

少女は汚泥の溜まった水溜りを、魚も住めなくなるほど綺麗な泉に浄化してしまいうなくらいに良い笑顔で頷く。そんな顔で言われたらこちらも何も言えない。差し出された綺麗に折りたたまれた五千円札で会計を済ませ、キッチンにオーダーを通す。

店の奥から出てきた三人前の食事が乗ったトレイを少女に渡して一礼。少女はスキップでもし始めそうな程嬉しそうに客席へ消えて行つた。

あれくらい美人になると食べる量も違うんだなあと一人心地ながら、一花は次の客へ向き直る。

少女の後ろのいたのはザ・野獣と称するに相応しい、怒りに狂った猛牛の生首を乗せているのかと錯覚するほど恐ろしい顔をした男だった。顔の形がとかそういうレベルではない。明らかに表情筋を威嚇の形に動かしている。一花に向かつて。

「い、いらつしやいませー……?」

「嬢ちゃん、中国人か」

野獣男は怒気満載の声色で、一花の胸の名札を見下ろす。

「てつてて店内でお召し上がりでしようカー?」

とりあえずマニュアルに従うが、男がただのお客さんで無い事は分かりきっている。どう見てもハンバーガーでは無く一花個人に用がある人だ。一花には分かる。何故なら男はスマートフォンをカウンターのの上に置いて、その画面に映る『歌舞伎町の駐車場

から出てくる女の写真』と自分を見比べているからだ。写真の女には見覚えがある。さつきも更衣室の鏡で見た。いやいや目の錯覚だ。違う違う。あれは私ではない。違う違う。

一花は目を写真から放してどことなく視線を泳がせる。

「これお前だな？」

スマートフォンを突きだされた。遊泳させていた視界が反射で写真を映す。

間違いなく自分だ。

「おおおおきやおきやお客さま……？」

嫌な汗が全身から吹き出てくるのが分かる。

これは、やばい案件だ。スパイ関係のやばい案件だ。

汗が顎を伝ってぼとぼとカウンターに落ちる。

こういう場合、どうすればいいのだろう。すつとぼけるのが正解なのか、それとも認めてしまった方がいいのか。何も聞かされていない。ただ与えられた仕事をするようにとしか言われてない。問題が起こった場合は自己責任という事だろう。ただ下手な回答を選んだ場合、この場をやり過ぎしても後で雇い主の方から罰則を食らう可能性だってある。最悪殺される、たぶん。選ぶなら出来るだけ生命の危機が少ない方を選ぶべきだ。ここは知らぬ存ぜぬで行こう。

行動のベクトルを決めた一花は力強く首を振る。全力の否定だ。

「違います！」

「……………。本当か？」

「本当です、本当ですよ……へへへ」

下手な作り笑いを見せてみる。誤魔化すにはとりあえず笑顔だ。

男は一花の汗だくの顔を隅々まで観察した後、スマートフォンを仕舞った。

「そうか。それは邪魔をしたな」

「あ、いえいえいえ、お気になさらずー」

とりあえずこの場は収まりそうな雰囲気だ。

安堵で汗が少し引いて行くが、男の指がカウンターのメニュー表にあるビックマックを差した。

「これとコーヒー」

帰ってはくれないらしい。一花は緊張で凝り固まってしまった作り笑顔に涙を浮かべてオーダーを通し、商品を差し出す。

男が客席へ向かうのと同時に、一花は同僚にお手洗いにいく旨を告げてレジを離れた。店の裏側にあるスタッフ用のトイレに飛び込んで、鍵を閉め、ガハッと肺の底部に溜まっていた息を吐き出した。

「どつ、どつどつどつどつどうすれば!」

頭を抱えて自問する。当然答えは出ない。とりあえず知らんと答えた物の、写真に写っていたのはどう見ても自分だ。あの男だつて気付いているだろう。あれ以上レジの前で粘れば他の店員が出てくる可能性があつたから引いたに過ぎない。明らかに自分を狙つてカマを掛けに来ていた。向こうからすれば生簀にいる魚を相手に釣りしている気分だつたらう。

「やばい、やばいよー!」

このまま逃げるか。店には多大な迷惑が掛かる。恐らくクビになる。だがしかし、男が居座つた店内にこのまま立ち続ける度胸は無い。もう一度接触される前に逃げた方がいい。そうと決めたら即行動だ。皆様バックれる非礼をお許しください。

一花は内心で店のみんなに謝りながら、こつそり忍び足でトイレから更衣室へ移動する。音を極力立てないように制服からパーカーとジーンズに着替え、ウインドブレーカーを羽織つて更衣室から裏口へ回り込む。最後にチラリと店の方を窺うと、店の外に人相の悪い男たちが店内を覗き込んでるのが見えた。増えてる。

やはりこれは逃げが正解だ。

一花は足早に裏口へ進む。途中でマネージャーに見つかつたが、もう足を止めて謝っている余裕は無さそうだ。



「ごめんなさい！」

一花は謝罪と共に裏口の寂れた戸からビルの隙間に飛び出した。

そこにも怖い顔の男が二人待ち構えていた。

「あ」

エマーゼンシーアラームが一花の脳内でうるさく響くが、身体が反応出来ない。殺鼠剤を撒かれて巣穴から飛び出したら猫が目の前にいたネズミは、きつとこんな感じなんだろうなと一花は呑気に考えていた。

固まる一花だが、一方で男たちもいきなり一花が出てくるのは予想外だったらしい。

互いにポカンとした顔で見合っていたが、ほんの一瞬一花の方が現実に帰ってくるのが早かった。

サイドを固める男の右側を突き飛ばして、一花は必死の逃走を開始した。

そして十分後。

一花は未だに厚木を走り回っている。

現状の確認をしてみたはいいが、やはりと解決案は浮かばなかった。とにかく逃げるしかない。

もう一度振り返ると、追ってくる男は五名。揃いも揃って暴力を生業にしているのがモロ分かりな風体だ。しかもさつきはいなかった野獣男が混じっていた。こうして見

ると本当に牛みたいだ。牛に追いかけられるってこんなに怖かったのか。

これは捕まったら殺される。

恐怖で涙が止まらない。鼻水もちよつと出てる。

一花は肩で息をしながら生への渴望を主動力にして走る。

とりあえず人のいない裏路地から表に出よう。

そう判断して、路を曲がって表通りに出た。

後ろに注意を払いながらの折走、曲がった先にあつた障害物に一花は気付かなかつた。

「あうあつ！」

「アイヤア！」

「うわわっ！」

そこにいたのは二人の少女。見事なまでに正面衝突だつた。

それぞれが悲鳴を上げて道路に転げる。地面に顔から突つ込んだ一花は目を閉じて痛みと衝撃に備えるが、しかし来たのは柔らかい感触だつた。

「んえ？」

起き上がると、不細工なカエルのぬいぐるみか転がっていた。これがクツションになつてくれたらしい。自分のものでは無いから少女たちの持ち物だろう。感謝で拝み

倒したい気持ちになるが、今はそれどころではない。とにかく少女たち謝って立ち上がろうとするが、それより早くぶつかつた少女の一人が猫の様な体捌きで跳ね起きると、連れの少女の手を引いて立ち上がらせ、

「いめんさー！」

叫ぶように言つて、再び駆け出して行つた。次いで男の集団が一花を跳び越えていく。彼女らを追っているらしい。

「今の子……」

宙に流れる長い黒髪。さつき店にいた美少女だ。何故、という疑問が浮かぶが一花自身それどころではない。こっちはこっちで追われているのだ。捨て置かれたぬいぐるみを咄嗟に引つ掴んで、一花は逃走を再開した。

追手を寸でのとところで躲し、脚を回転させる。

今の衝突で頭が冷えたのか、一つの案を思いついた。警察へ行こう。今思えば何故すぐにそうしなかつたのかと自分を疑いたくなる。

ここからなら厚木警察署が一番近い。

一花は足を北に向けて走る。

表通りからまた裏路地に入り、また表に戻りを繰り返して、出来るだけ直線で走らないように気を配りながら走る。

繁华街から遠ざかり、ビルと住宅が並ぶ閑静な地区に入った。前も後ろも人氣が無い。

「痛っ……」

突如右足首から疼痛が響いた。さっきの転倒と、度重なる右往左往による負荷で痛めてしまったのだろう。一步踏み出すたびに痛みは大きくなる。

だがここで走りを止めるわけにはいかない。警察署まで直線だとあと三ブロック程なのだ。しかし後ろの連中との距離が詰まってきた。このままますます走ると追い付かれる。

一花は距離を放そうと路地を曲がろうとする。が、足首が今までにないほどの激痛を発した。全身から力が抜ける、稼働限界を告げる痛みだった。

「痛……うひっ!」

バランスを崩した身体。傾く全身を持ちなおそうとするが、上手く踏ん張れず、また転倒してしまった。速度が乗っていたためにコンクリートの地面を跳ねて転がり、電柱に背中をぶつける。肺の空気が叩き出され、痛みで呼吸が出来ない。立ち上がりたいが、身体は自然と蹲りの体勢になってしまう。

立て、一花。このままだと追い付かれるぞ、警察署まであと少しじゃないか。

そう自分を鼓舞してみるが、肉体的な限界が精神を凌駕して動けない。

痛めた足が痛い。

打った背中が痛い。

肺が痛い。

心臓が痛い。

全身が痛い。

「う、ぐ、ぐ……」

這つてでも動こうとしてみるが、四肢の筋肉が痙攣して思い通りにならない。

「やっと止まったか……すばしっこいクソガキが……」

頭上から声がする。荒い息の男の声。初めに一花と接触したあの男の物だ。

面を上げると、追いかけてきていた男たち五人全員が、一花を囲む様にして見下ろしていた。

終わった。これは逃げられない。

「は、ははは」

一花は乾いた笑いを喉から漏らしながら、最後の抵抗を試みる。

「はは……あの、私に何か御用ですか……？」

危険な香りがしたから逃げてみたが、そもそも彼らが危害を加えるつもりでいるのかどうかはまだ未確認だ。もしかしたら、対話が可能かもしれない。

そんな希望を踏み砕く、野獣男の蹴りが一花の腹に打ち込まれた。

「っ……………」

苦痛に腹を押さえる一花の胸倉を掴んで無理矢理立たせ、電柱に押し付ける。喉元を強く絞められ、息が出来ない。

そして鼻息が掛かる距離に顔を近づけ、唸るようにして言った。

「逃げといて用も糞もねえだろ……………！ 自分が何したか分かつてるから逃げたんだろ？」

あ？！

「し、知らな……………ぐっ」

顔を殴られた。口の中に鉄の味が広がる。

「佐鹿さん、こいつどうするんですか？」

周りの男の一人が声をかける。野獣男は佐鹿と言うらしい。

「殺す」

佐鹿は一言で返す。

「ひえっ!?!」

殺される殺されると勝手に怯えてはいたが、いざ相手にそう宣告されると脊髄に冷水を流し込まれるような恐怖が全身に染み込んでいく。

筋肉の痙攣ではない。目の前に現れた死への恐れで手足が震える。

「あ、あの……私本当に何も知らないんです……私が何をしたんですか……？」

「お前うちのシマでクスリ売っただろうが！ 何しらばつくれてんだ！」

「クスリ……!?!？」

身に覚えが……ある。今朝届けた小箱。あれにはクスリ——麻薬が入っていたのだ。つまり情報部が寄越した仕事というのは、麻薬の運び屋だ。そして、それを歌舞伎町の麻薬売買を取り仕切っている人たち、要するにヤクザに見つかったのだ。どうして諜報組織が麻薬密売などをしているのか？ どうして自分にそんな仕事をさせたのだろうか？ いや、そんな疑問は今では重要ではない。それよりもこの場を何とか切り抜けなければ。事情がどうあれ相手がヤクザで私はシマを荒らした密売人。このままでは本当に殺される。

「あの、あの……私はあれを運ぶように言われただけデ……中身が麻薬だなんて知らなくテ……！」

「関係ない。見せしめに死んでもらう。だいたい俺は中国人が嫌いなんだよ」

関係ないらしかった。見せしめになるらしかった。死んでもらうらしかった。しかも中国人が嫌いらしかった。

関係ないと言われたら、もうどうすることも出来ないではないか。

全身がすつと冷たくなるのを感じた。血液から温度が無くなってしまったみたいだ。

奥歯がガチガチ鳴る。小便も少し漏れた。

「おい、早く車回せ。こいつが逃げ回ったせいでやたらに目立つちまった。もうすぐサツの連中が来るぞ」

「もう呼んでいます。あと二分ほどで着くそうです」

あと二分。それを過ぎればもう生存の望みは無い。

一花は力を振り絞つてもがいた。

胸倉にある佐鹿の手を引き剥がそうにも、掴むその指は万力のような硬い。

佐鹿の身体を蹴つても、まるで大樹を相手にしているかのように微動だにしない。

声を出して助けを求めようにも、喉元を押しえられて大声が出ない。

通行人に助けを乞おうにも、この路地に入ろうとした人間は車も歩行者も近隣住人も皆、一花たちを見て引き返して行く。誰かがひどい目にあっているみたいだが、厄介事に巻き込まれたくない。そんな心理が見え見えだった。

「うっ……うっ……」

涙を流し、嗚咽を溢す。

「私は……」

死にたくない。



「こんなところで……………」

死にたくない。

「放して……………放せよお……………」

死ぬのが恐ろしい。生きていたい。

生きて、私は、幸せになりたい。

何故田舎を出ようと思ったのか。死を目の前にした今になって分かった。

両親とか弟とか関係ない。自分のためだ。

自分は幸せになりたかったのだ。

貧しい生活の中で、自分の人生はこんなものだと言っていた。

諦めなければ、生きているのが辛いのだ。

だから諦め、平気そうな顔をして朝から晩まで働いた。

でも本当は、学校に行ける近所の子達が羨ましかった。

おしやれが出来る年代の女の子たちが羨ましかった。

当然のように青春を謳歌出来る日本人が羨ましかった。

羨ましさを感じる度に、胸がきゅつと痛くなった。

だから、人生を変えられるかもしれないという期待と願望を都会と言う幻想に託した

のだ。口減らしだとかは関係ない。都会に行くと決めたのは自分だ。人生を変えた

かったから。幸せになりたかったから。だから故郷を出ようと思ったのだ。

確かに人生は変わった。劇的に変わった。

でも、私はまだ、幸せになってない！

こんな訳のわからない事に巻き込まれて死ねない。死にたくない。

——ポコリ、と。

一花はずっと手に持っていたカエルのぬいぐるみで、佐鹿の頭を叩いた。

ダメージ何て与えられるはずもない。ただ鬱陶しいだけの、抵抗にもならない悪足掻きだった。

それでも、ポコリ、ポコリとぬいぐるみで叩き続ける。

これしか出来ないから。もうこれしか出来ることが無いから。意味がないと分かっているても、諦めて大人しく殺されるのを待つことだけは絶対に嫌だった。

「往生際の悪い……！」

額に青筋を立てた佐鹿が、一花を黙らせようと拳を振り上げる。

その時。

自動車のクラクションが響いた。

それは一花の命の灯の時間切れを知らせる音——では無かった。

「早かったな——ん？」

佐鹿は近づいてくる自動車を見て、そして怪訝そうな顔になる。この車は彼らが呼んだものでは無いらしい。

自動車に疎い一花に、その車名までは分からない。

この車の名はホンダ・ヴェゼル。

運転席にいるのは黒いスーツを着た、右こめかみに傷のある青年だった。

この道を通りたいのに男が大勢寄り集まって道を塞いでる。それが邪魔で仕方がないといった表情で、再びクラクションを鳴らした。

「急いでるんだ。どけ」

窓から顔を出して、青年は迷惑そうに言う。

「別の道を通れ！」

一花にぬいぐるみで殴られていた佐鹿は、非常に機嫌が悪い。

いつもなら厄介事を避けるために道を開けるところだが、今日はクラクションを鳴らし続けるヴェゼルの怒鳴り声を上げた。

人生はいつも唐突だ。それを一花はたった一日で学んだが、これは誰にでも当て嵌まることである。

いつもと違うことをする。それは十分に唐突を呼び寄せる引き金になりうる。

ヴェゼルに乗っていた青年は、佐鹿の物言いが琴線に触れたらしい。眉間に皺を寄せ

て車から降りてきた。どう見ても堅気ではない連中相手にどういうつもりだろうか。

一花は青年の正気を疑いたくなくなった。ほんの数秒前まで誰か助けてくれと思っていたが、いざその誰かが現れると、どう考えても自殺行為をしようとしている青年に逃げてくれと願ってしまう。

佐鹿たちは見せしめと言う理由で簡単に殺人をしようとする連中だ。自分と一緒に惨い目にあつてしまふかもしれない。関係ない人間が巻き込まれるのは、やっぱり嫌だ。

「逃げテ……!」

青年にそう言うのと同時に、佐鹿の拳が一花の下腹にめり込んだ。胸倉を放され、地面に崩れ落ちた一花は刺すような痛みで悶えて動けない。

「お前は黙ってる……それで兄さん、車から降りて何の用だ。早くどつか行け、ぶち殺」  
佐鹿が言い終わる前に、青年の前蹴りがその顎を貫いた。一撃で意識を失った佐鹿は白目をむいて地面に倒れる。

兄貴分が顔を蹴られて伸びてしまい、ヤクザたちは一瞬黙りこくるが、すぐに頭に血を上らせる。雄叫びをあげながら青年に襲いかかった。

心配そうに、申し訳なきように、蹲りながら彼らの様子を見ていた一花。だが青年の身を案じる気持ちはすぐに無くなってしまった。

青年が強すぎたのだ。

ヤクザに強烈な拳を食らわせ蹴りを浴びせ、掴まれたらぶん投げる。地に伏す男たちの頭や腹を容赦なく踏みつける。倒れた相手を無理矢理義引き起こしたかと思えば顔面を思い切り壁に叩き付ける。全員が半殺し一步手前の状態にまで痛めつけられ、一分もしないうちに道路路端に蹴り転がされていた。

「大丈夫か？」

事が済んで、青年は一花に歩み寄ってきた。

何もかもが唐突すぎる。一花はここ数か月で何度目かになる現状把握キャパシティの限界点に到達して、よく分からないままカクカク頷く。

「ただだ大丈夫です」

「そうか。あまり大丈夫そうには見えないが……とりあえず涙と涙を拭け」

つい中国語で返答してしまうが、青年は一花に合わせて同じ言語で返してきた。懐かしい。今朝電話で聞いたはずなのに、そう感じる言葉だった。

青年がスーツのポケットから上等そうなハンカチを出した。一花は受け取ったハンカチで顔をごしごし擦る。

「立てるか？」

「はい……痛っ」

「つと、足首痛めてるな。こっちに来い」

青年は一花に肩を貸し、自分の車のボンネットまで運ぶ。そこに一花を腰掛けさせ、車内から軟膏と錠剤、未開封のミネラルウォーターのペットボトルを持ってきた。

「湿布と鎮痛剤だ。悪いがこっちも急いでてな。病院まで運んでやれないが、それで少しはマシになるだろう」

「あ、ありがとうございます……」

一花はボンネットから離れて、車に戻った青年に頭を下げる。

淡い微笑で手を掲げ、青年は車を走らせ去って行った。フルスロットル、アクセルを限界まで踏み込んでいるかのような凄まじい勢いで去り方だった。

タイヤの焦げる臭いを嗅ぎながら、手の中の湿布と飲み薬と水と、ハンカチを見下ろす。

ハンカチ返し忘れた。追いかけてようにも、もうどこに行ったか分からない。

あとに残された、轍と気絶するヤクザと自分。

「……とりあえず逃げよう！」

一花は片足で移動を再開する。鎮痛剤を水で流し込み、そしてもう一口水を喉に流し込む。

汗と涙とその他諸々で水分を失った体には、たまらなく美味しかった。

陽もすつかり落ちた頃。

一花は何とかボロアパートに帰ってこれた。

あの後。ヤクザが呼んだ車と入れ違いに近い形で現場を去った一花は、なんとか厚木警察署にたどり着き、そこでトイレを借りるフリをしてしばらく避難した。そして署内が騒がしくなったのを確認してから、周囲に細心の注意を払いながら帰宅した。これほど後ろを警戒しながら移動したことなど無かった。本来スパイ活動をするなら、これくらいの心構えでないといけないのだろう。

一花は湿布と鎮痛剤のお陰で、なんとか歩けるようになった。階段をゆっくり登って、自分の部屋に。

「……………ん？」

おかしい。無人のはずの自室から物音がする。

ギイギイとアパートの壁が軋んでいる。誰かが、自分の部屋にいる。

一花の警戒レベルがマックスになり、そつと戸に耳を当てる。

まさか、この部屋にまでヤクザの連中が現れたのだろうか。可能性としては当然あり得ることだ。もし連中ならば、早急にここから立ち去らなければならない。

だがしかし、この部屋には全財産がある。出来れば回収したい。

一花は耳に全神経を集中させて室内の音を拾う。かすかに声が聞こえる。一人分の、男の声。

これは……中国語だ。

一花は部屋の戸を開ける。

貧相な格好をした中年の男が一花の布団に寝つ転がっていた。

「な、何だ？」

「何だはこつちのセリフです」

二人の間に交わされた言葉は中国語。恐らく彼は情報部絡みの人間だろう。人の部屋に勝手に入って、人の布団で勝手に寝て、しかも人の荷物が入ったカバンを漁った様子まである。下着がご丁寧にちゃぶ台の上に並べられていた。

「誰ですかあなた」

「誰って……この部屋の住人だよ……。中国語話せるって事は、工作人員の人？」

「え……は？ ちよつと待つてくださいいね」

この部屋の住人は間違いなく自分である。今朝までこの部屋で寝起きしていたし、自分の荷物もちゃんとある。なのに何故知らないおじさんが部屋の居住権を主張しているのだ。



工員という単語が出てくるという事は、このおじさんも情報部と無関係の人間ではあるまい。つまり本国の差し金か。説明を乞いたい。でなければ自分は住む場所を失うか、あるいはこのおじさんと同居しなければならなくなる。人の下着を並べて鑑賞する人とは出来れば同じ屋根の下で過ごしたくはない。

一花は懐から携帯電話を取り出す。ここにはマクドナルドの番号ともう一つ。今朝の仕事で連絡を入れた番号が入っている。

「今まで情報部への連絡手段は無かった。しかし今はこれがある。繋がるか分からないが、これ以外に取れる手は無い。」

一花はその番号にリダイヤルを掛けた。

着信拒否されていた。

「……………」

電話を耳から放して、しばし沈黙。

どうしよう。ていうかどうしようもないのではないか。

先ほどとは違いあつさり諦めムードに入った一花は、部屋の中から彼女を見つめるおじさんと目がある。

「あなた、中国から来た準工員ですか？」

「え、うん。そうだけど……………」

「なら、携帯電話、渡されてないですか？」

「携帯？　渡されてるけど」

「貸してください」

一花は土足のまま部屋に入り、中年男が持っていた携帯電話をぶん取った。

このおじさんの携帯電話なら、あるいは……。

新品の携帯で番号を入力する。

今度はコールが鳴った。

朝とは違ってなかなか相手は出てこない。そして八コール目で、ブツリと異音。受話器を取った音だ。

『誰だ？』

電波の向こうから聞こえたのは、今朝の男の声だった。

「楊一花です」

『なぜこの番号を知っている』

「あなた方が私に教えてくれたんでしょう」

『何を言ってる……ちよつと待て。楊一花と言ったか』

「言いました」

男は言葉を中断し、受話器から息を吹き付けるような音がする。これは笑っているの

だろうか。

『そうか、お前生きて帰れたのか。なるほどな』

「生きて帰れたって……どういふことですか!？」

『ふ、まあいい。……面白いから特別に教えてやる。余興だ。お前は、そうだな……言つてしまえば捨て駒だ』

「……………はい?」

『準工作員にも色々な使い道があつて、用途によつてリクルートする人間は変わる。お前は、生贄が必要な時に使う用の準工作員だ。死刑の身代わりとか大怪我を負つた工作員の為の臓器移植とか見せしめのための人身御供とか、そういう人命が必要な時に消費される用の、ようするに家畜だ。お前らは十万そこらの現金と就労ビザと日本への渡航費だけで手に入る、安く消費される命なんだよ。理解したか?』

「……………」

『お前は今日“消費”された。楊一花、確か日本のヤクザのシマにヤクを持つて行つたな。あそこは中華マフィアが手を出さないと取り決められた不可侵地帯だ。そこにヤクを持つて行つた中国人のお前は、中華マフィアの売人だと思われるだろう。そう思われるように情報を流した。これで最近癒着し始めていた日本のヤクザと中華マフィアはまた仲違いするだろう。これは我々にとって大きな利益となる。君のお陰だ、あり

がとう楊一花。お前はこのゴロツキ同士のどうしようもない戦争の引き金となるべく、出来るだけ早くぶち殺されてくれ。大丈夫だ。どんな惨たらしい拷問死でも輪姦された挙句の窒息死でも、田舎の親父さんたちには交通事故で死んだと伝えてやる。まあ精々頑張つて余生を楽しめ。じゃあな』

言うだけ言つて、男は通話を切つてしまった。

「……………」

かけ直す気力もない。もはや怒りも湧かない。

一花は携帯をおじさんに投げて返し、机の上の下着を引つ掴んでカバンに押し込んだ。

この部屋は、連中の言うところの家畜小屋なのだろう。代々、命を消費するためだけに飼われた人々がここに住んで、そして忽然といなくなる。家畜が屠殺されると、また新しい家畜が連れて来られるのだ。部屋に初めからあつたちやぶ台は、そんな家畜のうちの一人が遺したものだつたのだろう。

一花はシンクの下にある収納棚を開く。空っぽの棚の上面には封筒が隠すように張り付けられており、そこには一花が今まで貯めて全資産が収められていた。

その封筒を棚から千切り取り、懐深くに大事に仕舞つてカバンを背負う。

「ふっ」

これで準備完了。

家畜小屋からも、ヤクザからも、情報部からも、逃げ出してやる。

逃げて逃げて逃げて、絶対に生き残ってやる。

一花はこれまで過ごしたアパートの一室から一歩、痛めた方の足で踏み出す。

そして振り返り、唾然としている中年男に言った。

「おじさんも逃げた方がいいよ？」

## 第12話

東京都目黒区にある国立医療センターの駐車場、蔵馬辰巳は愛車のヴェゼルの中から眼前を並ぶ病棟を眺めていた。白い外壁の高層建造物たちは、なるほど白い塔の群れに見えなくもない。

蔵馬は遠い昔に読んだ小説のタイトルを思い出した。いつで読んだだろうか。確かミドルスクールのころに、日本語教育の一環として義父さんが自分に買い与えた日本の小説の中にあつた気がする。病院から目を西へ回すと、駒沢オリンピック公園のアリーナが視界に入った。橿円状の競技場から思い出すのは、孤児の少女が繰り広げた時間を巡る物語だ。これは家の本棚にあつたものを読んだ。英語版かと思えば原典のドイツ語で、読むのに苦労したものだ。

記憶は一つ手繰り寄せると、連鎖的に様々な思い出が記憶の海から出てくるもので、過去に読んだ小説の記憶を呼び水にどんどん溢れ出てくる。

良い記憶も、嫌な記憶も。

思い出したくない記憶も。

一服しようとして煙草を取り出す。皺くちやになったセブンスターのソフトケースから

紙巻きを唇に加え、シガーライターで火を点した。

紫煙を吸い込み、煙で肺を満たす。

溜まった白煙を吐き出したのと同時に、車の窓がコツコツと軽く叩かれた。そして車内を覗き込む白衣姿の大柄な影。義体外科医の正木だ。

「待たせたか？」

「いや、今来た」

蔵馬はエンジンを切って車から降りる。曇天の所為か、少し肌寒い。春も半ばを過ぎているが、夏まではまだ少し遠そうだ。

蔵馬は正木と並んで駐車場を横切り、医療センターの玄関へ向かう。

「男同士で今のやり取りはやりたくなかったな」

「何の話だ」

「日本では今の『待った?』『今来たところ』みたいな会話を逢引き構文と言うんだ。アベックがデートする時に使う、挨拶みたいなもんだな」

「髭面の熊みたいなおッサンとデート? 冗談じゃない」

「俺だってお前みたいなおッサンとデートなんかしたくないね。それと院内は禁煙だ。煙草消せ」

「はいはい……」

蔵馬は啞えていた煙草を手の平で握り潰してスーツのポケットに入れた。

二人は医療センターの玄関を通り抜ける。玄関ホールは外来の患者や入院患者の家族が雑多と入り混じり、しかし皆が極力声を殺しているため、人の声は至るところから聞こえるのに静かな印象を受ける。

「(ト)で待つてろ」

言つて正木は受付へ向かう。

蔵馬は待てと言われたその場で、周囲を見回した。

人間、柱と窓と照明、ホールから繋がる通路、スプリンクラーと監視カメラ、段差のある場所。その他の設置物。それらの数と位置を脳に刻み込んでいく。

これらの確認は職業病に近い、蔵馬の癖だった。この確認が役に立つ事は千回に一回あるか無いだが、しかしこれを怠ればその一回であつけなく死ぬ。特に弾丸や爆弾と隣り合わせの仕事は、警戒を欠いた人間から死んでいくものだと、蔵馬は経験から知っていた。

正木は受付と一言二言交わして来客用の名札を受け取り、それを胸に着けながら蔵馬の元へ戻つてきた。

「行(こ)うか」

蔵馬は正木を追つて玄関ホールから病院の奥、患者が往来する入院病棟では無く、関



係者以外立ち入り禁止の区画を進んでいく。時折すれ違う病院関係者らは不審そうに蔵馬らを目で追うが、正木の胸の名札を見て声までは掛けてこなかった。

「……しかし」

二人はエレベーターに入り、そこで正木が口を開く。

「お前自暴自棄になってないだろうな？」

「どういう意味だ？」

「今から会いに行く子だが、センターでも話した通り、義体の適応値がかなり低い。基準スレスレだ。そんな子をわざわざ選ぶなんて——」

「あえて性能の低い義体を選んで、任務で心中しようとしてるんじゃないかって？」

「そこまでは言わんが……」

しかし似たことは考えていたのだろう。蔵馬は正木の杞憂を小さく鼻で笑った。

無理も無い。自分は所詮得体の知れない外様の若造だ。一体何をしでかすか、測りかねているのだ。

エレベーターが止まる。扉が開くと、常俗とは種を違えた、身体の内側を舐めるような生々しさのある空気が流れ込んできた。ここは集中治療室のあるフロアだ。

廊下側の壁がガラス張りになった病室が連なり、中の様子が確認できる。いくつかの病室には重体の患者がベッドに寝かされ、医師や看護婦から治療を受けていた。

蔵馬たちはそれを眺めながら廊下を歩み、そしてある一室の前で足を止めた。

「余計な心配はしなくていい」

蔵馬はガラスの向こう側、ベッドに横たわっている患者を見下ろす。

少女らしい。そう知らされているが、容貌からそれを窺い知ることは出来ない。全身に包帯が限なく分厚く巻かれているからだ。チューブを至る所に通されて、寝台の脇の心電図モニターが小さな心拍を映している。

麻酔で眠らされており身動き一つせず、心電図が無ければ生死の区別もつかなかった。

生きているのは無く、生かされている。そう言わざるを得ない状態だ。

弱々しい。生と言うにはあまりに弱々しい。彼岸との距離が此岸よりもずっと近い。救えないだろう、この国の現代医療では。

徐々に全身の細胞が限界を迎え、身体の機能は停止を始め、そして遠くないうちに死に至るだろう。

救えないだろう、この国の現代医療では。

「この子を選んだ理由はある。ま、大した理由じゃないが」

「ならいい。容姿のリクエストがあれば聞くぞ。細かい要望があるなら紙に書いて渡してくれ」

「任せる」

「了解——それで、名前はもう決めているのか？」

「名前？ ……名前か、そうだな」

蔵馬は一瞬の思案。そして決めた。

これから死に、そして生まれ変わる少女の名前を。

「——モモだ」

\* \* \*

「モモ——おい、モモ！」

肩を揺さぶられ、モモは二度目の失神から目を覚ました。

ここは……センターの道場。

いまは……午前十一時やや過ぎ。

私は……モモです、はい。

モモはじんわり痛む頭で状況を確認する。ポリマー製の柔道畳の上で大の字になっている彼女の視界にあるのは、白いパネル天井と涼しい顔で見下ろしてくる道着姿の蔵馬だ。

「お前本当に弱いな。イタリヤのと違って、担当官に対するセーフティは掛からないはずだが」

「クラマさんが強すぎるんですよ……痛たた……」

頭を擦りながら体を起こすモモのシルエツトはやけに厳つい。頭部にはフルフェイスのヘッドガード、胴体には分厚いボディプロテクター、腕も脚もサポーターですつぽりと覆っている。軽自動車くらいなら撥ね飛ばされても無事で済みそうなほどの重装甲だ。

昨日始まった近接格闘術の稽古だが、二回目の今日は厳しさが十割増しだった。

一通り突いたり蹴ったりを繰り返すのは前回と同じだが、その後件の防具で全身を固められてから三十分近く、延々組手を行なっている。

昨日は途中で斎藤美希を探しに厚木へ向かった為に稽古が中断されたが、これが蔵馬が用意していた本来の稽古内容だったのだろう。

モモは腐っても戦鬪用に作られたサイボーグである。初めは生身の人間であり担当官でもある蔵馬に拳を振りかざすのに躊躇したが、余計な心配だった。

一発も当たらない。突きも蹴りも体当たりも、躲され往なされ逸らされ潰される。躲されたと思えば強烈な拳が頭蓋を打ち、往なされた次の瞬間には鋭い蹴りが腹に刺さり、逸らされたその勢いを利用して投げ飛ばされ、潰されたのと同時に関節を極められ床に組み敷かれた。

強いなんてものじゃない。鬼だ。鬼の如き強さだ。もし防具を着けていなければ、何回修理に出されたか分からない。蔵馬ならきつとゴリラ相手にもいい相手するだろう。

「この……ゴリラア……！」

「ふざけてんのかお前」

今度は合気の要領で投げ飛ばされ、またもや床に固められたモモの後頭部を叩いて、蔵馬は道着の袖を直しながら立ち上がる。

対してモモは起き上がってこない。もうバテたのだろうか。

「おい、モモ。なにサボろうとしてんだ、起きろ」

うつ伏せのまま動かないモモの、体型からすれば若干大きめの尻を蹴る。すると勢いよく上体を飛び上がらせて、ワナワナ震えて顔を赤くしながら睨みつけてきた。

「けつ蹴りましたね!! お尻蹴りましたね!! そこは触れてはならないのに! 許せな

いー」

「痔か？」

「違います！ ただそのちよつと……とにかくダメなんです！」

モモは頬を染めながら臀部を隠すような仕草をする。  
なるほど。

「早く起きないとそのデカイ尻を倍に腫れ上がるまで蹴り飛ばすぞ」

「くうう……！ よくも乙女のデリカシーなゾーンを……！」

尻を押さえながら立ち上がったモモは、刹那、身を落として体を屈め、タツクルを放ってきた。これまでとは比べ物にならないほど鋭い。

「ほう」

初めからこれくらいの切れを見せてくれたら良いものを。

蔵馬はモモのタツクルに内心で感心しながら、素早いステップで後退し、モモの腕を寸前で避けた。モモは床に顔面から突っ込み、また動かなくなる。何度か尻を蹴ってみるが、ピクピク肩を震わせるだけで起き上がる気配がない。

「……まだやれるか？」

「……………」

返事がない。

これくらいが潮時か。もう少し動かすつもりだったが、無理はよくない。訓練のし過ぎで本番に身体を動かせなくなつては本末転倒だ。実際あと数時間もすれば新しい任

務を下されるだろうと蔵馬は踏んでいる。

蔵馬は昨日拾ってきた少女の顔を思い出す。今頃は諜報部で尋問の如き事情聴取を受けているか、あるいは山の様な誓約書の束にサインをしているだろう。少し顔を出してみるか。

「今日はこれで終いだ。防具は倉庫に仕舞っておけよ。着替えたら一応正木のところで検査を受けておけ。終わったら諜報部のデスクで待つてろ。俺は斎藤美希の様子を見てくる」

言つて、蔵馬は道場を出ようとする。その背後。

「……………ふふふふ」

不気味な笑みを溢しながら、モモはゾンビのようにゆらりと起き上がった。

そして何を思ったか、蔵馬に向かって疲労など微塵も感じさせない俊敏な動きで走り出す。一気に距離を詰め、疾駆の勢いを保ったまま跳躍する。その顔を爛々と輝き、してやったりと奇襲の成功を確信した笑みを浮かべている。

「食らえ！ 夜な夜なアザミとビデオを見て研究した20文人間ロケットキツ」

言い終わる前に、振り返った蔵馬はモモの足を掴んで腋に固定した。そして地獄の鬼も尻尾を下げて退散しかねないほど凶悪な笑みを浮かべ、蹴りの威力を殺さずに自身を軸にして、ぐわんぐわんと独楽のように回転をし始める。

伝説のプロレスラージャイアント馬場をも投げ飛ばしたプロレスを代表する大技。ジャイアントスイングだ。

「奇襲はとても効果的な戦法だな、うん」

「ああああああ！ 違うんですくらマさん！ ああああああ！」

「だが奇襲に失敗するとより酷い目にあう。……覚えておけ！」

回転で凄まじい遠心力を蓄積させたモモの身体を、蔵馬は道場の真ん中へ放り投げた。モモは弧を描いて宙を飛び、錘揉みしながら畳をバウンドバウンドバウンド。

そして道場の壁にぶつかると、

「ぐえ」

その美しい白い喉から漏れたとは思えない潰れた声で一鳴きし、動かなくなった。

完全に伸びてしまっているモモに、蔵馬は投げの姿勢のまま言う。

「遊んでないでとつとと検査に行け！」



起き上がったモモがベソをかきながら防具を片しているのと時を同じくして、斎藤美希は蔵馬の予想通り、国立児童社会復帰センターの諜報部で尋問に近い事情聴取で家出



の経緯を白状させられた後に、山の様な誓約書の束にゲツソリとした顔でサインをしていた。

国立児童社会復帰センター本部棟。地上五階地下三階の建物の三階。課報部のデスクが入るこの階にある第二会議室で、斎藤美希は積まれた書類と向かい合っていた。

口の字に組まれた長机の、入口からみて部屋の奥側の辺を陣取っている。

走るペンから伸びる文字は疲れと飽きからもがき苦しむ糸ミミズのように乱雑になり、紙を見る目の下にはクマが浮かんでいる。

「……終わった……」

最後の一枚に署名し終えてペンを長机に放り投げ、美希はパイプ椅子の背もたれに全身を預ける勢いで倒れ込んだ。

疲れた。ただ名前を書いていただけだが、単純作業を繰り返すという事が、それだけで精神を摩耗させる。初めは書面の内容を逐一確認していたが、どこもこれも『ここで見たこと聞いたことは絶対に口にははいけません』というような内容だったので、途中からは淡々と筆を滑らす人力印刷機と化していた。

各所に提出し保管するために、何枚でも似たような書類に似たようなことを記入させる。日本の役所の悪癖をその身に受けて、美希はここが確かに日本政府の機関の一つなのだ実感していた。

魂ごと吐き出さん勢いで重い溜息を吐く美希に笑いかけるのは、漆黒のスーツ姿の坂崎だ。

「お疲れ様です。お手数お掛けして申し訳ありません、斎藤さん。うちは少し特殊な環境下にあるので、どうしてもこういういった事が必要になるんです」

「そうでしょうな……」

美希は拳銃を掲げるモモの姿を思い出す。ピストルを平然と人に向ける人間がいる組織があるなんて、そんな話が世に出れば大炎上間違いなしだ。

「少し休憩しましょうか。コーヒーでいいですか？」

「ありがとうございます……」

美希は紙の束を抱えて部屋を出ていく坂崎を見送る。

先ほど取調室みたいな殺風景な部屋で、胡散臭さが半端ではない男たちの事情聴取から助け出してくれたのが坂崎だった。連れ出された先はサイン地獄だったが。

ここに来てから監視として剣呑な雰囲気の間人ばかりに囲まれていたが、しかし坂崎は周りの空気が全然違う。朗らかだ。彼女を見ていると少し気分が楽になる。国立児童社会復帰センターという社会福祉を謳った名称に唯一合致している人間かもしれない。

戻ってきた坂崎は熱いブラックコーヒーを美希に手渡し、

「昨日から大変だったでしょう」

ねぎらいの言葉を掛ける。それだけで美希は少し泣きそうになる。

「あの……質問いいですか？」

「ええ、答えられることは限られています」

「今あたし、どうゆう状況にいるんですか？」

「調査中です」

「それじゃあ、これからあたしはどうなるんですか？」

「検討中です」

「……………」

「すみません……本当にまだ何も分かっていないんです。貴女の処遇に関しても、まだ上の方で意見が分かれていますみたいで」

「もしかして口封じのために処刑とか……」

口に出してからそのことを美希は後悔する。これで肯定されたらどうするのだ。間違ひなくチビる。

恐る恐る坂崎の方を見るが、彼女は見る者を安心させる慈愛の女神の様な微笑みをたたえながら首を横に振る。

「それはありませんから安心してください。そうですねー、いつ、どうやって貴女を家に

送るか。そういう話し合いがされているとお考えください」

「……分かりました。じゃあ最後に、あの、モモは今どうしてますか？」

昨日、厚木から奥多摩のセンターに連れて来られてから、美希はずっと一人きりだった。

蔵馬の車から降りた途端に携帯を取り上げられてモモらと引き離され、それから今朝までベッドと机しかない質素な部屋に押し込まれていた。さすがに部屋の戸に施錠はされなかったが、お手洗いに行こうと部屋を出ると、外で待ち構えていたマネキンよりも無表情な女が、トイレの個室前までずっと後ろを追ってくるのだ。しかも話し掛けても無視される。

この女が怖くて、美希は結局一度トイレに行つたつきり部屋から出られなかった。

そうして独りでいると、混乱していた脳が冷静になり、本物の拳銃を持つていたモモに対する恐怖と、自分が今『そういう人たち』の本拠地にいるのだという緊張が湧いて止まらず、昨晩は一睡も出来なかった。

しかし見知らぬ場所で孤独な一夜を過ごす、恐怖よりも寂しさと不安の方が強くなる。一度は怖いと感じたモモに、今は会いたくて堪らない。

「モモちゃんですか？」

「はい、その……出来れば会いたいなあ……って」

美希の言葉に、坂崎は指を顎に当てる仕草を一瞬見せてからニパツと笑い、  
「すぐに会えますよ」

## 第13話

深夜を数刻回っていた。

セメントの四方を持つ事務所の体をした部屋がある。

関西を支配の核とする、広域指定暴力団・扇組。全国に系列組織を張り巡らせ、総組員数は二万人を超す日本最大のヤクザ組織だ。この部屋は、その扇組の三次団体である大柳組が事務所として利用しているテナントビルの一室である。

彼ら大柳組の収入源は密入国者や不法滞在者に仕事を斡旋する、労働者派遣だ。金も無い、居場所も無い、この国に居ること自体が違法で、しかし国に帰っても未来など無い。そんなどん詰まりに陥った人間を回収して監禁し、酒と煙草を辛うじて買える程度、ノミの糞ほどの賃金で死ぬまで働かせるのだ。彼らが従事する労働は危険で不衛生で苛酷だ。どれだけ仕事を斡旋しても、仕事がなくなることは無い。仕事が完遂する前に次から次へと死んでしまうからだ。

当然そんなビジネスで多大な利益を生み出すことは難しいが、しかしこの組の金回りは悪くない。最近扇組の中でも台頭の兆しを見せ始めているくらいである。

部屋の中、蛍光灯の生白い照明の下にいるのは、十数人の男たちだ。彼らは一人を除

いて、冷たいタイルの床の上に正座して並ばされており、叱られている子供の様に顔を伏せている。

実際、彼らは『叱られて』いた。だが子供が大人に受ける叱咤、いや、世間一般に思われている叱咤と、彼らが今被っているそれは、先に待ち受ける物が全く異なる。

彼ら自身が誰よりも、その事を理解しているのだろう。

行く末の不安から脂汗を浮かべる者がいる。緊張で息を荒げている者がいる。恐怖に四肢を震わせる者がいる。

「……………つまり」

床に座する男たちの正面。唯一床では無くビジネスチェアに腰掛けているのは、大柳組の組長である大柳昭二だ。

大柳は怒気で波立った声を吐いた。その手の中にはラムネ瓶ほどの円錐物——12. 7×108mm弾が二つ、カチカチと転がされている。

「斎藤美希を拉致できなかった。組の人間ほぼ総出で行って、しかも一回見つけておいて、なのに逃がした、と」

「……………」

「八木い…………」

名を呼ばれて肩を跳ねさせたのは、右腕を三角巾で吊った、金髪の軽薄そうな男。厚

木の街でモモたちを追いかけ回したヤクザの一人だ。

「……俺が納得できるように説明しろ」

「えっ……と……っすね……その……」

八木は自分が厚木で見た物を説明しようとして、しかし口ごもる。

どう説明すればいいのだ。

八木は貧しい語彙を総動員させて、なんとか説得力を持ちうる説明をしようとする。

アレを……どう説明すれば、どう言えばいいのだ。何と言つても信じては貰えないだろう。自分自身が、いまだに信じられていないのだから。これはもはやボキャブラリーの問題ではなかった。

「八木！ 説明しろっつってんだ！」

「は、はい……」

怒鳴られ、彼はもう、見たままを語ることに決めた。

「ゲーセンで斎藤美希を見つけてまして、それで声を掛けたら、隣にいたガキが斎藤美希を連れていきなり走り……逃げ出して……やっと思つたと思つたら、その、ガキに殴られて、それで、そのガキがチャカを抜いて……」

「……その話を俺は最後まで聞かないと駄目か」

「本当なんすよ！ 本当にチャカ出してきて、そしたらガキの仲間らしい野郎の車が



突っ込んできて！ それで！」

「……もういい、黙れ。平塚、大戸、お前らは何があつた？」

大柳は額を抱えて八木の言葉を遮り、正座する一群の中でも特に体の大きな二人に目を向ける。蔵馬に壁に顔を削がれた男——平塚も、何と説明すればいいのか、言葉に窮する様子で、ポツポツと語り出す。

「俺らは斎藤美希を探していたら、その、サツに不審者として捕まりまして……すぐに解放されたんですが、変な奴に声を掛けられて……そう、そいつも斎藤美希を探している風でした」

大事なピースが抜けている様な、曖昧で確信に欠ける二人の話に、大柳は怒りを通り越して、むしろ冷静になってきた。

無論冷静になったからと言って、状況が理解できた訳では無い。意味が分からないという事が分かっただけである。ともかく目の前に並ぶ部下たちは、与えた仕事を失敗した。斎藤美希を取り逃がし、その行方も分からない。事が大阪で起こつたならコネを使つて手の回しようもあるが、東京の方だとそうもいかない。東京にも扇組の系列組織があるにはあるが、同じ組織内であつても東と西は伝統的に不仲なのである。

ともかく成功には飴を、失敗には鞭を。それがこの世界の掟だ。

怒鳴りつける為に、大柳は肺深くまで息を吸い込む。が、怒声として吐き出される前

に、事務所の戸を叩く音。そして返事を待たずに戸が開かれ、部屋にスーツ姿の男が静かに入ってきた。

「——反省会など開く暇があるのか？」

「李明……！」

溜まった呼吸は、緊張と驚嘆の声に変わった。

細長い影に年齢不詳のキツネ顔。中華人民共和国情報部の工作員だ。もちろんその立場を知る者は、この場には大柳しかない。密入国者のリストを売りに来る奴隷商、というのが他の大柳組組員たちの彼に対する認識である。

ヤクザたちは振り返り、挨拶も無しに現れた異国人に敵愾心の籠った目を向けた。

この大柳組は、外国人の不法就労の斡旋を飯の種にしている組織だ。彼らにとって外国人は豚や家禽などの経済動物と同義であり、自分たちよりも格下の存在という認識があった。外国人である李明が、挨拶も無しの不敬な態度を取っている。こんな状況であつても、そのことが序列と矜持の世界に生きる彼らの自尊心を引っ掻いた。

李明は床に座るヤクザたちを見下ろして、

「お使いも禄に果たせんのか」

「……聞いていたのか」

「私は耳が良いんだ。物凄くな」

言いながら、李明は立ち位置を少し横にずらし、目を床のヤクザから出入り口の戸に滑らせた。その意味を理解し、大柳は部下たちに部屋から出ていくように命じる。

組員たちは李明にギラついた眼光を飛ばしながらも、やれ幸いと、そそくさ事務所を出て行った。

二人だけになった事務所。

先に李明が口を開く。

「どういうことだ?」

「……聞いていたんだろう。取り逃がした」

「聞いていたさ。お前が囲っている屑どもの、間抜けな報告もな。それを踏まえて訊いている。どういうことだ?」

「……………」

「貴様は自分の立場を分かっているのか? 貴様は失敗が許される立場か? どうなんだ?」

「……すまん」

「すまん?」

「……っ! ……済みません、李さん」

慌てて言葉を直す大柳。李明は芝居がかった溜息を吐いた。

「やれやれだ。小汚いチンピラだったお前に人を売ってやった。それでは足りないと言  
うから、武器を売ってやり、ヤクも売ってやった。親組織に目を着けられない裏の販売  
ルートも手配してやった。そして今度は言葉遣いまで教えてやれねばならんのか……  
身の程を弁えろ」

「……済みませんでした……もう一度チャンスをご覧ください……お願いします」  
「……もう貴様に期待はしていないが、しかしチャンスだけはやろう」

李明は椅子に腰かけたままの大柳に一步近づき二歩近づき、互いの息遣いが聞こえる  
ほどに距離を縮める。

「明後日までに斎藤の孫娘を誘拐しろ。最悪——殺せ。出来るだけ派手にな」

キン、と。小さな金属響。

12・7×108mm弾が李明の指に弾かれた。

宙を舞う対物ライフル弾を大柳は無意識に目で追う。数瞬の間の後、弾は床に落下し  
コツコツと小音を鳴らして部屋の隅へと転がって行った。

それを見届け、大柳はようやく手にあつた弾丸が一つ失っている事に気付く。

いつ盗られたのか。彼には李明の挙動を一分も察知出来なかつた。

手の中の弾丸に意識を逸らしたその間に、李明は既に事務所から出ようとしていた。

閉される戸の隙間から、李明は囁くようにして言う。

「失敗したら貴様らを殺す」

極道者と中国人の会合から時間になると八時間十二分後、距離にして約四〇〇km。正午を目前に控えた奥多摩。国立児童社会復帰センター本部棟三階に、蔵馬辰巳は腕にジャケットを掛けたポロシャツとスラックス姿で現れた。

諜報部のフロアに入った瞬間、蔵馬はそこにいる人間全員の目が彼に向いたのを感じる。状況の変化に関心を抱かない物は、諜報の世界には向いていない。その点、この職員は皆最低限の素質を持っていると言えるだろう。他に足りない物はたくさんあるが、と蔵馬は内心で付け加える。

職員たちは蔵馬を認識すると、すぐに目を元の場所に戻していく。しかし、外されていく視線の中に一つ、蔵馬から動かない物があった。

並ぶ職員たちのデスクの中、その視線の源には鳶色の目をした金髪の男がいる。歳は蔵馬と同じくらいだろう。日本人の中になると目立つ外見だが、しかし不思議と周囲に溶け込む雰囲気を持っている。名をレナード・ガルシアと言う。

「御嬢さんはどうした？」

「格闘訓練でやり過ぎた。頭がおかしくなつてないか検査に行かせてる」

「相変わらずだな。そのうち児童保護局にドヤされるぞ」

寄つてきた蔵馬と軽口を叩きながら、レナードは椅子に腰かけたまま、デスクの上に散乱した書類ファイルの内の一つを差し出した。蔵馬が昨晚頼んでおいた、斎藤美希に關して諜報部が集めた情報を纏めたものだ。

「今朝の段階の、斎藤美希とその近辺の状況だ」

「助かる……何か分かったか？」

受け取つた書類に目を通しながら尋ねる蔵馬に、レナードは肩をすくめてみせる。

「ダメだな。狙つてきたのが暴力団というのが解せない。身代金目的の誘拐にしては動きが派手すぎる」

「父親は外交官だったな。政治目的の線は？」

「俺も初めはポリティカルエンドだと思つて調べてみたんだが、例の暴力団……大柳組だったか。連中は国内外、どの政治団体との繋がりも無かった。お金儲けだけに執心してるよ」

その報告に、蔵馬は片眉を上げる。扇組は比較的右翼的思想の強い組織ゆえに、外国の政治結社と距離を取っているのは分かる。が、国内の政治家や官僚とも繋がりがないというのは、

「かえって不審だな」

「ああ。上手い事隠してやがるのか、それとも政治屋も近づきたがらないほど黒いのか  
あるいはその両方か。

どっちみち現状では推測することも出来ない。判断材料が足りない。

「母親の方は怪しい所はなかったんだな？」

「普通の専業主婦だった。強いて言えば美人だな。瞳の他は美希ちゃんこそつくりだ  
「とすると爺さん絡みか……？」

蔵馬はレナードを無視して続ける。

美希の祖父である斎藤孝三。日本最大手の重工業企業である西京重工、その防衛機器  
製造部門の幹部だ。肩書からすれば間違いなく重要人物ではあるが、しかし極道組織が  
その孫娘を狙う理由は、やはり見当がつかない。

「本人に心当たりが無いか聞いた方が早いな。斎藤孝三と連絡は取れたのか？」

「取れた。さつきな」

「さつきって……おい」

この事件が始まって既に二十時間近く経過している。いくらなんでもノンビリし  
ぎだ。

「そんな怖い顔するなって。色々事情があったんだ。その紙にも書いてるだろ」

「……防衛省のお偉方と会議？　なるほど……カンヅメ食らってる訳か」

「会議の内容までは俺たちに教える気はないみたいだが、ここまで外部とのパイプをシャットアウトするってことは、そこそこ重要な話を話し合ってるんだろうな」

「どんな悪い事を相談し合ってるんだか……。それで孝三翁は何て言ってきたら？」

「身に覚えがない。忙しくて迎えに行けない。お前らが神戸まで孫娘を連れてこい」  
と

一応は国家安全保障の一翼を担う諜報組織であるセンターをタクシー扱いだ。しかし断れないのが辛いところである。

「諜報部がやるのか？」

「どうなんだろうな。部長たちはやる気らしいが……俺は作戦部に任せただ方がいいと思ってる。こういう不明瞭な案件には、大抵とんでもないモノが潜んでるっていうのが相場だ」

「同感だが……諜報部はあの子を手放す気なんてないだろ」

諜報部がやる気になっているなら、斎藤美希を作戦部にほいほいと渡してくれるか怪しいところだ。小河内ダム的一件でテロリストに後れを取った彼らにすれば、どんな形であつても名誉挽回の機会が欲しいのだろう。娘を一人護送するだけの楽な任務、そう



簡単に手放すとは考えにくい。

「まあ、作戦部はもう手を打っているみたいだがな」

そう労って、レナードは立ち上がると蔵馬の肩を叩き、

「斎藤美希は第二会議室にいるぞ。お前の上司の、眼鏡かけた美人が部長たちに内緒で連れてった」

「それでね！ クラマさんったらね！ 私のお尻をね！」

検査を終えて研究棟から本部棟に戻ってきたモモは、途中で出くわしたムラサキを伴ってプリプリ頬を膨らませていた。

エレベーターを待つのがもどかしく、階段を登る二人の会話は、モモによる蔵馬に対する愚痴が十割だった。

道場の一件がよほど憤慨しているらしく、ぶーぶーと蔵馬に対する不満を口にするモモ。そんな彼女の話を聞いて神妙そうに頷いているムラサキだが、実際半分くらいは聞き流していた。

妹分の担当官との痴話喧嘩を真面目に取り合うだけの度量を、ムラサキは持ち合わせ

ていないし、持つ気も無い。そもそも女が不平不満をくどくど垂れるのは、ただ口にして感情をぶちまけただけの場合が多い。石室にもそういうところがあるし、モモも例に漏れない。だから聞いているふりをして頷いて、『そうだね』だの『全くその通り』だの相槌を打ってやればいい。

「……うんうん、せやね、全くその通り。酷い酷い」

「だよー！ 酷いよー！ そんなに大きくないよー！」

「……うんうん、デカないデカない」

ただ発言の反芻と全肯定を繰り返しているだけの会話だったが、しかし話すだけで怒りのボルテージがみるみる下がっていくのも女というものだった。

初めは深く刻まれていた眉間の皺も徐々に薄らぎ、膨らんだ頬も萎んでいる。紅い唇を多少尖がらせる程度までには怒りも収まってきたのだろう。

表情の豊かな子だと、ムラサキは思う。

感情を表に出すことに、何の躊躇もない。いや、感情を抑えようという観念自体持っていないのだろう。だから嬉しければ楽しそうに笑うし、哀しければすぐに泣く。怒ったら不機嫌さを隠そうとしないし、驚けば目と口を真ん丸にしてハニワの様な顔をして驚く。

その様子を見ているのは面白いし、可愛らしいとも感じる。

自分には出来ない事だ。きつとアザミにも。タンポポも、何も考えていないスポンジ頭のアホに見えて、実は内側の底深くに何か秘めている。他の人間が気付いているかは定かではないが。

素直。それはモモだけの個性。本来、子供ならみんな持っているはずの、凡庸な個性。自分たちには持つことが出来なかった、そして大人たちが歳を重ねるにつれて失ってしまった、大切な個性だ。

どうせ大人にはなれない自分たちだ。出来ればそのまま大切に持っていて欲しい。だがしかし。

蔵馬に対して怒りを露わにするモモに、ムラサキは小さな違和感を覚えていた。騙し絵を見た時の様な、半音ずれた音楽を聞いた時の様な、小さな違和感。無視しようと思えば無視できる程度の、しかし確かにそこにある違和感。

「……あ、クラマさんだ。じゃあね、ムラサキ」

言葉の往来の間に二人は三階にたどり着く。階段の隣にあるエレベーターホールには蔵馬がおり、壁にもたれ掛かって煙草をふかしていた。

「……うん？ ああ、うん。あんまり喧嘩せんようにね」

互いに小さく手を振って別れ、ムラサキは続けて階段を登って行く。

ムラサキと反対方向へ進むモモは、既に怒りは大方収まっている物の、しかし『私は

貴方に対して不満がありますよ』というポーズだけは示しておきたくて、口を尖がらせたまま蔵馬の前に立つ。

「なんだその口は。キスして欲しいのか」

「……………」

「……わかった、その目を止めろ。口もだ。謝るから機嫌直せ」

「謝って済むなら刑法も監獄も拷問部屋も必要ないんですよ」

「坂崎みたいなこと言いやがって……行くぞ。仕事だ」

いつも笑顔な癖に、けっこうすぐに機嫌を損ねる眼鏡の上司とモモを重ね、ついに無理屈屋などころまで似てきた事にゲツソリしながら、蔵馬は指にある煙草をスタンド灰皿に投げた。

エスカレーターで一階に降りている間、モモは懺然とした態度を崩さなかったが、蔵馬の足が玄関では無く建物の奥、武器庫へ向かうと、さすがに結んでいた唇を解いた。

「武器を持っていくんですか?」

「武器類持ち出し許可三種（小火器持ち出し許可）が下りてる」

「重装備じゃないですか……どんな仕事ですか?」

「護衛だ」

頑丈な施錠を外して、二人は武器庫に入る。

ここは本部棟の中で一番広い。政府がこの建物を買い取った時には、こんな部屋は無かった。大量の武器を運び込む為に、もともとあった部屋を三つ打ち抜いて作られたのが、この武器庫だ。

国立児童社会復帰センターの武器庫に収まる武器は、数量、種類共に非常に豊富である。

陸上自衛隊で正式採用されている89式自動小銃や前・制式小銃64式自動小銃は言わずもがな、アメリカのM4カービンやイスラエルのタボールAR21、その他にもドイツ製、イタリア製、スイス製、フランス製。

拳銃、自動小銃、散弾銃、狙撃銃、短機関銃、軽機関銃、重機関銃、無反動砲、擲弾発射器、対物火器。

大ベストセラーもあまり世には出ていないマイナー銃も、世界中の銃火器が累々と並んでいる。

火器類だけではない。手榴弾や地雷、爆薬など爆発物の類、ナイフや警棒と言った近接格闘武器も並んでいる。

さながら近代武器の万国博覧会だが、これは政治的な理由があった。

センターは様々な試験的運用が活動の中に組み込まれている。戦後日本初の諜報組織としてのCIA式諜報活動ノウハウの試験世運用や、イタリアから持ち込まれた義体

技術の試験運用の他に、兵器類の試験運用も大切な役割の一つである。

長らく国産の武器に慣れ親しんでいた日本の軍事は、外国製の武器に対してあまりに無知だった。精々陸上自衛隊の一部の部隊が、こつそりとアメリカ製の銃などを少数運用しているに過ぎないのが実情だ。

政治家の詭弁で眼前の脅威から目を逸らせているうちは、それでも良かった。だが事態はそれを許さなくなってきた。自衛隊の戦闘行為が、あり得なくはない、という状況になっているのである。

であるならば、隊員たちには本物の戦闘に耐えうる、実戦的な武器を与えなければならぬ。バトルプルーフを一切積んでいない銃で戦わせるなどという自殺行為を隊員にさせるほど、防衛省は情に薄くは無。しかし一方で、大々的に次世代小銃の開発や外国製の銃を選定するほど度胸が据わってもない。

世論に気を使って銃火器の更新を怠っているうちに、戦闘が始まってしまつては元も子もない。

しかし火薬がギツシリ詰まつた案件を表だつて進める訳にはいかないし、したくもない。

そこで、国立児童社会復帰センターを使う事を政治家たちは思いついた。

この組織ならば秘匿性が高く、実戦も経験でき、万が一事故が起こつても死ぬのは端

から消費するのが前提となっている死兵と義体だ。

この組織である程度銃器の選定を進めている間に、次世代銃器の選定を表だつて行えるように世論と国会と霞ヶ関の調整をする算段である。

これで万が一戦闘行為が勃発して、急遽に最新鋭武器が必要になつても、即座に何をを使うかを決定できる。上手く事が運んだ場合は、スピーディーに武器の更新ができる。

そういう政治的な思惑が大いに絡んでの、センター武器庫の充実ぶりであつた。

無論職員たちも、ただモルモットの立場に甘んじている訳では無い。

基本的には海外で十分な実戦経験を積んだ武器を選んで使っているし、武器の購入にはある程度の裁量権がセンター側に与えられている為、個人的趣味全開の装備をこつそり購入リストに紛れ込ませたりもしている。それ故に、倉庫の片隅には、いつ誰が使うのつもりなのかも定かではない珍品が転がっていたりするのだ。マイナー銃の類はだいたいそういう経緯でここにある。

そういう悪ノリをするからこんな組織に左遷されるのだと、坂崎や石室ら女性職員達は溜め息を吐いていたが、しかしデカイ銃やオモシロ兵器は男のロマンであるのだから仕方がないのである。

「タボールでいいですか？」

蔵馬に問いかけながら、モモは壁に掛かったタボールAR21を手に取る。独特な形

をしたブルパップ式の自動小銃は、彼女が使い続けている愛銃だ。蔵馬は自分と同じM4カービンを使わせたかったらしいが、モモはこの銃が気に入っている。比較的小さくて扱いやすく、何よりデザインが格好いい。それにマガジンが蔵馬のM4カービンと同じSTANAGマガジンという理由もある。

「ああ。予備マガンはいつも通り六つ。あと、常盤とアザミの分の装備も持っていくから、ケースを用意してろ」

「了解です。強襲用の銃ですよね」

慣れた様子で自身の装備と、常盤たちがいつも使っているMP7とMG4を、倉庫の隅に積まれているギグケースにカモフラージュさせたガンケースに詰めていく。

「今日はどこに行くんですか?」

「神戸だ」

「神戸……お肉が美味しいところですね」

「お前地名を食べ物で覚えてる節があるな……。まあ、ちゃんと働いたら食わせてやる」  
「本当ですか! 今度こそ約束ですよ!」

華が咲いたかのような笑顔で鼻歌を歌い始めるモモ。

相変わらず即物的な娘である。

「食い物の話ですぐに機嫌直しやがって……そんなんだとお前ふと……」



太るぞと言いかけて、蔵馬は慌てて口を閉ざした。

美食に釣られて機嫌をようやく一転させたモモを重ねて刺激する意味は無い。女に脂肪の話をすると100%怒るのだ。蔵馬は己の迂闊な発言を、舌から飛び出る寸前でなんとか戒めた。

「？」

「何でも無い。早く準備しろ。人を待たせている」

「人を？」というかまだ聞いてませんが、誰の護衛ですか？」

モモの呑気な質問に、蔵馬は呆れ顔になる。このタイミングで護衛する人間など、大体の察しはつくだろうに。

「斎藤美希に決まっているだろうが」

言つて、M4カービンのスライドを引く。起こるかもしれない戦いに備えて。

「……………」

いや、起こるだろう。

蔵馬の嗅覚は、確かに戦いの臭いを嗅ぎつけていた。

作戦前夜の待機室で、あるいは任務に向かう途中の機内で。鼻の奥、脳の底が、チリチリを燻る様な感覚がする。

勘や直感の類だが、これを信じない兵士は皆死んでいった。信じた結果死んでしまっ

た哀れな連中も山の様にいるだろうが、それはそれだ。

ゆえに、蔵馬は判断を変える。

「……。モモ、マガジンあと六個追加だ」

世界は小さな判断の結果に形成されていく。

蔵馬の、この気まぐれに近い判断が、確実に未来につながるダイスの目を変えた。

## 第14話

「——というわけで、蔵馬さんたちに、斎藤美希さんの護衛をお願いします」

「……よろしくお願いします」

にこにこ笑顔を絶やさずに、坂崎は町内会の遠足の引率役を頼む様な、のんびりした口調でそう言った。続いて斎藤美希が蔵馬たちに頭を下げる。

国立児童社会復帰センター本部棟の玄関ホールには、坂崎と、彼女が諜報部のフロアから連れてきた斎藤美希。そして蔵馬とモモが並んでいる。

坂崎たちがエレベーターから降りてきたのと同時に、ホールの隅にある柱時計が十三時の鐘を低く響かせていた。

「承った」

「(こちら)そよろしくお願いします」

頷く蔵馬とモモに美希を引き渡して、坂崎は黒いファイルを差し出す。

「詳しいルート等々はこのファイルに入っているのです、駅へ向かい途中に読んでください。すみません、忙しい感じになってしまってます」

「別に構わないが……しかしよく諜報部を言い包められたな」

レナードが言うには、諜報部は斎藤美希の護衛任務に執心していたらしいが、一体どんな魔法か貸しか脅しを使ったのか。

どこか抜けた雰囲気を持つ上司の、意外なほどの敏腕ぶりに蔵馬は感心の声を漏らす。

「別に大したことはありませんよ。諜報部の近くで『昨日から都心の方で暴力団と中華系マフィアが騒がしいですね、なんだか怪しいです。うちも義体を動かしましょうかねー』と独り言を言っただけなんですけどね」

「なるほどな……」

昨日厚木の街では、斎藤美希を中心とした騒動の他にもう一件、何者かが暴力団組員らしき集団に追われていた、という情報があった。その鬼ごっこを皮切りに、昨晩ごろから新宿一帯を支配していた扇組の一派と中華マフィアが小競り合いを始めたらしい。

斎藤美希が暴力団に狙われている以上、このタイミングで暴力団関連の不審な動きがあるならば、そちらを優先した動きをセンターとしては取らざるを得ない。

そういう状況の中、普段反目している作戦部の人間が『我々も怪しいと思います』とわざわざ言いに来たのだ。加えて、作戦部の虎の子である義体まで投入する予定がある程に重要視している言う情報まで与えた。

そして恐らく、坂崎はこう独り言を続けたのだろう。

『でも義体を出すのは諜報部の報告が来てからにしましょうかねー』

要するに、東京の調査はそちらに出番を譲るから、斎藤美希はこちらに回せと坂崎は諜報部に暗に言いに行ったのだ。

結果、斎藤美希は蔵馬たちが護衛することになった。

もし真正面から直接交渉に向かえば、一度護衛任務を引き受けると決定した以上、諜報部は頑として美希を手放しはしなかつただろう。もし作戦部の要請を通せば、作戦部は諜報部の決定を覆す力があると外部からは見られ、それは作戦部の方が立場が上であるかのような印象を周囲に振りまくだろう。しかも娘一人を護衛する能力も無いのか、と言う任務達成能力への疑いまで背負い込んでしまいかねない。

故に作戦部は『東京の仕事は譲る』という意志を見せに行った。これで諜報部は『斎藤美希の一件に関して、根本的解決に繋がる可能性のある東京での調査に人的リソースを集中するために、仕事が無くて暇な作戦部に斎藤美希の護衛を譲った』という大義名分と作戦部への貸しを得ることで、作戦部は斎藤美希の身柄を手中に収めることが出来た。

この駆け引きを、たった一言二言で達成してしまう坂崎の政治力の高さには、蔵馬は舌を巻くばかりだ。現場指揮官としても優秀な坂崎だが、こういったところでも彼女は高い能力を遺憾なく発揮する。もし坂崎がいなければ、作戦部と諜報部の仲は今以上に

険悪になっていただろう。

外で自動車のクラクションが一鳴りした。玄関の前に、黒のセダンが停まっている。運転席にはレナードの姿があつた。今から新宿の方へ行くと言うので、ついだに乗せてけと蔵馬が待たせていたのだ。

「ではそろそろ出発してください。気を付けてくださいね」

「はい、行つてきます」

笑顔で手を振る坂崎に手を振り返しながら背を向けて、モモは美希を伴つて本部棟を出た。

その後ろに続こうと蔵馬は一步踏み出し、——止まった。

「どうかしましたか？」

「坂崎」

蔵馬は振り返り、いつもと変わらない、変わらなさすぎる笑顔の坂崎を見下ろす。

「どういう魂胆だ？」

「はい？」

「斎藤美希の護衛。重要な任務だろう。無辜な一般市民の少女が何者かに狙われている。忌々しき事態だ。だが、義体を出してまでする仕事じゃないだろう」

義体は国立児童社会復帰センターの最大戦力の一つであると同時に、最大の弱点でも

あるのだ。

怪我をしても自然治癒をしないため、かすり傷一つ負う度にその部位を交換しなくてはならない燃費の悪さと膨大な維持費。

既存の生物工学の数歩先を行く、まさに歩くオーバーテクノロジーである故、万が一にも他勢力に身体の一部でも渡すわけにはいかない機密性。

だがそれ以上に、義体は存在自体がセンターだけでなく、彼女らを運用する現政権すら木端微塵に瓦解させかねない程に強力な爆薬なのだ。

義体は、当然の如く生きた人間を材料にして生産される。

身寄りも無く、居なくなっても誰も気付かない、気にしない、そして今にも死にかけている少女を素材に作られている。

国家が一方的に選定した半死体の少女を、本人の意思確認も無く人体実験の素体として脳みそを薬漬けにし、体を切り刻み、洗脳を施して人殺しの道具として利用する。

悪魔の所業と誹りを受けて然るべき、人道を大きく外れた行いだ。

もし彼女らの存在が白昼に晒されでもすれば、センターだけでなく日本政府自体が国民だけでなく世界各国から非難の大豪雨を受けるのだ。

本来ならば研究所から出すべきですらない。政権の安寧を望むならば、そもそも手を出さない方がいい。義体とはそういうモノなのだ。

そんな危険因子を、危険の少なく人目にも付きにくい人探し程度ならともかく、どうしても目立つ護衛任務に駆り出すのは、はつきり言って異常である。いくらスポンサーの縁者だとは言え、斎藤美希はただの一般人なのだ。

「……そうですか？」

「確かに嫌な予感はある。作戦部がやった方がいいと、俺も思う。だが、わざわざ義体を出すほどの物でも、諜報部に貸しを作ってまで取ってくるような仕事でもない」

「蔵馬さん意外と冷たいですねー。困っている女の子がいたら、助けてあげたくなるのが人情でしょう？ それに彼女は西京重工のVIPの孫ですよ。パイプを繋げる良いチャンスじゃないですか」

坂崎は笑顔だ。いつも通りの笑顔だ。変わらない笑顔だ。

心など一抹も微塵も籠っていない、ただ貼り付けただけの笑顔だ。

表情は心を映す鏡。鏡は映るものが変わるから、鏡たりえる。一つの物しか映さないのは、何も映していないのと同じだ。本来映すべき物を映さず、虚構の像だけを映す。隠す為に。騙す為に。欺く為に。

いつも笑顔。変わらず笑顔。どんな時も笑顔。

それはつまり――。

「これ以上の話を続けますか？」



笑顔の底から聞こえた、優しさも和やかさ親しみも懐こさも温かさも朗らかさも懇ろさも円かさも無い、抑揚の失せた平坦な坂崎の声。機械で造った合成音声の方がまだ心を感じるそれは、言葉と言うよりも冷え冷えとした音の連続にようだった。

蔵馬はそれを聞いて、

「——いや、いい。行ってくる」

普段のどこか気怠げな表情を解いて、自然な笑みを欠片ほど浮かべる。そして今度こそモモたちを追って、本部棟を出て行った。

坂崎一人になった玄関ホールに、午後の静謐が満ちる。

蔵馬の後ろ姿を見送りながら、坂崎はやはり笑顔を寸も崩さずに、その笑顔から正逆に位置する、深い苛立ちの籠った声で呟いた。

「……………厭な人」

モモは外で待つていたレナードの車にガンケースを積み込み、美希の為に後部座席のドアを開ける。

「お先にどうぞー！」

「あ……ありがと……お邪魔します」

礼を言つて、レナードに会釈しながら車に乗り込む美希の表情はどこか固く余所余所しい。

はて、彼女はこんな他人行儀に接してくるタイプの人間だったのだろうか、モモは首をククツと傾ける。

モモの記憶の中では、初対面にも関わらず、そこそこ踏み込んでくるタイプだった。だが今日はどこか壁のあるような、避けられているような感じがする。目も合わせてくれないし。どこか体調が悪いのだろうか。あるいは再開してから数分も経たないうちに癪に障る事をしてしまったのか。

「美希さん、元氣ですか？」

「……何それ？ 猪木？」

「ダー！」

「……ダー！」

試しに話しかけてみると、レスポンス速度が少し遅いが、しかし会話には乗ってきてくれる。嫌われている様子はないし、やはり一体どうしたのだろうか。モモはモヤモヤした気持ち胸に収め、首を更に深く傾げた。

心中にわだかまりを得ながらモモが美希に続いてセダンに乗り込むと、坂崎と何か話

していた蔵馬が本部棟から出てきた。どんな会話していたのかは知らないが、どこか機嫌が良さそうだ。

「……………むむ」

あの表情は、今まで見たことが無い顔だ。いつもはムスツとしているか意地悪そうな顔の蔵馬が、まるで悪戯に成功した子供の様にはにかんでいる、ように見える。

モモの心中わだかまり指数が加算される。

自分では引き出すことの出来ない担当官の一面を見て、モモの唇はへの字型に曲がった。

「乗せてもらって悪いな。助かった」

そう言ってレナードの隣に着いた時には、蔵馬は緩いような険のある様な、いつもの表情に戻っていた。

「ついでだ。気にしなくていい」

全員が乗り込んだのを確認して、レナードはアクセルを踏む。センターの外門を抜けて、入り組んだ山道を縫うように進んでいく。

「ところで東京駅でいいの？ 飛行機の方が早いだろう」

レナードの問いに対して、後ろの美希が頭を下げる。

「えっと……………済みません」

「どういふことだ？」

「高所恐怖症なんだとさ」

「……なるほど」

美希の高所恐怖症に関しては一悶着あったらしい。本来坂崎が用意したルートは羽田空港から神戸空港まで飛行機で一飛びの予定だったのだが、『無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理！』と美希が壊れたレコードを倍速再生させている様な勢いで無理を高速連呼した結果、新幹線で神戸まで向かう運びとなった。本当に直前での変更だったらしく、坂崎に渡された移送ルートは飛行機の欄に大きくバツテンが書かれて、その下に新幹線を用いたルートが手書きで記されている。

「——そういえば」

次にレナードが口を開いたのは、車窓の風景が山林の緑から都会の灰に変化した頃だった。出発当初は他愛も無い事を駄弁っていた後部座席の二人は、いつの間にか眠ってしまっていて、車内は静かだ。特に美希は疲れが溜まっていたのか寝息が深い。

「ミス坂崎は保育園の先生でもしてそうな見た目の割に、なかなか敏腕だな。どういふつもりかは知らないが、ちゃっかり美希ちゃんの護衛を掠めて行った。口と頭の周る女性だ」

「あいつはコアラの皮を被った狐の体内に潜んだカマキリみたいな女だからな」

「それは貶しているのか……?」

レナードは蔵馬の変な方向に伸びた日本語能力を鼻で笑う。

「しかしな蔵馬。腹芸まで真似しろとは言わんが、お前も少しは彼女を見習った方がいいぞ。ミス坂崎の書いた報告書を読んだことがあるか?」

「いや無い。そもそも上司の書いた報告書なんて俺の目に入らん」

「読もうと思えば読めるだろう……。ともかく、ミス坂崎の報告書だが、あれは一見の価値ありだ。あんなエレガントな報告書は読んだことがない。彼女は英語圏に住んでいたことがあるのか? 見事な英文だ」

「知らん。たぶん無いだろうが……。まあアイツはやろうと思えば大抵のことは出来ちゃうタイプの人種だからな」

「ともかく蔵馬、彼女の報告書の書き方だけは見習え。お前の報告書は読み難くて敵わん。一々余計なことまで書き過ぎだ。報告書はお前の日記じゃないんだぞ」

「本国の連中が、出来る限り詳しく書けつて言うからだろう」

「それにしたつてな。この前のコンテナヤードでの戦闘記録なんてモモちゃんのパンツの色まで書いてただろう。お前本国に帰って偽装収監とかすることがあつたら、罪状たぶん性犯罪にされるぞ」

「え、ちよつとちよつとクラマさん」

「起きてたのかモモ」

「起きてましたよ。それよかパンツって、嘘でしょう、まさか本当に報告書に書いたんですか」

「書いたぞ」

「モモちゃん、こいつ『白に薄ピンクのリボンが付いたやつ』って書いてたよ。スケベな奴だ」

「うー！ あー！ もー！ 何でいつもいつも意地悪ばかりするんですか！」

「書くって言っただろうが」

「了承した覚えはなくてですよ!？」

「……う、なになに、もう着いたの……?」

モモの悲鳴に美希は目を覚まし、車内は打って変わって騒々しさに満たされながら東京の街を進んでいく。



東海道を最高時速300kmで疾走する白影がある。新幹線N700系《のぞみ》だ。古くから幹線道路として親しまれてきた東海道、かつては早くても数日を要した距離

を、この高速鉄道は約2時間で走破する。さすがに空路には敵わないが、陸上の交通機関としては他の追隨を許さない。

蔵馬ら三人を乗せた《のぞみ》は名古屋をすでに通過し、神戸まで旅路は半分を切った。

10号車のグリーン席、車両の半ばに窓際に美希を置いてモモが並んで腰掛け、車内全体視界に収められる車輛の端席に蔵馬が位置している。

このまま何事も無く済めば、あと半刻ほどで神戸に到着する。そこから先は民間警備会社か兵庫県警の仕事だ。

モモの脇の通路を、二人組の乗客が通過する。モモはいつもの紺ブレザーの下に隠したP×4拳銃を撫でる。昨日のことがあるので車両に他の乗客が来るたびに警戒をしているが、そのまま車両を出て行ってしまった。先ほどチャラそうな男に声を掛けられた時に抜きかけたが、『自分と美希の身が危ない時以外使うな』と蔵馬に叱られた。

「このまま何もなければいいですね」  
「……ん、そうだね」

車窓を眺める美希の返事は、やはりどこか素っ気ない。

モモは美希の顔を覗き込もうと身体を傾けてみるが、美希の視線は窓の外から動かないため、半面しか窺えない。

「美希さん、やっぱり体調が良くないんですか？」

「え、なんで？」

疑問を受けて、美希は少しだけモモの側に目を向けた。

「うーん、何と言うか……」

先ほどから感じている距離感、モモはこれを言い表す言葉が出てこない。美希もそれを言葉にしないから分からない。強いて言えば生理中のアザミの素っ気なさに似ている故に体調不良を推してみているのだが、口ぶりからすると、そういう事でもないようだ。

体調不良でないなら、一体何なのだろう。

彼女が何か思うところがあるのは、モモはしっかりと感じ取っていた。

壁は無いが、距離はある。

拒絶は無いが、許容も無い。

こちらに背を向けているわけでは無いが、向いているわけでもない。

今までにも似た態度の人間を幾度か見た経験はある。だがそれが、いつ、どこで、誰のものだっただろうか。つい最近も感じたことがある気がするのだが……。

次に紡ぐべき言葉を織り上げることが出来ず、モモは唇を締める。

そして心の内を覗くつもりか、それとも美希の次の挙動を見逃さない為か、モモは無



意識のうちに美希の目を、カメラのような無機質な双眼で覗き込んでいた。

そんなモモの視線と空気に耐えられなくなったのか、美希は立ち上がると、

「……………トイレ」

告げて車両の奥へ行ってしまった。

咄嗟に蔵馬に目を向けると、美希を指差して『ついて行け』とジエスチャーを送っていた。

領き、美希を追って10号車から、11号車の通用路に入った。多機能トイレと搭乗口が収められているその場所は無人だ。美希は既にトイレに入ったようで、使用中の表示が出ている。

モモはほうと息を吐いてトイレのスライドドアにもたれ掛かった。

微かに聞こえる新幹線の駆動音以外の音は無い。静けさの中で俯いて、ローファアの爪先に目を落とす。先の方が少し削れてしまっている。昨日美希を連れて逃げ回っている最中、転んだ拍子にコンクリートの地面に擦ってしまったのだろう。

「……………あ」

その回想が気付きをもたらしした。

モモはくるりと身を翻して、トイレのドアに向き直る。

「……………あの……………美希さん」

声を掛けたのは、一応中身が美希かどうかの確認の為。

「……………なに？　モモもトイレ？」

「いえ、そうでなくてですね。あの、もしかして……………」

続けたのは、彼女の態度に思い当たる節があつたのを思い出したからだ。

ただ、これは美希にとって答えにくいことかもしれない。顔を隠す物理的な遮蔽物があつたほうが、答えやすいかもしれない。それに、もし答えなくなければ、無視すればいい。壁を挟んでいれば、聞こえなかつたと言いつい訳が出来るからだ。

だから、今訊いてみようと思つた。

しかし言葉にする前に、通路に他の乗客がやって来てしまい、モモは口を噤む。

現れたのは二人。ビジネススーツの男女だ。彼らには見覚えがある。先ほど通路を通つて行つた二人だ。

彼らはモモがトイレを待っている物だと勘違いしたのか、モモの後ろに並んでしまつた。

「どうしたのモモ。もしかして、何？」

外の様子を知らない美希は続きを促してくるが、言おうとしていたのは他人のいる傍で話ではない。

「え、えーと……………も、もしかして大きいほうですか……………」

「……………」

沈黙が帰ってきた。答えたくなかったから無視された。壁があつて良かった。

「は、ははは……えと、すみません、すぐに出てくると思うんで……」

トイレの中からスライドドア越しに発せられる寒冷空気に耐えかねて、モモは茶を濁すために後ろに並んだ二人に会釈を飛ばしてヘラリと笑い、

——女に消炎器着きの拳銃を向けられている事に気が付いた。

「……大きい方みたいなんで、すぐには出てこないと思いますけど」

「喋るな。動くな。次の駅で斎藤美希と一緒に降りろ」

言ったのは女の方だ。表情は無く、インプットされた通りの動きのみを行なおうとする機械と対面しているようだ。

何事もなさそうだと呑気に考えた矢先にこれだ。

纏う空気が昨日見たヤクザとは全く違う。これまで対峙してきたテロリストとも違う。

ヤクザの様な暴力的な威圧感はない。テロリストの様な熱に逆上させた狂気も無い。

挙げるなら、蔵馬ら国立児童社会復帰センターの人間に近い。獲物を飲みこむタイミングを窺う蛇の様な、肉食の爬虫類めいた雰囲気だ。

引き金はトリガーに掛かっており、発射寸前まで絞られている。下手な挙動をすれ

ば、躊躇なく撃ってくるつもりだ。

何者だろうか。考えてはみるがモモには判断がつかない。ともかく、斎藤美希を狙う連中は、脅して連れ去る強硬手段を採ることにしようだ。

距離はほぼゼロ。こちらは相手二人に背を向けており、そして銃口は心臓を狙っている。

声を出したら撃たれる。銃を抜こうと腕を動かせば撃たれる。振り返ろうとしても撃たれる。

ならば声を出さずに、手を動かさずに、振り返らずに、現状を打破するしかない。

故にモモは、一瞬だけ膝を折る。その刹那の内に大腿の筋肉を高収縮させ、そしてその力を突撃力に変換させる。

数メートルの高さを軽く跳び越える脚力で床を蹴り、肩ごとスライドドアに突っ込んだ。

当然のことだが、トイレの間仕切りとして取り付けられたスライドドアの取り付け部に、義体の突進に耐えうる耐久度は備わっていない。

そうしてモモは、スライドドアを半損させてトイレの中に転がり込んだ。

奇襲には奇襲。人間は不意を突かれると、最低でも0.5秒は動きを止める。義体にとっては十分な時間だ。

「——っ!？」

声こそ出さなかつたが、背後の二人が驚愕に息を飲むのをモモは聞く。

「えっちよっちよっちよ、なに!？」

そして大業に驚き慌てる美希の声も聴く。

「敵です! 早くパンツ履いてください!」

指示を飛ばしながらモモは銃を抜く。そして転がった姿勢のまま身体を半転させ、トイレの外で動揺している女を射撃。

銃を向けられたのだから、立派な『危ない時』だ。だから躊躇なく撃つ。蔵馬の指示で、こちらにも消音器は取り付け済みだ。

「ちよっちよっちよちよちよちよっ」と!

抑えられた銃声は、美希の悲鳴と新幹線の走行音に大抵が掻き消される。腹に弾を二発食らった女は力を失って倒れ、女の後ろにいた男が射界に入った。

彼らは手順通りに事が進まなければ、すぐに撤退する事に決めていたらしい。

男は仲間の女を顧みることなく、俊敏な動きでモモの射界から逃れ、トイレの前から10号車の方へ駆け出して行った。すでに京都駅まで後数分の距離に迫っている。新幹線の中を逃げ惑っていれば、逃走も不可能ではない。

——逃げられた。

追うべきか、それともいまだにパンツをずり下げたまま目を白黒させている美希の傍にいるべきか。

だが一瞬の逡巡のうちに、その選択肢を選ぶ必要は無くなった。

逃げ去った男が、消えた方向から反対方向へすつ飛んできたのだ。床に頭を強く打ちつけた男は白目を剥く。

何だ、と思う前に、男が吹っ飛んできた方から蔵馬が顔を出した。

「やっぱりこうなつてたか」

「クラマさん……撃ちました」

蔵馬はスーツのポケットから出した結束バンドで、倒れる男の両親指を縛る。そして血に沈む女の脈を取り、死んでいる事を確認してからモモに向き直った。

「いや、構わん。むしろ撃つべきだった。よくやった」

蔵馬は女が所持していた拳銃を拾い上げて、マガジンを抜いて弾種を確認する。

「グロツク28か……こいつらヤクザじゃないな。斎藤美希は中か?」

「はい、います……います……ひっ」

イマイチ状況を把握できてなかった美希は、ようやく下着を上げて、紫煙を上らせる拳銃を握るモモを避け気味にトイレから出てきた。そして靴底を濡らす血だまりに気付き、通用路に転がる死体に身体を強張らせた。

蔵馬は固まってしまった彼女の肩を掴み、トイレの隣にある出入り口の前に移動させる。そして空いたトイレの中に床に転がる二人を押し込み、壊れたドアを元の位置に立て掛け応急の偽装を凝らす。零れた血液はどうしようもないので放置だ。

現場の処置の後は、乗客を近づけない為に一芝居打つ必要がある。

蔵馬は10号車の客室に入ると、乗客たちに向かつて、

「すみません！ こっち側の扉は故障して開かないので、反対側の扉から出てください！」

と叫んだ。どう見ても鉄道関係者ではないが、しかし人は案外疑う事もせず他者の言葉に従うものだ。次いで11号車にもこちら側の扉を使うなど大声で伝え、蔵馬はモモたちの所に戻ってきた。

「もうこの新幹線に乗っている訳にはいかんな。あと二分と少しで京都駅に着くから降りるぞ。お前は斎藤美希と一緒にいろ。絶対に離れるな」

「了解です」

頷くモモから美希に目を移す。

美希は展開について行けなくなつたのか、ぼんやり虚空を眺めている。

蔵馬は彼女の正面に立つと、膝を追って視線の高さを合わせる。

「斎藤美希……おい、斎藤美希。しつかりしろ。今の状況を説明するぞ。理解できない

かもしれないが、とりあえず聞け。状況の危険度は二段階ほど上がった。敵——そんな敵と呼ぼう。敵は高確率で俺たちの行動を把握している。だから俺たちも予定を変えろ。いいな？」

「はっ……はい、わ、かりました」

「いい子だ」

蔵馬は頷き、モモに待機を命じてガンケースを回収して一旦座席に戻る。

自分たちの分と常盤たちの物を合わせると相当な重さになるが、蔵馬は顔色一つ変えずに軽々とそれら全てを担いだ。

モモのケースを回収した時、新幹線は制動を追えて完全に停止した。

京都駅に到着したのだ。

蔵馬は急いでモモたちの元に戻り、タボールの入ったガンケースを手渡す。受け取ったモモは搭乗口から頭を出して周囲を窺い、不審な影が無いかを確認する。京都駅のホームには観光客とビジネスマンが数多く往来しており、怪しいと思えば皆怪しく見える。

指示を求めて振り返るモモに、蔵馬は取り敢えず出ると手で合図をする。

「——！」

そのジェスチャーと交錯する形で、モモの右手が彼を突き飛ばした。瞬間に、今まで



蔵馬の体があつた空間に弾丸が二発通過する。

弾丸の射手は11号車の客室から男。恐らくトイレに詰め込まれた男女の仲間だ。この男の手にもグロック28が握られている。

蔵馬は咄嗟に鹵獲したグロックで応射する。狙いもつけない威嚇射撃だが、男は弾を逃れるために身を素早く動かして一旦客室に逃れた。

担当官を守護するのは義体の条件反射に近い。モモは蔵馬の盾となるために、再び新幹線内に飛び込もうとする。だが蔵馬は、その動きを遮る様に美希の背を突き飛ばして、モモの腕の中に投げ込んだ。

この行為の理由は二つ。一つは美希をグロックの射線から逃がす為。そしてもう一つは、新幹線の搭乗口があと数秒で閉ざされるのを察したからだ。

その蔵馬の力は美希が一瞬間に浮くほど強く、二人は新幹線から放り出された。

「——つクラマさん！」

「センターと連絡を取れ！」

蔵馬の飛ばした言葉は辛うじて、閉じる新幹線の扉の隙間からモモに届いた。

そして新幹線はモモと美希をホームに残し、新幹線は次の駅へ走り始める。

扉が閉じる寸前、蔵馬は頷くモモを確かに見た。現場の状況を司令部が把握していない事態ほど、現場の人間にとって最悪な事は無い。センターに状況を知らせれば、何か

対処を取るはずだ。義体と護衛対象から引き離された大概最悪な状況ではあるが、最悪一歩手前までは持ち込めた。

この連中が京都駅で降りるつもりだったのなら、モモたちは依然敵に囲まれている可能性が高いが、それでもなお、既に戦場と化した新幹線の中よりは安全だろう。一度銃器の発砲に踏み切った人間は吹っ切れる。そうなると目的を果たすまで、周囲の被害などお構いなしに暴れるのが定石なのだ。ぶち切れた暴れん坊の相手は、生憎得意中の得意だ。

蔵馬は肩に担いでいたガンケースを床に降ろしてグロックを構え、男がいる客室を睨みつけた。

「お前らのせいで旅程が滅茶苦茶だ。出てこいよ、まずは自己紹介をしろ」

## 第15話

蔵馬はモモの分が一つ減ったガンケースを担いで、乗口近くに積み直し、その傍に身を隠した。L字型の通路を持つ通路区画、11号車の客室から死角になる位置だ。

新幹線は時刻表通りに運行を始めた。あと十五分ほどで新大阪駅に到着する。蔵馬は流れる車窓の画を一瞥し、奪ったグロック28拳銃をベルトに差して、11号車の客室の方を覗き見た。

客室と通路を隔てるドアに嵌められた小窓から、客室の中を確認できるが、物陰に隠れたのか男の姿は無い。だが逃げてはいない。

鹵獲したグロック28は9mmオート弾を使用する、公的機関限定のモデルだ。つまり彼らはヤクザでも金で雇われた傭兵でも無く、どこかの公的組織の人間——ほぼ間違いないく諜報組織の作業員だろう。ならば必ず戻ってくる。そして己らの存在を秘匿するため蔵馬を始末しようとするはずだ。それが難しいと判断したとしても、最悪情報の流出を防ぐために仲間を殺しにくる。諜報組織は何処でもそういう物だ。

しかし、普通非合法の諜報活動を行う場合は、万が一装備を相手側に回収されても身元が明かされない物を使う。公的機関限定モデルなど絶対に使わない。この連中は間

抜けなのか、それともこの装備を選ぶ理由があったのか。

装備を差し引いても、諜報員として落第だ。公衆の面前で拳銃を出して、あまつさえ発砲してくるなど、諜報機関にあるまじき蛮行だ。銃を弾くなんて最高に目立つ。目立つなど最悪だ。目立って喜ばれる作業員などジエームズ・ボンドかソリッド・スネークくらいである。

ともかく諜報の人間として下の下だが、しかし連中はそれを推してなお撃ってきた。それ程の重要性が、斎藤美希と言う娘にあるのだろうか。そもそも諜報機関が出てくる時点で、色々とおかしい。身代金目的の誘拐なんてチャチな動機では絶対に無いし、斎藤美希の周辺だけで完結する話とも思えない。

坂崎はこうなることを予見していたに違いない。諜報組織が動いている事も察知していたのだろう。発砲事件まで起こっているのに新幹線が発車すること自体おかしいのだ。新幹線には至る所に監視カメラが設置されている。当然いま起こっている事も筒抜けだ。鉄道会社にはすっかり手回しをしている証拠である。坂崎は何も知らない自分たちを囷にして、裏で蠢く正体不明の敵を誘き寄せるつもりだったのだろう。坂崎は『釣りのコツは疑似餌を疑似餌と見られないことですよ』などと嘯くに違いない。釣りなどしたこと無いだろうに。

蔵馬は軽い苛立ちを溜息に乗せて吐き出す。

「……………」

この任務の実態がどうであれ、やはり情報が足りない。坂崎もそう思つて、こんな無茶な作戦を立てたのだろう。ならば一人生け捕りにしたが、出来ればもう一人欲しい。一人分の情報と二人分の情報では、精度も量も段違いだからだ。

しかし殺すのと生け捕りにするのは、その難易度も危険度もまた段違いだ。こつちは殺さないように手加減をして、しかし向こうは殺す気満々。しかも銃器持ち。普通は死ぬ。蔵馬も出来れば相手にしたくない。だが普通の人間は出来ない事をするために、国家は蔵馬辰巳という男に安くは無い給料を払っているのだ。今回は楽が出来ると思つたが、そうは問屋が卸さないらしい。

「……………ま、いつもの仕事だ」

独り言ちたすぐ後に、11号車のドアが開かれる気配が来た。

蔵馬は物陰に隠れながら急ぎスーツの上着を脱ぎ、そして神経を尖らせて作業員の接近を計った。耳をそばだて、足音と衣擦れの音を溢さず拾い上げる。一瞬対峙しただけだが、作業員の体格は把握している。身長は大よそ170センチ。歩幅は70cm程度だろう。警戒状態なら歩幅は普段の半分程度に縮まる。蔵馬の場所まで約十歩。時間にして約5秒。

つまり今だ。

蔵馬は脱いだ上着を鞭の様にしならせ、廊下側に鋭く投擲した。その動きに重ねて、蔵馬が隠れるすぐ裏側で抑制された銃声が鳴る。この音一つで、蔵馬は工作員と拳銃の位置を掴んだ。宙に浮いた上着が重力に捕まるより先に素早く動いた。

廊下にいた工作員の体勢を確認。右手で銃を持ち半身で構えるウィーバースタンス。グロツクの銃口は上着に向いたままだ。工作員の目は蔵馬を捉えて反応しようとしているが、もう遅い。

工作員から見て右側から飛び出した蔵馬は、右手でグロツクを掴み射線を固定する。そして左手は肘を取り、飛び出した勢いをそのままぶつけ、右腕の関節を極めて壁に叩き付けた。最後に踏みつける様なローキックを膝裏に入れて体勢を崩す。

初手の奇襲を決めたら、次は武装解除だ。

蔵馬は工作員が反撃に転じる前に、掴んだグロツクを真横に九十度捻って指からもぎ取る。

「——っ？」

拳銃の握りが甘い。

この動作で得た違和感に気付けたのは、蔵馬が何度も銃器の前にその身を晒して戦ってきた、その経験があつたからだろう。

蔵馬は奪った拳銃も極めた右肘も放棄して緊急回避。身体を後ろに反らせる。

危機を察知し条件反射的に動いた身体が、コンマ数秒前までであった空間に刺突が穿たれた。それは工作員が後ろ手に放った一撃。グロツクを持っていたはず右手に、逆手に握られたナイフの一閃だった。

薬指に嵌ったリンググリップと鎌状の刃。折り畳み式のカランビットナイフだ。抜いた状態で逆手に持って、上着の袖の中に隠していたのだろう。このナイフと拳銃を両方握っていたから、グロツクの握りが甘くなっていたのだ。

回避行動を取った蔵馬には隙が生まれる。工作員は押さえ付けられていた壁から弾けるようにして離れ、右に鋭く旋回してナイフで薙ぐ。蔵馬は辛うじて手首を捉えて受け流したが、追撃の左掌底が顔面に来た。躲し切れず顎を打たれる。攻撃は止まらず、獲物を捕らえた猛禽類の爪の様に掌が蔵馬の顔を食らい付き、後頭部を思い切り壁に打ち据えた。

立場が先ほどと逆転し、今度は蔵馬が壁に押し付けられる。だが工作員に蔵馬を生かしておく気など露も無い。蔵馬の首を切り裂く為に、鈍く光るナイフを振り下ろした。顔を掌に覆われて蔵馬の視界はゼロに近い。だが殺気を嗅ぎ取る敏感な嗅覚と、自分ならばそうするという予測で蔵馬は動く。切っ先が喉の皮を破る寸前で、蔵馬はナイフを持つ手首を左手で受け止めた。

同時に、グロツクを取り落として空いた右手で、頭蓋を鷲掴む工作員の手首を、常人

離れた筋力で万力の様に締め上げて引き剥がしに掛かる。

「ぐ………」

鉄面皮を保つて機械の様に動いていた工作員の顔に、初めて人間らしい苦悶の表情が浮かぶ。それほどまでに蔵馬の握力は凄まじく、手首の骨がミシリと軋みをあげている。

純粹な力比べに押し負け、少しずつだが工作員の指が蔵馬の顔から離れていく。利き腕で突きつけたナイフも拮抗状態に入つて動かない。

この状況を変えるには、次の手を打つしかない。そう判断し、工作員は更に攻撃を加えることにした。

蔵馬の頭をさらに壁に打ち付ける。繰り返し、ゴリゴリと、頭蓋骨の中身をグチャグチャに攪拌するつもりで壁打ちを続ける。

普通なら死ぬか、気絶するか、あるいは戦意を喪失するか、少なくとも多少のダメージは免れない攻撃だ。しかし蔵馬の膂力は一向に緩まる気配が見られない。ギリギリと工作員の腕を締め上げ続けている。

「——！」

工作員が吐き捨てる様に悪態らしき言葉を吐いた。何と言つたかまでは聞き取れた者はいない。『化け物』とでも言ったのか、あるいは『雄ゴリラ』辺りかもしれない。



ともかく、彼の想定を蔵馬はあらゆる意味で上回っていた。想定外が彼の中で焦燥を生み、その焦りが次の悪手を選ばずに至った。

作業員は蔵馬の顔を掴んでいた手、その親指を放し、蔵馬の右目を抉り潰す為に動かした。

『掴む』と言う行為は、親指があつて初めて成立する。親指の外れた握縛など、蔵馬にとつては脆い砂糖細工の拘束具に等しい。

蔵馬は首を振つて目つぶしを躲し、親指は目尻を掠るに終わった。

蔵馬は眼球を掠つた親指など歯牙にも掛けない。

そしてついに、蔵馬は作業員の手を引き剥がして得ようとしていた物——視界を得る。指の隙間から闘志燃える黒眼を巡らし、作業員の耳を見た。

刹那、蔵馬の右手は視線の先に延び、そしてブツンと左耳を引き千切った。

痛覚に対する無条件反射はあらゆる反射より優先される。突如激痛を負った作業員の体はほんの一瞬だが、側頭部を中心とした生体防衛行動による筋伸縮が取られ、要するに両腕への集中が削がれた。蔵馬に対してこの一瞬は致命的だ。

千切った耳を塵ゴミの如く投げ捨て、蔵馬の両腕は作業員の腕とナイフを押し退けるに至る。これで蔵馬を縛るものは無くなった。

蔵馬は男の鼻頭に頭突きを叩き込む。額で鼻骨を押し潰した感触があつた。そして

男が怯んだ気配も肌で感じる。

この隙を逃さず、蔵馬は工作員のナイフを握る方の腕に両腕を巻き付けて、身体を落  
下させる様にして体勢を膝立ちまで下げた。

100キロ近い蔵馬の体重を支えられず、工作員は右手から体を床に落とした。先に  
床に到着したのはナイフの切っ先だ。二人分の体重が乗った衝撃に、カランビットナイ  
フのリングを通していた薬指は耐えきれなかった。

薬指の骨は粉碎し、曲がるはずの無い位置がへし曲がる。こうしてナイフのグリップ  
を指ごと破壊し、手刀でナイフを通用路の端へ弾き飛ばした。

「ぐっ……ぬ……」

工作員は鼻血を吹き出し、側頭部を赤黒く濡らし、痛みに歯を食いしばる。しかし体  
勢が床に伏すようになった事で、蔵馬に奪われ床に転がっていたグロックが手の届く位  
置に入った。

工作員は咄嗟に無事な左手を伸ばす。が、蔵馬はそれを見逃さない。工作員の武器回  
収よりも素早く、蔵馬の蹴りがグロックをナイフと同じ戦闘域外に弾き出す。

武器を奪われ、右手を破壊された。だがこの工作員の戦意も未だ萎えない。蔵馬が彼  
の拳動を見逃さないと同じように、彼もまた蔵馬の変化を見逃さなかった。

今の蹴りで、蔵馬の重心が崩れた。この状態の相手は踏ん張りが効かない事をこの男

は知っていた。

作業員は蹲った体勢から蔵馬の胸目掛けてタツクルをぶちかました。二人の身体が宙を浮き、そして衝突したのは、モモが壊した多機能トイレのドアだ。立て掛けていただけのドアは当然大人二人を受け止める事など出来ず、彼らはトイレの中に転がり込む。

トイレの中には既に先客が二人いる。今だに伸びている男の仲間と死体が寝ている多機能トイレの中は、いくら通常のトイレより広く造られているとは言え、大人四人が入るには手狭だ。

その狭い空間で、蔵馬と作業員は纏れ合い、体勢を立て直しに掛かる。ここで不意を突かれた蔵馬と、この展開に備えていた作業員に差が生まれた。

先に膝立ちになって体勢を整えたのは作業員だった。この有利を逃せば負ける。依然床に背を着けたままの蔵馬に攻撃を加えるため、威力を優先して利き側である右腕を振り上げ、そして顔の中心を目掛けて全体重を預けた掌底を放つ。

彼は再び焦った。これが敗因だ。

「焦んなよ三流が」

蔵馬は不安定な状態ながら的確に作業員の手首を取った。そして下半身を跳ね上げ、両脚で大蛇の様に作業員の頸部を絞め上げる。

前三角絞め。自らの大腿肉と相手の三角筋で頸動脈を絞める、現代柔術の代表的な絞め技だ。絞め技全般に言えることだが、一度極まるとそう簡単には外せない。蔵馬ほどの格闘者なら、外されることはほぼ無い。工作員の意識が潰えるまで後数秒といったところだろう。

無論外せない訳では無い。三角絞めは代表的であるが故に様々な対処法が研究されているのだが、最もシンプルかつ効果的な抜け方がある。

酸欠と絞めの圧力による苦痛に耐え、工作員は両脚と背筋に力を込める。そして蔵馬を身体ごと持ち上げようと身体を後ろに反らせた。

三角絞めの抜け方。それは単純だ。技を掛けた相手を身体ごと持ち上げ、床に叩き付ける。強引だが効果的な、抜けが攻撃になる必殺技だ。

プロレスで言えばパワーボムと称され、柔道ではほとんどの場合禁止される、相手を殺傷させることすら可能な技である。安全を計られているプロレスリングや、柔らかな柔道畳ですらその威力だ。硬い新幹線の床に叩き付けられてはタダでは済まない。

もちろん叩き付けることが出来れば、の話だが。

「多機能トイレって便利だな。ほら、手すりが付いてる」

蔵馬の身体が持ち上がったのは、精々数十センチだった。それより高くへ昇る前に、蔵馬は多機能トイレには必ず取り付けられている手すりを掴み、工作員の起死回生を阻

んだ。

「ん、ぐ、おとおおツツッ！」

作業員の、くぐもった断末魔。これが戦闘終了の鐘となった。全身の力を失い、作業員は意識を失う。

蔵馬はぐったりとして動かなくなった作業員から脚を外し、再び動き出す前に他の二人と同じように結束バンドで拘束する。二人と死体をトイレの奥に蹴り転がし、度重なる暴力を受けた不憫なドアを元の位置に戻した。

作業を終えて、一息吐く。

少しだけ厄介な相手だった。これだけ錬度の高い作業員、三人一度に来られていたら手こずっていたかもしれない。素手で相手した場合の話だが。

蔵馬は床に落としたままになっていたスーツの上着を拾って袖を通し、作業員が落とした二丁目のグローックを腰に差し、そしてカランビットナイフを折り畳みポケットに突っ込む。

入れ替わりに携帯電話を出して、坂崎の番号にダイアル。

京都駅を離れて数分経った。モモが無事なら、そろそろセンターへ連絡を入れているはずだ。

連中が京都駅で降りるつもりでいたのなら、あの場所にも作業員が潜伏している可能

性が高い。それが心配だが、タボールも持たせてある。それに携帯電話も持たせて――

「あーくそ……」

持たせるの忘れてた。

蔵馬は自身の間抜けさにうんざりとして肩をすくめ、後頭部をぼりぼり搔く。

そうして初めて、蔵馬は頭にタンコブが出来ている事に気付いた。



京都駅のホームに横たわる少女が二人。

蔵馬に放り投げられたモモと、そのモモを受け止め損なって押し倒された美希だ。なかなか派手に転がったが、ぶつかった際に後ろに回したモモの腕が緩衝になったお陰で、美希に怪我は無い。だが見た目よりもずっと重いモモの下敷きになって動けずいた。

モモはモモで、厚い冬着越しでも分かる美希の大体積な胸部に顔面を半分ほど埋めて、そこから動き出す様子はない。『条件付け』の『担当官を護れ』という命令と蔵馬の『斎藤美希の傍にいろ』という命令が衝突してフリーズを起しているのか、走り消

えた新幹線をぼんやり見送っていた。

そんな二人は、京都駅のホームを往来する人々の目を自然と集めていた。当然である。公衆の真ん中でいつまでも抱き合ったまま動かない少女は、日常風景とは決して混じり合わない。

今は目立つちやダメだろうと、一介の女子高生である美希ですら、それくらいの頭は回る。ここまで来ると、一周周って美希の方がいくらか冷静になっていた。固まるモモへの呼びかけのつもりで、美希はモモと同じ方向を向いて呟いた。

「……………行っちゃったね」

「あ、う……………行っちゃいましたね」

「……………これからどうする?」

「……………えっと」

モモはザワザワと毛羽立つ心内を胸中に抑え込み、美希の上から起き上がる。美希を抱き起して、ガンケースを背負う。そして深く深呼吸。

よし、落ち着いた。モモは蔵馬のことは一旦頭の隅に置いて、自分たちの今後について思考する。

ともかく、ここに止まるのは良くない。

「……………移動しましょう」

モモは美希の手を取って、ホームから改札へ向かって歩み出す。

「改札出ちやうの?」

「私たちがこの駅にいることは、たぶん敵にバレてます。とにかく動いて……あと電話……」

蔵馬に与えられた二つ目の命令。センターへの連絡。

これを実行に移すべく、モモは人の流れに出来るだけ逆らわないように、人と人の隙間を縫うように移動し続ける。そして周囲を最大集中力で警戒しながら、電話を探した。

「モモは携帯持っていないの?」

「持っていないです。美希さんもまだ返してもらってないですよね」

「うん。ところで携帯持っていないって事は、探してるのは公衆電話だよな?」

「はい」

「お金持ってる?」

「……持っていないですね」

モモの形の良い眉毛がキュツと傾く。

電話を渡さずお金も持たせず、一体どうやってセンターと取れと言うのか。普段からそこそこ意地悪な男だが、これは少し度が過ぎる。今朝の尻の件や報告書の件もある。



どうにかしてあの男に報復したいところだが、その算段は後に取っておく。

ともかく電話だ。どうしたものかと思案したが、京都駅の中央口広場に出て、答えはあっさりと出た。

「借りましょうか」

「借りるって……誰に？」

「その辺にいる人にです。みんな携帯電話持つてるでしょう」

モモは妙案得たりと得意顔になって美希に振り返った。

モモの言う通り、現代日本に携帯電話を所持していない人間などほんの一握り。ほぼ国民に普及していると言つてもいい。現に二人がいる中央口付近には携帯電話のディスプレイを眺め、あるいは通話をしながら往来する人々が数える気も起きないほど大勢いる。

しかしそれは持っている持っていないの話であつて、貸してくれるかどうかは別の話である。普通は見知らぬ人間に、自分の携帯電話を貸したりはしない。美希だつてそうであるから、モモの案に苦笑いを浮かべるしか出来なかつた。

難しいんじゃないかなあ、と美希がモモに世間の常識を説こうと口を開いた、が。

「じゃあ借りてきますねー」

美希の言葉を聞くよりも先に、止める間もなくモモはふらつと駅構内案内板の横でス

スマートフォンをいじる大学生風の青年のところへ行ってしまった。

一体何と言って借りる気なのか。こうなってはもう、モモにすべて任せる事にした。美希はモモの後を追いつながら、彼女の交渉の行く末を遠巻きに眺める。

普通は無理だ。だが一方で、モモは普通とは掛け離れた規格外の美貌を搭載した、『傾国の』や『絶世の』を枕詞にしても良いくらいの美人だ。彼女が頼めば、あるいは可能性が無きにしても非ずかもしれない。

ところがモモはニコニコしながら青年に近づいたかと思えば、

「こんにちは、少し携帯お借りますね」

と挨拶を置いて、返事も聞かずに青年の手からスマートフォンを奪い取ってしまった。交渉ですらない。強奪だ。

「えっ? ちょっ? 君? ……なに?」

一瞬驚き、五瞬ほどモモの美貌に呆けていた青年だが、携帯を唐突に奪取された事実をゆっくり飲み込む。そして疑問符だらけの戸惑いの声を漏らした。混乱するのも無理はないだろうが、モモは青年の当惑に意を介さず勝手にナンバーディスプレイをプッシュする。

「あの、すみません。ちょつと携帯お借りします……」

モモの代わりに美希が謝るが、青年も突如現れた小娘に私物を盗られて、それで納得

できる訳がない。次第に不快感を露わに、眉を吊り上げて詰め寄ってくる。

「えつと、何なの君ら？ とりあえず俺の携帯返してもらえない？」

「ごめんなさい、ごめんなさい、これにはちよつと事情が……」

「済みません、電話中なのでお静かにお願いします」

どこの国の社会常識に立つても違反側に立っているモモが、何故か美希と青年二人に対して非常識を咎める様な顔をして唇に指を添える。

モモのぶつちぎり具合に圧倒され、また呆れ返って二人はついに言葉を失う。

その沈黙に満足したのか、たった今電話に出た相手に意識を傾ける。

「もしもし」

『……もしもし、その声はモモちゃんですね？』

モモは「条件付け」による教育によって記憶させられた、緊急連絡先の番号にダイヤルした。恐らく作戦部か諜報部どちらかのデスクに繋がるのだろうと思っていたが、しかし電話に出たのは予想に反し、先ほど自分たちを見送った坂崎だった。

「はい、モモです。この番号って坂崎さんの番号だったんですか？」

『厳密に言えば違いますが、まあそれに近い物です。ところでモモちゃん、どこから電話掛けてきますか？』

「京都駅です」

『京都……なるほど……。あとその携帯も支給品ではありませんね?』

「はい、近くにいた人に借りました」

「貸してねえよ……」

青年がぶつりと呟いたがモモは無視し、美希が代わりにペコペコ頭を下げる。

『民間人の……ではその携帯は返さずに持ち帰ってください。もし持ち帰れなさそうなら、メモリチップを必ず破壊してください。いいですね?』

「分りました」

『では話を聞きましょう。どうしましたか?』

「えーっと……」

ここでようやくモモは青年の方を一瞥する。部外者の民間人が聞き耳を立てている環境で、開けっ広げに語るわけにはいかない。どう説明すればいいだろう。いっそ移動したほうがいいか。モモは人気のなさそうな場所を探してキョロキョロと周囲を窺う。その間に、坂崎の方でガサゴソと異音がした。

『あ、モモちゃんちよつと待っててくださいいね』

そう言ってから、坂崎の声が遠ざかる。他の誰かと会話しているらしい。よく聞き取れないが、『釣りのコツは』や『釣果は十分』などという言葉の断片が聞き取れた。どうやら釣りの話をしているらしい。

坂崎の話は一分そこらで終わったようで、再びこちらに戻ってきた。

『お待たせしました。いま蔵馬さんから連絡がありました。貴方達の状況もだいたい掴めました』

蔵馬の無事を聞いて、モモはそつと胸を撫で下ろす。蔵馬なら無事だろうと信じてはいたが、それでも義体の本能が担当官の安否を慮るのだ。

「釣りの話じゃないんですか？」

『よく聞き取れましたね……。気にしなくて結構です。それで、モモちゃんは何か報告状況はありますか？ 連絡が出来ているという事は、現在敵からの襲撃は受けていない様ですね』

「はい、今のところは特にありません」

モモは周囲をぐるりと確認するが、異常は見られない。

『そうですか。蔵馬さんは新大阪で降りるそうです。今からうちの職員をそちらに向かわせますので、モモちゃん達も新大阪へ向かってください』

「了解しました」

ようやく行動の道しるべが立てられた。自分は所詮道具なのだ。ああしろこうしろと命令されている状態が一番落ち着く。

安堵の籠ったモモの肯定に、坂崎は声のトーンを少し落として続けた。

『モモちゃん、齋藤美希さんを連れたままで大丈夫ですか？』

「どういう意味ですか？」

突然だった坂崎の問いかけに、モモは面を食らう。

『もし自分の身が危ないと思ったら、逃げたっていいんですよ』

「……………それは」

モモの一度落ち着いた心が、坂崎の言葉で再び冷える。

坂崎は何を言っているのか。

それは齋藤美希を放棄しても構わない、という意味だ。

もう齋藤美希に護る価値は無くなった、という意味だ。

あたかもモモの身を案じる様に言った坂崎の台詞は、実質護衛任務の終了を意味する。

義体は命じられれば自身の身を、言葉通り盾にすることも厭わない。モモは当然、美希に危険を及ぼすものがいれば排除し、身を挺して守るつもりでいた。何故ならそれが命令だったから。だがその命令が解かれた今、自分が美希と一緒に行動する意味はあるのだろうか。

ざわざわ護衛任務を立案したのは坂崎だ。この期に及んで、坂崎は何がしたいのだろう。モモに彼女の考えが少しも理解が出来ない。

返す言葉に窮して、モモは黙りこくってしまった。

そして無意識に美希の方を見る。

その視界の動きが、何かを捉えた。

中央口改札の奥。チラチラと映るのは派手な金髪だ。自然とモモの視線はそちらへ向かう。

その派手な金髪には見覚えがある。そしてその下にある顔も記憶に新しい。軽薄という言葉のモデルケースに相応しいチンピラ顔。そして彼の周りには大柄の男が三人。昨日厚木で出会ったヤクザだった。

「……………」

そして金髪が突然顔を巡らせ、モモとバッチリ目が合う。

『大丈夫ならいいんです。モモちゃん、職員の到着まであと十五分ほどありそうですけど、それまで京都駅で待機できそうですか？』

「あー、無理そうです」

「いたぞー！」

金髪がモモを指差して叫び、同時にモモは電話を切って美希の手を掴んで駆け出した。

「あー！ おい！ 俺の携帯！」

「もう少しお借りします！」

そう言い残して、モモは美希を引いて京都駅から外へ駆け出た。突然だったモモの動きに目を丸くして足を纏れさせた美希だったが、昨日のヤクザが追ってきている事に気付いて駆け足の上速度を上げる。

「昨日からこんなものばかり……」

「タクシーに乗りますよ！」

ヤクザ達が改札で手こずっている間にタクシー乗り場に辿り着いたモモたちは、最も手近な客待ちタクシーの後部座席に飛び込んだ。モモは身を乗り出して運転手に出発を急かす。

「新大阪駅まで！ 全速力で！」

「分りました、シートベルトをしてください」

運転手はシートベルト着用を促し、モモが従ったのを確認してからタクシーを走らせ始めた。ほとんど入れ違いの形で、ヤクザ達がタクシー乗り場にやって来る。モモたちが乗るタクシーを追って走ってくるが、成人男性の全速力は平均で時速25km。ギリギリ発進したタクシーの方が早かった。

「……お客さん、あの方々は……」

「無視してください。前だけを見て、急いで新大阪駅へ向かってください」



あの連中を無視するなどやや無茶な要求だが、運転手はそれ以上言及せずに車を走らせる。ややこしそうなことには首を突っ込まない主義なのだろう。

タクシーは大通りに乗って、京都の街を南へ下って行く。交通量の多い大通りにいれば、さすがに無茶な襲撃は避けられるだろう。

モモと美希はリアガラスに張り付いて追手を探すが、それらしい影は無い。どうやら撒けたらしい。

二人そろって深いため息を吐き、シートに深くもたれ掛かる。

娘二人で落ち着かない状態だったが、何とか蔵馬と合流できそうだ。美希も大人の不在は心許なかったが、担当官と離されたモモのストレスはその比でない。蔵馬と離別してまだ十分ほどだが、モモの顔には疲労の色が浮かび始めていた。

「……ところでモモ」

タクシーに乗り込んでしばらく経ってから、美希は運転手には聞こえないように、モモの耳に顔を近づけ小声で囁く。

美希が気になったのは運賃メーターだ。そろそろ五千円を超えそうだ。

「運賃どうするの？」

「あー……この携帯で現物支払い、は駄目ですね。これは持って帰らないと」

「いやそれ盗品……」

モモの発言からやはり考え無しだったと理解して、美希はもう慣れたのかそれ以上のツツコミは無かった。まあ運賃は今無くて問題ではないと気を持ち直す。新大阪駅に着いてから蔵馬に払ってもらえばいいだろう。

ただ、モモは普段でも支払いのことを考えずにタクシーに乗りそうな気がする。たった二日程度の付き合いだが、美希は段々モモの人となりが分かってきた。

この娘、知的で思慮深い、深窓の令嬢然とした見た目をしている癖に、結構考え無しでバカだ。何をするにしても突然で、空気を読んでいる様で読めていないことが間々ある。

でも優しい。

そんな彼女は——政府の殺し屋だ。

「どうかしましたか?」

「……ううん、何でもない」

美希の視線に勘付いて小首を傾げるモモから目を放し、美希は窓の外に目を向ける。京都を出て、高槻市を抜けたタクシーは大阪市郊外にまで近付いていた。

車窓の風景は時々美希の見知った土地があり、家恋しさが湧いてくる。そう言えば、自分は家出しているんだつと、美希は二日前までの自分を思い出す。家出なんてするんじゃないかった。ちよつとした衝動と若気の至りのせいでこんなことになってしまっ

とは。

美希が自身の軽率さを反省していると、車内に右向き of 遠心力が掛かる。タクシーが左折したのだ。曲がった先は大通りから外れた支道だ。

おかしい。

関西に住んでおり、大阪へも家の都合で良く出向く美希だから気付けた。新大阪駅へ向かうのに、大通りから外れる必要などないはずだ。

「どうして通りから外れたの？」

美希の運転手への問いかけで、モモに自分たちが大通りから外れたことに気付いたらしい。

モモの危機察知が特大のアラームを鳴らす。

「どうも大通りが混んでいるみたいなんで、別の道へ移るだけですよ」。

「——っ早く通りに戻っ」

戻って。その言葉の途中で、モモの耳は異音を掴んだ。ゴムが焦げ削れる音と、野太いエンジン駆動音。それが後方から凄まじいスピードで迫ってきた。

モモは隣の美希を被さるように抱き抱え込む。

次の瞬間に訪れた、爆発にも似た衝撃。

大砲を撃ち込まれたかのような轟音と震動が車内の三人を襲い、身体を打ち揺さぶつ

た。

「きゃあああー！」

美希の悲鳴はタクシーが破砕する音に飲まれる。

衝撃の原因は、自動車による追突だ。

突っ込んできた車は黒塗りのセダン。全ての窓には黒スモークが貼られている。

黒セダンの数メートル後ろにはタイヤ痕が残されており、明らかに突撃目的で急加速したことが窺える。故意の衝突を受けたタクシーは道路脇のガードレールに突っ込んで、車体をあちこち歪め凹ませて白煙を上げていた。

黒セダンはバックして加速点まで戻る。タクシーに動きが無いのを確認して、ドアが開いた。中に乗っていたのはモモに京都で巻かれた金髪のチンピラヤクザ——大柳組の八木と二人のヤクザだ。

八木は運転席の窓を開けて、車外の二人に支持を飛ばす。

「早く斎藤美希を拉致れ」

人気の乏しい支道でも、自動車の衝突事故があればすぐに人が集まってくる。誘拐するにしろ、死亡を確認するにしろ、時間に余裕はない。

八木としては死んでいてくれた方が運ぶ苦勞が無くていい。いままで何度か同じように、衝突事故と見せかけて人を殺してきた経験からすると、三割くらいの確率で死ん

でいるだろう。もし生きていれば、もう中から這い出てきている。その動きが無いという事は、死んだか、瀕死の状態のはずだ。

二人のヤクザはタクシーの両側に回り込み、中を覗き込む。

右側にいた方のヤクザが、中の状態を八木に伝えようと口を開く。

だが彼が声を発することは無かった。内側から蹴り開けられたドアに殴られて、身体  
の骨と内臓を半分潰して吹っ飛ぶ。

残ったヤクザは驚く間もなく、タクシーの中から散来したタボールの銃撃を全身に受ける。身を腐り潰れた柿の如く赤く弾けさせて、声も挙げずに死んだ。

「くそっ！ 生きてやがった！」

仲間の惨状を見て八木は悪態を吐き、再びアクセルを思い切り踏み込んだ。だがタクシーに接触するよりも早く、タボールの銃把を握ったモモは、気を失った美希を担いで蹴り破ったドアから脱出していた。

金属が割れ砕かれる轟音。

モモは飛び散る車の破片を、集る羽虫を払うが如くタボールの銃身で弾く。

タクシーの尻に食い付いて動けなくなった黒セダン。エアバッグを取り除いている為、八木は額をハンドルにぶつけて意識を失っていた。

モモは意識の戻らない美希をへしやげたガードレールにもたれ掛けさせると、黒セダ

ンにゆっくりと歩み寄る。

「もしもし、起きてください」

空いた窓からタボールの銃口で八木の頭を突く。

銃で揺さぶられて意識を取り戻した八木は、すぐ横のモモに気付いて顔を青くした。頭に突き付けられた銃口へ対する恐怖もあるが、それ以上に八木の胆を冷やしたのはモモの状態だった。

傷一つ無い。厳密に言えば多少の擦り傷や打ち傷が散在しているが、しかしモモが遭った衝突の威力は、本来人を死傷せしめるものである。転んだ程度の怪我で済むはずがないのだ。

「化け物が……何で死なねえんだよ……!」

恐怖と緊張に喉を震わせながらも、齒の隙間からそう絞り出した。

「凄く丈夫で強いんです」

「雌ゴリラが……!」

「ふふ、口が減りませんね、見た目より根性あるじゃないですか。まあいいです、それよりどうして私たちの位置が分かったんですか？ 教えてください」

「教える訳ないだろ……!」

「そうですか」

情報が得られないなら、生かしておく必要も無い。

モモは引き金を絞る指に力を込めるが、人の接近の気配を察知して身を引く。人殺しの様子を民間人に目撃されるわけにはいかない。見られたら、見た人全員を殺す必要が出てくる。タボールを下ろしたモモに、八木は生還を感じてヘラヘラ笑い始める。

瘡に障る顔だ。

モモは表情の無い氷の貌で、その下卑た笑いの上に乗った金髪を鷲掴み、顔面をハンドルに叩き付けた。八木の前歯が、歯茎を突き破って内側にへし折れた。

「ふおっ、い、おおおおおおお」

八木の絶叫を背後に、モモはタクシーの中からガンケースを引つ張り出してタボールを突っ込み、失神したままの美希を背負う。

人が集まってきたが、幸い野次馬たちの注意は、大破したタクシーと道に伏すヤクザの死体に注がれている。誰にも呼び止められること無く、事故と死体と痛みに呻くヤクザを置いて、ふらふらと歩み始める。

蔵馬と別れて一時間と少し。もうすぐ四時を回るだろうか。

十二月の空は移ろいが早い。空は西から橙を含み始めている。

大阪の街を彷徨いながら、モモは白い息を吐いた。

「新大阪駅……どっちだろう……」

## 第16話

肌に噛み付く凍れる乾気を注ぐ空は、既に薄暗い。十二月の夕暮は瞬く間に夜闇に溶ける。濃紺の空に覆われたから風の吹き荒ぶ大阪の街を、モモはいまだに失神したままの美希を背負ったままひよこひよこ歩み進んでいた。

モモの美しく流れていた髪は乱れ、寒さに反して微かに汗がにじんでいる。蔵馬に買って貰ったばかりの赤いコートは車のオイルやらなんやらで汚れ、一部破れてしまっていた。ローファーも片足ぶつ壊れたタクシーの中に忘れてきてしまったらしく、右足にしか靴を履いていない。

背中に美希を担ぎ、銃が収められたギグケースを肩から前体にぶら下げる様は、クラスみんなのランドセルを担いで帰る、いじめられっこの小学生を髣髴とさせる。

大破したタクシーから抜け出したモモは大通りに戻ると、往来する人々に新大阪駅の方向を尋ねると、駅へ向かって黙々と太臈を進んでいた。すでに数十分は歩いただろう。坂崎にもう一度連絡を取ることが出来れば良かったのだが、自動車で追突された衝撃は借りた携帯電話を粉々に破損してしまっていた。

モモは背中の美希を背負い直す。その揺れに美希は小さな頭をカクンと動かすが、目



を覚ます気配はない。なかなか覚醒しない美希に、一時は重篤かと焦ったモモだったが、美希の呼吸は安定しており、時折むにやむにや言っているの、単に眠っているだけだろうと判断していた。

昨晩は眠れなかったような事を言っていたし、疲れも溜まっていることだろう。眠れるならば眠っておいた方がよい。それに、起きていたとしても、美希はもう自力では歩けまい。彼女の右足首は強く打ちつけてしまったらしく、青々と腫れあがっていた。骨折している可能性もある。仮に骨が無事でも、腫れが引くまで一步も動けないだろう。

「……………うー、寒いなあ」

師走の寒風が一迅吹き付け、モモは思わず立ち止まって身を縮こませる。夜になると寒さも一入だ。立ち止まって、モモは自分の息が少し上がっている事に気付いた。冷えた大気を深く吸って、替りに白い息を吐き出す。それを三回繰り返してから、再び歩き出した。

冷えた指先や耳に痛みは無い。義体は戦闘用というその用途上、痛み鈍感に出来ている。だが痛みを消しても、寒さは取り除いてくれないらしい。それに腹の辺りも何故か寒い。まるで指先や側頭部、お臍の辺りから氷水を注入されている様な、奇妙な感覚だ。寒気に身体の末端部から徐々に体深部を侵食されていて、不快な寒さが氣力を削ぎ落す。

背中にも当たる美希の胸の辺りが柔らかか温かいのが救いだつた。他者の巨乳を嬉しく思ったのはこれが初めてだ。おっぱいは脂肪だから発熱効果は無いと、早朝の訓練場で寒そうに身体を揺すりながら言っていた石室の言葉を思い出す。確かに発熱はしないだろうが、柔らかい物は柔らかいというだけで価値があるのだ。柔軟な物に触れていると、それだけで気が紛れる。

「……………」

急に脚の力が抜けた。

倒れ込みそうになるのを、歯を食いしばって堪え、深呼吸。モモは自分の脚を見下ろす。所々破れた黒タイツに包まれた脚は、小刻みに振るえていた。振るえが収まるのを待ち、そして再び力が入ったのを確認して、移動を再開した。

「……………」

口に出したからどうかなる訳でもない。蔵馬がいたら泣き言言うなど頭を叩かれるかもしれないが、つい声に出る。

寒い。妙に寒い。

手や素足の左足も寒い、それよりもお腹がやたらと寒い。

不審に思い、モモは足を止めた。体の前傾を深くして美希を背中で支え、右手を美希の臀部から放して自分の腹を探ってみる。臍の右横辺りが濡れていた。羽織ったコー

トの生地までたつぷりと水気を含んでジクジクと湿っている。ここから体温が吸われていたようだ。

寒さの原因は分かったが、しかし何故ここが濡れているのだろうか。

腹をなぞった掌を見ると、真っ赤に濡れていた。かすかに鼻腔に届く鉄臭さ。血液だ。

「……困った」

モモは周囲に歩行者がいないことを確認すると、傍にあつた道脇の電柱の陰に身体を隠し、服をめくる。本来は白く滑らかな肌があるはずのそこは鮮赤に染まり、細長い針金のような物が深々と突き刺さっていた。タクシーの中で美希を庇った際に、破碎し飛び散った車の部品だろう。衣類を貫通してしまっていた為、そして興奮状態による鎮痛物質の大量分泌の為に気付かなかつた。この怪我のせいで寒さに悴んでいたはずの四肢に痛みが無かつたのだろう。

義体は負傷も無視して任務を継続する為に、外傷を追つた場合、大量の鎮痛物質が脳内に分泌される。しかしこれだけの負傷に気付かないとは、相当な量の脳内物質が分泌されている証だ。義体は脳が動くたびに脳細胞が死滅し委縮する。この数十分で、何日分の寿命を失つたのだろうか。

「クラマさん、怒るかなあ……」

モモは針金を爪先で摘まむ。抜いてしまいかどうか、一瞬悩んだが、刺さったままでは傷が広がる恐れがある。抜いてしまう事に決めて、モモは一気に引き抜いた。腹腔から出てきた針金は10センチほどの長さで、ぬるりと赤黒い糸を引く。針金が抜けて空いた穴からとぷつと色の濃い血が吹き出すのを手で抑える。

義体の血液は赤血球が多く含まれているが、血小板も多い。多少の傷ならすぐに塞がってしまうが、この傷はどうだろう。内臓まで負傷していたら応急処置が必要だろうが、痛覚が無いためどの程度の怪我なのか判断が付かない。判断出来たところでどうしようもないが。

どっちみち今できることなど限られている。早く蔵馬と合流するしかない。

モモはコートのポケットからポケットティッシュを取りだして丸めると、傷口に捻じり込んだ。これで一応の止血にはなるだろう。

残ったティッシュで衣服に染み込んだ血を拭き取り、服を正してモモはまた歩き出した。

赤いコートを着ていて良かった。大ききの割には歩行者の少ない道を通っているが、すれ違う人はゼロではない。ボロボロのモモが同年代の少女を負っているだけで人目を引くが、それでも『変なのがいるなあ』程度の奇異の目で見られるだけだ。これに血染め衣装が加われば通報不可避だったろうが、血がほぼ同色の生地のお陰で、目立た

ずに済んでいる。

いや、いつそ通報された方が良かったのだろうか。

どんな手段を講じているのかはモモの与り知らないところだが、恐らく美希を狙う連中は、ある程度こちらの位置を把握している。

次の瞬間、またクルマで突っ込んで来てもおかしくないのだ。地元の警察に一度保護してもらってから、蔵馬が迎えに来るのを待った方が美希の安全を考えると上策だったかもしれない。

しかし自分は、人間基準で見れば大怪我を負っている身だ。もし病院に連れて行かれて血液一滴でも検査されるとまずい。それに弾薬てんこ盛りのアサルトライフルと拳銃を携帯している。もし見つければ、武装した女が警察署内に潜入してきたと大騒ぎになってしまう。

秘匿性第一のセンターにとって、最も起こってはならない事態の一つである。非合法の料を結集した国立児童社会復帰センターにとって一番怖いのは、皮肉なことに警察や法務省といった国家権力なのだということが、義体になって初めに教わる事だ。

警察に助けを求める案はやはり却下。根性出して歩こう。

黙々と足を動かすモモの頬に汗が伝う。すれ違うクルマのライトに煌めくそれを肩口で拭って、気付く違和感。

発汗しているなら体温は上昇しているはずだ。だが寒気が溶け出す気配はない。それどころか感じる寒さ徐々に増している。どうやら単純に体が冷えている故に得ている寒気では無いようだ。

脳のどこかが誤作動を起こしているのだろう。よくあることだ。

痛覚を消して、本来の体感体温すら消し去って、偽りの感覚を創り出す。

本物の部分など存在しない義体にとって、何かの弾みで起こる日常的な不具合。構造の解明すら碌に終えていない脳という未知の器官に、未発達で実験的な人的処置を加えた当然の帰結としての動作不良。

感じるはずの無い感情を得て、感じるはずの感情を得ない。

何かを異常に恐怖して、あるいは何かを異常に固執する。

戦場では身体のどこにも痛みを感じない。

だが、痛みは一切を感じない訳では無かった。

戦場では負わない痛みは、日常の中にこそある。

身体では無いどこかが、無条件で無作為で無意味な痛みを感じてしまう。

何が痛いのか。自分だけが痛いのか。どこが痛いのか。一体いつの傷なのか。何故痛いのか。

今も、身体はどこも痛くない。腹に穴を開けて、全身に擦り傷と打撲を受けて、タイ

ツ一枚の足裏に小石を踏んでも、何も感じない。

だが、身体では無い『どこか』に、ずっと痛みを抱えていた。

「……………ん……………」

背中の美希が小さく息を漏らした。

その声を聞いて、モモの『どこか』がまたチクリと疼く。

美希と一緒にいると、モモの『どこか』は疼痛を感じていた。不快感は無い。もちろん心地よい訳も無い。

彼女と出会った時からこの痛みはあった。

マクドナルドの店内で、苦しんでいるような、後悔しているような、不幸せそうな顔をして、ぼんやり頬杖をついている美希を見かけた瞬間に感じた痛み。初めて得た微かな痛み。これも脳の誤作動なのだろう。幻肢痛に近い、脳だけが感じる存在しない痛みなのだろう。

だがモモは、無視してもいいこの痛みの正体が気になった。故に自覚の有無はさて置き、好奇心に駆られてわざわざ彼女の前に座ったのだ。

あの時に得た好奇心の正体を、モモはまだ掴んでいない。

だからだろう。坂崎に美希を見捨てても良いと暗に言われたにも関わらず、いまだに彼女と共にいる事を選んだのは。

例え蔵馬に美希と一緒にいるように命令されたとしても、序列は坂崎の方が上だ。離れても良いと許しを得たのだから、『センサーからの命令を遵守する』という条件付けの絶対の強制力からも、モモは既に美希から解放されている。

京都駅で見捨ててもよかった。タクシーの中に放置してもよかった。

今眠りこけてる美希を道端に捨て置いて、一人で新大阪駅に向かつてもいいのだ。

身の安全を考えればそうして然るべきだ。例え蔵馬の命令に背いたことになっても、腹の傷を見れば、仕方がないと納得して治療に出してくれるだろう。

しかしモモは頑なに、美希の傍から離れずにいる。美希と共に行くことを選んでい

る。

「……………う……………寝てた……………」

背中に乗せた肉付きの良い身体がもぞもぞ蠢く。寝ぼけ頭は浮いた足の裏が不安らしく、地面を求めて脚で宙を搔く。

「動いたら落っこちちゃいますよ」

ずり落としかけた美希の尻を抱え直し、モモは首を回して美希に笑いかける。

「おはようございます」

美希は三白眼をシパシパ瞬かせて、周囲の状況を咀嚼しようとするが、状況が良く飲み込めないらしい。先ほどまでタクシーの中にいて、強い衝撃を受けて気を失い、目覚



めたらモモに背負われてどこかの街中にいるのだから無理も無い。

「おはよ……ここ……どこ？　　どういう状況？」

「どこまで覚えてますか？」

「えつと、タクシーに乗ってて、凄いガン！　　つてなつて……それで今」

「だいたい覚えてますね。タクシーにヤクザが突っ込んで来たので逃げました。今は美希さんをおんぶして新大阪駅に歩いて向かっている最中です」

「また守ってくれたの？」

「はい」

「そっか……ありがとう……だからモモ、ボロボロなのか……怪我、怪我はしてない？」  
モモは一瞬返答を思索し、嘘を吐く事に決めた。腹の傷を見せたら、きっと美希は自分に責任を感じるだろう。それは、なんだか嫌だった。

「大丈夫です、私はとても丈夫なんです。美希さんこそ、右足が腫れてますけど痛みませんか？」

「え？　　わ、本当だ……。自覚したら痛みがちよつと来たかも……」

「分かりました。このまま行きましょう」

「ごめんね……その、重くない？」

体重に関して何か思うところがあるのか、美希は遠慮がちに尋ねてくる。

「問題なしです。軽いですよ」

義体にとつて、高々数十キロ程度のウェイトなど苦にもならない。イタリアでは50kgの爆弾を単独で持ち上げた例があると聞く。美希が平均的な女子高生の体重を多少オーバーしていたところで、モモにとつては無いに等しい差だ。

軽いの一言に美希はあからさまな安堵を見せた。よほど気にしているのだろう。

「あれ、モモ靴片方ないじゃん……私の履けば？」

「サイズはいくつですか？」

「24センチ」

「履けませんね……」

「24で履けないか……。はは、モモつてところどころサイズ大きいよね。背も高いし、胸はそうでも無いけどお尻とかかかかかか！ 痛い痛い！ 尻をつねるな！」

「またお尻の話をしたら私より大きく腫れあがるまで打ちますよ」

「ご、ごめん……」

温和なモモの琴線に触れて、美希は少し縮こまった。だが、完全無欠の美少女に見えていたモモにもコンプレックスがあることを知り、そこに触れられムキになる彼女に愛嬌を感じたのだろう。美希は溢すようにして笑う。その失笑にモモも釣られて笑う。

「笑ってる場合じゃないんだらうけどね……」

「でも、ムスツとしてたつて仕方ありません。クラマさんも言っていました。人間深刻そうな顔をするのは機嫌の悪い上司の前にいる時だけでいいって」

「あの人ずつと深刻そうな顔してるけどね……」

「クラマさんが本当に深刻な顔をしたらもつと凄いですよ」

「何と無く分かるわ……こう、仁王系？」

「におう？」

「そっか……モモは仁王さまを見たことが無いか……せつかく大阪まで来たんだから、ついでに東大寺に寄ってみなよ。蔵馬さんと一緒にさ」

「連れて行つてくれるかな……」

「モモみたいな美少女の誘いを断る男が、この世に存在するもんですか」

「クラマさん普通に断つてきますよ。全然優しくしてくれないし、意地悪だし、ひどい人です」

「でも好きなんだよね……？ 見てたら分かるよ」

「好きですけど……そんなに分かりやすいですか？」

「そりやもう……確かに蔵馬さん格好いいけどね。良い声してるし、顔の彫り深いし、背も高いし、声も低いし。身体大きい割に指が細めなのもポイント高い。あと声。モモは蔵馬さんのどこが好きなの？」

「どこ……全部？」

「全部か……もうちよつと具体的な話が聞きたかったけど、全部なら仕方ないね。まあ、頑張つてアタックしなさいよ。とりあえずデートに誘つてさ」

「デート……行けたら、いいですね」

モモは立ち止まって、上がりつつあつた息を整える。

寒気は依然身体の芯に居座っている。それどころか、徐々に強まってきた。背骨まで凍り付いているのかと錯覚するほどだ。

「寒いですね……」

「そうだね。でも、モモが温かいから辛くはないよ」

「……。そうですか、良かったです」

やはり、体温と感覚がずれている。

寒くて仕方が無いはずなのに額から流れてくる汗に、つい乾いた笑いが出た。

「ふふ……」

それを疲労と見たのだろう。

美希はモモの肩を叩いて言う。

「下ろして、自分で歩くから」

「その脚じゃ無理ですよ」

「いいから」

配慮か、遠慮か、美希はモモから下りようともがく。

「はーやーくー!」

「もー! 我儘言つて!」

根負けして、モモは美希を下ろし、腰に手を当て薄く溜息。

歩ける訳がない。軽い捻挫で、いや、靴擦れ程度の怪我でも、人は歩行に何を来す。倍近くまで腫れた脚では立つ事すら儘ならないだろう。

コンクリートの大地に降り立った美希は片足で立ち、恐る恐る腫れた右脚を爪先から着地させる。

ほんの僅かな負荷が右足首に掛かる。体重の何十分の一の負荷。有つて無い様なストレス。それが引き起こした、焼き焦げる如き激痛。ジュツと白灼した石を氷浮く冷水に投げ込んだような音が、聞こえた気がした。

「痛——ッ!」

神経が軋みを上げ、条件反射で全身が振るえる。痛みに大腿の筋肉が痙攣を起し、視界が白く千切れた。目尻から涙が湧き出る。

大企業の重鎮の孫娘、そして敏腕外交官の娘として何の不自由も無く蝶よ花よと愛され育つた美希にとって、これまでの人生で味わつた事の無い、特上の激痛だった。

身体から力が抜けて、腰から碎けて崩れ落ちる。脂汗が染み出て全身を濡らした。

人間には我慢できる痛みの限界がある。一定以上の痛みを受けると身体は動作を停止し、それを超えると痛みを受容すると耐えられずショック死する。

精神を凌駕する人体の限界を、若干十六歳の少女は身を持って知ったのだった。

「痛った……い……」

「ほら、歩けないでしよう？ 乗ってください」

蹲つてすすり泣く美希にモモはコートから出したハンカチを握らせ、膝を折つて背中を向ける。

モモの言う通りだったと、美希は軽率な行動を反省する。

美希は涙を拭こうとハンカチを顔に近づけ、

「……………」

蠟人形の如く硬直した。そして顔が、恐怖と後悔と苦渋に満ちて歪む。ポロリと涙が零れた。それは痛みとは別の起因に発した、とても濃い一滴だった。

「……………」

ハンカチをきつく固く握り締め、涙も流れるままにして深く息を吸う。そしてギツと音がするほど奥歯を食いしばり、両手と左脚で体を起こした。肩で荒く息をして右足を浮かし、ケンケンと道端のフェンスに寄り掛かる。

「美希さん……?」

「いいから……。行こう」

ずりずりと、這うようにして壁伝いに動き始めた。

遅々として、蛞蝓の様に全身から汗を滴らせ、見るのも憚れる程の深い顰み面を浮かべて。

その姿は大怪我を負っているモモよりも痛々しく、そして焦燥的だった。

急かされる様にして必死に前に進む美希を、モモはしばらく黙って眺める。

だがそれも束の間の出来事だった。集中する力を痛みに削がれた美希は、バランスを崩して転げる。地面にぶつかると寸前で、モモが飛び出しその身体を受け止める。

「私はいいから……。大丈夫だから……」

自身を抱えるモモの腕を押し退けようとする美希。

美希の突然の変化を飲み込みきれず、モモは美希の正面に回り込む。肩を掴んで、顔を上げさせ、美希の涙に沈んだ三白眼を真っ直ぐに見据えた。

「美希さん……?」

「早く……。蔵馬さんのところに行かないや……」

「だったら私の背中に乗ってください」

「でも……」

「乗ってください。私は早くクラマさんのところに行きたいんです。」

強めの語調で言い、モモは再度背を美希に差し出す。

逡巡に三瞬ほど費やし、そして観念したように美希はモモの背中に身体を預ける。強く噛み締めすぎた唇には犬歯が貫き、口端から血が滲んでいた。

美希の身体をすっかり背負い込み、初めと同じように黙として進む。

「いめん……」

「どうして謝るんですか」

違うのは、二人の表情。

泣き続ける美希と、困惑するモモ。

何故、と問うたモモに、美希は手に握っていたハンカチを見せた。

モモの懐から渡されたハンカチ。それには、紅い血糊がべつとりと付着していた。

血塗れのハンカチを目の前に出されて、モモは己の失態に頭を垂れる。

「……怪我してるじゃん……!」

「……は、い」

「こんな……こんなに血が出るくらい怪我してるのに、今も私のこと背負って……私の事ばかり気付かって……!」

「……大丈夫なんです、本当に。気にしないでください」



「気にするよ！　するに決まってるじゃん！」

心の吐露。美希は泣きながら、己の額をモモの後頭部に打ち付ける。

「私と同じ歳の女の子がさ！　私のことを護るって言うんだよ!!　気にするよ！　だっておかしいもん！　変だもん！　モモは子供でしょ!!　私と同じただの女の子でしょ!?!　護る側じゃないもん！　変なのに狙われる私も変だけど……私を護るっていうセクター？　あれも変だけど……一番変なのはモモだよ！　おかしいよ！　気持ち悪いよー！」

モモの髪に顔を埋めて、美希は泣き続ける。

熱い水滴が首筋に流れる。寒さに侵された体の中でそこだけが温かい。

「気持ち悪い……ですか」

「うん、気持ち悪い……でも悪いのはモモじゃない……悪いのは、最低なのは……モモを気持ち悪いと思う私だ……」

嗚咽を耳の裏から感じながら、モモは美希の言葉を待つ。

「……モモはさ、政府の殺し屋なんだよね……？」

「……どこでそれを……？」

「眼鏡の人……坂崎さんが教えてくれた……」

「坂崎さんが……？」

坂崎は国立児童社会復帰センターの重大機密事項を、何故美希に話したりしたのでらうか……？

モモは疑念を募らせるが、とりあえずそれを横に置いて美希の話に耳を傾ける。それらの方が大切な様に感じたからだ。

「うん……。あの……。私さ……。昨日モモが話しかけてくれた時、嬉しかったんだ……。パパとママと初めてケンカして、勢いで家を飛び出しちゃって……。初めてあんな遠くまで一人で行って……。家に帰ってきたけどパパたちに会うのが怖くて帰れなくて……。それがモモに会う前……」

「はい」

消え入りそうな声に、モモは静かに相槌を打つ。

「誰も知らない場所で、寂しくて、だからモモが話しかけてくれた時は嬉しかった……。勝手にちよつと運命的な物とか、友情とか感じてたよ……。変わってるけどいい子だし、きつと友達になれると思った。この家出にも意味があったって思った。でも変な人たちに追いかけてられて、モモがピストル出した時には、感じた友情とか無くなっちゃってただ怖かった……。離れたいって正直思った」

「……はい」

「山奥のセンターに連れて行かれた時には何が何だか分からなくて、部屋に閉じ込めら

れた時は怖くて、さつきまでモモの事を怖いって、離れたいって思ってたのに、今度はモモに会いたくなつて……モモがまた会いたいな、助けてくれないかなつて都合よく……それで、坂崎さんに訊いたんだ。モモにまた会えますか？　つて」

「会えましたね」

「うん、会えた。坂崎さんも言つてた。『すぐにまた会えますよ』つて……それで、私調子に乗つて聞いちゃつたんだ……モモつて、何者なんですかつて……ホントに私、バカだよ……」

「……………」

「…………『モモちゃんは政府の殺し屋ですよ。見たのでしょう？　人を殺すことに何の感慨も抱かず、責任も負わず、ただ殺せるから殺す。殺した方がいいから殺す。殺せと言われたから殺す。そんなあの子を』つて……あの笑顔で……あの……笑つてない笑顔で……言われて、私またモモが怖くなつて……」

合点がいった。新幹線の中で思い至つた推測。

今朝から美希が見せていたモモに対する余所余所しき。見慣れているような、見覚えがある様な、慣れ親しんだ様な、あの態度。

あれは恐怖だ。自分に対して恐怖を抱く者が見せる、モモにとつては最もその身に受ける感情。

モモと相対する人間は、モモの正面に立つ者は、みんな彼女を恐れる。

人殺しだから。人を傷つけるから。みんなモモを恐れる。

だから見覚えがあつたのだ。知っていたのだ。

知っていた。美希が自分を恐れてる事は知っていた。

でもそれは、

「当然のことです。仕方のないことです。みんなそうなんです。美希さんは悪くありません」

人殺しが恐いのは当然だ。人殺しが恐いのは仕方のないことだ。誰だって人殺しは恐い。

だから、美希は悪くない。恐いのは——誰だろう？

「悪い……悪いよ……！ 最低だよ……！ 私はモモを受け入れて、拒絶してをずっと繰り返してる……モモはずっと同じなのに……私は自分の都合で好きになって、嫌いになって、会いたくなくなって、恐いと思って……私のせいで怪我してるのに、私はモモを気持ち悪いって感じてしまってる……最低だ……」

「悪くなんて……ありません」

「ごめん……モモ……ごめんね……」

泣き続け、謝り続ける美希に、モモは掛ける言葉が分からなかった。

否定ではないのだろう。許してはならないのだろう。

でも、何なら良いのだろう。自分は一体何と、背中の少女に言いたいのだろう。言葉を探るたびに『どこか』が痛む。まるで何かを伝えようとしているかの様に。だが結局、痛みは痛み以外の何も与えてはくれなかった。

●  
あの後。

モモは言葉を結局見つけることが出来ず、黙ったままだった。

美希も謝罪を最後に口を閉ざし、ただ泣き続けるだけだ。

「……………」

そうして道を行く事十分弱。

さすがにもう美希も泣き止んでいる。

泣いてすつきりした美希と、彼女の心中を聞いて朝からのモヤモヤを晴らした二人の間には近付き難いような、しかしずっと距離の縮まったような、良いとも悪いとも無い奇妙な空気が漂っていた。

ようやく互いの腹の内を半分はさらけ出した安心感と、自分を知られてしまった気まずさ。それらに未だ残る恐怖や申し訳なさや興味や好意が織り交ざった、そんな雰囲気。

街の騒音の中に流れる沈黙をモモは、周囲の街並みの変化から、そろそろ新大阪駅の到着を間近に控えつつあることを察知した。

このまま何も起こらずに行けばよいのだが、ゴールまであと少しというところで、モモは自身の消耗がやや危険な域に踏み込みつつあることを自覚していた。

歩幅が狭まり、視界がぼやける。手足が痺れて上手く動かすことが出来なかった。今敵と遭遇したら、まずいかもしれない。しかも往來人に教えてもらった新大阪駅への道順を進んでいると、いつの間にか人氣の全くない高架下の道に入り込んでしまっていた。まさに襲撃にはお誂え向きといった雰囲気の場合だ。

モモはこのままやり過ぎせることを祈りながら進んでいると、目の前に大きな河川が現れた。さすがに泳いで渡れない。どこかに橋は無いかと川の上下を見渡すと、いまままで沿って歩いてきた高架線の脇に歩道路が見えた。あそこへ行くにはどこを通ればよいのだろうか。

モモがキョロキョロと周囲を探っていると、美希が肩を叩いて来た道の方を指差した。河川敷からすぐそこに高架橋に登るための階段が見える。たった今横を通り過ぎ

たはずなのに、まったく気付かなかった。これは集中力の消耗も相当な域に達しているようだ。

しつかりしないと……。階段を一步、また一步と登りながら、モモはそう自分を叱咤する。

そして階段を登り切った瞬間。

「いっ……ぎゃ……！」

脳を鋸で挽かれた様な頭痛がモモを襲った。

思わず漏れた悲鳴は風に飲まれて美希には届かなかったのか、モモの異変に気付いた様子は無い。僥倖だ。これ以上心配を掛けたくない。

モモは吐き出しそうになる苦声を喉奥で嘔み潰しながら、橋を渡り始める。

長い橋だった。たった数十メートルの橋が、今のモモにとっては何十キロも歩いたようだった。

気が遠くなってくる。自分が歩いているのか、止まっているのか、身体の間隔が曖昧になる。遠くの物が近くに感じ、近くの物が遠く感じる。音が遅れて聞こえ、風の音、クルマのエンジン音、美希の声が溶けて交じって上手く聞き取れない。雑音の集合体にか感じない。

ただ、その雑音に混じって、何かが聞こえてきた。

やけに明瞭で、まるで耳の内側から聞こえてくるようだ。

パチパチと何かが爆ぜる音。

ゴウゴウと何かが燃える音。

ジウジウと何かが焼ける音。

この音は——一体何だ？

「——モモ！」

悲鳴に近い美希の呼び声に、ぼやけて渦巻いていたモモの世界に急に焦点があつた。

同時に聞こえてくるのは重い駆動音と、幾人もの男性の声。

気付いた時には、モモたちは男たちに囲まれていた。雰囲気からして分かる。彼らも

極道者だ。

迂闊だった。集中しなければ、警戒しなければと思つていた矢先にこれだ。

義体として完全に失格。『条件付け』の再処理もあり得る。

「居ました。親父の言う通り、はい、新御堂筋の橋です」

前に三人、後ろにも三人。携帯電話で話す男の口振りから、やはりモモたちの居場所を掴んで待ち伏せしていたようだ。それぞれが懐に手をつ込み、何かを握っている。十中八九武器の類だ。モモが怪しい挙動一つでも取れば、得物を抜くつもりだろう。

臨戦態勢に入った彼らには悪いが、モモに戦うつもりなど毛頭ない。



「美希さん、掴まって」

美希に小声で言い、モモは膝を曲げる。そして跳んだ。

跳ぶと言つても、数メートルもの大ジャンプを試みたわけでは無い。ほんの一メートルほど、横に跳ねただけだ。

だがここは歩道橋の上。一メートル横はもう空中だ。

橋から飛び降りたモモだったが、ここからは賭けだった。

まず、着地。素早く目配せして現在地が既に川をほとんど渡り切っていた事は確認済みだが、真下がどうなっているのかまでは未知だ。真下がまだ川の可能性もある。

次いで、もし下が着地に適した場所であったとしても、そこにもヤクザが待ち伏せしていないとも限らない。橋の上で待っていたのなら、周囲にまだ伏兵がいたとしても不思議ではない。

そして着地の衝撃に耐える自信がモモには無かった。歩道橋から地面まで、推定5メートルは少なくともある。

階段を登ることすら難儀した今の足腰で上手く着地出来るか、これが一番の賭けだった。

「あだっ」

「うわっ」

結論として、初めの賭け以外には全て負けた。

何とか河川敷に落ちることは出来たが、着地の衝撃にはやはり耐えきれず、モモは尻もちをついて美希を放り出してしまった。河川敷の傾斜を転がり土と枯草の屑を巻き上げる。

モモは転がりながらも手足を操り体勢を直すと、美希を引つ掴んで抱き寄せた。着地時に右足を接地してしまったのか、足首を押さえて振るえている。

「そつち行つたぞ！ 飛び降りやがつた！」

「大丈夫だ、もう囲んだ！」

橋の上から身を乗り出して叫ぶ男に呼応して、モモたちを中心に輪を作るのは三人の極道者。それぞれが手にマカロフを備えている。

ガンケースは転げ落ちた際に川沿いの遊歩道の方へ落としてしまった。モモは腰に収めていたP×4を抜いて、取り囲む男達に向ける。

それがオモチャでは無いと既に聞き及んでいるのか、彼らは包囲の輪を縮めるのを止め、拳銃を構えた。素人丸出し、まるで西部劇のガンマンさながらの構え方だったが、彼の距離は3メートルも無い。さすがにどれかは当たる。

モモは引き金に指を掛けながら、これ以上打つ手がない事を悟る。

美希が胸の中にいる以上、彼らに発砲させるわけにはいかない。構えるだけで撃つて

こない以上、連中の目的はこの場での殺害では無く誘拐なのだろう。こちらが抵抗しないなら、必要以上の危害は加えてこないはずだ。だが大人しく誘拐されて、美希も自分も無事に帰れる保証はない。ほぼ十割の確率で無傷では済むまい。

万事休す。どうしよう。焦りと不甲斐なさに、モモは血の味がする唇を嘔む。

その横あい、遊歩道から声が掛かった。

「伏せて」

聞き覚えのある少女の声スイッチになり、考える余地も無くモモは美希に覆い被さるようにして伏せた。その頭上を、弾丸の横列が殺意を持って通過する。

モモたちを囲んでいた三人は、横薙ぎの弾丸を受けて血を吹き崩れ落ちた。

「大丈夫?」

軽い足音が近付いてくる。覇気の薄い声に、モモは頭を上げた。

見上げた先には灰色のダツフルコートを羽織った、髪の高い短身の少女。

「アザミ……」

名を呼ばれたアザミは返事する代わりに手にあつたMP9短機関銃を掲げる。

「大丈夫?」

再度尋ねられた質問に、モモは力なく笑んだ。

「大丈夫ではない、かも」

「そっか、だいじよばないか。じゃあそこにいる」

微笑みを返すと、ダツフルコートの裏から替えの弾倉を抜いて口に咥える。モモたちを巻き込まぬように前に出た。

思わぬ加勢に慌てて橋から降りてくるヤクザ連中に片手で握ったMP9短機関銃の銃口を向け、引き金を引く。片手撃ちなど普通は碌な方向に弾は飛ばない。だが義体の凄まじい握力に固定された銃と卓越したアザミの射撃センスによって、9mm弾は目標へと真つ直ぐ駆ける。

フルオートの銃弾が残った六人の内二人を屠った。無警告の射撃に彼らは余計に慌て、そのままチンタラ階段を下りていたら格好の的になると思い、二人がモモと同じように橋から飛び降りた。残りの二人は橋の上からマカロフを突き出し射撃してくる。

空いている左手が弾倉を差していたベルトに吊っていたH&K45C拳銃を取り出し、威嚇射撃を加える。弾幕に怯えて狙いも付けないマカロフの弾はあらぬ方へ無駄撃ちされる。その間にアザミは短機関銃のマガジンを交換し、目の前に降ってきたヤクザを撃ち殺した。

あとは上の二人だけだ。

アザミが両手の銃を頭の上に向ける。

「あああああー！」

アザミの視線と交差して、橋の上に隠れていた二人が、放り出される様にして落下してきた。アザミは咄嗟に後ずさり、足元に銃口を落とす。

地面に激突した男は受け身も取れずに身体を打ちつけ、痛みを堪えられず半身が千切れた芋虫の様に背を弓形に反らしてもがく。もう片方は綺麗に頭から落ちたらしい。頸を折って死んでいた。

生き残った男は奥歯に噛んだ息を固い唇からひいひい漏らし、痛みよりも直近に迫った死への恐怖に鼻皺を寄らせている。

これなら銃を使う必要もあるまい。

アザミは銃の構えを解いた。それを助命と勘違いした男は、表情から恐怖と緊張をいくらか溶かす。その顔目掛けてアザミは脚を振りかぶり、半死で蠢いていた男の頭部を蹴り飛ばした。

表皮が裂けて肉が潰れ頸椎がへし折れる。千切れた首の肉の隙間から覗いた、気道らしい赤白い管がぶよぶよ膨縮していたが、すぐに動かなくなつた。

動く標的が消えたのを確認し、アザミは橋の上を見上げる。

「終わったかい？」

そこには優面に微量の冷徹さを含んだ笑顔の常盤がいて、ひらひら手を振っていた。彼が密かに橋に上がり、今死んだ二人を投げ落としたのだ。

「終わりました」

「じゃあ撤収だ」

常盤は橋から降りながら、携帯電話で控えていたセンター職員を呼び寄せる。戦闘を終えたアザミは体内の熱を吐き出す様に一度深く息をして、両手の銃器コートの下に戻すと、モモへと踵を返した。

「ボロボロだね、いつも通り」

「いつもじゃないよ……」

「いつもだよ。立てる?」

言つて手を差し出すアザミに侮蔑の色は無い。不出来な妹をからかう様な、そんな口調だ。

「……よくここが分かりましたね」

アザミの言葉に強くは言い返せずにやや憮然として、しかしその手を取つて、美希を抱えたまま立ち上がった。

「トキワさんが、奴らが待ち伏せするならここだつて」

「さすが常盤さん……。美希さん、大丈夫ですか?」

「うん……。この子は……?」

右足を庇いながら立ち上がった美希は、アザミに視線を投げかける。

「アザミです」

「名前じゃなくて……まあいいや。モモの仲間、なんだよね」

モモとアザミの領きを見て、美希は安堵の息を漏らした。モモよりも幼い殺し屋がいたことに驚きもあるが、今更取り立てて言及する気にもならない。

「ともかく……助かった？」

「助かりましたね……とりあえず」

二人は目配せして、大小の胸を撫で下ろしたのだった。

## 第17話

夜の大阪は闇が入り込む余地など無く明るい。煙草の吸殻や、吐瀉物の跡や、側溝から溢れた汚水で汚れた薄黒い地面は行き交う幾万の雑踏に踏み暖められ、街にひしめく人々は白い息を吐きながらも、頬を上気させていた。東京の都心部にある様な小奇麗さは無いが、しかし汚れた街特有の餿えた臭いも、体に纏わりつくような粘ついた空気も無い。寒さの中にも耐えずに燃える熱気が、この街にはあった。

都心部から少し北に軸を移した場所にあるビジネスホテル街。蔵馬たちは、玉石混淆する宿泊施設の中でも一際質素な、表の看板が無ければただのテナントビルにしか見えない古びたビジネスホテルにいた。

照明が切られた暗い部屋。固いベッドの他には小さなブラウン管テレビと異音のする冷蔵庫があるだけの、寝る以外の使用用途は想定されていないであろう狭いツインルーム。陰気な薄灰色の壁紙と恐ろしく趣味の悪い赤紫色のカーテンに囲まれた部屋には、煙草の臭いに混じって、かすかに消毒液と血の香りが残留していた。

ベッド脇のサイドボードには、消毒液や薬品の詰め込まれたタブレットケースが散在している。部屋の隅にあるゴミ箱の中には、血で汚れたガーゼやタオルが放り込まれて



いた。モモの応急処置の残骸だ。

傷の治療を受けたモモは、すうすう静かな寝息を立てていた。ほとんど沈まない安物のベッドに横たわる姿は下着一枚で、腹や大腿に包帯が巻かれ、細い腕には点滴が刺さっている。そこから伸びるチューブは、カランビットナイフで壁に縫い止められた輸血パックに繋がる。輸血パックには、本来なら必ず明記されているはずの血液型を示すラベルが貼られていなかった。

そして眠る少女のすぐ隣。ジャケットとベッドに放り、ワイシャツを腕まくりしたままの姿で、蔵馬は残ったベッドに腰掛けて、冷蔵庫の異音とエアコンの動作音が余計に際立てる静寂の中、STANAGマガジンに弾薬を黙々と詰め込んでいた。口にある煙草は唾えられているだけなのだろう。煙は真っ直ぐ真上に上がり、口元近くにまで燃えた火の尻には、長い葉灰が伸びている。

ドアノブを回す音がする。蔵馬は我に返ったように弾倉から視線を上げ、煙草が燃え尽きかけていることに気付いた。灰をベッドに落とさないよう器用に、部屋に備え付けられていた灰皿に短くなった煙草を捨てる。

「明かりくらい点けたらどうだい？」

部屋に入ってきた常盤は照明のスイッチに手を伸ばすが、

「モモが寝てる」

蔵馬の皺喰れた声に手を止めた。

「具合はどうだい？」

「目が覚めない事には確かな事は言えんが……身体の方は大丈夫だ。腹も内臓は逸れていた。失血もあれがあれば、しばらくは問題ないそうだ」

蔵馬はソフトケースから抜いた新しい煙草で、壁の輸血パックを指す。

「アザミに礼を言わなきゃな」

「直接輸血が可能だなんて、つくづく便利な身体だよ。感心するよ」

常盤は感心というよりは、呆れた風にも見れる表情で笑う。

今モモに輸血されている血液は、アザミから抜いた血液だった。医学的には禁忌に近い直接輸血だが、義体の身体には成分が人為的に調整された、ほとんど人工血液に近い代物が流れている。よって感染症や拒絶反応の危険性は低い。

この血液は当然体内では生成が出来ず、逆に自然に造血される本物の血液は、義体にとっては蓄積する老廃物に近い。その為、義体は定期メンテナンスの際に血液を一度全て抜かれ、研究所で造られた血液を新たに注入され直される。

血液型の垣根を超えるには至らないが、型が同じで、かつメンテナンスから数日以内あればほぼ問題なく交換が出来るのだ。アザミがメンテナンスを受けたのは大阪に来る直前である2日前。拒絶反応を起こす可能性は無いに等しいと、義体技師の正木から

太鼓判を押されている。

「血液型が同じで運が良かった。他の三人だったら、塩水流し込むしかなかったな」

「人間の輸血は使えないしね。ともかく、大丈夫そうで良かったよ」

常盤は自分も煙草を取り出して唇に咥え、ライターが無い事に気付く。

「あ。蔵馬君、火貸してもらえる？」

「ん」

蔵馬は自分の煙草を点して、愛用の古びたライターを差し出す。受け取った常盤は代わりに手に持っていた新聞を蔵馬に投げ寄せた。

「何だ」

「今日の夕刊。新幹線でのゴタゴタ、上手い事処理されてるよ」

蔵馬は新聞紙を開いて、ざっと目を通す。件の記事は一面の隅、警察のSAT増強や首相の国防政策に重きを置く国会発言などの、大衆の目を引く記事に混じって、目立ちも陰に隠れもせずに載せられていた。こういう載せ方が一番人の記憶に残らない。

「……暴力団同士の抗争、か。とんだ濡れ衣だな」

「こういう時のために生かされてる連中だからね。上手い具合に東京では日中のヤクザが抗争一步手前の睨み合いを始めてるし、こっちにもヤクザが出て来てる。そういう風に見せるのは簡単だったみたいだよ」

「府警の方にはお前が手を回してくれたらしいな、助かった」

「古巣だしね。気軽なもんさ」

二人は同時に紫煙を吐いて、しばらく煙を燻らせる。

蔵馬は煙草を唇の端に差すと、弾倉に再び弾を込め始めた。カチリカチリと弾を押し込みながら、蔵馬は顔を上げずに言った。

「で、どうするんだ？」

「そのまま任務は継続。このまま美希ちゃんを神戸まで連れて行け、だつてさ」

「……モモも連れて行くのか」

「そのまま、だよ。美希ちゃんがなかなか危険な目に遭つてることを、齋藤翁に報告した人がいたみたいだね。今更他にバトンタッチは出来ないよ」

「さすがの坂崎もノーとは言えないか。策士策に溺れるつてやつだ」

「あれ、彼女の策に気付いていたのかい？」

意外そうな常盤の声。蔵馬は煙草を深く飲みながら答えた。

「さつき、大体な。まあ俺たちを出した時点で、何か小狡い事考えてるんだらうとは思つていたさ」

「ふーん、そうかい。……ま、僕の仕事はもう少し残つてる。美希ちゃんだけじゃなくて、齋藤翁や家族の方にも護衛を回さなきゃいけないくなって大変さ。あの子の護衛は蔵

馬君に任せるよ」

「……………」

常盤の言を聞いて、蔵馬はどこか物思いに耽る様にして、脇に置いた新聞に目を落とす。

「新幹線にいた工作員、どこの連中か分かったか？」

「中国情報部。非合法な手段で吐かせたから表には出せない話だけだね」

「斎藤孝三は今も防衛省と会議の最中だったんだよな？」

「そう聞いている」

「……………そつちに回す人数出来るだけ増やすように言っといてくれ」

蔵馬の言葉から何か読み取ったのか、常盤は声をやや低くして頷く。

「……………了解。こつちも今夜中に出るから、そのつもりで」

返事する代わりに、蔵馬は煙草を指で持ち、左右に振った。

「じゃあ僕は行くから」

「おい、ライター返せ」

「ああ忘れてた。ごめんごめん」

常盤はいつの間にかポケットに入れていたライターを蔵馬が腰を置くベッドに置いて、部屋から出て行った。

明らかに借りパクする気満々だった。蔵馬は常盤に対する警戒事項を脳内の人物評価表に書き加える。

二本目の煙草を灰皿で揉み消して、蔵馬は常盤が置いたライターに手を伸ばした。長い指で摘まみあげ、掌に載せる。方形のオイルライターは、相当使い込まれてきたらしく、幾重にも幾重にも傷が折り重なっていた。

蔵馬の指が、ライターの面を引つ繰り返す。反対の面も変わらず傷だらけだ。ただ一つ、異なる点があつた。

小さく文字が彫られている。他の傷に紛れて目立たないが、そこには確かに、

『Don't smoke you!』

と刻まれている。三つのシンプルな単語は、それぞれ微妙に字体が違う。三人の異なる人物が、まるで寄せ書きのように書き込んだ風だった。

その文字を見つめる蔵馬の顔に表情は無い。普段の険しさや気怠さすら無い。ただそこに、まだ文字があるかどうかを確認するような、そんな顔だった。

時間になると一秒も無かつた。

文字を親指で一撫でてから、蔵馬はライターをスラックスのポケットに押し込む。

「……………」

そして煙草は啞えずに、しかし煙を吸う様に細く深く息を吸い、吐く。

次の瞬間には、いつもの険ゆるい顔に戻り、足元に置いていたモモのガンケースからタボールと取り出した。込め終わった弾倉を装填し、銃身の前方にあるスライドを引いて薬室に給弾する。

「……んう」

金属の擦れる聞きなれた音に反応したのか、モモの瞼が薄く開いた。その目尻から一條の涙が零れる。義体は眠ると涙を流す。ただの生理現象か、義体化の障害か、それとも悪い夢を見ているのか。

涙を流したモモだが、しかし表情は呑気で、昼寝するコアラの様な顔でにやむにやむ唇を動かして小さく欠伸をし、再び目を閉じる。そうして二度寝の体勢に入って一秒経ち、二秒経ち、三秒経ち、ビククンッと跳ね起きた。

「……はあ！　また寝るところだった！」

涙のせいでぼやける視界、この部屋に見覚えはないが、常盤にホテルまで連れられたのは覚えている。きつとその一室だろうと納得する。

「まだ寝ていいぞ」

起き上がって瞬きするモモは、焦点の定まらない目で蔵馬の方に視界を巡らせる。

暗い部屋、窓から差し込む淡い街光を唯一の明かりにして、タボールを抱え、自分を真っ直ぐ見つめる蔵馬がいる。

自然と心の安らぐ光景だった。目が覚めて、蔵馬が傍にいてくれたことが嬉しい。寝顔を見られた気恥ずかしさと嬉しさに、つい頬が緩む。

だがその歓喜は、一瞬で冷めた。いや、燃えた。

「う……………あ……………」

ゾワリと背骨の中が怖気立つ。

瞬きで刹那途切れた視界。

視界の隅の隅。あるいは奥の奥。

暗いホテルの壁に、床に、天井に、そして蔵馬に、火が揺らめいていた。

明かりを発しない、熱も無い、ただ燃える、そこにある、火。

「……………火、が」

引き攣った声で呟く。

しかし火炎は、モモが再び瞬き瞼を閉じたその一瞬で、消えて無くなった。

「あれ？」

モモは目を指先で擦るが、あるのは涙と、焦げ目一つ無いホテルの一室だけだった。

「……………火？」

モモの視線を辿って、蔵馬は自身と周囲を見渡すが、そこには何もありません。

「モモ？」



「え、あ、……はい。大丈夫です。まだ夢を見てたみたいですね……はは」

モモは固い笑みで頭を搔いて、ぶらぶら揺れる腕の点滴チューブに気付く。それを目で辿り、次に自分の下着一枚の格好に視点が落ちた。

モモの頬に朱が差す。咄嗟にベッドのシーツを引き寄せて身体を隠した。

「あの、クラマさん。着る物……！」

青く照る月も夜の半ばを通り過ぎた。ホテルの屋上は設置されたエアコンの室外機が吐き出す暖気のためか、真冬の深夜である割には温かい。

並んだ室外機の隙間に立って、モモは延々と蔵馬に教わったジャブの空打ちを続けていた。一発一発。大切に、身体に刻み込む様に、自分の体の動きを確かめる様に同じ動作を反復し続ける。初めはぎこちなかったその動きは、次第に鋭さを帯び始めた。

目覚めた後、着替えを終えたモモは待機を命じられた。身体を休めろという事だろう。

蔵馬は常盤と話があると言って部屋を出て行ってしまい、一人残された。しかしあの

部屋でくつろぐ気にもなれず、ホテルの中をふらふらと彷徨った末にこの場所にたどり着いた。ここならばそこそこ温かく、身体を動かしても迷惑にならない。

モモの頬に汗が一線流れ、シャープな顎筋を通って落ちた。室外機のお陰で多少は温かいとは言え、それは比較的马シな程度である。

外気は冷えて、身を凍えさせてくる。だが、彼女の俊打はかれこれ十分近く続けられている。寒気よりも、体内から発生する熱が勝っていた。それゆえの発汗であり、モモは外の寒さと内の熱さの両方をしつかりと感じ取っていた。体感の感覚も、一眠りの間に正常に戻ったようだ。頭痛も、体のだるさも無い。一応腹に傷が残っているため万全とは言えないのだろうが、任務続行には支障ない。まだまだ働ける。

「身体の具合はどうだ？」

「クラマさん……はい、元通り、ちゃんと動きます」

背後から声が掛けられる。煙草を吹かしながら屋上が上がってきた蔵馬に振り返り、モモは体に馴染んできた殴打の動きを見せた。

「大分マシになったな」

「……何か企んでますか？」

「たまに褒めたら捻じれた反応しやがって……」

あまりにも褒められ馴れしなすぎで、心が乾いてしまっている。哀れな事だ。とい

うか単純に腹立つ反応だ。今度からは褒めて伸ばす教育に切り替えようか。

恐らく採用されることの無い教育案を頭の隅に書き留めながら、蔵馬はモモに温かい缶コーヒーを投げる。ホテルのエレベーターホールで今しがた購入した物だが、額を汗で濡らすモモにはスポーツドリンクの方が良かったかもしれない。

受け取ったモモは熱い飲料物には特に文句も言わずに、礼を言つてプルを空け、一口。コーヒーで唇を湿らせる。

「美希さんはどうしてますか？」

「軽く食事を取つて、今は寝てる」

「そうですか……」

「……あの子が気になるか」

蔵馬の問いに、モモははにかむだけで、明確な回答を出さなかつた。

モモは室外機の縁に腰掛ける。缶のプルを爪先で弄び、脇に立つ蔵馬を見上げた。

「クラマさんには怖い物つてありますか？」

「無いな」

蔵馬は即答する。強がりや虚勢などではなく、本当に無いのだろう。

「オバケは？」

「死んだ戦友が多い」

「悪魔は？」

「牧師の知り合いがいる」

「オオカミ人間は？」

「俺は犬が好きなんだ」

「無敵ですか……！」

戦慄するモモに、蔵馬は頭を搔く。

「そんな物を怖がる歳に見えるか」

「なら昔は恐かったんですか？」

「……ガキの頃は相応にビビってたさ」

「……意外です」

モモはコーヒーを口に運び、ぽつりと呟いた。

「俺に子供の時代があったことがか？」

「怖い物があったことです！」

「……ともかく、今は特に怖い物は無い。それで？」

蔵馬は脇道に逸れた話を戻し、連なる言葉をモモに促す。

モモは缶の中身を半ばまであおり、話を本題に移した。モモが聞きたかったのは蔵馬の弱点などではなく、その先だった。

「怖い物は、どうすれば怖くなくなりましたか？」

昔は恐くて、今は恐くない。ならば恐怖を払拭する機会があつたはずだ。方法があつたはずだ。

「どうすればいいのか……教えてください」

縋りつくような声だった。

「……………」

蔵馬は沈黙を持って煙草を携帯灰皿にねじ込み、言葉を選ぶ。

「そうだな……。恐怖は……。未知か、あるいは喪失から生まれる」

モモは次の一步を踏み出せばいいのか、どこに着地させるべきなのか、決めかねている。

世界をあまりに知らなさすぎる少女に、可能な限り伝えられるように。

彼女がこの先選ぶその未来を、より良い物にするために。

縋られれば、支えてやる。

それが老い先長い大人である蔵馬が、命短い子供であるモモにしてやれることだった。

短命故に、可能な限りの幸福を。

そう言った女の言葉を蔵馬は思い出す。

「それが何なのか分からないから、人は恐がる。それが自分から何かを奪うから、人は恐れる。だから、恐怖を乗り越えなければそれを恐れ。そして奪われない強さを持つ」  
蔵馬はちょうどいい高さにあるモモの頭に手を伸ばす。

モモもその手に気付き、受け入れの意志として動かずにいる。

「……………」

だが蔵馬は手を止め、開いた指を握ると、ポケットに行き先を変えた。手先にはライターの固い感触がある。

その不自然な挙動にモモは首を傾げたが、取り繕うようにして次の煙草を吸い始めた。蔵馬は話を続ける。

「……………つまり怖がられたくなきゃ、知られ、そして与えよって事だな」

「……………分かりました」

彼女なりの答えを得たのだろう。少し表情を和らげて頷く。

そして一転、唐突に慥然とした不機嫌顔になる。

「ところでクラマさん。どうして頭撫でてくれなかったんですか。なんですか今の弾道

修正は」

「お前……………止めろよ……………蒸し返すなよ」

「私がつかりです。乙女シヨックです」

「止めろって」

蔵馬は己の軽率な行動に後悔しながら、眉を吊り上げるモモの唇に煙草を刺し込んで黙らせる。

途端、モモは一拍置いて顔を朱に染め上げた。黙るばかりか体までカチコチに固まらせたモモの手から、缶を取って一気に飲み干す。口内に残る煙草の残香を洗い流し、空になったスチール缶をモモの目の前に掲げた。

「おい、モモ」

「あ、う、ひゃい」

「ジャブを少しだけまともに打てるようになったお前に、必殺技を教えてやる。だから機嫌直せ」

「ひゃい、直します、直ってます」

モモは室外機から跳ね上がって、口の煙草を啜えたままガクガク頷く。

モモの様子からして、お茶を濁すことに成功したと確信しながら、蔵馬は手にあるスチール缶を宙高くに放る。

「どんな時も、最後はこれで片が付く」

そう言つて、蔵馬はモモに教えた戦闘の構えを作る。そして右足の親指がコンクリートで出来た屋上の床を蹴る。鍛え上げられた脚部の筋力が生み出したエネルギーは、地

面から反作用となつて右脚の芯に伝わる。身体の最底辺から生まれた力は腰に伝わり、そこから身体の旋回を加えてエネルギーを蓄積する。腰部から上半身に伝来したエネルギーを各関節で散らさぬように、より強力になるように、肩から右腕に運ぶ。

発射される右拳。脚から生まれたエネルギー、そして同時に身体の重心を前に倒し、体重を乗せる。

回転しながら落下してきたスチール缶に、拳先が接触する。

重い金属が正面衝突したような、硬い音が響いた。

モモの眼前を砲弾の如き速さと勢いで缶が通過する。咄嗟に行く末を目で追うと、スチール缶はプレス機に掛けられたかのように体を潰し、屋上に張り巡らされたフェンスの金網の網目に突き刺さった。

「わあ、ただのパンチだけど凄い！」

煙草を唾えたまま、モモははしゃいで殴られた缶に駆け寄つていく。蔵馬は構えを解くと、はしゃぐ少女に背を向けた。

「一時間後に出発する。そのゴミは捨てていてくれ」





大柳組の事務所は昨夜と同じく明かりが消され、部屋はほの暗く、その中で組長である大柳が座り心地の良さそうな革張りの椅子に腰かけている。手には相変わらず50口径の弾薬が二発。そして彼の正面には組の構成員。

昨夜と同じ光景に見えるが、大柳の前に整列する男たちの数が違う。二十人近くいた組員は半数が姿を消していた。今ここにいない者たちは、ほぼ全員が既にこの世からも退場している。

「他の奴らは？」

「連絡が付きませんでした……」

大柳も目減りした己の部下の数について言及するが、誰からも明確な返事は無い。消えた組員の行方を知る者は、ここにはいなかった。モモとアザミが積み上げた死体はとつくにセンターが回収し終えている。彼らは明日の朝刊に、抗争事件で死んだ暴力団組員としてその名を連ねるだろう。

そのような情報工作が裏で粛々と進められているなど知る由も無い大柳だが、彼は己が住まう極道世界の常識に照らし合わせて、部下の死を直感していた。

彼らが仕事の途中で殺されたのならば、つまり仕事を失敗したことを意味する。そのことの方が、大柳にとつては組の人間の生死よりも重要だ。チンピラなどいくらでも補充が効く。そもそもヤクザなど命を張ってナンボの世界。殺し殺されで一々騒いでは

いられない。

今対処しなければならぬのは、恐らく死んでいるのであろう行方不明になった組員の搜索でも、空いた枠を埋めるリクルートの準備でもない。失敗した仕事の穴埋めだ。

この仕事は組の後ろ盾である、中国情報部が命じてきた。大柳組にとつて中国情報部は、あらゆる意味での絶対唯一、極太の生命線だ。大柳がこの世界で破格の大出世を遂げることが出来たのは、一重に彼らの協力があつたからだ。

使い勝手のいい不法入国者に、末端価格数億円に上る麻薬。旧ソ連軍で使用されていた、日本に置いては過剰とすら言える火器の数々。そして表向きは親である扇組すら知りえない、それらの販売ルート。それらを売り捌いて築いた莫大な資産を武器にして、日本の極道組織の中で組を持つまでに至つたのだ。

彼らの存在なしにはこの組は存在しえず、また彼らの情報隠ぺいと庇護が無ければ、この組は警察に取り潰される前に、本当の親組織である扇組によって血祭りにあげられてしまう。そして中国情報部の機嫌を損ねれば、どっちみち皆殺しの憂き目にあう。

情報部のスパイが自分にこれだけの物を寄越した見返りとして、大柳組は日本国内で情報部が動く際の手先として働くことを対価としている。

しかしこの組の者たちは大柳以外全員、自分たちが中国人の便利屋さんとして雑務を請け負っている事すら知らずにいた。普段回される仕事は警察内部の情報を流したり、

あるいは武器や人員の輸送や、たまに死体の処理や誘拐、監禁、拷問に殺人の手伝い程度。それを日本の極道組織でも稀にある仕事であるのを良い事に、大柳は全て扇組ゆかりの仕事であると組員を偽り続けてきた。

いつしか外国人をひどく見下すようになった組の風潮。大柳は組長であるが故に、その空気を読まざるを得なかった。部下たちに対する虚偽を大柳はそう自己弁解するが、要は組員に自分が外国人にヘコヘコ頭を下げている姿を見せたくなかっただけである。

もし組員たちが自分の立場を把握していれば、もう少し身を入れて仕事に励んでいただろう。あるいは逃げ出すことも出来たかもしれない。

だが大柳の安い見栄と虚栄心ゆえに、彼らは何も知らされずにいる。それがここにいる全員の、取り返しのつかない不幸だった。

「くそ……」

大柳は震える手で煙草を唾える。誰かが火を点しに来るのを待つが、組員の誰もライターを携えて火を掲げに来る気配はない。こういう時に、真つ先に跳んでくるのは八木だった。彼も事務所に戻ってはこなかった。街のヤンキー崩れの、腕つぶしも頭の回転も下の、媚を売るしか能が無いと蔑視していた八木だが、残った組員はあの男以下のくの坊ばかり。

「……………の、ボンクラどもが!!」

大柳は手に遭った弾丸を、だんまりを決め込んでいる組員たちに投げつけた。それでもなお身動きしない彼らの、自分の怒りが収まるまで黙ってやり過ごそうとする見え透けの内心と態度がまた気に食わない。

怒りに肩を震わせて立ち上がる大柳。その懷で、携帯電話が着信音を鳴らした。深く深呼吸をして怒りを吐き出し、電話を取る。非通知番号だった。電話の主を察し、無灯の煙草が震える唇から零れ落ちる。

『私だ』

のっぺりとした、若者にも老人にも聞こえる声。李明だ。

その声を聞いて、大柳の憤怒のボルテージは一気にマイナスまで急降下する。

『また派手に失敗してくれたな』

合成音声と話しているような波の無い言葉だが、それが却って大柳の心を委縮させる。大柳は目の前の部下たちに一瞬口ごもるが、彼らに構わず謝罪した。

「すま……すみません」

『お前がどうしてもチャンスをくれと言うから、情報をくれてやった。目標の位置情報だ。私個人のかなり貴重なコネを使った情報だ』

ふー、と、スピーカーの向こうで溜息を吐く音が聞こえた。

『問題は……分かるか？ 私はお前が失敗したことにはそこまで腹を立たせていない。』

身内の恥だが、我々も実は彼女の確保に失敗している。だから失敗したこと自体は、水に流してやろう。だが』

「……………だが……………？」

『派手に、失敗したことは許さない。派手に殺せとは言ったが、派手に失敗しろなんて一言も言っていない。……………お前が事を派手に引つ掻き回して状況を悪くしてくれたお陰で、我々がどういう状況になっているは分かるか？』

「いえ……………」

『お前らの無駄な大暴れの結果、警察も、公安も、テレビカメラも三文記者も地元住民もツイッターも、大阪の街に目を向けているんだ。分かるか？ 分かるだろう？ 我々はまだ動けないんだ。私が個人的な、お前がうちのお零れで稼いだ端金の数十倍の価値のある、お前らチンピラ集団100ダース分の命より価値のあるコネを使っているのに、私たちはもう動けないんだ。分かるだろう？』

平坦だった語気に、かすかな憤怒が混じった。

大柳の奥歯がカチカチと連鼓し始める。

『……………と。ところで、お前は海と山、どっちが好きだ？』

唐突な、意味不明の質問。大柳は咄嗟に、

「……………海……………です」

『そうか。分かった。じゃあこつちも忙しい。別にもうどうでもいいが、仕事をする気があるなら今夜中にやってくれ。情報は……ついでだ。くれてやる』  
通話が切られた。

それを確認するや否や、大柳は電話を投げ捨て、組員たちを押し退けて事務所を出ていく。

「お前ら全員来い！」

「親父！ 一体どうしたんですか！」

組員たちは組長の豹変ぶりに当惑しながら、その後を追う。大柳はビルを出ると、隣接する古びた倉庫のシャッターを壊しかねない勢いで跳ね上げた。

中には幾つもの段ボール箱と、車体に布を被せられたピックアップトラックが一台停められている。大柳はトラックに駆け寄り、その道筋にあった足元にあった段ボールが蹴り飛ばされる。中から白い梱包材に混じって、十挺のAKM自動小銃と弾薬箱がこぼれ出てきた。

「今困ってる外国人ども全員集めろ。それと車をありったけ持ってこい」  
指示を飛ばし、トラックの覆い布を掴み、引き摺り下ろした。

トラックの荷台には黒い長銃身。大戦期にソビエト連邦によって開発されて以来、半世紀以上の長きに渡って世界中で銃火を噴き、人を、物を粉微塵にした重火器。D S h

K重機関銃が搭載されていた。

「お前ら全員、死ぬ気で斎藤美希を殺しに行け！」

## 第18話

蔵馬たちが滞在したビジネスホテルの駐車場には、十台分の乗用車を停めるだけのキャパシティがある。ほとんど宿泊客のいないこのホテルには無用の長物とも思える。いつそ月極の駐車場にした方がいい儲けになりそうだ。

現に広々としたこの空間を占める車は一台も無い。しかし、寒々とした打放しコンクリートの壁や天井は排気ガスに煤け、床にもタイヤ痕が黒く幾層にも重なっている。人の気配が微かも匂わないこのホテルの駐車場にしては、随分と利用されている形跡がある。

ただ管理が行き届いていないだけという訳では無い証拠に、蛍光灯は全て新品に近い明るさで光を発し、床の白線も定期的に引き直されているらしく剥げや擦れは一切無い。それもそのはずであり、このホテルにとつて、駐車場こそが最も重要な施設なのだ。彼らが休息を取ったこのホテルは、公安の刑事や、その他のあまり公には出来ない性質の公務員が主に集合場所として利用する、半官営のホテルなのである。サツと集まって人員機材を確認してサツと立ち去る。

そういう施設であるから、そもそも宿泊客がいること自体稀有なのだ。むしろ客室よ



りも運搬用の自動車を抑める駐車場こそがメインフロアと言えた。

その丁寧に打たれたコンクリの滑らかな床に、一台の自動車が滑り込んできた。運転席に居るのは常盤だ。

重く唸るエンジン音を響かせる黒の車体を見て、蔵馬は思わず感嘆の声を漏らす。ホテルの駐車場に停められたのは、世界に名だたる高級車メルセデス・ベンツSクラス、その五代目であるW221だ。それを防弾車仕様に改造した代物であることに、目ざとい蔵馬は一目で看破した。

このマシンは装甲やガラスの防弾化は当然として、シャーシ周りのサスペンションやシヨックアブソーバーを初めとした大部分のパーツが強化され、爆弾が真横で爆発しても問題なく走行できる。

その他安全性を高めるために、あらゆる改造が施されており、かつ本来の操縦性を維持している。主に国賓や政府の重要ポストに就く人間を護送する為に使われる、走る掩体壕のような車だ。

蔵馬は空間を切り裂くようなシャープなボディを指先で撫で、運転席から降り出た常盤に振り返る。

「どうしたんだこれ」

「府警公安の駐車場に置いてたから借りてきた」

借りる許可を取ったのかどうかは言わなかった。蔵馬もあえて聞かずに、悪そうな笑みを浮かべてW221の周りを回って嬉しそうに眺めている。

「防弾性能はN I J - IV。これなら日本のヤクザ程度の火力、目じゃないよ」

「ヤクザどころか一個小隊のと真ん中を突っ切れるぞ」

何が面白いのか二人で仄暗くククク……と笑う。その様子をモモたち三人はどこか冷めた目で眺めていた。

男が熱中するものに、女は大抵無関心なものなのだ。多少理解のあるモモですら、しゃがみ込んでタイヤを愛おしそうに撫でる蔵馬に、やや引き気味の体だった。マシンの性能とかはどうでもいいので、早く乗せて欲しい。空調が無く冷たいコンクリートに囲まれた駐車場は非常に寒い。

その視線に気付いていないのか無視しているのか、蔵馬は全く意に介さず、ひとしきり車を愛でた後に、助手席にガンケースを放り込むと、いつになくワクワクした様子で運転席に乗り込んだ。感触を確かめるようにハンドルを撫で、バックミラーの向きを調節する。

座席の位置を調整しながら窓を半分開き、並んで立っているモモたちに「乗れ」と手招きした。少女三人は互いに顔を見合わせ、そして蔵馬に続いてW221の後部座席に入る。

美希を中央に、右にモモ、左にアザミが座る。美希は疲れと緊張を混ぜ合わせた面持ちをしているが、左右の二人は温かい車内にほっこりしながら、能天気の内装を眺めている。中に入ると分かるが、見た目の割に狭い。天井やピラー、ガラス、すべての外に面する部分が分厚く、圧迫感がある。

この手の要人護送用の防弾車は、外見だけなら一般車とそう変わらない。一目で銃弾を防ぎ、爆風の中を突き進む厳つい車輛だと分かる見た目をしていると、周囲に『ここに重要人物がいますよ！』と触れ散らかしている事になり、逆に狙われる。要人護送車が主に防弾処理を施しているのは主に内装側なのだ。

とは言えそこまで一般車と大きくかけ離れた内装をしている訳でもなく、単純に外車が珍しいだけだろう。

蔵馬はグローブボックスにガンケースにある小銃のマガジンの内、半分の六本をしま  
う。

「左ハンドルだけど、大丈夫かい？」

車外の常盤が、半開きの窓から声をかける。

「こつちのほうが馴れてるくらいだ」

「じゃあ悪いけど、僕は府警の方へ行くよ。アザミは置いて行くから」

「助かる」

蔵馬は礼を言つてモモを一瞥する。いくら本人と技術師が問題ないと言つても、なるべく負担を掛けたくないというのが蔵馬の本音だった。これまで再三の襲撃があつたのだ。この先には更なる危険が、牙を剥き出して待ち構えていると考えたほうがいい。義体の中でもトップクラスの戦闘能力を持つアザミは大きな戦力になる。

「アザミ、蔵馬君の言う事をちゃんと聞くんだよ」

「分かつています」

アザミの領きを見て、常盤は腰を折つて窓に顔を寄せ、蔵馬の耳元に口を寄せる。

「センターからの応援は無し。この車以外の追加装備も無し。出せる駒はここまでだよ。本当に大丈夫かい？」

「やらなきやあの子、殺されちまうだろうが」

後ろの美希には聞こえない小声で、蔵馬は返す。大丈夫、とは言わなかつた。

「諜報部、どうも臭いよ。今日はやけに口を出してくる。『義体を使つている上に更なる人員の追加は過剰であり無駄だ』って、僕がそつちに付くのも許さない。作戦部も義体が負傷した事は諜報部に伏せてるから、あまり強くは言い返せない」

「……まあ、今回は諜報部だけじゃ無いだろうけどな」

何か思い当たる節がある口振りの蔵馬は、剣呑とした濁りを瞳の奥に湧かせる。しかしそれ以上の事は言わず、シフトレバーを操作して発進に備える。

「出発する。何かあったら些細な事でも連絡をくれ」

蔵馬がアクセルを踏む寸前に、美希が窓の方へ身を乗り出した。

「あの……助けてくれて……ありがとうございました」

感謝の言葉に常盤は面喰った様に一瞬停滞し、だがすぐに笑顔を戻す。

「無事に家に帰れるといいね」

美希は「ありがとうございます」と再度頭を下げてから義体二人の間に戻る。

W221のエンジンが嘶き、ライトが灯る。

蔵馬は手を振る常盤に片手を挙げて返し、自動車を出発させた。駐車場を去り、夜も深まった大阪を湾岸方面に向かって出ていく。

再び空になった駐車場、一人残った常盤は、漂う排気ガスの帯を目で辿りながら、面白がるように呟いた。

「……ま、無事じゃ済まないだろうけどね」

蔵馬たちが乗るベンツW221は新大阪から、港湾地帯を西に抜け、阪神高速5号湾岸線に入った。前から後ろへ過ぎ消える照明灯の下には、W221の他、遠くにチラチ

ラと数台の乗用車を見るのみだ。

大阪湾の淵を巡るこの高速幹線は、比較的用户者の少ない高速道路である。今は深夜帯であることもあり、蔵馬らの他に走る車影はない。

「神戸市内に入ったら、兵庫県警と合流して彼女の自宅に行く。精々一時間程度の気軽なドライブだ」

そうは言いつつ、蔵馬は敵の気配を逃すまいと、全身に警戒と緊張を漲らせながら運転する。最も襲撃の可能性があつた市街地を何事も無く抜けたが、それで安心と言うわけでは無い。高速道路に入ってしまった以上、ここで襲われたら逃げる事が出来ない。正面から突つ切つて、障害を排除する以外に取れる選択肢がないのだ。

「どうして湾岸線を使うんですか？」

首を傾げるのは、常盤が事前に渡していた地図を広げるモモだ。彼女もこのルートでは逃げ道が無いことに思い至つたのだろう。

「大阪府警と諜報部が、この道を指定してきた。また戦闘が起こつたら、この高速以外ではもう揉み消せないんだと」

市街地から遠く離れた湾岸線ならば、民間人の目に晒されることも無く、息のかかつていない警官たちの到着も遅らせられる。それに高速道路なら偽装する監視カメラの数も少なくて済むし、何か都合の悪い物が道に落ちていても、最悪海に捨てられる。

確かに隠蔽はしやすい。

新幹線の方も含めれば、昨日一日で三度の発砲事件を起こしているのだ。これ以上は庇いきれないというのが正直なところなのだろう。関西地域でセンターの存在を知るのには、各県の公安と、その息がかかった一部の警官のみだ。

発砲事件と聞いて出張つてくる捜査一課と、ヤクザの臭いを嗅ぎつけて飛んできた捜査四課を上手くあしらひながらの組織内隠蔽工作。これ以上隠しきれないと泣き言を暗に漏らす、彼らの気持ち分らないことも無い。

「府警は無理だったが、常盤と坂崎の奮迅のお陰で、神戸市警の協力は得られた。この高速を凌げば、後は護衛付きで優雅に帰れる」

「帰る、ね……」

頬杖をついて窓の外を眺めながら呟くのはアザミだ。

タボールを腕に抱えて臨戦態勢、戦意十分、ヤル気一杯のモモとは違い、やや眠たげだ。無論そう見えるだけであり、アザミが少し眠そうに見えるのはいつものことだ。多少活気づくことがあるとすれば、風呂場への強制連行に必死の抵抗を試みる時くらいだろう。

アザミは夜の帳に塗り潰されて見えない、湾岸線の隣に広がっているはずの黒い海面から視線だけを美希に向ける。

「どうして家出なんかしたの？」

尋ねる言葉には、攻撃的な色は無い。どうしてもその答えが知りたいという意志も籠っていない。何と無くの、暇つぶし程度の質問なのだろう。

「私には家とか家族とかが無いから、家出するって感覚がよく分からない。どうして家を出たの？」

アザミに質問に、モモも興味があるのか黙って美希の答えを待っている。

「どうして……」

どうして、と問われて、美希は咄嗟に返せなかった。そもそも自分は何故家を出たのだっただろう。色々とあり過ぎて、つい二日前にあったことが忘却の彼方に吹っ飛んでしまっていた。

美希は記憶を手繰り寄せようとして、つい癖で自身の毛先を指に巻きつける。考え事をする時の癖だ。実際こうすると頭が冴える様な気がして、自然と髪を伸ばすようになったのも、この癖があるからだ。クルクルと、弄ぶその茶色い髪を見て、

「あ」

思い出した。

「これ」

美希はつま先の髪を一房つまみ上げる。



「髪の毛?」

モモとアザミは不思議そうにその毛先を見る。

「この髪が原因で、親とケンカしちゃって」

「それだけで?」

アザミはどうも釈然としたようだった。

「えつとね……髪を毛染めて、それが学校に見つかって、停学になっちゃったの。それで親とケンカ」

言つて、思わず笑つてしまう。自傷的な笑いだった。家を飛び出した当時は人生でもっとも深刻な問題であるように思えたことが、今や鼻で笑う程度の些事にまで大暴落してしまっている。

「私髪の毛の量すごく多くて、しかも剛毛。あとこの三白眼でしょ。だから昔から『モツプ女』とか『物の怪』言われててさ」

美希は久しく思い出すことの無かった幼少期を回顧する。

あまり気の強い方でなかった自分は、からかわれても黙つて我慢する以外の術を知らず、悔しくて帰つてからよく泣いた。誰かに相談しようにも、家には怖くて厳しい祖父と、無口な老家政婦がいるだけ。

本来なら傍にいてくれるはずの母は外交官である父に付いて、家どころか日本にすら

滅多に帰ってこない。いっそ自分も両親について行けたら良かったのだが、祖父の教育方針として、高校を卒業するまでは日本の教育を受けることを厳命されていた。

「高校に入ってからそういう事は言われなくなっただけ、やつぱりコンプレックスがあっただんだ。だから思い切って染めてやろうって思っただけだ」

「だけど？」

「私を通ってる学校って校則凄く厳しくて、毛染めもカラーコンタクトも絶対禁止だったのよね。それで……あれって四日前か……凄く昔に感じる」

話しながら、美希は指を折って何かの日数を数える。

「終業式の後、学校の帰りに美容室に寄ったんだ。髪の毛もつさりしてきたから。その時に美容師さんと冬休みだねークリスマスだねーって話をしてて、そしたら休みになるなら染めてみる？ って言われて、うっかり染めちゃったんだよね。」

ついでにカラーコンタクトも買って、一人でウキウキしながら街歩いてたら同級生に見つかって、学校に密告されて、停学食らっちゃった。もう冬休みなのにさ」

そう言いながらも、停学処分に關しては特別思うところは無い。もともと学校は肌にあわなかったし、祖父が半ば強制的に進学させたお嬢様学校だ。退学させられたとしても、すんなり受け入れるだろう。ただショックだったのは、その後のことだった。

「お祖父ちゃんは最近ずっと家にいないし、パパとママはずっと海外にいるし、停学と

言っても冬休み中だし、まあいつかかって思ってたんだけど。……なんでかなー、そういう時に限ってパパたち帰ってきてるんだよね」

学校で生活指導教諭にたつぷり絞られた後、怒られ疲れてやや憔悴しながら帰宅し、そして玄関に両親の靴とキャリーケースがある事に気付いた。つい口角が上がったのを、美希は覚えていた。

数年ぶりに会った両親は特に変わった様子も無く、強いて言えば自分が成長した為か、少し縮んで見えた。それくらい、直接会ったのは久しぶりだった。ただ記憶の中の両親は、もっと血色が良かったはずだ。

二人の顔が青い原因が、自分の停学にあると気付いたのはそのすぐ後だった。

「……どうせなら怒ってくれたらいいのに、ママったら泣きながら『どうしてそんな事したの?』って。反抗期だと思っただのかな、よく分かんないや。……でも気付いたら家を飛び出しちゃって……いまここ」

「やっぱりよく分からないわ……」

アザミは再び外に視線を戻した。

親との行き違い、子供としての悩念。どちらも義体には縁の無いものだ。

もしかしたら義体になる前、人間として生きていた頃ならあつたかもしれない。少しでも当時の記憶が残っていれば、あるいは共感できたかもしれないが、この身体を得る

前の記憶は全て、洗脳と薬物と手術の際に脳を弄繰り回されて消滅している。

知らないから、理解も共感も出来ない。美希が話したことは、アザミにとって、それが真横にあつたとしても遠い何処か違う世界の出来事ではなかった。

「分んないか。まあ私も分かつて無いもんね。……でも、分からないなら、ちゃんと話をするべきだった。分からないなら……怖いなら……なお更ちゃんと近付いて、話をしないと駄目だった」

アザミの疑問に答えることは出来ずとも、自分の頭の中にあつたものを声に乗せていくうちに、美希は何かに気付き、答えを導き出すことが出来たらしい。臃げだった言葉の節々に力がこもる。

「あの時に、ちゃんとそれが出来ていれば、モモが怪我することもなかったのに」  
「それは違いますよ」

美希の言葉に、モモは否定を入れた。そして腹を撫でながら笑う。

「美希さんがいなくても、別の任務でどうせ怪我しますから」

「怪我しないようにしなよ……クラマさんが苦々しい顔してるよ」

バックミラーに映る蔵馬の眉間には、確かに警戒以外のことが理由であろう皺が深く刻まれていた。モモはそれを見なかつたことにした。

「と、とりあえず、まずはお家に帰りましょう。全部はそこからですよ」

「そうだね……帰らなきゃ」

モモは太ももの上にあつた左手の袖に、軽く力が掛かったのを感じて目を落とす。

そこには小さくブレザーの裾を摘まむ、美希の指があつた。小刻みに震えるその手を、モモは強く握つた。

「……………」

取られた手に、美希は一度ビクリと肩を跳ねさせ、そしてゆっくり、モモと同じ力で握り返した。重なつた二人の手、そこから美希はモモを見る。モモも、まっすぐ美希を見ていた。

車窓から差し込み消える照明灯の橙光によつて、闇から浮かび、沈むモモの顔は、美希が今まで見た中で最も自然で、人間的で、じんわりとした静かな輝きに満ちた、美しい微笑みを湛えていた。

一秒が五秒にも十秒にも感じられる、そんな時間。

この時間を破つたのは、コツンと、小石か何かを弾いたような、そんな小さな音だった。

その音を聞いた瞬間、闇から次に浮かび上がったモモから微笑は消え失せ、能面のように無機質な、少女の形をした別の何かの顔があつた。

「来たな」

「来たね」

「……来ましたね」

モモは美希の手を放し、代わりにタボールの銃身を掴んだ。

そしてアザミと二人、リアガラスから後方を振り返る。

つい先ほどまで閑散としていた高速道路に、幾層のライトの強い光が雑列していた。

けたたましいエンジン音をかき鳴らし、十数台の自動車の群れが猛烈な勢いで距離を詰めてくる。特に目の良いアザミは、この薄暗い視界の中で、それらの車内を明細に確認できた。誰も彼もが小銃や拳銃を装備していた。車から身を乗り出して、銃口を向けてくる者も何人かいる。

「前にもいるぞ」

蔵馬が指差す前方には、四台の大型トラックが田の字に鈍行して道を塞いでいた。その荷台には、AKM自動小銃を手に持つ男たちがいる。

まるで映画のカーチェイスシーンのようだ。さすがの蔵馬もその大所帯ぶりに言葉を無くすが、すぐにシニカルな笑いを飛ばした。それに釣られてアザミが笑い、そしてモモも笑った。美希だけが、恐怖と緊張で固まっている。

乾いた笑いに満ちた車内、そして少女たちは銃把を手に取った。

湾岸五号線を二十台近くの自動車が一団となって走っている。

騒々しく、煌々とハイビームで道を照らして団子になっている集団、その中心にいるベンツW221は頭をトラックなどの大型車両に阻まれ、尻にはセダン車やワゴン車、小型トラックなどの普通車が縦に横に列をなして塞いでいる。前にも後ろにも逃げ道はない。

「無いなら作るしかないな」

蔵馬は犬歯を剥いて笑う。

「おい、お前ら。窓は開けるな。手も車の外には出来るだけ出すなよ」

ちようど窓のパワーウィンドースイッチに指を掛けていたモモと、MG4に弾倉を挿し込むアザミは動きを止めて運転席を見る。

「何故ですか？」

「危ないからだ」

皮肉めいた蔵馬の台詞が吐かれた直後、後ろにいた集団の内、クーペ車が一台右側に横づけしてきた。助手席の男は窓を開く。人相からして暴力団組員——これまで執拗に美希を追ってきた大柳組の組員だろう。組員は何か喚き散らしながら腕を突き出し

て、こちらにマカロフを向けてきた。それを見て美希は思わずモモに抱き着く。

「えっ大丈夫……？　これは大丈夫なの……？」

「大丈夫ですよ、ええ、うん」

マカロフが火を噴き、コツコツと弾丸が窓に撃ち込まれる。だが薄い跡を残すだけで、窓を割るところか傷つける事すら適わない。AKシリーズの大型弾薬にすら耐える防弾レベルを持つこの車にとつて、拳銃弾など石つぶてとそう変わらないのだ。

蔵馬は銃撃に意も介さず、ハンドルを右に切った。W221は右に滑り、横のクーペに衝突する。窓から出ていた腕は、車体に挟まれてグシャリと押し潰された。骨を潰し折られた激痛に悲鳴を上げている様子のヤクザは、変な方向に曲がる腕を抱えて車の奥に消えた。

「な、危ないだろ？」

その一部始終を見ていた義体の二人は勢いよく首を上下させる。

「でも、それじゃあどこから撃てばいいですか？」

「サンルーフから撃て。開くようにされてるはずだ」

モモはサンルーフの傍にあったスイッチを入れた。サンルーフの窓がスライドし、ちょうど大人二人がギリギリ潜れる穴が屋根に開く。車内に皮膚を刺す寒風が奔流と成り入り込んできた。



「開きました!」

「なら撃て!」

モモはアザミとの間にいた美希を、座席の下に押し込む。

「ここにいて、動かないでください」

そして、アザミと一瞬目を見合わせると、二人同時にサンルーフから身を踊り出した。右側にいたモモは横のクーペに、アザミは前方のトラックの荷台にいる男たちに弾丸を浴びせる。防弾加工など受けていないクーペの車体はいとも容易く貫かれた。中にいた者たちは弾の雨を浴びて血を噴き、車窓が内側から赤く汚れる。そして操舵を失ったクーペは路肩に突っ込み、後方に姿を消した。

一方で前方トラックの荷台にいた男たちは、アザミの張った弾幕に崩れて道路に放り出され、あるいは弾除けとして設置しているコンテナに身を隠した。すると、アザミは隠れて出てこないヤクザから照準を外し、トラックの後輪に射撃を加えた。後ろタイヤはズタズタに引き裂かれ、トラックの速度は目に見えて落ち始める。

四台で塞いでいた行く手の道に隙間が出来た。蔵馬はその空間を通って、トラックの側面に車を滑り込ませる。そしてモモはトラック運転席に、アザミは射撃を加えてくる他のトラックに向けて引き金を引く。モモに運転手を殺されたトラックはグネグネ蛇行し、ついに反対車線の方へ突っ込んでいった。

「熱っ、あちちち!」

車の中で美希の悲鳴がして、モモは車内にいったん戻る。

「どうしました?!」

「上から何か熱いのが降ってくる!」

「熱いのって……」

モモが見上げると、ちようどアザミのMG4から空葉莢が降ってきた。火薬を燃焼させたその金属筒は当然凄まじく熱い。

「熱! アザミ熱い!」

「え!?! なに!?!」

「撃つの止めてください!」

モモはアザミの手からMG4をもぎ取って、彼女ごと車内に引き込んだ。

それより一瞬遅れて、周りのヤクザたちが一斉射撃を初め、アザミがさつきまでいた空間に四方八方から弾丸が貫いた。

「何よ!?!」

「葉莢が車の中に落ちちやって危ないんです」

「言ってる場合か!」

「クラマさん、葉莢受けありますか?」

「ある訳ないだろ！」

前後からの射撃を受けつつ何とか車を走らせる蔵馬は怒鳴り返ししながら、自分の右側を指差す。

「こつちに座らせろ！」

言つて、また後ろから横に入ってきたワゴン車に体当たりをかます。

その時、蔵馬のスーツのポケットで、携帯が鳴った。後ろから前に移動しようとモゾモゾ動く鈍くさい女子高生の首根つこを掴んで助手席に詰め込み、その手で携帯を取る。

『蔵馬君、まずいことが』

珍しく、少し焦燥を滲ませた常盤の声だ。

「何だ!？」

『湾岸線のインターチェンジのほとんどで交通事故が起こった。敵が君たちをその道から降ろさない為に、わざと突っ込んで塞いだんだ。敵がそつちに向かつてる』

「もう来てる！」

『ならなんとかそのまま深江浜インターチェンジ行けるかい？　そこならもう警備が固められている。兵庫県警の公安が機動隊を連れて今から神戸側から応援に向かうそうだから、何とか持ちこたえてくれ』

「分かったー！」

通話を切って、電話を隣の美希に放り投げる。

「鳴ったら出といってくれ！」

言うと同時に、急ブレーキをかけて近付いてきた前のトラックを鋭いハンドル捌きで躲し、その側に回る。後部座席でモモたちが「せーの！」と声を合わせ、銃弾飛び交うサドルーフから再び攻撃を開始した。

二台目のトラックもタボールとMG4の一斉射撃を受けて、一台目と同じ道を辿った。

散った二台の戦訓を得て、残りのトラックは蔵馬らに横を取られないように、間を詰めて走り始めた。前からの射撃が疎らになったのを見て、モモは後ろの車群に銃口を巡らせる。

後方の車はどれも民間の普通車で、タボールの射撃に耐えうる防御力を備えているものはない。身体の半分を防弾車に隠しながら撃つモモにとって、射撃場の訓練とそう変わらなかった。一台一台、確実に運転席かエンジンを撃ち抜いて潰していく。

中にはモモの射撃を掻い潜って、突っ込んでくる車両もあった。

ちようど白いワンボックスカーが、W221の真横に並走するようにして来た。その中にいる男たちと、モモの目が合う。そこにはまだ若い男も何人かいて、AKM小銃を

握りしめながら、涙を浮かべている。初めから戦うのが厭だったのか、それとも次々に死んでいく仲間たちを見て怖気づいたのか。それはモモにとつてどうでもよかった。

ワンボックスの後部ドアが開かれ出てきた小銃を構える男たちを、タボールのフルオートで迎える。五秒間ほどの連なる発砲音が止み、ボルトが下がり止まって弾切れを知らせる。ワンボックスの乗員は運転席を除くと、偶然仲間の死体が盾になって即死を免れた一人だけだった。モモと目があつた男だ。運転席の仲間が撃てと叫んでいるが、男の戦意は恐怖で氷結してしまつたらしい。ブルブル震えて呆けるだけだ。

モモは九つ目の空になつた弾倉を車内に捨てて、ブレザーのポケットに差した替えの弾倉を装填。いまだに並走する障害を排除する為に、タボールを掲げた時、後ろの車群からまた一台、荷台に幌を掛けたピックアップトラックが飛び出してきた。

モモは目標の順番を変える。タボールでピックアップトラックを狙い、横のワンボックスには腰から抜いたP×4拳銃を向けた。弾丸を撃ち込まれ、二台はグワンと車体を左右にぶれさせる。生き残つた男は、ここでようやく生存本能が恐怖を上回つたのか、絶叫しながらAKM小銃のトリガーを絞つた。

照準も合わせず滅茶苦茶な方へ弾を飛ばす。モモは落ち着いて、その銃火に向けて拳銃弾を撃つ。AKM小銃の銃撃が止まつた。

次いで運転席にも全弾放ち、ワンボックスカーはスピンしながら速度を落とす、後ろ

を走る仲間の軽トラを巻き込んで破砕した。

それを見送ったモモの耳元に、弾丸が掠った。髪が数房風に乗って散る。

その弾を撃ったのは、ピックアップトラックの助手席にいた男だった。

「……………あれ？」

そのピックアップトラックは、モモが運転席にタボールの弾幕を浴びせたはずの車だ。弾を撃ち尽くしたPX4拳銃を弾倉と同じように車内に放り、モモは再度そのピックアップトラックにタボールで射撃を加え——その弾丸が全て弾かれるのを見た。

「——アザミ！ あのトラックも防弾車です！」

「どれ？」

前のトラックを牽制していたアザミは、モモと一緒にピックアップトラックに弾幕を浴びせるが、火花を散らせるだけで装甲を貫くことが出来ない。恐らく、モモらが乗っているW221と同程度の防弾処理が施されている。

「クラマさん、あのトラック、なんか変です！」

「どう変なんだ!？」

「防弾処理がされていて……………それに……………まるで何かタイミングを窺っているような……………」

蔵馬はサイドミラーで後ろを確認する。後方にはモモの言う通りピックアップ

トラックがいて、他の車と違って時々疎らに撃ってくる程度だ。

確かに妙だった。暴力団程度が防弾車を持つている事もだが、それよりも、幌に隠された荷台が気になる。蔵馬の戦場で培った経験が、その部分に警鐘を鳴らしていた。あの手のトラックは、今まで何度も見たことがある。

そう、中東の砂漠や市街で、民兵が乗っていた――。

「――ッ伏せろっ！」

ピックアップトラックが急加速したのを見て、蔵馬は咄嗟に叫んだ。まず隣の美希を座席の下に押し込む。ハンドルから手を放して脚で固定すると身を振り、後ろの二人も車内に引き戻した。

ほぼ同じタイミングで、ピックアップトラックがW221の真横についた。そして荷台の幌が剥ぎ取られる。そこには、黒鉄の大銃身――航空機すら撃ち落とすD S h k重機関銃の黒い銃口がこちらを向いていた。

銃轟が爆ぜる。

至近距離から放たれた12.7 x 108 mm弾は厚く防弾処理された装甲を難なく引き裂き、防弾ガラスを貫き破り、無残に重機関銃の威力に蹂躪される。

破壊の嵐が巻き起こったほんの数秒で、厚い装甲の防弾車は走る鉄屑と化した。

だがしかし、エンジンは未だに熱を湛え、そして蔵馬たちもまだ生きている。

蔵馬はハンドルを回す。W2221は銃撃を受けながらも、鋭く右に動いた。ピックアップトラックに体当たりを食らわせる。

時速100km以上の速度で走る自動車同士がぶつかると、中の人間は相当な衝撃を受ける。体を固定されていないDShk重機関銃の射手は大きくよろけ、銃把の担い手を失った機関銃は弾を吐き出すのを止めた。その隙を蔵馬は逃さない。

素早く体を起こし、腰のホルスターからP220拳銃を抜く。破碎した防弾ガラスの隙間、一瞬の視界に映った重機関銃の射手の身体を、三発の弾丸で撃ち抜いた。射手は血の帯を引いて荷台から落下し、背後に消えた。間髪入れず、再度ピックアップトラックに体当たりを決めた。さすがに怯んだのか、ほんの少しブレーキが入る。その速度の差がついた一瞬で、蔵馬はW2221をピックアップトラックの前に滑り込ませた。そうやって頭を押さえ、拳銃からガンケースのM4カービンに素早く持ち替える。

そして足元に備え付けられている誘導灯を取り、窓から後ろに投擲した。クルクルと宙を舞う誘導灯が、ピックアップトラックのフロントガラスにぶつかる寸前。運転席の窓から身を振り出し、M4カービンで誘導灯を狙う。刹那の照準、そして発砲——弾丸が着弾した。火薬の詰まった誘導灯は灼発し、眩い赤光がトラックの運転手の目を焼く。

視界を奪われた運転手は思わず急制動が掛け、W2221との距離が一気に開く。



蔵馬はM4カービンの銃口を後ろから前に移す。蔵馬が見たのは、高速道路に点在する電光の道路情報掲示板だ。その基部に小銃のフルオートを放つ。掲示板はW221がその下を通過した瞬間の道路に落下し、後続の行く手を塞いだ。

ピックアップトラックは何か停止に成功したが、他の後続車は次々に追突を繰り返して壊滅状態に陥っていた。

追走集団を引き離し、蔵馬は少女たちに声をかける。

「生きてるか!？」

「……生きてます」

「……なんとか」

「……………」

後ろの二人からは返事があつたが、隣からは返答が無い。蔵馬は座席の下からシートに美希の身体を戻す。美希は白目を剥いて気絶していた。無理も無い。

「何ですかあれ……」

髪にまみれたガラス片を手で払い落しながら、モモは全身に負傷が無いか確認する。

「あれはテクニカルって言うてな。トラックの荷台に重機関銃とか無反動砲を搭載させる、手作りの戦闘車両だ。イラクで民兵がよく使っていた」

「重機関銃は反則だ……車がボロボロ。よく生きてたな私たち」

同じくガラス片で頭をキラキラ輝かせているアザミは起き上がり、W221の状況を見て顔を引き攣らせた。W221は半壊と言っても過言ではない有様となっている。窓はフロントガラスを除いて全て粉碎され、シートの背もたれも半分の高さまで千切れている。四隅のピラーもほとんどへし折りしており、屋根部分がいつ取れてもおかしくない。

「車体ではなくて窓の高さを撃つてたからな……ギリギリだ。次は俺たちがミンチにされるぞ」

今なんとか生きていられているのは、彼らの錬度不足があつたからだろう。わざわざ目の鼻の先まで接近してから撃つてきたのも、距離が開くと当てる自信が無かつたからだ。あるいは零距离射撃でなければ当たらないくらいに、銃の方にガタが来ているのか。

「今のうちに逃げるぞ。前塞いでるやつらを退かせ」

「その前に弾を分けてもらえませんか。さつきMG4のマグを使い切りました」

アザミにそう乞われるが、しかし余分に持つてきているのはSTANAGマガジンだけだ。MG4とは弾薬は同じだが弾倉の規格が合わない。

「分けるつつても……」

正面のトラックから飛んできた銃弾が、バンパーに当たる。二台まで減ったトラック

は、一台が道を塞ぐ役割を担い、もう片方は攻勢に出る構えを見せている。今は何とか防げてはいるが、重機関銃の大口徑弾を掠った今では、それもいつまで持つか分からない。

モモは咄嗟に窓から半身を出して応射する。蔵馬も武器を拳銃に持ち直し、窓から威嚇射撃を続けた。窓から手を出すなど自分で言っただけだが、そもそも窓が無いのだから無効だ。

「モモ、弾貫うよ」

アザミはモモのガンケースに残っていた弾倉を取り出し、弾をMG4の弾倉に入れ替え始める。だが、これが時間のかかる作業だ。

前方のトラックに乗ってAKM小銃の弾霰を降らせてくるヤクザたちは、蔵馬たちの弾幕が薄くなったことに気付いたのである。荷台に用意した遮蔽物に隠れながら撃っていたのが、いつの間にか大きくこちらに近づき、突き刺すようにして弾を撃ちこんでくる。

DShk重機関銃に蹂躪され、何十発もの弾丸を受けたフロントガラスが、ついに限界を迎える。一発の小銃弾がガラスを貫通し、車内に飛び込んできた。運よく誰にも当たらずに後部座席のシートを挟むだけで済んだ。だがこれは、最初の一発目に過ぎない。

「調子に乗りやがって……!」

蔵馬はW221を右往左往させて弾を避けるが、いつまでも通用する手では無い。早急に次の一手が必要だ。

「……ねえ起きて!」

その一手を放ったのはアザミだった。彼女は弾の入れ替えを中断すると、助手席にいた美希を再び後部座席に引き戻した。そして肩を揺さぶり、頬をパチパチ叩く。

「んぐ……」

乱暴に覚醒を促された美希は、苦しそうに意識を戻して瞼を開く。その目の前を、再度貫通してきた弾丸が通過してシートのカッションを食い千切る。

「ひっ」

「起きた? 起きたね? じゃあこれ弾入れ替えといて。やり方はモモに聞いて。じゃあよろしく」

涙と冷や汗をだくだく流す美希にマガジンを押し付け、アザミは懐のホルターから抜いたHK45拳銃とガンケースのMP9短機関銃を両手に持ち、運転席の蔵馬に顔を近づける。

「あのトラックに近づけますか?」

蔵馬はアザミの提案に怪訝そうな顔をして、しかし彼女の手にある近接戦闘用銃火器

を見て、合点がいったらしい。

「いけるか？」

「勿論」

アザミの返事を聞くや否や、蔵馬はW221のアクセルを蹴り飛ばす。急加速した車体にかかったGに、後ろのモモと美希がふぎやあと悲鳴を上げて転がる気配がある。だがそれは一旦無視して、蔵馬はトラックに体当たりする勢いで突っ込んだ。

そして衝突する直前、W221のボンネットに躍り出る影。

サンルーフから飛び出したアザミだ。その影は山猫の如く俊敏に、そして柔らかく弾の雨の中を掻い潜る。そして敵を諸手の銃器で次々に屠っていく。

荷台の敵をアザミに任せ、蔵馬はトラックの分厚い双輪に拳銃のマズルを向ける。弾かれた鉛礫がタイヤのゴムを裂き、トラックの動きが鈍った。徐々に速度を落としていくトラックを追い抜くのと同時に、その運転席にMP9短機関銃の残弾をすべて注ぎ込んだアザミが飛び移る。サンルーフから車内に舞い戻り、一息を吐いた。

「助かった」

「お安い御用です」

返り血で真っ赤になったアザミは服の袖で顔を拭きながら、拳銃のマガジンを入れ替える。

「残り一台……！」

## 第19話

蔵馬が指差す先には最後の一台となったダンプカーがあり、その向こうには大きな橋が見えた。蔵馬は脳内に刷り込んだ地図と現在地を照らし合わせる。湾岸線も残り半分を切っていた。何とか生還の光が差しこんでくる。

だがその光を遮る様に、ダンプカーは急ブレーキを踏んでW221の鼻頭にぴたりと着いてゆく手を阻んだ。危うく衝突しかけ、蔵馬は咄嗟にハンドルを左に切ってその大きく重い車体を躲す。

二台の自動車は横に並んだまま、五号湾岸線の海橋部に入った。

ギツとタイヤが道路を嘯む音が蔵馬の耳に届いた。ダンプカーは蔵馬たちがいる左側へ一気に動く。荷台と激しく衝突し、W221は道路の最端——橋の路壁に押し付けられる。W221のポロポロの車体は耳朶を裂く金属擦過音を叫びながら、辺りを照らすほど凄まじい量の火花を散らす。

このままでは車ごと押し潰されるか、あるいは路壁を乗り上げ海へ落下する。それが狙いだろう。

「撃て撃て！」

蔵馬はハンドルを限界まで右に回しながら、P220拳銃をダンプカーに向ける。

後ろの二人も銃を取ってダンプカーを狙う。だが引き金を引く前に、何かダンプカーの荷台から落ちてきた。それは1.6mほどの大きさの、ボロ切れが巻き付いた物体——人間だった。

ダンプの荷台から乗り移ってきた男は、風貌からして東南アジア系の外国人。W221のボンネットに何とかしがみついている。そして、その手には一振り数千円の三徳包丁が握られていた。

荷台の上を一瞥すると、ヤクザの男が数人の外国人を散弾銃で脅している様子が見える。そうやって、無理やり特攻させているのだろう。

視線を前に戻すと、ボンネットにいる男は這いずって割れた運転席の窓枠に指を掛け、包丁を振り上げていた。

「邪魔だー！」

蔵馬はその頭蓋に拳銃弾を撃ちこみ、そして死体をゴミでも捨てるように海へ落とすた。

それと入れ替えるようにして、二人目の外国人が荷台から飛び降りてくる。この男はサンルーフの穴に上手く入り、車内に侵入してきた。血走った目でモモら三人を睨み、安物の包丁を逆手に持って刃を煌めかせた。



「いのー」

その男の顔面目掛けてモモは力任せに蹴りを放ち、頸椎を潰された男は即死した。蹴り殺された死体に垂れかかられ美希は悲鳴を上げるが、構ってやる余裕は無い。貧相に過ぎる武器を片手に次々ダイブしてくる外国人に、三人は容赦なく弾丸を浴びせ、時には蹴り落として死地へ送っていく。

「出てけ！ このー」

包丁を振り回す男を、モモが割れたリアガラスから蹴り落とす。

その一人で人間と言う弾が尽きたのか、ダンブカーからの攻撃が止んだ。攻防が逆転し、次は蔵馬らが銃撃を見舞う。だが大きな車体を持つ大型ダンブはバカにタフで、なかなか息絶える気配が無い。

ここで橋を半ばまで過ぎた。ダンブカーは蔵馬らを海へ落とす為、車体を右へ振り、勢いを付けてW221に体当たりを繰り返す。その度に火花の量は増え、W221の左側のドアはほとんど外れかかっている。

だがしかし、路壁を乗り越え海へ落下するには至らない。ついに痺れを切らして、ダンブカーは今までで最も大きく右へ車体を滑らせ、助走を稼ぐ。それと同時に今まで荷台に隠れていたヤクザが陰から身を出し、散弾銃で蔵馬らを狙う。

「バカが」

蔵馬は眩き、ブレーキペダルを踏んだ。W221は制動が掛かり、ダンプカーは独りで前に行く。もう何物もない空間に、散弾銃の鉛粒が散らばり、そしてダンプカーが勢い十分の体当たりを敢行する。

当然、それは空振りに終わり、今度はダンプカーが路壁に衝突する。

荷台にいたヤクザは体勢を崩し、身体がふわりと宙に浮いた。荷台から外に放り出されたヤクザは時速約100kmの慣性をその身に宿しながら、硬いアスファルトの地面に頭から落ちた。ザリザリと下ろし金に擦り削られるようにして、頭部が半分無くなった。血と脳漿を画材とした、肉と髪が混じった赤い線が道路に長く引かれる。

その光景を目で追って、美希は顔を青くして軽く吐瀉した。

一方ダンプカーは、巨体の半分を路壁に乗り上げ、しばらく持ち応えてはいたが、ついに暗い海へと身を投げ出した。破片とオイルを撒き散らしながら墜落し、高い水柱をあげて海底へ消える。

これで道を塞ぐ物は無くなった。

「やったー！」

アザミは片手で小さくガッツポーズを取り、そしてモモは嘔吐の第二波に襲われる美希の背を撫でる。

蔵馬も軽く肩の力を落とし、

「これで何とか……って、クソ」

一瞬弛緩した車内の空気が、蔵馬の舌打ちで再び緊張する。

W221のスピードメーターの針が、みるみる下がっていく。いくらアクセルを踏んでも、タコメーターのエンジン回転数も上がらない。度重なるダメージが遂に臨界点を迎えたのだ。エンジンは甲高い声で泣き叫び、アクセルを奥まで踏み切っても、時速50kmほどまでしか速度が出ない。

蔵馬はヒビの入ったバックミラーで後方を確認する。

ライトの光が追ってきているのが見えた。蔵馬が作った障害物を排除して、テクニカルが蔵馬たちを猛スピードで追ってきている。蔵馬らが抜けた海橋に入ったテクニカルは、恐らくW221の倍は速度が出ている。このままでは追い付かれるのは時間の問題だ。

「マズイぞ……もう戦える状態じゃない」

「弾もほとんど残ってませんよ……!」

モモは残弾を確認して奥歯を噛む。残りの弾数はSTANAGマガジンが蔵馬の物も合わせて四本と、美希が何とか詰め込んだMG4の弾倉が一本。アザミのMP9短機関銃の弾倉が一本。そして拳銃がモモとアザミは今装填しているだけ。蔵馬のP220拳銃は撃ち切ってしまった。防弾仕様のテクニカルともう一戦交えるには心許

ない。

そもそも、頼みの綱のW221が既に走行すら困難になっている。追い付かれる前に策を講じなければ、みんなDShk重機関銃の餌食になって、骨と肉のジャムに変えられてしまう。

いっそのこと海へ飛び込んでしまおうか。蔵馬は先に回避したばかりの海面に目を落とす。このままテクニカルと戦うよりは、少しは生存率が上がる。無論全員が泳げればの話だが。

「……お前から泳げるか？」

その言葉を聞いて、アザミが身を震わせ、小刻みにふるふると首を横に振った。入浴ですら身体を硬直させ嘔吐するアザミにとって、海に入るといふことはそのまま溺死を意味する。

「……む……りです」

「私がアザミを抱えて泳ぎます！」

身を乗り出してくるモモに、蔵馬は首を振る。

「お前も泳いだことないだろう」

万が一泳げたとしても、素人が溺れる人間を抱えて泳ぐなど不可能だ。さらに美希も気力体力とも消耗していて、服を着たまま寒中水泳を出来るとは思えない。最悪蔵馬が

三人を一人で抱えて、岸まで泳がなければならなくなる可能性がある。さすがにそれをやつてのける自信は無かった。

海へ逃げる案を退けたとして、他に何が出来るだろうか。

何が出来る。どうすれば戦える。

テクニカルはもうすぐそこに迫っている。悠長に考えている余裕はない。

「あの……」

蔵馬が思考を高速で巡らせ回転させる中、美希が呟いた。吐息に近い、薄い声は、震えの中に決意があつた。

「……私が死んだら……みんな助かりませんか……う？」

その言葉に、三人が沈黙する。美希はエンジンの異音と窓から入り込んでくる風鳴りが、妙に鮮明になつた気がした。

こちらを見る三人に向かつて、美希はこの湾岸線に入ってから、いや、モモと大阪の河川敷で襲われた時からずっと頭の片隅にあつたことを、ついに口にした。

「凄く今更なのは分かつてるんですけど……でも……私が死んだらモモたち、助かるんじゃない……」

美希はぼろぼろ涙を零しながら、奥歯をカチカチ鳴らしながら、そう提案する。それはつまり、相手に勝利を差し出せということだ。彼らが美希を狙っているのだから、自

分が死ねば他の人間は助かると言う、いかにも素人らしい、しかし現状ではもつとも『モモたちの』生存率が高い案だった。

そうしよう、誰かがそう言えば。もう引き返すことは出来ない。吐いた言葉は飲み込めず、抗おうにも、自分はこの中で最も非力だ。言った事を後悔して、しかし誰かが領いてくれることを、美希は期待した。

命の瀬戸際に立って初めて、美希は自分が自身の死よりも、他者が自分の為に死ぬことを厭う人間なのだを知る。だが一方で、自分から死に飛び込む勇気も無い。

だから、誰かに死ねと言って欲しかった。

その心を、ここにいる全員が理解できた。

何故ならモモも、アザミも、そして蔵馬も、常に誰かの為に命を死に晒し、戦っているからだ。故に、美希がなけなしの勇気を絞り出して放った言葉が理解できる。共感できる。

出来るが、受け入れることなど、決して出来ない。

「……私たちのことを思つてそう言っているんだって、分かってます。分かってますけど……また同じことを言ったら怒りますよ」

そういうモモの声は明らかに怒気を含んでいた。

今まで戦意を剥き出しにすることも、冷徹に人を殺すこととしてきたモモだが、そこ

に怒りの感情が混じっている事は無かった。

モモが感情を見せるのは、嬉しい時と、悲しい時だけだ。表面上怒っている素振りを見せても、どこか楽しげ。そんな、本気で怒ることをしてこなかったモモが得た、初めての感情。

だからこれが、美希が初めて見た、怒ったモモだった。眉間を寄せ、顔を強張らせ、そして眼だけは悲しげな、モモの怒った顔。

「今見捨てるくらいなら、京都駅で放り出してます。ここまで来たんです。美希さんは私を盾にしても、家に帰ってもらいますよ」

「……………」

怒りと、そして真の籠った力強いモモの言葉に、美希はこれ以上何も言えずに黙って俯き、ポツポツと硝煙まみれになったシートに涙を落とす。モモはその鳶色の髪の毛の頭に、そつと手を置いた。

「帰るんでしよう?」

「……………うん……………でも……………」

美希は涙に塗れた顔を上げ、そして数十メートルの距離まで迫ったテクニカルへ振り返った。テクニカルのライトに頬を伝う涙が光る。

「……………みんなに……………モモに……………死んでほしくない……………!」

それを聞いて、モモは怒面を微笑みに変えた。そしてタボールをテクニカルへ向ける。

例え効かないと分かっているとしても、そうせずにはいられなかった。

理由もわからず美希に近付いた時と同じ。思考を介せず身体が動いた。

「……………盾、盾……………盾か……………」

そんな少女たちの裏で、蔵馬はモモが放った言葉の一片を繰り返し口にする。

そして自身のM4カービンを引つ掴み、鋭く言い放つ。

「ピラーを撃てー！」

蔵馬はM4カービンのセレクターをフルオートに回し、W221の四角で天井を支える窓柱に全弾を撃ち込んだ。

義体は命令されると理由も聞かずに即座に実行に移す。

モモとアザミは反射的に体を動かし、ピラーにタボールとMG4の弾丸を注ぐ。もともと破損していたピラーが至近距離の小銃弾を受けて、穿たれ千切れた。屋根は車内ならず落ちて、それをモモとアザミがピラーの代わりに両腕で支える。

天井を無くしてオープンカーとなったW221の隣に再びテクニカルが滑り込んできた。DShk重機関銃が破壊を連ねた大口を、蔵馬たちに向ける。今度は間違いなく、全員を殺せる照準だった。



勝利を確信して、機関銃の射手であるヤクザが厭らしい笑みを浮かべた。そしてトリガーが引かれる。その刹那。

「盾だー！」

蔵馬が叫び、モモとアザミはこの外した屋根の意味を瞬時に理解した。

二人は屋根の端を掴むと、それを側面、W221とテクニカルの間に差し込んだ。

二度目の銃轟。

DShk重機関銃の連射撃が、破壊の暴風が吹き荒れ——それは辛うじて即席の盾となった天井に防がれた。もちろん天井一枚で防いでいるわけでは無い。

弾は天井の盾を貫通し、だが威力を減衰されて車体の装甲で何とか防げている。防ぎきれずに貫通してくる弾もあり、天井自体に防弾性が大してある訳ではない。保つて数秒だ。

だがその数秒が欲しかった。

「あああああくらマさんこれきつついっ！」

他の音を全て押し潰す銃声の中で、モモとアザミは悲鳴をあげる。

蔵馬はその声が聞こえるより前に、既に行動を開始していた。ピラーを撃つて残弾を無くしたM4カービンから、ポケットから取り出したカランビットナイフに持ち替える。シートから腰を浮かせて即席盾から体を出し、ナイフを投擲。

鋼の鉤爪は高速で回転しながら飛翔し、機関銃射手の喉を切り裂いた。

射手は血を噴いて倒れ、D S h k重機関銃に再度沈黙が訪れた。銃撃の終りを腕に感じ、アザミは、

「手を放して!」

モモが指示に従ったのを確認もせず、即席盾を大きく振り上げ、テクニカルに叩き付けた。予期せぬ打撃を受けて、テクニカルは操縦を失い十メートルほど後方に下がる。役目を終えた即席盾を投げ捨て、アザミは右足を抱えてシートに戻った。

「当たった……だっさ……」

貫通した弾が掠ったのだ。掠っただけとは言え、分厚いコンクリ塀すら容易く貫く大型弾薬だ。太ももの肉が一掴み分削がれていた。

アザミの傷を美希と手で押さえながら、モモは蔵馬を見た。

「次はどうするんですか!」

「あとはもう逃げるだけだ!」

今のが最後の策だった。後はもう、応援に来てもらうという兵庫県警の合流を待つしかない。

湾岸線も残り三分の一を切っている。もういつ現れてもおかしくない。

だが、テクニカルもこの期に及んで諦める気など毛頭ない。事故が死に直結する猛ス

ピードの中で、テクニカルの助手席が開く。そこから出てきた男が素早く荷台に乗り移った。三度目の射撃を行うつもりだ。

「撃たせませんよ……！」

モモは残り二本になった弾倉をタボールに詰めて構えるが、新たな射手はテクニカルのキャブに隠れて射界に出てこない。このまま再び横づけするまで隠れているつもりだ。そうなると思うのはこつちだ。近付かれる前に、あのテクニカルを撃破しなければならぬ。

「……クラマさん、このまま真っ直ぐ走らせてください」

「何？」

「残りの弾倉、貰いますね」

モモはアザミの傷を美希に任せ、タボールのスリングを肩に掛け、弾倉を口に咥える。

天井が無くなった後部座席のシートの上で仁王立ちするモモは、スカートが風に煽られて白い中身が剥き出しになっているが、モモがそれを気にする様子は無い。

「行きます」

「おいちよつと待」

蔵馬の制止より早く、モモは脚に全力の力を込める。W221に強い衝撃が穿たれ、次の瞬間にはモモの姿が消えていた。

クルマから後ろのテクニカルに目掛けて跳んだモモは、長い黒髪をなびかせて、ふわりと、飛翔する黒鳥のように美しく滞空する。その優美さとは裏腹に、獲物を狩る猛禽類のような激しきでテクニカルのボンネットに着地した。

砲弾を正面から食らったかのような衝撃に、テクニカルは体勢を立て直す為に蛇行を余儀なくされ、モモの身体は左右へ揺さぶられる。それでもなんとかしがみ付き、モモはタボールの銃口をフロントガラスに近付け、フルオートで全弾射撃する。

「——っ！」

だがしかし、大きく凹み亀裂を入れつつも、ガラスを割ることが出来なかつた。だがこの防弾ガラスも相当のダメージが蓄積されてきている。次の射撃で確実に貫ける。何とか弾倉を入れ替える隙を見つける必要がある。

だがその隙を、テクニカルの運転手も与える気はない。テクニカルは唐突に、速度を跳ね上げた。その縦方向のGに対する備えをモモは怠つた。

「ふわっ！」

モモはバランスを崩し、テクニカルのキャブの上を一回転する。そして身体が浮いた感覚があった。眼下には高速で流れるアスファルト道路。そして身体は完全に宙に投げ出されていた。死ぬ——直感が脳裏を走る。

だが、身を引く重力に抵抗が生じる。無意識のうちに、左手が何かを咄嗟に掴んでい

た。

モモはその何かにぶら下がる形で、なんとかテクニカルにしがみ付くことが出来た。ザツとロープアールが道路で擦れて、片足が脱げる。

モモは脚を縮ませ、自分が掴んだ何かを確認する。モモが命綱にしているのは、蔵馬が投げたカランビットナイフで喉を裂かれた射手の死体だった。荷台のどこかに身体が引つかかっているらしく、辛うじてモモの体重を支えている。

一命を取り留めたモモだが、危機は去っていない。この荷台には既に新しい射手が乗り込んでいるのだ。射手の男はすっ飛んで来て転んで落っこちかけているモモに一瞬唖然としていたが、すぐ回復してモモを確実に殺害するために、懐からマカロフを抜いた。

モモは射撃を受けながら、テクニカルの側面を蹴って体を跳ね上げ、荷台に入った。素早く死体の首にあるカランビットナイフを抜き、男のマカロフを正面から掴んで強引に射線を逸らす。マカロフの弾が手の甲から、血と骨を撒き散らしながら出てくる。だが一度死の淵を掠ったモモの脳はアドレナリンを異常分泌させており、痛みどころか手に何かが触れた感覚すらない。

自らの血で汚れながら、モモは射手のこめかみにナイフの切っ先を突き刺した。手首で刀身を回して脳を抉り、確実に殺してからナイフを抜いた。

制圧したテクニカルの荷台。モモは一度深呼吸をして、設置されていたD S h k重機関銃を蹴り落とした。自分たちを二度も殺しかけた兵器は、バラバラに破碎し道路に転がるゴミとなった。

あとはこの車を停めるだけだ。

モモは唾えていた弾倉をタボールに装填する。その気配を運転手は感じ取ったのだろう。今度はテクニカルの速度を一気に落とした。

次は前の方へ放り出されたモモだが、さすがにこれは警戒の内にあつた。上手くボンネットの上に乗れ、そして身体を固定する為、一度目のフルオートで傷を作った個所にカランビットナイフを突き立てた。義体の膂力に、ついに防弾ガラスは敗北を喫した。

鉤爪状の刀身がテクニカルに食い込む。これでモモの身体を縫い止めることが出来た。

モモは体勢を正すと、穴が開き、血で真っ赤になった左の拳を掲げる。

そして全て始点である脚がボンネットを蹴った。その力は大腿を伝って腰に伝導し、腰で回転を加える。蓄えた力は上身を通り、そして肩を経由して左の拳に集積する。

見よう見まねの、不格好な突きだった。

だが幾度も銃撃を受けた防弾ガラスを砕くには、十分な威力を有していた。

左拳は血の帯を虚空に引きながら、防弾ガラスにめり込む。

ギシリと軋みの音がモモの耳に届く。左拳をガラスから抜くと、ぼつかり空いた穴から怯える運転手と目があった。今日は良く敵と目が合う。

こういう時にどういう顔をすればいいか、モモは少し悩んでから、別に今から殺す相手に愛想を振りまく必要も無いと思いつつた。

無表情のまま、穴にタボールの銃身をねじ込む。

最後のフルオート射撃。三十発の弾丸が一斉に運転席の中を暴れ回り、中にいた男の血飛沫が内側からガラスを赤く汚した。

運転手を失い、テクニカルは直進する力を失って路肩へとぐんぐん接近していく。

モモはタボールとナイフをフロントガラスから抜き、前方のボロボロになったW221へ身体を反転させる。距離は数メートル。そこにはこちらを見守る蔵馬とアザミと、美希の姿があった。

テクニカルのボンネットを踏み台にして跳躍。来た時と同じように、夜空に浅い弧を描く。飛距離はびったり、W221の後部座席に辿りつけるだろう。

モモの身体が跳びの最頂点に到達した時。

背後で、まず光があった。続いて爆音と、背中を襲った熱痛。

路肩の塀に衝突したテクニカルが、その瞬間に大爆発を起こしたのだ。

「——うあつ」

爆風の凄まじい圧が、モモの身体を後ろから強く押す。飛距離が伸び、モモは自分がW221を跳び越えようとしている事を悟った。今度は掴めるものが手の届く範囲には無い。

蔵馬がモモの状態に気付き、アクセルを蹴り込んでいるのが見えた。だが今以上に加速を得る力をW221は残していなかった。

モモの目に、彼女を粉々に磨り潰そうとする路面が映った。

今度こそ落ちる。そして死ぬ。その二つの単語が浮かんだ。

モモは案外潔く死を受け入れる自分に少し驚いた。これが義体になるという事なのだろうか。

「——モモー」

随分近いところから自分を呼ぶ声が聞こえた。そして死に抗うのを止めた身体を、何者かが掴んだ。

「美希さん!」

美希が行き過ぎようとしているモモを受け止めようと、W221のシートから跳びだしたのだ。美希に抱きとめられたモモは吹っ飛ば力が減衰され——しかしいまだに落下コースの上にいる。

だが、美希の行動は無駄ではない。



「つぶねえ！」

蔵馬はハンドルから手を放して、仲良く心中しようとする少女二人に手を伸ばす。

ギリギリで、美希の服に指が掛かった。そのまま蔵馬も彼女らに引つ張られ、ダツシユボードを越えてボンネットに滑り込む。しかしモモの美希の命を掴んだ手を決して放さぬように握りしめ、一気に二人を胸の中に抱き込んだ。

「ちよっ、ハンドル！」

W221がふらりと路壁に寄った。アザミは太ももの怪我も忘れて、後部座席から運転席に身を乗り出してハンドルを引つ掴む。W221は急折し、バンパーを少し削りながらも、間一髪で路壁を躲して道路の中央に戻った。

アクセルを踏む者がいないW221はそのまま徐々に速度を落とし、そしてゆっくりと停車する。

「……………ふう」

ボンネットの上で、蔵馬はモモと美希を抱き抱えたまま、深く息を吐いた。

胸の上で、美希も同じように吐息を漏らし、モモは「助かったあ」と呟く。

そんな三人に、ハンドルを握りしめたままのアザミが、珍しく目尻を吊り上げて怒鳴り声を上げた。

「無茶すぎー！」

「はは……言い返せない」

「ほんと……アザミがいなかったら死んでましたね私たち」

「……………」

「美希さんまた気絶してる……」

白目を剥いて、とても人には見せられない顔で眠る美希。モモは瞼だけでも閉ざしてやろうと左手を持ち上げると、その手は美希の右手と繋がっていた。モモはその重なりを解かずに、右手で美希の瞼を閉める。

「……………さすがに疲れましたね」

二人はボンネットから起き上がる気力も湧かない。

蔵馬は仰向けになったまま、煙草を取り出して唇に啣える。

大阪湾の磯風と波声に混じって、遠くからパトカーのサイレンが聞こえてくる。

紫煙が立ち上るその隣で、モモは煙草と硝煙の臭いに包まれながら、星ひとつない黒一色の空を遠く眺めていた。

## 第20話

昇った太陽の角度はまだ浅い。夜から早朝に移り変わったばかりの神戸の街には、いまだ人影は疎らだ。そんな静かな青白けた市街を、覆面パトカーの護衛を前後に受けながら、濃紺色のロングバンが走る。

その中にいるのは、五号湾岸線から辛くも生還した蔵馬たちだ。

運転を兵庫県警の公安刑事に任せ、後部座席に腰掛ける蔵馬は左右から寝息を立てるモモとアザミに寄り掛かれている。一度戦闘状態に入り、脳内麻薬を大量分泌し始めた義体は、いつまでも興奮状態を維持し続ける。

脳にオンオフ機能を刷り込むことも出来るが、薬の方がほんの少しだが負担が少なく、また薬品の恒常的な必需性をあえて作って、自らの地位を向上させんとした医療・薬理研究部門の政治工作によって、日本式の義体は薬物によるコントロールを採用しているのだ。

ただし鎮静薬物を摂ると、拮抗薬も同時に接種しなければ、強い眠気に襲われる。

いま二人には、拮抗薬は与えられていなかった。脳に強い負担を掛ける為、蔵馬は使用するのを普段から避けている。

両肩を涙に濡らされながら、蔵馬は手の内でカランビットナイフを、使い心地を確かめる様に弄んでいた。

幾度も血を吸ったナイフは綺麗に吹き拭われ、鏡のように朝日に照っている。その刀身に、チラリと、四人掛けシートの窓際に座る美希が映った。

つい先ほど目を覚ました美希は、神戸を眺めて、生きて帰れた実感を得ようとしていた。

見慣れた建物や、道、それらの風景は、銃火に彩られた非日常から、徐々に美希を日常へと引き戻していく。

神戸の中央市街地を抜けて、車窓は商業地区から住宅街へと移り変わる。

入った事のある喫茶店が見え、通った事のある路地が見え、周囲が自分との関わり合いが濃い物へなっていく。

角を曲がり、高級住宅街に入ってしまったらしくして、輸送車の群れは停車した。

「到着しました」

美希が見た窓の外。瑞々とした生垣に囲まれた庭には、江戸時代から根を張っているらしい赤松の木や、亡き祖母が植えて、今は庭師が手入れをしている草花の数々が茂っている。庭の松と同じくらい古い和風建築に、住みやすいよう所々に現代家屋が増築された屋敷。

四日ぶりの我が家があった。

運転席の公安刑事は振り向きもせず、ドアスイッチパネルを操作して後部座席のドアロックを解除する。降りろということだろう。

前にいた護衛車から降りてきた女性刑事が、ドアをノックする。

美希は蔵馬に指示を乞うように目を向けた。頷きで返され、次はその肩で眠るモモを見る。最後に挨拶したかったが、彼女らは一晩戦い抜いたのだ。起こすのは憚られた。

ドアが外から開かれ、刑事が出る様に促す。

従えば、それが別れになる。それくらい世間知らずの小娘にも理解できた。

たった数日の付き合いだが、十分すぎるほどに、住む世界の違いを思い知った。車を降りれば、もう関わることは二度と無いだろう。

モモやアザミや蔵馬がいるのは、日本社会の上辺を捲って捲って、最深部まで剥がし切ったところに蠢動する血生臭い世界だ。彼らは陽の光を浴びることなく、暗い血の池で揺蕩う存在だ。

普通に両親のまぐわいから生まれて、普通に学校に行つて就職して結婚して、普通に病気が事故が運が良ければ老衰で死ぬ。

お天道様から顔を背ける必要などない人生を送るであろう、美希にとつては交錯するはず無かった人々。

これは美希が宝くじを当てるよりも確率の低い貧乏くじを引いた結果。

この国で上位百位以内の運の悪さを持った故の出会いだった。

会わずに済むなら、会わない方がいいのだろう。

交わらない二本の線が、偶然何かの拍子に一瞬重なったに過ぎない。

モモの顔を名残惜しそうに眺める美希の肩に、車外で待つ刑事が手を置いた。

半ば強引に、引つ張り出されるようにして外に出た美希は、

「……あのー」

刑事の手を払って、腫れた右足を庇いながら蔵馬に向き直った。そして背過ぎを伸ばし、深く、深く頭を下げる。

「ありがとうございます……」

蔵馬はナイフを折り畳んでポケットに戻し、軽く手をひらひら振って、ナイフの替りに煙草を指に取る。

顔を上げた美希は、刑事に連れ添われて自宅の門へと向かう。

その後ろ姿を、煙草を吹かして眺めながら、モモが頭を乗せる右肩を揺さぶった。

「いつまでもたれてんだ」

「……気付いてましたか」

「涙が止まってる」

言われて、モモは蔵馬から起き上がると、目尻に残った涙跡をブレザーの裾で拭う。涙で潤った目で美希の背を追い、安心したように溜息を吐いた。

「挨拶くらいしてやれ」

「……何を言えばいいか分からなくて。それに、守るっていったのに結構怪我とかさせちゃいましたし。今になって少しばつが悪いです」

「……まあ、初めてにしては上手くやった方だ」

「初めてって、何がです？」

「護衛任務。お前民間人とちゃんと話したことすら、今まで無かっただろ」

「そうか……そうでした」

モモは何かに納得したように一人頷く。

「……気になるなら、一言だけでも声を掛ける」

「……それは命令ですか？」

「バカ言え、そんなこと一々命令するか。自分で決めろ。それくらい自由はある」

「……分かりました」

ほんの一瞬の迷いを見せ、しかしモモは車から降りることを選んだ。そして刑事の手を借りびつっこを引いて歩く美希の後を追う。

「あの……」

背後から掛けられたモモの声に、美希は驚と嬉が入り混じった顔で振り返る。

義体が独りで来たことに、刑事は咎めるような視線をロングバンの蔵馬に向けるが、止めるなど釘を刺すような視線に逆に刺し貫かれ、一步引いて待機の姿勢を取った。

「モモ……」

「あの、えーつと……ちゃんと護れなくて済みませんでした」

第一声の謝罪に、美希は咄嗟にそんなことない、と返しそうになる。

モモは全力で、会ったばかりの自分を助けてくれた。そして現に家に帰ってこれたのだ。謝る必要などない。

感情の奔流に押されて口から出てきそうになった言葉を、美希はふと差し込んだ思いつきで食い止めた。

もう二度と会えないのだ。だから、聞いておきたいことがあった。少し意地悪な物言いになるだろうが、そういう言い方が、今の自分たちにはちやうど良い気がした。

「……昨日訊いたよね。どうして私を護ろうとしてくれたの？ 教えてくれたら……許してあげる」

任務だからとか、それが義体の役目だからとか、そういう答えを望んでの質問では無い。

それはモモにも分かっていた。そして、その問いに対する答えを、今は有している。



「……護りたかったんだと思います、美希さんの『人生』を」

「人生？」

「……もしも」

もしもの話なんて意味が無い。そう言う大人はとても多いが、しかし、モモはそうは思わない。今の自分以外が初めから義体と、人生を選べた人間とは「もしも」の意味が違うのだ。

「もしも、私が普通の女の子だったら、美希さんみたいに本物の制服を着て、学校に行っていたんでしょうね。友達と一緒に過ごして、授業が終わったらマクドナルドに寄り添って……銃の撃ち方も知らない、撃つ必要も無い、そんな人生を送ったんだと思います」

義体は素材になった人間の年齢と、ほぼ同じ歳の容姿に作られる。高校生の美希とそう変わらない見た目のモモにも、何らかの理由で死に瀕して義体にされる前は、そういう日常を送っていたはずだ。だがそれは、今の自分とは関係の無い、他人の人生だ。

「美希さんは、私が……私たちが、取り溢してしまった人生なんです。だから、護れるなら護りたい……出来る限り、幸せでいて欲しい」

美希に声を掛けたのも、それが理由だ。

初めて一人で社会の表層に出て、そこには自分が失ってしまった『普通の人生』が溢

れ返っていた。

その中で、不幸に浸った顔をして、独り頰杖をついていた美希が、モモは氣に入らなかつたのだ。自分が得られなかつた幸福の中にいるのだから、そこにいる人たちには不幸でいて欲しくないというエゴイズム。

お前は幸福なはずなのに、どうしてそんな不幸せそうな顔をしているのだという、嫉妬に近い好奇心。

美希に近付いた理由は、きつとそんなところだろう。

「美希さん、どうか自分の『人生』に帰ってください」

——そして、もう二度とこちらに來ないで。

声に出さずに飲み込んだそれは、美希一人だけに向けての言葉では無く、表の世界に生きる全ての『人生』に対する、祈りだった。

「……分かつた、帰る。モモ……本当にありがとうね」

モモの答えを聞いた美希は、再び深く頭を下げた。

「……そろそろ」

脇に控えていた刑事が、美希に促しの声を掛ける。

今度こそ屋敷の門をくぐろうとする美希に、モモもまだ聞いていない事があつたのを思い出す。こちらが質問に答えたのだから、こちらからも一つくらいいいだろう。

「美希さん」

振り返るその顔にとびつきりの笑顔を向けて、モモは小首を傾げながら、細長い人差し指で自身を指差す。

「私の事、まだ怖いですか？」

「……うん、まだ少し」

「そうですね」

それを聞いて、モモは一步、美希に歩み寄る。

「私、モモっていいいます」

「それは知ってるよ」

また一步分、間隔を詰める。

「東京の、奥多摩に住んでいます」

「それも知ってる」

一步、さらに重ねる。

「マクドナルドのハンバーガーが好きです」

「うん、知ってる」

そして二人の間には、あと一步分の距離が残った。

「歳はまだ生後半年です」

「……それは知らなかった」

一瞬の沈黙、二人は同時にぶ、と吹き出し、そして声を上げて大笑いした。

朝の静寂に、笑い声が響き渡る。

笑いの波がようやくやく引いて、少女たちは腹を抑え、肩を上下させて息を整えながら、互いに笑顔を見せた。

「じゃあね」

「ええ、では」

そして同時に踵を返し、それぞれの居場所へと歩み出した。



屋敷の門を通った美希は、中央が深く擦り削れた庭の古い石畳を踏み締めながら、疲れと睡魔が鎌首をもたげてくるのを感じていた。家に帰ったという安心感が、いままでそれらを抑えつけていた緊張を解してしまったからだろう。

脇に付いてくる女性刑事が何か言っているが、あまり頭に入ってこない。ていうかどこまで付いてくるのだろう。護衛だと言っていたが、実際は自分が余計な事を話さないように見張っているのかもしれない。まあどうでもいい。話す気にはならない。話す

相手もいないし。

祖父はまだ家に帰っていないと蔵馬から聞いた。

両親はどうしているだろう。無事だろうか。護衛を受けて家の中にいるかと考えた  
が、すぐに打ち消す。両親は日本に帰っても、二日三日で仕事に戻ってしまう。

自分が護衛を付けられ始めたのは昨日からの事なので、この事態が始まった時には、  
もう海外に飛び立ってしまったているだろう。襲ってきたのは日本の暴力団という事な  
ので、むしろ国外にいる方が安全かもしれない。

クマも通れそうな大きな玄関に辿り着き、美希はいつもの癖で鍵を取ろうとポケット  
をまさぐる。

「鍵は開いています」

刑事にそう言われて、ドアノブを捻ると、確かに施錠は外されていた。

という事は、中に誰かいるのだろう。他の護衛の人だろうか。

扉をくぐった玄関の土間には、確かに普段より靴の数が明らかに多かった。隅っこの  
方に少しくたびれた黒い革靴が二人分、そして清楚なデザインのヒールと最高級メー  
カアのローファーがあった。見覚えのある靴だ。そう、両親が帰ってきた日に見た  
――。

美希は履物を蹴り飛ばすようにして脱ぎ、疲労も眠気も忘れてリビングへ駆けだし

た。

ドアを打ち壊さん勢いで押し開けると、その大音に、驚いた顔で振り返る二つの顔があった。ソファーに並んで座っていた両親は、憔悴した様子で、顔色は今まで見た中でも断トツで悪い。

「パパ……ママ……仕事は……？」

「行ける訳ないだろう……」

一睡もしていないのか、真つ赤に充血した目の下に濃い隈を作った父親は一旦立ち上がり、そしてすぐに気が抜けたのか、ソファーへ倒れ込むようにして戻った。

「……美希ちゃん」

「……ママ」

一方母親は、涙で腫らした目からまた雫を溢し、よろよろと覚束ない足取りで近付いてくる。そして手前で倒れかけた母の身体を両腕で受け止めて、数年ぶりの懐かしい香りを嗅ぐ。両親が帰ってくるたびに家の中に満ちていた、柔らかな香水の匂い。母の香りだった。

「良かった……良かったよお……」

いつもは物静かで、冷めた印象すらある母が、まるで幼子のように泣きじゃくっている。見ている方が冷静になってくる泣きっぷり。美希は母の背を撫でようと腕を回し

た、その時、逆に彼女の頭を母は優しく、力強く抱きしめた。

いつ振りかの抱擁。物心ついた時にはもう無かったかもしれない、その感触は、確かな懐かしさがあり、帰ってきたのだと、美希が本当の意味で実感させるには十分なものだった。

「ママ……ごめん……ただいま……」

親子で大号泣しながら、ただいまとおかえりを繰り返して、こうして美希は、ようやく自分の『人生』に戻る事が出来たのだった。



クリスマスイブを迎えた日本の朝は、五号湾岸線で起こった銃撃戦の話題で持ちきりだった。ニュース番組、インターネット、新聞紙、あらゆるメディアで取り上げられたその事件は、『海外マフィアと日本の暴力団による抗争』として報じられ、世間もそれを事実として受け入れ、あるいは懐疑的であっても、隠された真実の全貌に気付く者は皆無に近い。

大阪の街に、その真実を手繰り寄せた者が数少ないうちの一人いた。

西成あいりん地区の公園、煩雑さに満ちたその場所。ある者は錆びた一斗缶を火鉢に

廃材を燃やして暖を取り、ある者は毛布に包まり、石になろうとする様に微動だにしない。そんな浮浪者の群れに混じった、一人の男だ。

公園の隅にある縁石に腰を掛けたその男は、四十歳を超えたかというくらい顔相で、総髪を一つに縛り、綿が固まり薄くなった半纏を二重に重ね着ている。

いつ雪が降り始めてもおかしくない寒気の中では心許ない防寒措置だが、男は寒がるどころか、むしろこの公園にいる誰よりも元氣なくらいだった。瞳には熱があり、全ての事柄を楽しんでいる節すらある。この町にはあまりいないタイプの男だった。

昨今起こった一連の真実を知っているこの男は、しかし知っているからと言って何をする訳でもなく、ベニヤ板にマジックで線を引いたお手製の将棋盤と駒を使って呑気に遊んでいた。

「そうか……大変だったなあ……何か力になればいいが……そうだ、これあげよう」

感心したように腕を組み、ウンウンと頷く男は、半転のポケットから黒飴を対局相手に差し出した。

受け取ったのは、元の駒は紛失したのか、平べったい小石に『歩』と書かれた即席駒を指に挟む、またこの街では浮きに浮く、いまだ子供の色が抜けきらない少女——楊一花だった。

「ありがとうございます……おじさん良い人……!」



古着屋から七百円で買った男物の黒いダウンコートで身をすっぽり隠した一花は、疲労の蓄積した顔に笑顔を咲かせ、コロコロと舌の上に黒餡を転がした。

実に二日ぶりの食事だ。空腹に耐えきれず口にした雑草は苦すぎて吐き出したのでカウントしない。

「甘い……美味しい……」

一昨日関東から逃げ出した一花は徒歩とヒッチハイクを繰り返して、今朝大阪にやって来たのだ。大阪だとこのあいりん地区が何でも安くて住みやすいと、ヒッチハイクで乗せてくれた変な格好をしたおばさんが教えてくれたのだが、いざ来てみると道行く人はジロジロこちらを見てくるし、一昨日の一件で培ったヤクザセンサーに反応する人もいっぱいいるしで、恐々としていた。

ともかく宿を探そうにも疲労困憊して、一先ず休憩しようとするこの公園の縁石に尻を置いた時、飴をくれたおじさんに声を掛けられ、それから数時間の間、将棋を打ち続けている。

寒いしかつ怠いなあと思いつつ、勝てたらご飯を奢ってくれろというので勝負を受けたが、このおじさんがまた強く、なかなか勝たせて貰えない。

そして続く対局の合間に、沈黙を持って余したのか、おじさんの乞うままにこの街に至った経緯を語り終えたところだった。

「日本に来てまだ三ヶ月だったか。それにしても日本語上手いな。訛りも無い。どこで習ったんだい？」

「辞書で覚えました」

「……辞書だけ？」

「そうですけど……訛りは、結構苦戦しましたけど、でもここ数日でやっと直りました」  
「だが、学校には行っていないんだらう？ 字はどこで？」

「もー、おじさんったらバカにして。字なんてわざわざ学校に行かなくて、一度見たら覚えられるでしょ？」

それを聞いて、男はとびつきりのオモチャを与えられた子供のような笑みを浮かべた。

その破顔に首を傾けながら、一花は石の将棋駒を盤に置く。

男は即座に次の一手を打ち、そして一瞬で顔から笑みを消す。

同時に男が纏う空気が変わった。ぐにやりと曲がったような、ぐるりと渦まくような、大よそ人が出すような質では無い空気。身を委ねたくなるような、圧倒的な力に満ち満ちた、そんな空気。

「……おじさん？」

「……君は……」

その言葉が終わる前に、男の放つ空気は出てきた時と同様に、唐突に霧散した。

そして一花から脇の方に首を巡らせる。一花も釣られて目を向けると、そこには赤い紙袋を手を持ち、小奇麗なコートにスーツを着た、若いのか歳を食っているのかよく分からない不思議な容姿の男がいた。

「……悪いが、勝負はここまでだ。ご飯は奢つてやれない……まあ俺が負けることなんてないんだが……ともかく代わりにこれをあげよう。餞別だよ」

何も言わずに盤面を覗き込むコートの男を無視して、黒飴の入っていたポケットからキーホルダーが付いた鍵を出した。一花は飴と同じように受け取る。

「何の鍵ですか?」

「俺が泊まっているホテルの鍵だ。あと四十八日は泊まれるようにしてある。それで許してくれ」

「いい、いいんですか?」

「いいとも。……俺はもうそこには帰らないからな」

「あ……ありがとうございます!」

鍵を大切そうに懐に仕舞い、一花は荷物を担いで縁石から立ち上がり、大きく一礼して公園から出て行った。その姿を見送りながら、男は面白くなさそうに言う。

「可愛い女の子との時間を邪魔しないでくれるか」

「あんな貧乏臭い女が好みか、御堂」

「貧しくとも花は花だ」

そう言つて髪の伸びた頭を搔いてから、半纏の懐に手を突っ込み、御堂文昭は一笑した。

「何の用だ」

「そろそろ働いてくれないか。君に渡すものもある」

スーツの男——李明は一花がいた対面に腰を下ろし、盤面を見下ろしながら尋ねる。

「いつから大阪にいた？」

「一週間前。しばらく滞在するつもりだったんだが、そうもいかなくなった。誰かが無駄に派手な騒ぎを引き起こしてくれたお陰でな。……多少の予定外があつたが、おおむね順調つてところか。お疲れ様」

御堂は黒飴を差し出す。

李明が大玉の飴を口に放り込んだのを見て、御堂は半纏の中から今朝の朝刊を出した。大見出しには湾岸線の記事。しかし御堂はその一面には触れず、株式欄の一角を指した。

「西京重工の株価が急に上がっている。しかし何か情報開示がされたわけでは無い。つまり、開示されていないが美味しい情報が、株式ディーラーの一部で広がつたんだろう

な。例えば——」

御堂は国際面に指を滑らせる。そこには既に日常風景になりつつある、中国国籍船舶による日本領海の侵犯の記事があった。

「西京重工が新兵器の生産を受注した、とか」

「……お見通しか」

李明の歯が、固い黒飴を粉々に噛み砕いた。

「断片的な情報を組み立てていくのが好きだね。推理の答え合わせをしてもいいか？」

どうぞ、と両手を広げて促す李明に、御堂は話を続ける。

「お前が欲しかったのは、開発中の空対艦ミサイル、XASM-3の開発データだろう。海洋進出が国是の中国にとって、その脅威となる対艦兵器の情報は何としてでも入手しなければならぬ。つまりお前の仕事だな。」

しかし、ミサイル開発のデータは一昔前ならいざ知らず、現政権においては秘中の秘。この国で最も警備が分厚いブラックボックスの中にある。毛の先ほどの隙間も無い。だが、その完璧な警備が、一度だけ解かれる瞬間がある」

「厳重な金庫に保管されている物を盗み出すのは容易ではない。金庫をこじ開ける労力を費やしているうちに、その金庫の管理人に見つかるとかかもしれない。そもそも開けられるかどうか分からない。しかし、金庫の中身はどうしても盗み出さなければならぬ」

い。ならどうするか。

「二昨日から昨夜に掛けて、防衛省技術研究本部と西京重工の防衛事業部の極秘会議があったな」

金庫をこじ開けられないなら、管理人が正当な手続きを踏んで開くのを待てばいいのだ。

古い金庫から新しい金庫に中身を移す、その瞬間を狙えばいい。

「もちろん会議の警備も厳重だ。優秀な警備責任者が、長い時間をかけて緻密に組み上げた警備計画。恐らく金庫の中にあつた時とそう変わらない、不可侵の防衛線が張られていたはずだ。だから、その警備計画を変更させた」

そこまで言つて、御堂は新聞の一面に戻つた。

「この戦闘、ヤクザ同士のじゃれ合いなんかじゃない。たった一台のベントツに、雑魚チンピラとは言え銃器で装備した連中……大柳組の組員が乗つた、十四台の即席機動部隊が全滅させられたんだ。そしてベントツには西京重工防衛営業部、その統括責任者である斎藤孝三の孫娘が乗つていたそうだな。」

昨日の発砲事件があつた新幹線にも、その孫娘が乗車した記録がある。報道はされなかつたがタクシーと乗用車の衝突事故、新大阪の近くであつた発砲事件、両方の現場近くでも目撃されている。ここ数日関西で起こつた事件、全部この子が中心にいた。

だが、本当の中心はこの娘では無い。祖父の斎藤孝三でも無い。お前が標的にしていたのは、会議の警備計画だ」

警備は精緻で複雑なシステムで織り成され、難攻不落、蟻穴の一本も許さない、盤石の防壁で会議とその参加者、そして持ち出された開発データを護っていた。

李明はそこに、参加者の身内を襲うという一石を投じたのだ。参加者の身内が何らかの攻撃を受ければ、当然参加者に警備を追加する必要がある。出てくる。

しかし、取り行われているのはごく一部の者のみが参加を許された極秘会議だ。警備を増員しようにも、投入できる人員には限りがある。結果として、使えるのは元々配備されていた会議の警備担当者のみとなり、警備計画は否応にも変更せざるを得なくなつた。

完璧だった計画に、ほんの少しの亀裂が生じる。隙間さえ出来れば、あとは身を滑り込ませ、大事に護られていた金庫の中身を搔つ攫うだけだ。

「しかし、作戦は良くても実行部隊は未熟だな。どうしてあんなチンピラを使つたんだ」  
「そこが誤算だった。あいつらがあそこまで無能だとは思わなかったし、娘の護衛があんな規格外の化け物だったのも想定外だ」

「護衛、な……」

「結局、欲しかったデータも半分しか手に入らなかった。寸前で警備員が急増した。あ





でしか浮けない。鯉みたいに口をパクパクさせたり、時々波に飲まれガボガボ言うのを見て笑った後、決めた時間まで放置して、まだ顔が出るかどうかを賭ける」

「どつちに賭けたんだ？」

「俺はその時に使ったロープの長さ、引き潮の時の水深だつて知っていたんだ。だから勝てた」

「小狡いやつだ……ちなみに規定時間は？」

「来年まで」

「すぐだな。優しいね」

御堂は肉まんを飲み込み、手に付いた油を小汚い風貌とはチグハグな最高級ブランドのハンカチで拭う。

「もう一つの目的つてなんだ」

「ああ、ついだから新設の諜報組織も探つてやろうと、ちよつと尻尾を垂らしてやった。見事に食い付いてきたよ」

李明は不味いと呟き、赤い紙袋を中身ごと放り捨てた。そこに、いつの間にか集まつてきていたふてぶてしい顔をした三匹の野良犬が飛びついた。残飯を貪る獣の忙しく動く尻尾を眺めながら、李明は陰のある笑みを浮かべる。

「不入虎口、焉得虎子。虎の子を獲りに来たつもりだったのだろうか、そこには虎がいる

ことを忘れてもらっては困る」

「しかし半分は失敗した」

「だから、連中があんなに強かったのも予想外だった。お前もダムで会ったんだらう？」

あの化け物どもに」

「……ああ」

御堂は情報屋から買った、ペンツの中身を映した防犯カメラの写真を思い出す。荒い画だったが、そこには見覚えのある少女が二人映っていた。人間を超えた能力を持った、人の姿をした化け物。虎の子を獲りに来たのも、同じく虎だったという事だ。あれが一体何だったのか、御堂ですらその正体を掴みかねている。

ただ一つ明確なのは、あれが御堂の敵であるという事だ。

今はそれでいい。じっくりと、本性を見極めていけばいい。

きつと彼女らとは長い付き合いになる。そしてこれからの計画の、最大の障壁になる。

そういう予感が、御堂の中にはあった。

「……………そろそろ、会いに行つてやるか」



東京、奥多摩の夜は地上に闇が満ち、対して天空は幾千の星々が青白く輝いている。

国立児童社会復帰センター本部棟の屋上の縁に立って、坂崎は広い敷地と周囲を囲む森林、それらを飲み込む暗黒を見下ろしていた。存在の秘匿性から衛星や航空機に見つからぬよう、センター内は基本、夜間に照明光を外部に漏らすことが法度とされている。全ての窓には遮光カーテンが掛けられ、外灯も最低限のみしか設置されていない。

黒一色の世界の中、坂崎の口元に灯る煙草の火だけが赤い。

「——おや」

出入り口から声があつた。階下から上がってきたレナードが、屋上に先客がいることにまず驚き、そしてその煙草の主が坂崎だと気付いたらしい。

時刻はとつくに丑三つ時を経過している。いくら不眠不休で動き続ける政府機関とは言え、この時間になると夜間勤務の人間と、時間の感覚が狂っている研究員の類がちらほら徘徊する程度だ。まして年の瀬迫るこの季節。深夜の奥多摩は下手すれば凍死出来るほど寒い。煙草を吸うにしても、もう少し居心地の良い場所があるだろう。とは言えレナード自身、わざわざこんな場所を選んで煙草を吸いに来た。人のことをとやかく言える立場にはない。

坂崎の隣に立ち、レナードはアルミ柵にもたれ掛かつて煙草を啜える。そしてライ

ターを忘れたことに内心舌打ちを打った。

「こんばんは、ミス坂崎。煙草を吸いなさるんですね」

「たまには、吸いたくなる時もあります。こんな仕事ですからね」

「俺もね、気分転換したくなると、ここに来て吸うんです」

「ええ、存じています」

口の煙草を指に挟み、坂崎は微笑み返す。

「お忙しそうですね、ガルシアさん」

「ええ、蔵馬のやつが大阪で先にクリスマスパーティーを始めやがりましたね。クラツカーの音があまりにも煩いつてんで通報が掛かって、大阪の支局員と公安は事態の收拾にてんてこ舞いだ」

「あの人はトラブル体質と言うか、映画の主人公並みに何故か状況がどんどん悪くなっていく星の下に生まれていますからね」

坂崎は特に面白くもなさそうに笑い、煙草の煙を呑む。

「大柳組は組員のほとんどが蔵馬さん達に殺され、組長の大柳は大阪湾で水死体となつて発見。防衛省と西京重工の会議にも工作員に入り込まれて、少し情報を盗まればしましたが、辛うじて最重要事項の保護には成功。これで一連の事件はひとまず終結。そんな感じですかね」

「そんな感じでしょう」

「そんな感じじゃないでしょう」

唐突に、気温が十度は下がった感覚。

レナードは屋上に殺気が満ち始めたのを肌感じた。ドライアイスで皮膚を焦がされていくようなヒリヒリした緊張に、部隊を隠していたのかと周囲の気配を探るが、屋上には坂崎以外にはいない。

日本人の中でも特に大きい方では無い、一見どころか毛先から爪先まで観察しても特質すべき点など見当たらない、ただの小娘から、一部隊分に相当する膨大な殺気が放たれているのだ。

「これがモモちゃんのコートの襟裏に付いていたのですが、見覚えはありますか？」

坂崎は十円玉サイズの黒い円盤を親指で弾き、レナードの胸に打ち付けた。

「発信機のようなですな。一体誰が取りつけたのやら」

床に落ちた発信機を、坂崎はヒールの踵で踏み潰した。

同時に屋上に渦まく殺気が一層濃くなる。ここまで来ると、額に銃口を押し付けているのとそう変わらない。

「今回の件、中国情報部が絡んでいると諜報部に報告しましたが、その情報が揉み消されていました。道理でやけに非協力的なわけです」

「事務上の不手際ですかね？ 部内に注意勧告を出しておきましょう」

さらに殺気が濃くなり、言葉の一つ一つに殺意が籠っているようだった。

「……………貴方……………一昨日から随分と忙しそうでしたね？ どなたと頻繁に連絡を取っていたんですか？」

「それは守秘義務半分、プライバシーが半分の理由で言えませんね。今夜クリスマスディナーに付き合ってくれるなら、プライバシーな方はお話しても構いませんが」

瞬間、レナードは自分の身体がぐつと下に引つ張られたのを感じた。

坂崎がネクタイを掴み、引いたのだ。レナードは思わず腰を折る。

目の前に坂崎の眼鏡面が来た。少し首を伸ばせばキス出来そうなほどに近い。しかし彼女に啜えられた煙草が、あと一寸動けば右眼を焼き潰す位置にあつては、これ以上近づく気にはなれなかつた。

眼鏡越しに交錯した視線。

レナードの鳶色の目を覗き込む坂崎の目は、夜の闇より深く、暗く、冷たく、殺気が染み出る虚ろな穴としてぼっかり開いていた。

「……………一度目はありませんよ？」

何か一言でも余計な事を言えば、そのまま目を躊躇なく焼いてきそうな声だった。

薄桃色の唇が紡いだ言葉は普段の朗らかな明るい声からは、比べようもないほどに

重々しい。聞いた者に有無も言わせない、心を抉り刺すような凄味があつた。

そしてレナードが何かを言う前に、ネクタイから手を放した坂崎は、啞え煙草を指に持ち、火の点いていないレナードの煙草に近付ける。

「どつどつ」

「……………どうも」

レナードは煙草を燃やし、煙を吐く。

坂崎はそれを見て、いつも通りに見える笑顔で頷き、煙草を屋上から下界に放つた。赤い光が闇に飲まれて、そして消えた。

レナードがその軌跡を目で追ひ、次に坂崎に戻した時には、すでに屋上には彼一人になつていた。

空气中に滞留していた殺気もすっかり消失し、レナードの喉から思わず気の抜けた息が出る。

とんでもない女だ。仕事柄、色々とぶつ飛んだ人間と幾度も出会ってきたが、あれほど恐ろしい女は初めて見た。さすがは三十にも満たない歳で、警察に自衛隊にその他公安組織からはみ出た一癖二癖もある職員と、義体を預かる作戦部の現場指揮官を任されるだけはある。

恐ろしいのと同時に、つい従いたくなるカリスマも備えている。少ない情報から状況

を正しく導き出す知性もある。しかも美人だ。なるほど、確かに彼女をトップに据えれば現場の士気は上がる。

「やれやれ、堪らんぜ」

レナードは楽しそうに笑って煙を吐き、携帯電話を取り出した。

番号をプッシュし、そして英語で話し始める。

「課長？ 俺です、ええ、大丈夫です。もうこれきりにしてくださいよ。貴方の個人的な貸しを返すために、こつちの寿命が十年は縮んだ。怖すぎてアソコまで縮んでしまつてる。クリスマスだつてのに、これじゃ今夜は勃たないかも……これは貸しですからね。

まったく、貴方もそろそろ彼方此方に貸しを作るのを止めた方がいい。死ぬまでに返し切れませんよ。……ええ、諜報部のほうはあらかじめ揉み消しました。作戦部には関与が知られましたが、まあ問題ありません。彼女も、我々の協力なくして、センターの存続が無いことを理解しています。だから気付いても見逃したんでしょう。

……蔵馬ですか？ 勿論生きてますよ。こんな事で死ぬ訳がない。あいつもそりや気付いてるでしょうよ。……大丈夫ですつて。全て納得済みです。今でこそ少し日本かぶれになっていても、アイツの本性は愛国者だ。我々が……自分がどういふ存在なのか、身を持って理解しているはずですよ。

——我々は世界で最も強く、最も狡く、そして最も自由……それがアメリカ合衆國中





## 第21話

正午過ぎの国立児童社会復帰センターの義体寮、その玄関にはラウンジが設置されている。丸テーブルを囲む、一人掛けのソファが三つ。それが二対あり、壁際には四人掛けの長椅子がある。

一人掛けソファだけで現在の寮生の数を超えているラウンジは、基本無人だ。くつろぐなら部屋に戻るし、駄弁りたいなら誰かの部屋に行った方がいい。強いて言えばここにはテレビがあるが、映るのはNHKだけなのであまり集客効果を発揮していない。だが今はモモがいた。検査衣の上に白いセーター姿で、ラウンジに備え付けられた一人掛けのソファに腰掛け、テレビを眺めている。画面に映るのは往年のプロレス試合だ。モモが初瀬に借りたDVDの映像である。

覆面レスラーのフランケンシュタイナーを見つめるモモの脇を、外から帰ってきたアザミが通る。ブカブカのダツフルコートを着てなお寒さに凍えながらラウンジを通過し、チラリとモモを見て、そしてもう一度見直した。

「見覚えの無いブサイクがいると思ったらモモか」

「……………」

いつになくぼつてりした唇を尖らせ、アザミを無視して画面に齧りつく。アザミの言う通り、モモの容貌は普段と少し違う。かなり浮腫んでいる。

膨らんだ顔をテレビから話そうとしないモモ。無視を決め込んでいるようだ。そういう態度を取られると、からかいたくなる心理に駆られるのがアザミと言う少女だった。普段は平坦な口元をにいと薄く吊り上げ、モモに寄っていく。

「ん？ あれ？ モモかと思っただけど、やっぱり見覚えの無いブサイクさんですか？」

「……放っておいてよー」

「いやいや、放つてはおけないよ。知らない人だったら警備員を呼ばないといけないし。ほら白状しな、ただの見知らぬブスかな？ それともブスになったモモかな？」

「あーもー！ 煩い！」

「はは、キレたブスの顔こっわ。それで、なにその顔」

アザミは一しきり笑った後、モモの正面にあるソファーに座る。モモは無視を選択肢に一瞬だけ入れた後、益無しと判断して返事した。

「……薬の副作用です。じゃあ私もう行きますね」

「どこ行くの？」

「研究棟です。検査結果が出る時間なので」

モモはテレビの電源を消し、傍らにあった赤い外套を羽織る。寮の玄関に向かうその

背に、アザミが何故か着いてきていた。

「……………何？」

「もうちよつとその顔を眺めていようと思つて。暇だし」

「お好きにどうぞ」

言つて、溜め息。その息は玄関の外で白い靄となり、冷えた大気に散る。義体寮の外は、銀白の雪に覆われていた。

今年は無発的な降雪はあれども積もるまでには至らなかつた雪が、今頃になつて本腰を入れ始めたのだ。今朝、積雪を初めて見たモモとタンポポはそこそこはしゃいでいたが、一時間もすれば飽きる。靴が濡れることを厭いながら新雪をサクサクと踏み、モモはアザミと研究棟へと入る。

ここは青少年育成施設時代のもをそのまま流用した他の棟とは違い、かなり大規模な改装を受けた建物だった。会議室や多目的室は様々な機器が運び込まれ、あるフロアは手術室を設けるために壁ごと打ち抜かれて基礎から作り変えられている。

五分もすれば芯まで凍えそうな外とは違い、研究棟の中は空調がしっかりと効いている。空調はもとよりエアクリナーが強く作動し、空気に匂いがあまりしない。強いて言えばオゾン臭と薬品の臭いが微弱だが漂っている。

職員の質も本部棟とは異なり、一言で言えば研究畑風の人間が多い。白衣を着て、い

つも難しい顔でコンピュータや紙面に向かっているかと思えば、時々突拍子もない言動を取る。

社会の裏側で働く人間の巣窟である本部棟とは違った意味で、異空間な雰囲気醸し出す場所だ。しかし、ここの職員は基本義体に優しいので、モモは研究棟が好きだった。四階建ての研究棟、一階には職員用の医療施設があり、二階から上のスペースは義体の運用・研究のために割かれている。目的地は三階の検査室だ。

階段を登る途中、窓から見下ろす白い眼下。広い駐車場が見える。普段は職員の乗用車が多く並んでいるが、今は数えられるほどしか停まっていなない。

仕事で出ている者が七割、残りの三割は休暇だった。坂崎や佐久間の車すら無く、作戦部は開店休業状態である。

モモは無意識で蔵馬のヴェゼルを探すが、黒い車体は見つからない。今朝から姿が無かったが、出かけているようだ。常盤の高級車や初瀬のデカイアメ車も無い。唯一石室のスポーツカーだけ、雪に埋もれている。

モモの眉が微かに動く。担当官には担当官の都合がある。それは分かっているが、それでもなお、こんな日に、と思ってしまう。

今日の暦は十二月二十五日。

モモが大阪から帰った翌日であり、世の中はクリスマスであった。

東京都赤坂区に『日月』という料亭がある。表には看板の類は一切なく、小柄な一軒家風の面構えをした古い建物だ。古いと言っても並みの古さでは無い。創業百年を跨ぐ、文久の時代より続く老舗である。

幕末の騒乱、日清・日露戦争、太平洋戦争、そして戦後の混乱期。それら全てを見てきたこの『日月』だが、長く続いてきた割に、その存在を知る者は少ない。何故か。それはこの小さな飯屋が、歴史の大流の中——それも歴史の闇として葬られる、日本近代史の裏側に関わる場所だからだ。

元は討幕派の志士が、密かに集うために時たま用いた空き家だったらしい。そのうちに、この土地が密会に向いた土地であると知った志士たちが頻繁に出入りするようになると、空き家のままではかえって目立つということで飯屋の体を取り繕うようになった。それが料亭としての『日月』の始まりだ。もともとこの頃は『日月』という名前すら無く「あの店」などと呼ばれていた。

そのうち討幕派の時風が日本を取り巻き始めると、密会を要するような上方の志士たちはもつと上等な料亭などに出入りするようになる。『日月』は無関係の人間を店に入れないために、かなり高めの価格設定になっている。こうして『日月』は政治からも世俗からも離れた特殊な店となった。

その特殊性が、この店を歴史の大渦に巻き込むことになる。

一時は討幕派からも存在を忘却された故に、幕府、討幕派両方の監視の目から零れ落ちた『日月』は、本来なら会うだけでも互いに都合の悪い人間同士が顔を突き合わせるのに、格好の場所となったのだ。ただ闇雲に争って共倒れしては本末転倒。幕府も討幕派も落としどころを探していた時期だ。

現代においても、重要な会議は始まる前から結論が出ているものだ。それ以前に行われる事前会議で、幾重にも積み重ねられた事前準備と妥協案の応酬。それらの末に出た合意案を確認してハンコを押す。

幕末の政治家たちも、その事前会議を進める為に、まず会議の会場を探していた。現代と違い、下手すると仲間に「敵と通じた」と誤解されて斬り殺されかねない時代だ。そういう経緯で使われることとなったのがこの店だった。

『日月』という名前もこの頃につけられた。太陽と月の如く、本来同じ場所にいるはずの無い者同士が膝を突き合わず。そういう意味だ。

そうして『日月』の密会の末に江戸城が明け渡され、明治時代が幕を開ける。その後も『日月』は本来会うはずの無い人間同士が偶然出会う場所、という立ち位置で常に歴史の大局に立ち合ってきた。

そういう店だ。薄暗く人気の希薄な店内。その中に唯一ある座敷の奥に、中年太りを引きずったまま壮年に入った恰幅の良い男——竜木正太郎内閣総理大臣が分厚い座布団に腰を下ろして、上等な日本酒を熱燗にしてあおついても、不思議では無い。

「竜木様」

襖の向こうから琴の音の様な女将の声がする。竜木は手にあつたお猪口を置いた。

「ただいま店内が大変込み合っておりまして、大変申し訳ございませんが相席の方にさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「構わんよ」

襖が開くと、二人の男が身を傳かせていた。

一人は国立児童社会復帰センター作戦部の部長、佐久間だ。その隣にいる細身の中年男性はセンターのもう一つの実働部署、諜報部の部長を担う男。工藤忠彦だ。

佐久間がいかにも軍人然としているのに対し、工藤はスーツが似合うインテリ風だ。すつきりした鼻筋に、尖った顎。切れ長の眼は佐久間に劣らず鋭い。

「失礼します」



二人は座敷の下座に並べられていた座布団に膝を付いた。

「……偶然だな」

「ええ、お久しぶりです、首相」

工藤の言葉に、竜木は脂の乗った頬を笑みに歪める。

「直接会うのは二年ぶりか……あの時はまだ総理じゃなかったな」

竜木は猪口を取り、一人酌で再び酒を飲み始める。

「どういう手管を使ってアポを取ったのか、正直驚きを通り越して恐怖すら感じたぜ。なあ、どうやったんだ？」

「総理、我々との相席は偶然ですよ」

「そう言って一応の会釈を見せるのは工藤だ。無論偶然などでは無い。ただ総理大臣相手であっても言えないだけだ。幾つものコネを潰し、とてつもない額の金を使い、法を掻い潜り見ぬふりをし、途方もない綱渡りを繰り返す。

人生が百回は破滅してもおかしくない、そういう道の末に、二人は竜木との邂逅を果たしている。

「そうしてでも会わなければならない理由が、当時の二人にはあったのだ。」

「ふん……。お前らはあの時、偶然、相席になった俺にテロリストだの工作員だの語り聞かせて、M I 6みたいな組織を設立させてくれって頼みに来たよな。電波なスパイ映画

オタクの集いに巻き込まれたのかと思つたぜ」

「あの時は我々も必死でして……」

「だからセンターを拵えてやった。……それで、今日はどんな話を聞かせてくれるんだ？」

「テロリストの首領が分かりました」

無言を貫いていた佐久間が口を開いた。背筋を高く伸ばし、老兵の目はまつすぐ竜木を見つめる。

「御堂と言う名の男です。いとも簡単に大量の銃器や兵士を集める資金力。我々を誘き寄せる為にダム一つを占拠して、無事に逃げ切る大胆さと個人の戦闘能力。我々がテロリストの存在に気付いて数年が経ちますが、その間ずっと隠れ続ける賢さと敏捷さ。どれをとつても常人の域を超越しています」

「それで？」

「この期に及んで姿を見せたのは、隠れる必要が無くなった……つまり奴らにとつての準備期間が終えたことを意味すると考えられます。今の我々ではいづれ限界が来ます」

「つまりもつと金を寄越せつて話か」

竜木は熱燗を飲み干し、懐から煙草を出した。工藤はいつの間にか手にライターを取り、流れる手つきで竜木の煙草に火を点け、そして佐久間の代わりに頷く。

「率直に言うのと、そうです。人材の確保、装備の拡張は必須ですが……」

工藤は身を乗り出すようにして言う。

「なによりも義体。あれは使えます。一昨日の大阪での一件でも義体の優秀さを分かっていただけたかと思えます。」

戦闘力は人の領域を遙かに上回り、姿形は女子供。あれがあれば、軍事だけでなく諜報も……それどころか世界が変わります。どうか増産のご検討を。イタリヤは開発に消極的になり、アメリカが内輪揉めで後れを取っている今が、この技術のイニシアチブを得る絶好の機会です。義体技術は相当な外交カードになるはずですよ」

「あれか……」

竜木の口から吐き出された煙はゆっくりと昇り、時間が染み込み黒ずんだ天井に染み込んでいく。

「分かった。だが義体に関しては少し待て。あれは少し慎重にやらなきゃならん。野党どころか身内にだって知られちゃマズい」

「ありがとうございます」

佐久間と工藤は揃って頭を下げた。

二人の頭を眺めながら、竜木は煙を吸い、口端から吐き出しながら頬杖をついた。

「科学は屍の上に築かれるもんだって言うが、義体にその価値があると思うか？」

「例え千人の子供の命を生贄にしても、完成させるべき技術です」

断言する工藤。語気は威圧感を覚えるほどに強い。

「……義体、か。前に一度会ったきりだな。お前らが連れてきたイタリアの……おつかない顔した金髪の兄さんと禿のおっさんもいたな。名前なんて言ったか」

「クローチェとベリサリオです」

「違う、義体の名前だ。こう、小さくて金髪の、可愛らしい子だった。うちの義体もあんな美人ぞろいなのか？」



「うっわ、モモどうしたの？ 凄いブサイク」

「そうなんです、モモは唯一の長所を失ってしまったんです……」

「可哀そうに……浮腫みによく効く顔面マツサージを教えてあげるわ。これ坂崎がよくやってたやつでね、まず目尻を思い切りこう、にゅっと」

「利尿剤貰いましたから！ 明日にはいつもの可愛いモモちゃんです！」

検査室の外で、モモはアザミと石室に絡まれていた。検査を終えて薬を処方され、廊下に出たところで捕まったのだ。笑いを嘯み殺して小芝居を打つ辺り、完全にアザミと同じタイプの人種だ。

その様子を眺める者がいる。石室に連れ添っていた白衣姿の女だ。黒い長髪をバレッタでまとめ、切れ長の目元は無機質に義体を見下ろしている。歳の位は二十代の後半から三十代に入った辺り。

彼女は義体の「条件付け」を担当する義体技師、名を庵原潮理と言う。

モモたちを黙って観察していた庵原は、時々白衣のポケットから黒い粒を摘み出して口に運んでいる。それはポケットに直入れされた黒ゴマだった。変な人間が多い研究棟の中でも、ぶつちぎりで変人生態系のトップに君臨する女だ。

ふと、庵原は急に思い至ったかのように、

「モモさん」

庵原の喉から出たのは抑揚のない声だった。冷たいと言うよりは無感情。機械音声の様であり、そして耳朶を打った次の瞬間には、どんな声だったか忘れてしまいそうなほど無個性でもあった。

「炎はあれから見えましたか？」

モモは質問の意味を少し考える。庵原が言うのは、大阪のホテルで一瞬だけ見た、炎

の幻覚のことだろう。

何も焼かず、何も照らさない、ただ揺らめくだけの不気味な火炎。

しかしあれを見たことを、自分は誰かに話しただろうか？

「……………いいえ」

「そうですか」

頷くと、それで用は済んだのか、庵原はゴマを咀嚼しながらするりと影のように立ち去って行った。

「あーちよつと待ちなつて」

石室も片手で会釈し、庵原を追って行った。残された二人はマイペースな大人たちに肩をすくめ、

「戻りましょうか」

「そだね」

並んで歩く二人は、廊下の窓から表の寒々とした雪空を見上げ、そしてふり落ちる雪に沿って視線を下ろしていく。白粒を追う二人の目は交差することなく、言葉だけが行き交う。

「庵原先生、今日はゴマ食べてたね。前は煎り豆だったけど」

「干しエビだった時期もありましたね。どういふ基準なんでしょ」

貧血対策だろうか、と首を捻るモモに、アザミは会話の続きとして、

「ところでモモ、炎つてなに？」

「……………」

モモが急に口を噤んだことに、アザミは怪訝そうな目を作る。

その目を覗き返し、モモは首を横に振った。

「……、何でもありません」

言うか、少し迷った。結局口を噤むことを選んだのは、これ以上あの火について話したくなかったからだ。理由は分らないが、そんな心理が働いた。

何か嫌な事があった気がする。あの火は、良くない火だ。思い出すと身を凍れさせる。脳のどこかがチリツと焦げるような感覚がする。

だからこれ以上話題にするのは避けた。

「ん？ あれ……」

アザミから目を逸らそうとして眼下の駐車場に視線を移すと、そこには今しがた滑り込んできたランドクルーザーがあった。そのシルエットには見覚えがある。確か義体技師の正木の愛車だ。

ランドクルーザーの運転席からは、やはり大柄な髭面が降りてきた。正木は後部座席から紙袋を二つ抱え、義体寮の方へと歩き出す。髭面の大男が袋を抱えて雪中を行く姿

は、さながらサンタクロースの様だ。

モモたちが研究棟を出ると、ちょうど正木が義体寮へ続く小道に入ろうとしているところだった。

「先生、なにか御用ですか？」

「ん？ ……ああモモか」

正木は振り返り、モモの顔を見て一瞬『誰だ？』という顔をしたが、ブスと言わなかったので許す。

「プレゼントを渡そうと思ってね。今日はクリスマスだろう？」

正木は紙袋を開いて見せる。そこには赤ん坊程の大きさのテディベアが詰め込まれていた。その中の一つ、桃色のクマをモモに手渡す。

「あ……ありがとうございます！」

モモにとって、これが初めてのクリスマスプレゼントだった。思い掛けない贈り物に、喜色を浮かべてヌイグルミを抱く。

「君らの趣味に合えば良いんだがね。これはアザミの分」

アザミに渡つたのはショッキングピンクカラーの小熊だ。受け取り、テディベアのつぶらな瞳と正木の野獣系の熊貌を見比べる。

「これ先生の子供ですか？」



「いいや、一匹一万二千円で買い叩いてきた。俺の子供は……現代っ子らしく今頃ゲームでもしてるんじゃないか」

「先生、お子さんがいるんですか？」

言葉に反応したのはモモだ。テディベアから関心を正木に移し、顔を上げる。

「……娘が二人な」

紙袋を担ぎ直した正木は、獰猛な顔を弛ませ、少し疲れたように笑った。

「娘には何にもしてやらない癖に、君らには何を贈るか小一時間は悩むんだ。ダメな父親だよ」

正木はもう一年近く、家族とは会っていなかった。連絡すらほとんど取っていない。妻と子供たちとは完全に別居状態。印を押していないだけで、離婚しているのほとんど変わらない。

義体の開発に携わる以上、プライベートを犠牲にするのは仕方が無い。そう割り切ってきた正木が義体に物を与えようとするのは、彼女たちに少しでも人並みの扱いをしてやりたい気持ちがあったからだ。

そんな正木の自傷的な言葉を、モモはゆっくりと脳内で咀嚼する。

飲み込み、分解し、意味を考え、そして返す。

「そうですね」

モモは目尻の下がった、屈託の欠片も無い笑顔で頷いた。

皮肉や批判では無く、正木の発言に対する単純な肯定。前後のセンテンスや言葉のオブラートなど端から眼中にない、純粹に父親として是か非かというクエスチョンへの答えだった。

家族を顧みないことは良くない。だからダメ。

個人の価値観を排し、一般倫理に照らし合わせて導き出される、無感情な笑顔の肯定。まるで機械と話しているようだった。

正木は一拍置いて、喉の奥を鳴らして乾いた笑いを発する。

顔を見合わせるモモとアザミに、正木は両手にある紙袋の一つ差し出す。そこには紫色と黄色のティディベアが入っていた。

「ムラサキとタンポポに渡しておいてもらえるかな」

そう言う正木の声色に含まれていたのは悲哀か、虚しさか。どちらにせよ、それを聞き取る耳を、義体の少女たちは持ち合わせていなかった。

少女たちが見送る視線を背に受けて、正木は雪の中、センターの敷地を奥へと進んでいく。

彼が行く先に何があるのか、モモたちは知らない。

東京都目黒区の国立医療センターは夕暮の刻になっても盛況だ。冬が深まる年の変わり目、体調を崩す者が多いのだろう。玄関ホールには苦しそうに痰絡みの咳き込み、あるいは蒼白の顔で具合の悪そうにうな垂れる人々が散在している。

その中に、生まれてこの方怪我以外の理由で病院に来たことが無い男がいた。蔵馬だ。受付前の長椅子に座って会計の順番待ちをする彼の手には、格闘技雑誌がある。年末のビッグタイトルマッチについて纏められたトピックに目を通す蔵馬の隣に、腰を落とす小柄な女の影。

「……どこか悪いんですか？」

セミロングの茶髪を揺らす、少し不機嫌そうな黒縁眼鏡の女性——坂崎の問いかけに、蔵馬は雑誌から目を離さずに答える。

「人間ドック」

「何でわざわざこんな日に……」

「こつちじゃどうか知らんが、俺のところは年一で診断書を提出しないといけないんだ。」

……で、出してない事を昨日思い出した。今日受けないと今年中に診断書貰えん」

「相変わらずちよいちよいドジする人ですね。今日がクリスマスだつて分かつてますか？　ちゃんとモモちゃんにプレゼント買ってあげてくださいいよ？」

坂崎は言葉混じりに溜息を吐く。センターにいる時の笑顔と相反する、眼鏡越しのじつとりとした目が蔵馬に向けられる。

「分かつてるつて……本当だ、もう買ってある」

「もしクマのぬいぐるみだつたら違う物を買つてきてください。被ってます」

「……犬だつたらセーフだと思うか？」

「アウトですね。モモちゃんは素体の年齢が高かつたですから、他の子よりも根つこの精神年齢も高いんです。もうちよつと大人っぽい物を贈つたらどうです？」

「……くそ、義姉さんと話してる気分だ」

呟き、蔵馬はようやく雑誌から目を離して坂崎を一瞥する。いつものスーツ姿では無く、タートルネックの白いケーブルニットにジーンズ。私服だった。

「家に帰るのか？」

「ええ、久々の連休です。蔵馬さんは帰らないんですか？」

「役所の職員じゃないんだ。クリスマスだから帰してくれるかよ。往復するだけで二十四時間超えるんだぞ」

受付で蔵馬を呼ぶ声がある。会話を打ち切り、会計を済ませる蔵馬を、坂崎は座ったまま眺めている。若干の居心地の悪さを感じる種の視線だった。蔵馬のことを責める様な、そういう刺々しさが背中に突き刺さる。

支払いを終えて振り返ると、坂崎と真つ向から目が合う。放つ眼光に押し負けて、蔵馬はつい目を逸らす。ガンの飛ばし合いに負けた自分に情けなさを感じ、このまま坂崎を置いて帰ろうかとも考えたが、それはそれで恐い。

「……何なんだ」

戻った蔵馬の言葉に、坂崎は舌打ちする寸前の表情を返す。

「……ここまで来たなら、どうして会いに行かないんですか？」

誰に、という主語は省かれていた。それが無くても通じる、二人に共通する相手の話だった。

蔵馬はどう言葉を作るか迷い、そしてぼつりと囁くように言った。

「……あいつは俺のこと嫌いだろが」

「会いに行かないから嫌われるんです！」

腰を浮かせ、声を大にした坂崎に衆目が集まる。

自己の暴発に気付いて、坂崎は一度口を閉ざした。そして少し浮かせた腰をそのまま持ち上げる。蔵馬の隣に立ち、今度は静かに言った。

「正確には、会いにも来ず、立ち去りもしない。そういう中途半端な未練タラタラの態度が、あの子をイラつかせるんですよ」

言い返す言葉も、示す態度も見つかからない蔵馬を置いて、坂崎は病院を後にする。声が届かなくなる寸前の距離で、彼女はこう言い残した。

「私もイラつきます」

蔵馬は小さくなっていく坂崎の背を目で追う。だがそれ以上の動きは無く、ただ見送るだけだった。

立ちつくす蔵馬に、声を掛ける者がいた。長椅子の斜向かいに座る、ガートル台を携えた寝間着姿の翁だ。二人の会話を盗み聞きしていたらしい。

「兄さん、カンカンになって帰る女は追いかけてやらにや、もつと怒るぞ」  
「……もうとつくに天辺に来てるんですよ、あいつは」

苦笑いを浮かべる蔵馬に、老人は大げさに肩をすくめてみせる。

「バカ、本当に天辺に来てる女は、話し掛けても来ねえよ。あれは『私に構って』って合図だ。可愛らしいねえ」

言われ、一瞬の間の後、蔵馬は老人に軽く頭を下げ、病院から足早に出る。

外は夜かと錯覚するほど暗く、曇天からチラチラと雪が降り始めていた。

雪衾の中、坂崎の姿はもうない。正面玄関の前で蔵馬は足を止め、

「は」

腹の底から出た自嘲を発する。

そして煙草を啜え、駐車場の愛車へ戻った。すっかり冷えたヴェゼルの車内。エンジンを入れて、紫煙を深く吸う。その一吸いで短くなつた紙巻きを灰皿にねじ込み、肺の煙を吐き出す。

車内が一瞬白に満ちる。その中で、蔵馬は助手席に置いてあつた大きな包み紙を掴み、後部座席に放り投げようとし、しかし直前で思い止まつた。

「……もう一つ何か買えばいいか……」

次の煙草の煙と共に眩き、少しくたびれた様にシートに背中を預けた。

そうやって思い出すのは、去り際の坂崎だつた。憎らしげな表情には、懐かしさがあつた。

あの表情には無い。感情を露わにする坂崎に対してである。

蔵馬と出会つたころの彼女は、それしか顔を持つていないかのように、常に笑みを携えている人間では無かつた。もつと直情的で、怒つたり、悔しがつたり、泣きそうな顔を良く見せた。全てを受け入れるような柔らかな空気も纏つておらず、息を詰まらせるほどの苛烈な殺気を眼鏡の奥に籠らせることも無い。

むしろ人よりも感情的で、お節介焼きで、クサイ詩的な事を時たま言つたりして、少

し押しに弱い結構大胆なところもある。そういう女だった。

「……中途半端で未練タラタラ、か」

坂崎の言葉が泥のように脳裏にへばりついて離れない。

煙草の煙で掻き消そうと一気に吸い込み、二本目も灰皿で揉み消す。

灰皿に伸びていた左手が、大きな包みの下に突っ込まれた。

包みから出てきたその手には、手のひらサイズの小箱があった。これも丁寧な包装を施されているが、大きな包みの多少華美なそれと違い、シックなデザインをしていた。

「……………」

蔵馬はその箱をしばらく見つめた後。

無造作に後部座席へと放り捨てた。